THE CENTRAL REVIEW

中央公論

七月號

第三十年第七號　第三百九十號

印度タゴール著、三浦關造先生譯

忽九版

森林哲學 生の實現

四六判上製　全一册　正價金八十錢　郵税金八錢

◎―タゴールを知らずして新思潮を語る勿れ―

本書は現代東洋第一の思想家として世界的名聲高きタゴールの代表作で、タゴールは實に本書の為めに世界的名譽の月桂冠たるノベル賞金を贈られ、又歐米の識者をして「今後はタゴールの時代也」とまで驚嘆せしめたのである。これ實に東洋精神の美妙雄大なる詩的表現、西洋文明の根本的批判、東洋思想勝利の熱烈なる大文字である。其思想に天涯無窮の平和があり、人類の永遠な秘義が解決されてある。苟も文學、倫理、宗教に心ある人、新生に憧がるゝ人の必ず熟讀せざるべからざる經典である。

東京市本郷區西片町十番地　玄黄社　電話下谷一三九番　振替東京七九九五番

歐洲戰後露西亞と獨逸とが怨恨を棄て、握手すべきは疑ふ可からざるの事實也。知らず彼等が相結んで嚮ふ所は何處ぞ――曰く日本！

伊崎陸軍少將序　原田步兵中尉新著

日本の危機 露獨の來襲

洋布特製極美本
（口繪詳密地圖）
價壹圓參拾五錢
—郵送料貳拾錢—

獨逸を中心とする歐洲大戰は終焉に近づかんとす

次に來る可きは、日本を中心とする

極東の大戰也

露西亞獨逸の二强國矛を列ねて我國に襲擊し來る近き將來を思はゞ何人かよく膚に粟せざるを得ん。著者原田中尉は戰爭哲理の論家として既に世に定評あるの士、今こゝに國民の警醒を促さんが爲め其の最も得意とする**小說的描寫**を用ゐ、本書を公にせられたり。内容は、日本が支那問題を不徹底に葬り去れる間隙に乘じ、露獨は同盟を結んで日本に復讐し來り、今日我國と最も親善なる某國また彼等に助力せる爲め、我れは遂に重圍に陷り、海に陸に惡戰苦鬪して克つ能はざる徑路を描けるもの也。嗚呼斯くの如き悲痛なる運命の來るは果して何の日ぞ。一篇の軍事小說「露獨の來襲」を讀んで國民は深く決する所なかる可らず

東京市牛込區
矢來町中の丸　新潮社　電話番町二二二三番
振替東京一七四二番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

世界の謎!! 問題の國!! 不可解なるロシヤの眞相を見よ

◎昇曙夢先生著

露國及露國民

□露國は問題の國である殊に大戰後の露國民は世界を擧げての研究の對象となるであらう。近時日露接近の聲高まりてゐるに拘はらず、我國民の露國に對する理解は頗る貧弱である。此意味に於て本書は唯一の秘鍵である。

本書は我國隨一のロシヤ通たる著者が十有余年の研鑽を傾寫せるもの不可解なる露國の特性と其公私生活の光暗兩面を抉剔して余す所ない時節柄あらゆる階級の人士の一讀を切望す

△中版總布 △上製函入 價九拾錢 郵税八錢

發兌 東京銀座四ノ四 振替三〇三九六 銀座書房

▲姉崎博士外四十餘大家執筆

樗牛兄弟

一代の文豪高山樗牛逝いて茲に十四年未だ一篇の傳記なし。彼の著作を讀んで彼の一生を詳にするは稀なり。本年は恰も末弟野の人が七回忌に相當し、併せて二兄追悼記念の爲に四十餘大家が新に執筆せられたるもの。先輩知己が各方面より彼等兄弟の生涯を詳述し彼等の性格と作品とを解剖評論して餘す所なし。本書は樗牛全集と共に讀んで始めて樗牛と其兄弟の偉なるを知るべし

▲兄弟叔父太田資順編 ▲樗牛の巻 ▲良太の巻 ▲野の人の巻 完

▲洋裝特製天金三六判五百七十頁挿圖六枚箱入 ▲定價金壹圓 ▲送料金八錢

發行所 東京本郷區本郷四丁目八番地 振替口座東京一四五三二番 有朋館 電話下谷八一六番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

伊東六郎氏譯

全譯 バッドボーイ日記

長谷川潔氏口繪及裝幀

最新刊

始末に負へない腕白者が滑稽百出拘腹絶倒のいたづらをすると云ふ天下の奇書なり。一度本書を繙けば奇想天外滑稽洒脱なる思はず最後まで卷を措く能はざらしむ。而も人情の幾微に觸れたる世に小說多しと雖も未だ斯くの如き作を見ず。行文平易且つ頗る流麗にして譯者苦心の全譯たり。全篇三十章四百有餘頁敢て初夏の讀書界に一本を薦む。

□四六判箱入頗美裝□
□紙數四百餘頁口繪入□
□定價金八拾五錢□
□郵送料金八錢□

發兌元 東京西大久保百三十一 振替東京三〇五九七番 高踏書院

(前付の六)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

文學士 速水滉先生補譯

■四六版全壹冊製本高雅　定價壹圓貳拾錢　送料八錢

新刊發賣

ヴント氏 心理學要領

苟くも現代の思想に留意するものは必ず先づ心理學最新の智識を要す ヴントは現代哲學の泰斗にして又現代心理學者の權威なり 譯者はヴントに精通せる專攻の學者なり 浩瀚難解なるヴントの思想を要領を攫まんと欲する者は本書の一讀によりて容易に其の目的を達するを得べし○卷頭にはヴントの評傳學說の大要を載せたり。

文學士 瀧村斐男先生著

○四六版美裝

最新刊

通俗 美學講話

近代文藝の花は今や我國に滿開せり而も此滿開の花を觀照批判すべき根本美學の智識は殆んと全く今の文壇に缺如せり著者此に於て多年の靜思默考を破つて此書を著す行文流麗解說明晰深邃の學理は日光の如く萬人の頭腦を直射す

（定價七十錢送料八錢）

東京市外西大久保二五八
不老閣書房
振替東京貳七〇貳壹

書名	著者	定價	送料
文藝と人生	藤代博士著	壹圓三十錢	送料八錢
現代之心理學	速水學士著	壹圓五十錢	送料十二錢
動物心理學	增田學士譯	壹圓五十錢	送料十二錢

(前付の八)

文學博士 坪内逍遙譯

沙翁傑作集

新刊

アントニーとクレオパトラ

沙翁が偉大なるは其作の彌出で、彌傑、特に作意の變化して窮らざるに存す。此作は彼れが爛熟期の最後の傑作、其三戀愛悲劇中の白眉、即ち巧に**世界的悲劇**の契機を捉へて「全世界に君たらんか熾烈なる肉的戀愛を全うせんか」てふ大デレンマに逢着せる**一英雄的放蕩兒**が悽慘なる巧名の末路を活寫し所謂四大悲劇以外に一新機軸を出し以て近代の諸學者をして沙翁作中の**最大驚異**を推賞せしめたるもの殊に**妖女王**が不可端倪的性格の描寫は眞に驚異中の**驚異**古今空絶と稱せらる。次に全篇に漲れる**漢楚軍談**風の男性的政治的興味は——項羽對肺公に擬すアントニー對オクテギャス、隨處に其照應を見出す鴻門の會や烏江の敗や虞公の歎や——は在來諸飜譯劇の未だ移植し得ざりし所、恰も是れ原色を其儘に映寫せる最長尺發聲大活動寫眞畫!

四六版天金美本
寫眞版木版密畫數個入全一冊
金壹圓卅五錢
郵税金八錢

【既刊】

1 ハムレット	5 ジュリヤス シーザー
2 ロミオとジュリエット	6 ヹニスの商人
3 オセロー	7 テムペスト
4 リヤ王	◎好評重版出來

發兌 東京牛込早稻田 振替一一二三番 **早稻田大學出版部**

東京神田裏神保町 振替五〇一番 **富山房** （賣捌）全國書肆

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一 當會社の保險料拂込方法は保險證劵訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

古河家經營

博愛生命

社長 男爵 中島久萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監査役 安達仁造

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
電話長本局一八五六、五一五〇、一二八七番
振替貯金口座東京一七一七番

支店 大阪市東區本町一ノ一三(電話長本局二三一一番

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

一 當會社は被保險者の年齡範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり

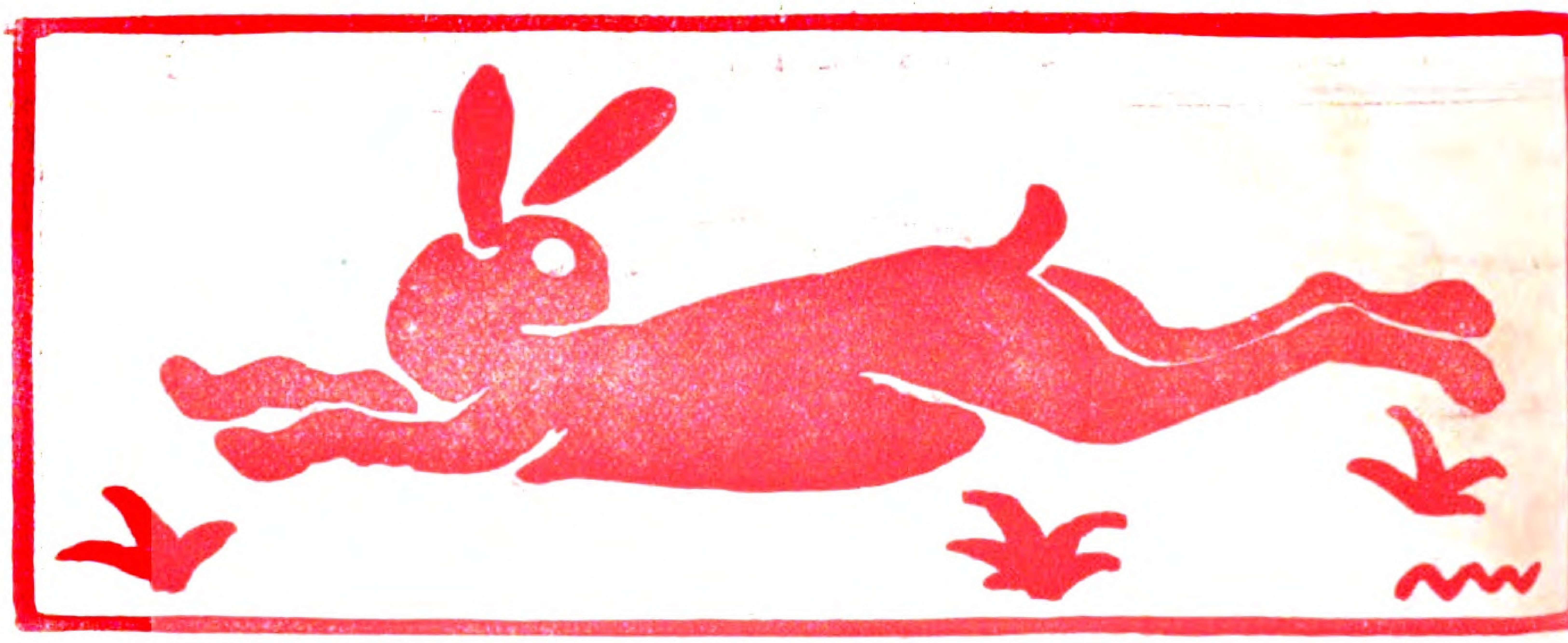
信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論第卅年七月號目次

▲公論

▲說苑

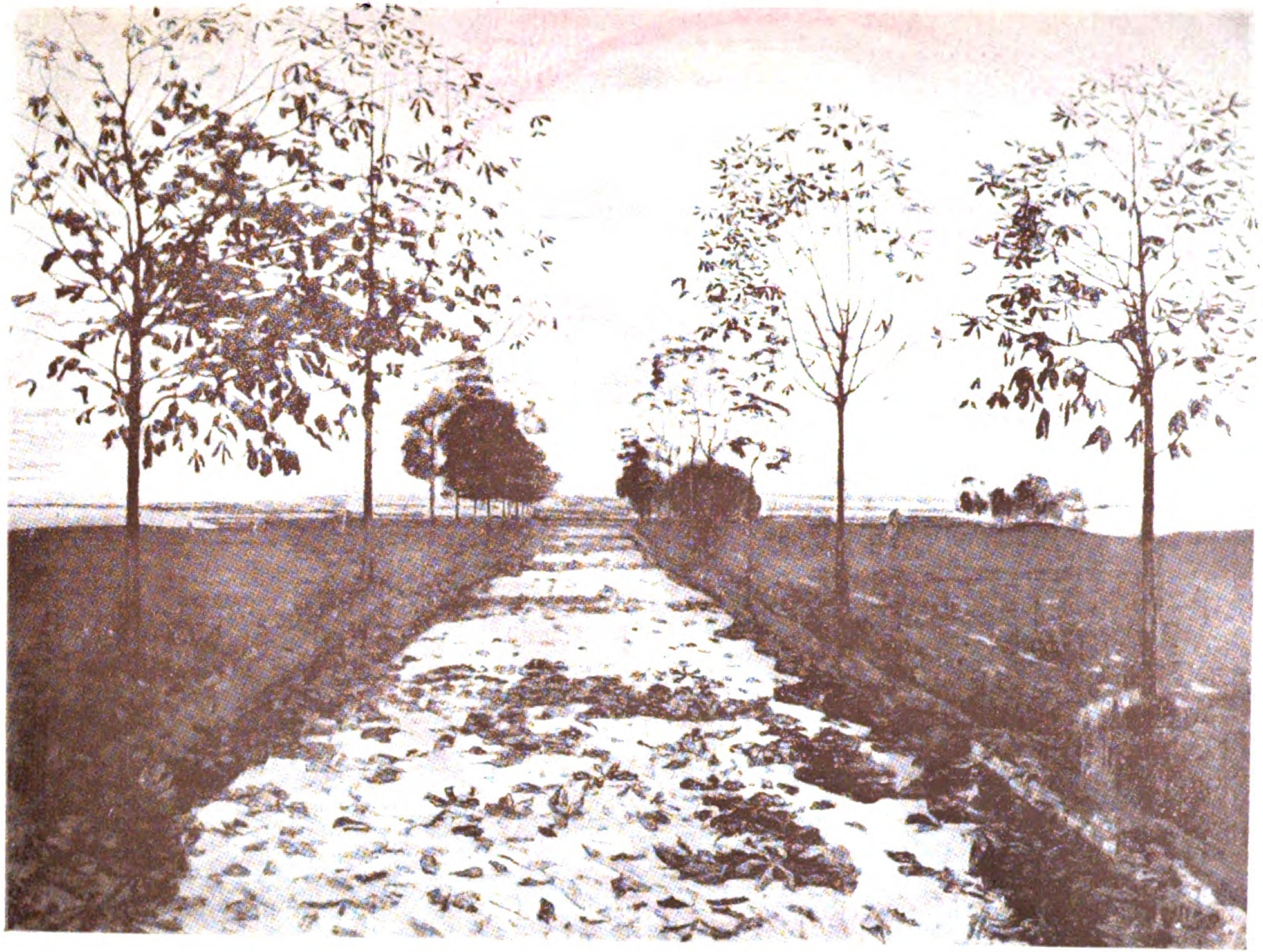


此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき商舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

HODLER



Landscape

中央公論



七月號
第三十年第七號
第三百十九號

大隈内閣の反正を促す

(一) 隈伯高遠の理想なし

人一人の意地は恐るべきものなり、三ッ兒の魂は百までと云ふ、君寵を爭へる婦女は嫉妬の執念より國を傾けその身また千載の醜名を負ふ、人を咀はば穴二つと知りつゝ人も己も供斃れを爲すに至る。是れ古今東西凡俗人情の通弊なり、哲人智者時に教訓を垂れ警戒を試みるも妄念に捕はれたる世人は竟に至言に耳を傾けず、世々代々幾千載、政局の要路に立ち一代を指導すべき任に在るものも亦た往々にして匹夫匹婦の態を學び同黨異伐是れ事として耻つることを知らず、前車の覆轍を追ひて復た覆滅に陷る

もの比々皆な是なり。

昨春山本内閣の崩壞するや大隈伯は其一派を率ゐて朝に立ち其政綱の一條として黨弊打破、政界廓淸を標榜せり、且世人に告げて曰く余に高遠の理想あり、請ふ暫く批評を休め余が將に施設すべき所を見よと、爾來一年有餘を閲みし議會を開くこと四回に及び內治外交、百事繁多に亘りしも曾て一として高遠の理想の實行せられたるを見ず、其所謂政界の廓淸は政友會の絕對多數を破碎し代ゆる大隈黨多數の横暴を以てするに止まり、過般の總選擧に於ける政府當局の惡辣なる干涉は大に天下の紛議を惹起するに至れるのみ、在野黨の選擧干涉論評は稍や極端に失し、其云ふが如く明治二十五年の選擧干涉よりも甚だしとは請取られずとするも、近年になき巧妙にして又た露骨なる干涉なりしと云ふも酷評ならじ、

政友會內閣の下に行はれたる數回の總選擧を見るに反對黨は每に張膽明目して干涉の事實を擧指せんと努めたるも比較的に其跡少なかりしが、今回の選擧に至りては地方官にして干涉の爲め處分を受けしものある耳ならず內務大臣自ら某違反被告人の豫審口述に基づき瀆職罪の名の下に告發せられ、議會に於ては反對黨の爲めに彈劾案を提議せられたり、法廷に於ける事件の發展は門外たる吾人の揣摩する限に非ずとするも、大浦內相が一種重大なる嫌疑の下に立てることは何人も否定す可らず、平素已に警察政治の代表人物と世人に注目せらるゝ程に選擧干涉に關する世間の心證亦自ら深刻ならざること能はず、蓋し法廷の問題は假令檢事局の之を不起訴に決定することありとするも、必ずしも事實無根を證明するものに非ず、又た世間の心證なるものは自ら法廷の決定以上に超越し、必ずしも其決定の如何に由り左

右せらるゝものに非ず、即ち起訴不起訴は別問題として大浦内相に對する官權濫用の非難は容易に一掃し得可らず、斯くて大隈首相の高遠の理想なるものを以て單に反對黨多數を打破し與黨の橫暴を以て彼が橫暴に代ゆるに外ならずとせば休む、若しも此外果して別に理想ありしとすれば在職一年後の今日その理想は竟に之を見る可らず、政治界は益々混濁して唯だ識者を憂へしむるあるのみ、所謂政界の廓淸とは在野黨攻擊の空砲のみ濛々たる硝煙一過の跡を顧みれば腐敗墮落は慘憺として前日と毫も異ならず、否な寧ろ却て前日より甚だしきものあるが如し、而して今や大隈伯に對する世間の論評頗る苛酷ならんとするものあり曰く、伯や元來何等の經綸ある人に非ず其所謂高遠の理想とは空々漠々の大言壯語のみ素より大政を料理するの資格なきものなりと、曰く伯や敵愾心の强さを特色とす、政友會が多年多數を制し政權に接近せしは伯の最も不愉快とせし所にして、竟に政友會の多數を打破し得たるは以て伯近來の願望を滿足したるものと云ふべく、過去一年間の內治外交蓋し悉く此の敵愾心の動機に出でざるなしと、苛評も玆に至りて盡く、一部論者の所謂世界の偉人、早稻田の哲人に對し其心機を論評する斯くの如く苛酷なるは頗る禮を失するに似たるも、大隈內閣の施政上幾多の失政を見れば此酷論を支持すべき材料なきに非ざるが如きは、吾人の長歎息する所たらずんばあらず。

回顧すれば大隈內閣の成立するや、先帝崩御後未だ幾許もあらず、新たに諒闇の期に入り、加ふるに前年來政爭の餘波尙ほ鎭定せず、剩さへ七八月の交に至れば歐洲の大亂さへ勃發して內憂外患並び到るの觀あり、此時に國政の衝に當らんものは須らく深く恐懼愼戒し以て內外の大政を奉行せざるべからず、

乃ち大隈伯たるもの此間に處し宜しく私心勝氣を除り廓落たる胸襟を以て內にありては政界の融圓を謀り、外に向つては帝國百年の大計を定むべかりしなり、然るに其動止往々にして恐懼愼戒を缺き宮中に於ける態度如何は云ふを得ざるも、其反對黨に對するや始より挑發的態度に出で丶益々政界の空氣を險惡ならしめたり、反對黨が多數を擁し往々傲慢の振舞ありしは伯に取り一種の誘惑なりしに相違なきも、年齒閱歷に富み聲望高き伯より之を見れば固と是れ腕白少年の惡戲と做すべきのみ豈に多く齒牙に係くるに足らんや、然るに何事ぞ木葉陣傘の賣言も一々買取りて喧嘩の種因となして辭せず終に叫んで曰く、現內閣は諸君に向ひ擧國一致を强ゐず、諸君もし爭論を事とし擧國一致を敗るの意ならば勝手にせらるべしと、何ぞ其局量の小にして態度の侮慢なる、此一語誰か之を軍國大宰相の言として聽かんや、之を解するもの丶說に曰く大隈伯は初めより反對黨打破を以て內閣組織の主一の目的となせり、故に日獨開戰中と雖も好き口實をさへ得ば衆議院の解散を行ふの覺悟なりしと、果せるかな年末の本議會に於ては前月來の行懸上衆議院は遂に解散せらるゝに至れり、言ふまでもなく吾人は衆議院に多數を有せざる內閣が其信任を問ふの意味に於て之を解散するを非とせざる耳ならず寧ろ極めて立憲的行動なりとして之を賛成せんとするものなり、但だ軍國の際に內、最も一致協同を要するの場合に臨み强ゐて政爭を喚起するを非とする耳、今次の總選擧の結果如何と見るに大隈內閣は實に意想外の大多數を占むるに至れるも、政爭の空氣は益々險惡を呈し世界の孰れの國も擧國一致して大戰局に當れるに際し獨り我國のみ朝野背離し國中の人心二分して氷炭相納れざるに至れりと云ふも不可なし、是實に我建國以來殆んど

未曾有の狀態なり、試みに思へ弘安の役蒙古軍十萬を擊攘せしに際し、從來京都朝廷は必ずしも事毎に鎌倉幕府と一致協和せられざりしに關はらず、幕府は擧國一致の力を以て國防の策を立て朝廷は伊勢神廟を初め所在の神社佛閣に敵國降伏の祈禱あり殊に　龜山上皇の如き躬を以て祈禱を捧げ給へり而して遂に彼が如き大捷を獲たる所以のもの實に擧國一致の賜なりと謂はざるべからず、文祿の役を見よ、當時豐太閤の覇業正に成り外征は天下統一の餘に出でたりとは云へ、德川氏の如き必ずや胸中深く異圖を秘するなしと云ふ可らざるも皆な斂ふて發せず能く其力を君國に致して以て擧國一致を敗るに至らざりしなり、近くは日清日露の兩役又は北清事件の際の如き內政上容易ならざる紛爭の行懸ありしに關はらず朝野共に怨を忘れ疑心を除り以て國家發展の途に出でたり此三回の外征に由り我武大に揚り國威世界に轟くに至れるもの與に宜なりと云ふべし、獨り德川幕府の末に當り開國攘夷の爭議を喚起するや幕府人なく竟に擧國一致の擧に出づること能はず猥りに憂國の志士を捕縛し天下の公論を壓し、終に維新の革命を見るに至れり、更に今次の日獨開戰に際し大隈內閣は竟に國內人心の協和を得ること能はず、我同盟國たる英吉利の如きは不俱戴天の政敵共に朝に立ちて國難を靖んぜんとするあるに關はらず、我大隈內閣は徒らに政爭を頻にし以て其私情を遂げんとするの狀態あるは最も痛歎す可し、今や青島の役巳に終れるも歐洲の大亂は今正に酣なり、日支交涉兎も角も結了したりと云ふも、歐洲戰局の如何に因りては我日支條約は根本より破壞せらるゝに至らんも未だ知る可らず、即ち全戰局の上より見れば我國は尙ほ戰爭中に在り終局の平和は依然として前途遼遠の觀なき能はざるなり、而して最後の平和談判に際し

ては最も擧國一致の努力を要すべきこと論を待たざる處なるが、大隈内閣は果して今後に擧國一致の實を擧ぐることを得べきや否や、吾人は過去一年間の成績に對し、殊に特別議會に於ける朝野揆離分裂の光景に對し、大に前途を悲觀せずんばあらず。

(二)　二兎を追ひ一兎を獲ず

二兎を追ふものは一兎を獲ず、大隈内閣の失敗は内治上の目的と外交上の目的とを同時に達せんと欲したるに因す、宛も德川幕府が開國の策未だ確定せざるに無謀の第二征長を試み以て三百年の天下を失墜したるが如し、大凡そ人間の能力には限定なきこと能はず、ナポレオンの偉大なる勢力を以てするも露國征服と英國征伐とを同時に試みんとして失敗し遂に大帝國の基礎を破滅したり、況んやナポレオンなるざるものに於てをや、大隈首相にして若しも多數黨打破を何處までも主一の目的となさんと欲せば成るべく歐洲戰亂に關係せざるの方針を取り、假りに日英條約の規定に基き全然中立の態度を持遂ぐ可らずとするも終始消極的方針を執り替らざらんことを要す、若しも之に反して千載一遇の此時に際し大に帝國發展の基を築かんと欲せば須らく内治上黨派的行懸を解くの策を執り擧國一致の後援を期して對外問題の解決に向つて全力を傾注すべかりしなり、然るに不幸その謀之に出でず、一擧にして對外的大飛躍を試み又た同時に内に向ひ黨弊打破を試みたり、而して二者は自然に混同せられ黨弊打破の爲めに外交を利用し外交の爲めに黨勢擴張を利用し、遂に二者共に目的を全達せず外交は失敗に歸し國内の人

心は益離反するに至れり、必竟これ高遠の理想なく一定の經綸なきより來る結果にして、外交を內治に利用し黨勢擴張を外交に利用せんと欲するが如きは凡庸政治家の慣用手段たるのみ、去年八月歐洲戰亂の勃發するや當時廢減稅、非增師等前日來の主張に絆されて豫算の編制に迷ひし內閣に取りては實に天與の好機會と思はれしなるべし、遽々然として青島攻擊を決定し某外國の異議に餘儀なくせられて一時躊躇し首相の所謂『御馳走』を延期するに至り或る面白からざる條件の下に辛ふじて出兵の目的を達し得たるが如き、明かに內治上の必用の爲めに外交を利用せんとしたるの罪に座せり、若しも今少しく自重して形勢の發展を待ちたらんには我態度は遂に積極に出づるにせよ又は消極に出づるにせよ餘程都合よき機會に遭遇するに至りしなるべきを、外交を利用せんとしたる毫厘の私心が竟に斯の重大なる錯誤を生ずるに至らしめき、一月十八日對支外交を開始せし以後の事に就て見るも、之を總選擧の爲めに利用せんとしたるの跡歷々掩ふ可らず、例せば三四月の交大に世間を騷然たらしめし出兵談の如き何故に政府は之を努めて世間の問題となすの方針を採りしか、少なくとも御用紙を初め諸新聞競ふて各方面動員の事を記するを差止めざりしか、默許か公許か將た奬勵かは吾人之を知らざるも、北京談判の進行に關する仰々敷電報の日に各新聞に發表せらるゝと同時に出兵の噂は一時頗る世人の注意を惹けり、後ち如何の譯に由るか（或は某國政府の質問に對し答辯に窮せしに由るとも云ふ）當局は頻りに辯疏を試むるに至りしの事實あり、世間一般には此出兵談を以て北京を威嚇せんとする小策に出でたりと解するもの〻如し、吾人も亦た斯く解するを至當なりとなすものなるが、同時に日支關係の甚だ切迫せることを當時

の選擧界に知らしめ以て政府與黨の爲め勢援を加へんとする一種の選擧應援策に資する所ありしや亦察するに難からず、而して當初の青島出兵と云ひ後の出兵騷ぎと云ひ内政上に取り頗る便利を得たること勿論なるも、之が爲め外交上には取返へしの付かざる損失を招きしこと辯を待たず、更に反對の方面即ち外交の爲めに内政上の事件を利用せんとしたるより生ずる弊に付て觀れば此方面に於ても亦失敗の跡歴々蔽ふ可らず、日支交渉開始以來現政府の頗る憂へとしたるの一事は議會に於ける基礎の薄弱なりしことにして、支那政府が容易に我提議に應ぜざりしも必ず内閣の根柢薄弱なるを輕侮し、總選擧の結果内閣竟に多數を制すると能はずして瓦解するにも至らば新内閣成立して寧ろ對支要求を緩和するも計られず、少なくとも新内閣が隈閣の提出條件以上に要求を増加するの氣遣ある可らずとは蓋し當時支那當局の胸中に畫かれし想像ならんか、茲に於て現内閣は是非とも選擧の結果に付て最も明瞭に一點疑を挾むの餘地なきほどの決定的勝利を得るの必要あり、元來今次の總選擧に對し政府は巧智を盡し財力權力を竭して必勝を期せしは言を待たざる所なるも、更に外交上の必要ありし爲め尚一層の努力を試みしは察するに餘あり、乃ち總選擧の結果は驚くべき大勝利を博し優に北京政府をして復た大隈内閣の基礎を疑ふの餘地なからしむるを得たりき、然れども斯の如き花々敷勝利を得るは決して尋常一樣の手段を以て足れりとせず必ず其間頗る惡辣にして且つ巧妙の手段の採用せられたるなるべしとは何人も想像すべき處なるが、果せるかな官權并に金權の大々的濫用は殆んど打消す可らず、選擧界は大隈伯一派の所謂廓清の實を見るに至らず却て從來に比して一層の混濁を見るに至れるは爭はれぬ事實なるが如し、茲に

於て黨派間の感情は益々險惡となり特別議會に於ける在野黨の突擊頗る猛烈にして遂に彼が如きの紛擾を以て閉會するに至れり、畢竟是れ大隈伯一派が黨勢擴張を主一の目的となし、此一事以て內治外交萬事を解決すべしと思込みしより來れる弊にして又た內治外交を混同し互に利用せんと欲したるより來れる弊害なり、此弊の及ぶ所大勝利必ずしも內政の平和を來たさず人心の離反漸く將さに甚だしからんとし、來るべき御大典を奉行・歐洲媾和に參加するに當り擧國一致の至誠を後援とし能はざるの不幸を見るの憂なき能はず、是實に大隈伯加藤男大浦子等內閣の首腦たる諸氏の深く猛省自反し大に善後の考慮を費やすべき場合に非ずや。

(三)　大隈伯果して反省し得るや否

特別議會後の大隈內閣は前日と比較せば果して大に信用聲望を加へたるや否、是れ大に疑問たらざるを得ず、內閣自らが果して其豫期せしに違はず大に多數與黨の便利を味ひ得たるは爭ふ可らずとするも、國民一般より之を觀れば內閣は其思ふ存分の大多數を得て反對黨の往々頗る根據ある抗爭を自在に蹴散らし去りしは小氣味好かりしに相違なきも、內閣としては無理を立て通ふしたるの形跡を免れず與黨としては幾多橫暴の行跡を留めざるを得ず、曾て政友會全盛の時に其橫暴を鳴らしたる與黨と黨弊打破の旗幟の下に這般の總選擧を行ひし現內閣は遂に其先に尤めたる處に倣ひ却て出藍の不名譽を贏ち得たるものと謂ふべきに非ずや、蓋し議會の紛擾と云ひ、多數黨の橫暴と云ひ今次の議會に限りて耳新ら

しきことに非ずと雖も連日の紛擾、反對黨の彌制箝口、未曾て今次の如く甚だしきはあらず、是れ一には島田議長が其職に慣れざるの致す處と云ふべく、又同志會院内總務等の指揮宜しきを得ざるに由ると云ふべく、更に又た反對黨も故意に紛擾を醸して敗軍の餘憤を洩らしたるの譏を免るべからず、然れども其の主たる責任は與黨作戰の動機を與へたる現内閣諸公の驕心慢氣に在りと謂はざる可らず、殊に同志會總理加藤男の傲慢にして挑戰的なる態度は自ら其部下の暴横を誘致したりと云ふも不可なかるべし、但し加藤外相の討論的辯説は、往々にして詭辯、贅辯、横辯を免れずとするも、自ら議會壇上の逸品たるを失はず、假令其傲慢不遜の態度に慊焉たらざるものも亦た時に快哉を呼ぶを禁ずる能はざるものありて多少は男が不遜の態度より生ずる損失を補ふの功なきに非ず、然れども同志會一派の横暴に至りては實に愚昧拙劣を極め、何等その横暴を償ふべき長所を示さずして徒に醜態を演じたるのみ、即ち大隈内閣は其多數を頼みとする與黨の行動により多大の不信用を招けり、加ふるに責任支出、選擧干渉、拙劣外交等内閣の施政上の失態あり、在職一年後の現内閣は假令近年稀に見る多數黨に擁護せらると雖も漸く其信用を失墜し始めたりと謂ふべく、今にして大に自反猛省するに非ずんば舊幕府の内治外交兩ながら錯りて頓に瓦解したると一般の最後を觀んこと恐らく甚だ遠きに非ざるべきか。

現内閣諸公の大に考慮せざるべからざるは反對黨の反對に在り、今や反對黨は少數に落ち政府黨三派の合計百有餘名の多數を占むるが故に總選擧以前と比較して隈閣の位地磐石の如くなりと謂ふべきに似たるも、今日の反對黨の反對は前日に比し遙かに猛烈にして惡辣なり、若し夫れ前日の反對黨の態度に於

て多少緩慢の點ありとせば此れ其多數を頼みし驕慢心に因れるなるべきも、今や政府の惡辣なる手段に罹りて選擧に大敗し小數に落ちたれば前日の驕慢心は毫も跡を止めず却て復讐雪辱を思ふの一念に滿つ、現内閣諸公もし其與黨の多數に慢心し依然反對黨を輕侮するの心を持せば政局一變の機は自ら其間より突發し來らん、而して特別議會に於ける政府の態度は頗る不謹愼なりしを思へば誰か復た隈閣が多數を得て却て其命脈を短縮したりとの感なからんや。

特別議會を過ぎて大隈内閣は其組織の目的を達したり、即ち政友會の多數を打破し二個師團增設問題を解決したる内閣は其創立の使命を果したり、是れ即ち其今後の維持に對する或る有力なる後援を失ふに近づけるものと謂ふ可らずや、素より現閣が其使命を果したればとて直に其日より之に立除きを命ずるが如きは餘りに不人情にして何人も敢てすること無かるべきも、若しも内閣今後の施設又は態度にして苟くも國家に不利益ならんには曩きに之を推薦したる人々は之に隱退を促がすを躊躇せざるべし、大概の不都合は之を忍耐して是非とも此内閣を支持せざる可らずと云ふの理由已に存在せずなりなればなり、更に增師問題の片付きたる一事は在野黨の行動に一種の自由を與へたるものと云はざる可らず、他なし政友會と國民黨とは同じく增師に反對しながら大に其理由を異にしたるを以て、若しも一朝兩黨相提携して此問題を積極的に處分すべき場合にも臨みたらんには相互に頗る當惑すべき問題を生じたらんこと想像に難しとせず、然るに今や、此の政界の暗礁は端なく取除かれたるを以て民黨兩派の聯盟に對する主たる障礙物は取除られたるなり、是れ間接には内閣に不利のことたらざるを得ざるべし、更に

又た過去一年の經過に由り内閣の政治的手腕は試みられ、内治外交の上失敗百出し大に其信用を毀損したるは爭ふ可らず、殊に内閣の大立物たる加藤外相の對支交涉失敗は内閣全體の聲譽に關すること少小ならず、現内閣の味方として其存續を希望するものと雖も多くは唯だ昨年來の慣勢に由りて然るものと云ふべく、是非とも隈伯及び閣僚を引止めて永く國政の衝に當らしめざる可らずと云ふの論者は蓋し寥々晨星も啻ならざるべし。

要するに大隈内閣の今日は初度征長後の德川幕府に髣髴たるものあり、當時江戸政府は巧みに長藩に向ひ朝敵の汚名を負はせ、命を二十有餘の雄藩に傳へて長州征討の軍を出さしめ將に天下の兵を擧げて長防の國境に殺到せんとするの概を示したれば、長藩の君臣は頓に恐震し三家老の首級を献じて罪を謝し和を乞へり、此際の幕府は尙ほ優に天下に主なるの權威あるものゝ如く、僅々兩三年にして崩壞し維新の盛擧を見べしとは何人も思設けざりし所なりしも、禍機已に成り滅亡の運命は疾に定まれり、當時出兵の命を受けし雄藩中出兵を躊躇せしものありし如く今の内閣與黨中にも已に御用を不快とするもの少なからずして、薩長聯合に比すべき政國の提携は益々鞏固ならんとし、舊時の公武合體に比すべき元老及貴族院と現内閣の關係亦た容易に油斷を許さず、是れ實に大隈伯加藤男大浦子輩の當に大に自反猛省すべき場合に非ずや、吾人が之を云ふは大隈内閣の爲め耳に非ず亦實に國家の爲めに之を云ふ、來るべき御大典と歐洲大戰後の外交とは須らく擧國一致の後援ある内閣により奉行せられざる可らず、大隈内閣は果して能く其驕心慢氣を除り虛懷謙抑以て能く時勢の要望に副ふことを得べきや否や。

讀書の趣味

消閑の方法に付ては古來君子も亦た顧慮す、吾人凡俗者に取りては如何にして其閑日月を費やすかは生涯の成敗苦樂を分つ所以にして、古人の所謂小人閑居して不善を爲すの訓戒最も味ふべし、今や天下幾萬の學生は一年の學業を了へて暫く休養の爲め江湖に放たれんとす、此時に際し特に學生諸氏の爲め讀書の趣味に付き少しく語る所ある必ずしも無用の言たらざるを思ふ。

大凡そ閑居の樂一にして止らず、散策、雜談、碁將棋、骨董、盆栽、庭園の如きありと雖も讀書より善きはなし、骨董、盆栽の道樂、庭園の樂事、孰れも老ひたる閑人に適し、青年の消閑具としては散策、雜談、碁將棋最も行はるゝが如きも、雜談最も不可にして碁將棋稍々可なり而して散策大に可なるも、孰れも讀書の最も可なるに如かず、將棋の如き特に熱して凝固すべき弊なき能はずして其弊に流るゝが如きは大に戒めざる可らず、青年にして能く讀書の趣味を解せば是れ殆んど萬福の基と云ふも不可なし。

讀書も亦た弊　きに非ず、漫りに感傷的文學に耽溺して人生の理義を忘却するが如き其一なり、然れども其弊は碁將棋に耽るが如く甚しからず、假令其弊亦た頗る厭ふべしとするも讀書の利益あるは他の所謂娯樂專門の娯樂と比較すべきに非ず、試みに東京より京都に到らんとすと假定せよ、此間約十二時を費やすを要すべく、其徒然を慰むる爲めには一冊の書を携ゆるに如かず、二箇月の休暇は短しと云ふ可からず、此間父母を省し近親を訪れる亦た人生の樂事たり、河川に釣り海水に浴する亦た頗る可なり、

然れども此間また讀書なかるべからず、以て思想を古今に馳せ情操を波瀾の間に修むる、亦た是れ一樂事たるを失はず、教場の筆記は之を下宿屋に預け置くべし、然れども歸省の際には必ず一二の有益なる書册を携ふることを忘る可らず。

大凡讀書を爲さんとするもの丶忘る可らざるは胸中常に質疑の問題を存し置くことなり、故エール大學の總理ノア・ポーター氏曰く已に心に疑問あり此疑問を質す爲めに讀めば如何なる書物も面白く讀まる丶なりと、世間に數字ほど乾燥無味のものはあらず、然れども統計學者をして之を讀ましむれば死せる如き數字乍ち躍如として其秘密を語る、又古文書ほど解しにく丶面白からざるものはあらず、然れども歴史家をして之を讀ましむれば舊きもの丶中に新眞理を發見すべく幾許もなく新著述の錦上花を添ゆるに至らん、而かも此道理は唯だ學者専門家のみに限れるに非ず普通の讀書者に於ても亦た其然るを見る、例せば織田信長の運を開きし桶狹間の戰爭に關し疑問ありとせよ、此疑問を晴らさん爲めには數種の書を讀むも厭飽を覺へじ、而して一度疑を晴らし得れば一種云ふに言れぬ快樂あるべし、又は日々新聞紙を賑はしつ丶ある歐洲戰報に關し獨逸の强力なるは何人も奇異とする所なるが、試みに其理由を研究する亦一興ならん、是が爲めには獨逸の近世史を讀むの必要あるべく又近來の世界政策に對する經綸の細大を研究するの必要あるべし、或は博物學に興味ある人は夏期中標本蒐集と同時に其專門の書を讀むも可なるべし、斯くて讀書と實物觀察と之を同時に行ふに於ては自ら利する所莫大なるものあるべし。

然れども夏期の讀物として吾人が特に推薦せんとするは修養に關する書册なり、大凡此世界に生を受

けるも何人か人生問題に接觸せざらん、死生離合悉く吾人を驅りて人生の問題に逢著せしむ、友人との關係、戀愛、事業の失敗孰れか吾人をして物に執着の想を思はしめざる、而も物に對する執着を去れば我心は亦遂に何物に依賴して立たんとするか、又は事物其他一切依賴するの想を曉り胸中無一物にして自ら快然たたる氣分を養ふの道ありや、蘇東坡曾て書を其弟なる子由に與へて曰く

我兄弟俱に老ゆ、當に時を以て自ら娛しむべし、此外萬端皆懷に介するに足らず、所謂自ら娛むとは亦世俗の樂に非ず、但胸中廓然然一物なければ即ち天壤の內、山川草木魚蟲の類皆吾樂事を作すなりと。

所謂胸中一物なしとは果して空々漠々何等思ふ所なきを云ふか、曰く然らず若し然らば東坡は未だ其境に達せざるなり、何となれは彼は其弟を思へり、彼の詩を讀むもの彼れが如何に多情多感の人たりしを知るなり、蓋し其所謂一物なりとは人生の物に拘泥執着せざるを云へるなるべし、即ち既に物に拘泥執着せず、故に能く之を樂しむことを得るなり、此の秘密は人生觀に徹底したる人にして初めて之を知ることを得べし、乃ち東坡の詩文の如き亦た修養の書として頗る恰好のものたり、讀者は彼の詩文を讀み直に彼の高崇なる人格に接するを得べければなり。

然れども讀書の趣味を耕やすの必要は豈に唯だ靑年學生のみに限らんや、實業家政治家の如き最も讀書を必要とせざらずや、昔者吳の孫權その臣呂蒙に告げて曰く卿今路に當り事を掌る學ばざる可らずと、蒙辭するに軍中多務を以てす、權曰く孤豈に卿の經を治め博士たらんことを欲せんや但た當に涉獵して往事を見るべき耳と、蒙乃ち始めて學に就く、魯肅尋陽を過ぐるに及び蒙と論議し大に驚きて曰く

卿今は才略復た呉下の阿蒙に非ずと、蒙曰く士別れて三日即ち更に目を刮いて相待つ、大兄何ぞ事を見るの晩きやと、讀書の功能亦實に著大ならずや、吾人が今の實業家政治家に向ひ讀者を勸むるもの豈に其博士たるを望まんや、但た廣く古今に涉獵して形勢を見るべき耳、想ふに今の政界の人士の如き人心收攬の術を解し黨略に長ずる人少なしとせず、不幸にして學問の趣味を解するもの少く爲に多くは大局の着眼を事とせず、黨爭の雄將を以て終るに至る、議政場裡に馳驅すること幾十年、竟に依然たる呉下阿蒙を以て終るもの丶多き誠に歎慨すべきに非ずや。

英國議會の品位あるは夙に世界の歎稱する所なるが、其然る所以主として多く讀書子を包容するに在りと云ふ可らずや、近年に至り院内辯論の性質大に平民化せられたりと雖も、演說者が往々ラテン語を以て古典を引用して論據を添へしは英國議院の傳統慣習なりしなり、或は討論の際其引用せる古典一句の正不正に關し餘事火花を散らして爭へるとありしと云へり、以てオックホード、ケムブリヂ出身の紳士輩が學者として身を嗜みしの光景、我源判官軟弓を恥ぢ梶原景時梅花を箙に揷かざせしと比し賞歎すべし、無學なる議員は自ら下劣ならざるを得ず、幸にして讀書は呉下阿蒙を化して其友を驚すの學者たらしめたり、吾人は我成金の代議士諸君に對し切に讀書修養を勸告す。

新聞紙は一般社會の日課の讀物なり、然れども新聞紙は多く修養に資せず、又讀者をして達觀の明、徹底の識を得せしめず、日々の新聞紙を讀むは譬へば茶を喫し酒を飲むが如し、刺激興奮の功能はあり、然れども滋養分の供給は多く得て期すべからず、吾人もし事端百出の間に處し能く靜平の心を持し、又た大局の見地に立たんとを欲せず須らく讀書せざる可らず、讀者は實に人生の樂事にして又幸福の基なり。

公論

日支合辦 亞細亞銀行法案私議

野間五造

歐洲の風雲は日々其熾盛の度を增して來るやうであつていよ／＼何日頃は平和の曙光が見え芽出度天日を仰ぐ事が出來るか、今分の處では鳥渡見當が附き兼ぬるやうに想はれる、然し同じ交戰國の地位には立つて居つても我邦は地理上の關係から餘り慘禍を蒙つては居らぬ、未來は判らぬが現在の所では先づ／＼小康を得て得ると言ふて宜しい、敢て人の不幸を利すると云ふわけでは無いが、此際に於て我邦は東亞細亞に於ける各種の懸案を片付け一ツには自己の立脚地を强固にし、又た一ツには東洋永遠の平和的基礎を作らねばならぬ時機であらうと想ふ、

日支新條約は數日前に於て公布せられた、一々の條項に就て質して見れば不服な箇條は澤山あるが、然し先づ全體から見れば、兼ての懸案は歪みなりにも埒が明いたやうな氣がする、斯條約の結果南滿洲、內蒙古、山東省即ち北支那一帶の地に於て我政治上の勢力が一段の發展を爲したと言ふ事は爭ふ可からざる事實で有る。

然し斯新條約に依て獲得した新權利も夫れを有効に利用しなければ唯だ一の空文に成つてしまふ譯けであるから、吾人は此際充分の注意を以つて此新收穫物を有功に行使する手段方法を講ぜねばならぬ、紙上の條

約よりも實行が大切である事を承知せねばならぬ。

然らば其收穫物から有功の利益を擧げんとするには差當りて何が必要であるかと言へば、金融機關の設備である、金融機關が完全に整ふて居なければ、如何に澤山な利權を獲得しても其れから甘味を吸收する事が出來ぬわけである。今回の條約に依つて見ると內蒙古でも山東省でも日支合辦でなければ出來ぬ仕事が澤山ある樣で有る、內蒙古では條約第四條に於て不動產營業に就いては總て合辦たる可しと規定してある、之れは却て幸ひの事で此際是非各種の事業を日支合辦として、彼我兩國經濟の共通を計りたい者である、殊に金融機關の如きは日支合辦として眞先きに其手本を示したい。

聞く所に據ると昨年十月下旬の事である、我軍が青島から獨軍を追ひ拂つた當時、其祝詞を述ぶるか爲め、外交總長孫寶琦氏我公使館を訪ひ、話しの序で、此際日支經濟同盟を締結し或る程度まで財政上の共濟主義を實行しようでは無いかとの相談が出たと云ふ事である、實に今日位中華民國朝野で財政の窮亡を告げて居る時は無い、兼て四國借款が完全に成立せぬので弱つて居る所へ、今回の歐洲大亂で、借款話しは全部中止となり、加へて革命以來無制限に發行した不換紙幣の祟りが出て來て、恐慌に繼ぐに恐慌を以てし、民間の疲弊其極に達して居る場合であるから、我邦も亦た此際利權問題は利權問題として置いて更らに彼れの窮境に對しては一片の同情を與へる價値が有ろふと思ふ、若し我邦に於て此企劃を爲さぬ場合には、或は第三國が夫れを企つるかも知れぬ、現に數日前の紐育電報に依れば、嘗て「モルガン、シンジケート」を企てた紳縉が今回、對支金融の調節を謀るが爲めに、四千萬弗(第一期拂込六百萬弗)米支合辦勸業銀行を創立せんとして居ると云ふ事である、我臥榻に他人の鼾聲は容れ度くないから速かに日支合辦の金融機關を速成したい者で有る。

日支銀行を起こさうと言ふ話しは近頃始まつた事では無い、古く日清戰爭後に興つた問題であつて、其際清國から受取る償金の一部を割いて斯銀行の資本に加

へ大々的計畫の上に實行しようと云ふ議論があつて、遂に政府も明治三十五年に至つて、政府案として日清銀行法案を提出した事もあつたので有るが、不幸にも議會の解散と共に遂に成立を見ずして今日に至つて居る次第である、吾輩は其日清銀行法案提出の時も、亦た夫れと略同性質の臺灣銀行法案に就ても共に特別委員と成つて取調に從事した事があるので、今回一部實業家及有志の政客から需められ、日支銀行設立の基礎案と云ふ考へで一種の草案を作り、日支合辦東亞細亞銀行法案として、一方は商業會議所へ、一方は當局者幷に有志議員の手元まで提出して置いたので、一時問題と成つた樣で有つたが、何分此臨時議會は日數短かく、遂に建議案提出だけに止まつて、實行の運びに行かなかつたのは如何にも殘念で有る、然し過日三井家の實業招待會の席上で、大隈首相幷に澁澤男は此件に就て殊更ら演説されたと言ふ事で有つて、今年秋季の通常議會へは是非提出の運びに成る事と信ずるが故に吾輩は自分が起稿した此の東亞細亞銀行の草案を、爰に掲載し基礎案各條に就て其理由を說明し、如何なる性質、如何なる組織にすれば善いかを論じて見ようと思ふ。

第一章　總則

第一條　東亞細亞銀行ハ株式會社トシ本店ヲ關東洲內ニ置ク

亞細亞銀行の目的とする處は、日支經濟の共通と我殖民政策の調和を計り度いと言ふので在る、從つて其の營業區域も最初は東蒙古、南滿洲、山東省と云ふ、今回の條約に據つて我勢力範圍と成つた箇所に止めて置て、將來政治上の勢力が段々に擴張さるゝに從つて其營業區域をも漸進せしめて行かうといふので在る、ある論者は支那全體を營業區域にしようと言ふけれど、最初から十八省四百餘洲を營業區域にすると云ふ事は到底行はれぬ事柄である、元來支那の商業取引地は二種類ありて第一は開埠(開放地)、第二は省城(內地)である、

日まで外國人の商業は大概此開埠地(上海、天津、漢口の如き)に限られて居つて、內地の一商業と云ふ者は其邦特別に政治上の勢力が布及されて居る場所に非ざれば行はれた者では無かつたのである、其國政治上勢力の無い箇所で到底完全に營業の出來る者では無い、從つて金融機關の如きも其營業が大概開港地に限られて居つて、若し內地に向て其營業區域を延さんとするには必ず政治上の勢力が其れに伴ふて來なければ成らぬ事に成つて居る次第で在る、嘗て露西亞が滿蒙地方で巾を利かして居つた節は露清銀行が極東で充分仕事の出來た時で在つた、德華銀行が山東省內で羽振良く營業して居たのは獨逸が山東省を我物顏に振舞つて居つた時である、又た「インド、チヤイナ」銀行(東方滙理銀行)が南方支那で威張つて居るのも東京に佛蘭西政廳が控へて居るからで在る、如何に古くから在つたにしても如何に信用があつても母國政治上の勢力に隨伴するに非ざれば到底支那今內地で營業の出來る者では無い彼の香港上海銀行、(滙豐銀行)でも渣打銀行でも、香港九龍一帶の地を離れて廣東省內や福建省內で營業はして居らぬ、不動產銀行と云はれて居る、義品澄欵銀行(法華銀行)でも花旗銀行(インターナショナル、バンキング、コンパニー)でも和蘭銀行でも開埠地丈けの商買である、我正金銀行が近年種種規定のもと滿洲內地の不動產に放資すべく政府から五百萬圓の保護を受けて居るに係はらず、貸付金の多分は大連埠市に限られて居るのを見ても判かる次第である、其れ故吾輩は東亞細亞銀行の營業區域を當分の內蒙古滿洲山東省の三地に限る事にして置きたいと想ふのである、露骨な言葉で言へば此際滿洲では露西亞銀行の相續人と成り山東省では獨逸銀行の繼承者の役目を勤めようと言ふに外ならぬので有る。

明治三十五年の日淸銀行法案では本店所在地を北京城內と定めてあつたが、夫れは右述べた主旨

からして時機尚ほ早く、其後生產調査會の時の日支銀行案では本店所在地を東京としてあつたが夫れは日支合辦と云ふ上から見て都合惡く、又た近頃滿鐵の有志に依て組織されたる東亞研究會とかから提出した滿蒙銀行案では本店を奉天に置くとしてあつたそうだが、將來我邦が發展せうと言ふ山東省や河南江蘇を眼中に措いて無い考へで之れも宜しく無い、今日の場合其籌辦處(本店)所在地は是非共關東洲内に極めねばならぬ事と想ふ、同じ關東洲内で國防中心地たる旅順にするか商業中心地たる大連にするかは、其時の都合で何れに定めても苦しく無い。

右述ぶるが如く豫め東亞細亞銀行の營業區域と云ふ者を確定して置けば、已設會社の正金銀行や臺灣銀行と營業の抵觸を來たす事は毫も無いわけである、たゞ現在正金が執務して居る在南滿特種貨付規定丈け新銀行で繼承すれば他は總て現狀の儘で良いので在る、中央支那の埠頭營業は正金之れを受け持ち、南支那の開港商業は臺灣銀行でやつて行きさへすれば何等差支へも起らぬ次第で共に我商權の發展に資する事が出來るのである。

銀行の名稱、之等は何んでも善いと思はれるので有るが、由來文字典禮にやかましい支那を對手にするのであるから、少敷注意を拂つて置く事も無法では無からう、此東亞細亞銀行と云ふ名稱は意味に於て日清銀行と云ひ日支銀行と云ふのと毫も異なつて居るのでは無い、然し今日と成つて清の字は勿論附けられず、支の字も亦支那人の好まざる文字で有る、其れ故日清日支の意味を顯す場合は日華或は日中と書かねば納まらぬわけであるが日の字を書冠に置くと云ふ事は彼れの「プライド」に觸る處であるから遠慮する方が至當である、然らばとて例の我鏘々たる實業家に倚つて組織されて居る中日實業公司の如く、何にも我から需めて中華を我日本の上に頂くにも及ばない次第である、恰も素町人が他人の前に出る時揉み手をする

と同様の形で、餘り感心した様では無い、次に東亞と云ふ文字はどうかと云ふに之れには現今他に澤山の類似がある、例の東亞興業を始め芝罘大連に東亞公司があり天津に東亞銀行があり上海に東亞洋行があつて、頗る混雜して居る、又た極東と云ふ字は外國の銀行や商店に類似の名前が澤山あつて飜譯の場合に頗るまぎらはしい次第である、縱令ば「エキスツリーム、ヲリエント」とか「フエアーエスト」とかの名を冠して居る銀行や會社は珍しく無い、是に於て止を得ず少し文字は長いが、吾號は東亞細亞銀行と命名したわけで、正金銀行や臺灣銀行の定款に明記してある如く英語を以て顯はす場合はThe Bank of Eastern Asia, Limited. と書くのである。

第二條　東亞細亞銀行ハ主務大臣ノ命令ニヨリ或ハ認可ニヨリ各要地ニ支店及代理店ヲ設置シ又ハ他ノ銀行ト「コレスポンデンス」ヲ締結スル事ヲ得、

此條文は臺灣銀行條例や朝鮮銀行條例と略ぼ同様の條文で有るが、たゞ命令に依つて支店設置をせねばならぬと云ふこと丈けが異例である、此東亞細亞銀行の營業區域は臺灣や朝鮮のやうに全然我領土では無いのみならず、此銀行を利用して商權政權の振張の具に供へねばならぬ場合があるから其場合には縱ひ營業上必要の無い所でも、政治上の意味から支店や出張所を設けさせねばならぬ事がある、例へば蒙古王の需めにより之迄露清銀行支店のあつた庫倫管下の某箇所へ出張店を設けると言ふが如き、又は獨逸が嘗て德華銀行の支店を設置しておいた濟南驛管下の某々箇所へ本銀行の支店を設けしめ我軍票や兌換劵の硬貨交換の衝に當らしむると云ふが如き場合は、銀行重役の希望不希望に不係主務大臣の命令で支店或は出張店の設置を餘儀せしめらるゝ事があるのである、之等の義務有るが爲めに後章に記するが如き優大の保護も出でくるわけである。

第三條　東亞細亞銀行ノ營業期限ヲ五拾箇年トス但シ

政府ノ認可ヲ得テ更ニ延長スルコトアルベシ

臺灣銀行の期限は貳拾箇年、朝鮮銀行は五拾箇年日清銀行法案によれば同銀行は五拾箇年、中華民國の中國銀行は參拾箇年、北京興華滙業銀行は五拾箇年であるから旁々參酌して、本銀行の期限を五拾箇年と定めたのである、又た滿洲の租借期限や鐵道の期限は千八百九十六年の露清條約及明治三十八年の日清北京條約で頗る短期の者であつたが、今回の新條約で九十九年に延長されたので、差引上何れの期限も未だ七八十年殘つて居るから本銀行の期限を五拾年としても差閊へ無いと想ふ呵々

第四條　東亞細亞銀行ノ資本金ハ金貨五千萬圓トシ之レヲ五十萬株（一株百圓）トス、他日增資必要ノ時ハ總會ノ決議ヲ以テ政府ノ認可ヲ得ベシ

本銀行の資本金を金貨五千萬圓にしたのに就ては多少の議論がある樣である、過日此草案を日清銀行法案提出の際の政府委員たりし阪谷前藏相に示したるに阪谷氏は此資本金を壹億圓位にしたらどうかと注意された、其後新聞に依ると同氏は商業會議所で右同樣の議論を主唱されたと書いてあつた臺灣銀行頭取柳生氏の議論に依ると、資本金は金額を五千萬圓として、其內貳千五百萬圓を金貨とし貳千五百萬圓を銀貨としたら宜からうと云ふ事であるさふな、吾輩の考は兩氏の說と少し異つて公稱資本金は五千萬圓として全部を金貨とし、本銀行の發行する債券は悉く銀貨本位として置きたいと想ふので在る、又た本銀行は銀行券や債權を發行するが故に極度の信用を利用する場合は優に金銀參億圓以上の仕事が出來る樣に成つて居るから、別段爰に資本を增額せしめ置く必要は無いと想ふ、參考に外國銀行の例を擧ぐれば、香港上海銀行（滙豐）公稱資本金千五百萬弗積立八千萬弗、麥利加銀行（揸打）資本金壹千貳百萬兩積立六千萬兩、俄亞道勝銀行（舊名露淸銀行）資本五千五百萬留、德華銀行資本七百五十萬元獨逸政府特別預金貳千

萬元、有利銀行資本千五百萬兩、和蘭銀行が四千五百ギルタ積立金六百八十萬ギルタ、華比銀行資本千五百萬法印度支那銀行（東方滙理）資本金五千萬法積立八千萬法である、近頃設立せられた者の中で重なる者は中美興業銀行公稱資本二千米弗、佛支合辦達興銀行公司資本二千萬法、義品澄銀行資本金千五百萬元である、又た次に支那人の設立したる者を見るに、新式銀行の內では中國銀行（舊名大淸銀行）公稱資本六千萬元、支蒙古合辦殖邊銀行資本二千萬元、山西中華滙通銀行資本二千萬元、北京通商銀行資本五百萬兩、交通銀行資本五萬萬兩、南海華商銀行資本千萬元、鹽業銀行資本五百萬元、四明銀行資本參百萬兩浙江興業銀行資本貳百萬元等である、各省の官銀號が獨立して銀行業を營んで居る者は大概三四百萬元の資本である其他新式銀行で無く舊來の支那風の銀行即ち錢行とか票莊とか、銀棧とか呼ぶ者の內で五百萬元以上の公稱資本を以て働いて居る者も澤山あるが、山西票莊一派を除いては他に銀行專門で無く種々の業務を兼ねて居るのであるから實際の資本は判明せぬ次第である、又た外國商館で傍ら銀行業を營んで居る者の內には、太古洋行、禮和洋行、怡和洋行、瑞記洋行、中白興業公司、禪莊洋行、義賓公司、等があるが、果して若干の資本を銀行業務の方へ廻して居るかは不明である。

本銀行の本位は金貨本位として置きたい、然し今日の場合中華民國が銀本位である以上止を得ず、暫時は金銀複本位を用ゆる事として、將來支那が金本位（少くとも金貨爲替本位）に直る時を待つて、本銀行の複本位制を撤却する考へである、

株券を百圓券としたのは現在の日本特種銀行や特種會社の例に倣ひ、且つ中華民國々立銀行の例を參酌した結果である、日本銀行券貳百圓、正金銀行券百圓、南滿鐵道券二百圓（改正百圓）臺灣銀行券百圓、朝鮮銀行券百圓、支那では中國銀行券百兩、滙業銀行券百元、開平炭礦券百元、通商銀行

券五元業である。本銀行の百圓券を五拾圓券にしたいと曰ふ論者が有る樣であるが、其れは過日來南滿鐵道の株主が同社の株券面を少額の者に分配したいと主唱して騷いたのと同意味であつて、「日本支那の細民に株が持たせたい、夫れに就ては現在の富の情況では貳百圓券百圓券は高過ぎるから少額面に分配せよと云ふのであるが」、吾輩は全々反對の意見である本銀行の如き株券は細民級の者に持つて貰ひ度く無い、況や原籍地すら判明せぬ支那の細民に此銀行の基礎に向て權利義務を持つ株主に成つて貰ふことは更に更ら希望せぬ次第である、此銀行の株主は日支兩國間に於て有力者を網羅したい考へで有る、然し債券の方は別であつて、債券(銀本位)の方は寧ろ細民に應募して貰ふ事が希望である、夫れは此銀行が支那上下に通じて親密の干係か結び度く且つ銀行の信用及債券の人氣を高騰せしむる上に於て必要であるからである。

第五條　東亞細亞銀行ノ株券ハ記名式トシ帝國臣民及中華民國人民ニ限リ株主タルコトヲ得

本條が即ち日支合辦の實を現したる者であつて、恰も日韓合邦以前に於て韓國の銀行や會社の章程に、日韓人に非されば株主たる事を得ずと記してあつたのと同樣である、米支合辦の會社も露支合辦の銀業も各自國人以外の者の株主たる事を禁じて居る、現今に於て日支合辦で仕事をして居る諸會社の例を擧げて見れば、先づ第一に指を漢冶萍煤鐵廠礦公司に屈せざるを得ざる次第であるが同公司は資本三千萬元(日支折半出資)社長宜盛懷氏次は正隆銀行資本百萬圓安田善次氏出資、本溪湖煤鐵公司資本金二百萬元大倉喜八郎氏出資、商務印書局資本金百萬圓原亮三郎氏出資、營口水道電氣會社資本二百萬圓社長岩下淸周氏、三泰油房資本五十萬圓出資者三井物産會社及潘玉田、上海絹糸製造會社資本金五拾萬圓藤田四郎氏社長などである、

株式を記名式としたのは、細民浮浪の徒を拒否する意味もあるので有る。現在支那の内地では未だ戸籍法が整ふて居らず從て身分（ステート）と云ふ者の責任が全く無いわけに成つて居る、故に止む事を得ず本銀行の株主として記名する華人は其貫族地の保甲長か或は知府知縣の奥書を添へて申込む事とせねばならぬ、若し之れが無ければ總會の通知すら爲す事が出來ぬ困難に出合ふであらふと想ふのである、何れ細別を作る時は種々の異例が加味される事であらふ。

次に株式分配の法は如何であるかと言ふに、之れは法律では取極め惡い場合も有るから何れ細則や定款で定める事に成るであらふが、先づ大體の標準は、總數五十萬株の内拾萬株は政府持株、殘り四十萬株の内拾萬株は中華民國政府及人民の持株とし、最後に殘る參拾萬株を内地で募集する事と成る次第であらふ、或論者は支那人側の拂込能力に就て疑を抱き支那側への振り當て株は我政府に於て借款の姿を以て一時立替へ置く必要があらふと言ふて心配する向も有る樣であるが之れは畢竟一場の杞憂に過ぎぬ、實際に於て此銀行の株式は多少の權利が附く者と見て差し支へ無い、一株に付て貳拾圓や參拾圓の「プリミヤム」の附くのは判り切つた話で在る（日本銀行券は參百圓の權利臺灣銀行は八十五圓、南滿鐵道は約五十圓の「プリミヤム」）又た現に此六月十日に〆切と成つた臺灣銀行の新株は四倍强の申込過剩にして權利は四十貳圓であつたそうである、之れを見ても東亞細亞銀行の株券は確かに參拾圓内外の「プリミヤム」が附く者と見て宜しい、若し左樣なりせば支那人側の分配株拾萬に付ては約參百萬圓の利益が附くわけで有つて、射利心の强い支那人が何んで此利益を見捨てる者であらふ、拂込能力を疑ふのは餘程迂濶な話で在る。

第二章　業務

第六條　東亞細亞銀行ハ左ノ業務ヲ營ム者トス

（一）各種商業手形ノ割引、交換、

此項目は普通商業銀行の普通に取扱ふ營業であつて我正金銀行や臺灣銀行が支那各開港場に於て取引して居る所では有るが、幣制統一が無く且つ商法も民法も無い支那では危險な商賣である、殊に約束手形（鈔票式帖子）を無制限に亂發するので其危險は一層甚しい、此鈔票亂發が屢々恐慌の原因を作るのであつて、政府は常に種々の法令を出して取締つて居るが一向利きめは無い様子で在る、現に北京では一昨年公估局なる者を新設し一方公定銀兩の統一を務め、他方鈔票亂發の弊を救正しやうとしたが餘り効能は無つたらしい、此信用手形亂發から起つて大恐惶を醸した著明なる例は、民國元年から今日迄僅か參四年の間に都合拾二回起つて居る、即ち山西の日昇號事件、北京の源豐潤倒產、南京寶善源の破產、芝罘鴻泰號の取付け營口の東盛和の投獄事件、漢口の源盛隆倒產、等が踵を接して起つて居る、一箇所に破產が有ると其影響は四百餘洲は勿論我大阪にまで及んで來るのである、本年一月は吉林の錢行慶泰號が破產した爲め滿洲全體に恐惶を及ぼした、支那の信用手形制度は實に寒心すべきである、而して此手形制度の危險は開港地よりも內地取引に多いのであるから東亞細亞銀行が將來內地取引を開始する上に於ては充分の注意を要する、

支那內地は道路が不完全にて運搬が不便で在るから從て硬貨の授受が少なく、大概の取引は相互帳面上の交換で決濟して居る、上海の錢行や票莊では手形の交換（滙劃）小切手（支票）の交換が盛んに行はれて居る、殊に滿洲では此交換法が非常に發達をして巧妙なる働きを爲して居る、其一種と云ふは有名なる營口の過爐銀制度で有る、此過爐銀制度の事を玆に委敷書けば非常に長くなるから、たゞ一言だけ述べて置くが、元來過爐銀なる者は滿洲では古くから發達した者で賣買双方が現金を

用ひずたゞ帳簿の上に於てのみ取引をする一種の交換法で、其利子(加色)の高低に輸贏を爭ふので有る、決濟は年に三回で其都度やかましい問題が起つて市場を賑はすわけであるが、兎も角滿洲一帶の地で銀行業に從事する者は營口の過爐銀、奉天の抹兌銀制度は之を取調べて置いて統一する考へで無ければならぬ。

(二) 内外に對スル爲換及荷爲換、倉庫業及「チャブ、ローン」制、

支那市場に於ける外國爲換の標準と云ふは總て倫頓の銀塊相場である、此銀塊相場が毎日電報で到着するのを土臺として毎夕相場を立てるのである其故爲換相場は毎日起る金銀の差で常に非常な高低が在つて一種「スペキユレーション」の目的物と成つて居る次第である、内地向きの爲換及荷爲換は總て從來山西銀莊の管轄であつて他の者は餘り手を染め無かつた業務であつたのである、況や外國銀行や商館では決して關係した事は無い、革命戰爭以來斯山西票莊が多く潰れてしまつたので今では北京通商銀行と中國銀行が重に其業務に從事して居る、然し内地各方が常に不穩の情態に有るのと、且つ運輸の不便とに依つて爲替相場は非常な懸隔を持つて居る、現に本年二月舊曆正月前に於ては、漢口と長沙の値開きが五割も出來たとの事である、漢口千兩の現金爲換が長沙で千五百兩であつた、又た上海で千兩の銀爲換が江西省で官札貳千百兩の相場であつて、其頃雲南貴州など遠隔地の爲換は全く中止の姿であつたと云ふ事である、滿蒙の地では古來獨立の爲換業は無かつた者で大概は粮店(豆問屋)經紀房(遼河船問屋)の兼業であつた、一方雜貨を送り込めば奧地からは豆や毛皮を積出すと云ふ風で殆ど現銀を用ひず物々交換で爲換の決濟をした者である、現今鐵道運輸が開けてからは段々爲換業が發達しつゝあるのであるから、此際新設の銀行が大いに勉めたなら將來此業務を獨專する事が出來ると思ふので有る、

支那人の取引は多くの場合對人信用で對物信用の場合が少ない、全く日本と反對で有る、なぜ斯樣な顯象が起つたかと云ふに、前にも言つた通り支那では貨幣制度が統一して居らぬのみならず、交際國が全部金貨本位なるに自個のみが銀貨本位と來て居るので、金銀相場の變動が甚しく從て物價の高低が亂高下をするので、安心して荷物に貸出しをする事が出來ぬ、寧ろ此危險なる荷物よりも個人を信ずる方が安全であると云ふので、自然對物信用よりも對人信用の方が發達して居るのである、其結果支那市場では割合に倉庫業が發達せぬ纔かに上海に大古洋行の藍烟筒碼頭の倉庫業が著しい位ゐの者で他には倉庫貸付業の盛行して居るのを餘り聞かぬ、然し新設さるゝ東亞細亞銀行に大連及青島等で日本商人の便を計らねばならぬのであるから、如何にも倉庫貸付けには注意を拂つて貰ひ度ひので在る、

「チャブ、ローン」(拆票)之れは支那市場特有の信用貸制度である數年前までは上海、香港、天津等で外國銀行の重なる營業は之れであつて、又た支那商館でも此融通法を唯一のたよりとして營業して居たわけで在る、此制度たるや畢竟對人信用を極度まで利用したる制度で支那市場では萬止を得ざる金融政策の一つで有る、即ち買辦「コンプラドー」や、跑合見(仲立人)を信用して、外國銀行が支那商館へ信用貸をするのである、一時上海のみで銀三千萬兩に登つた事が有るが革命騷ぎ後は少しく衰へて來た樣子である、然し今後共滿蒙地方の糧店などには此方法を用ゆる要があろふと思ふ。

(三) 年賦償還ニ依ル鐵道、礦山、其他不動産ニ對スル貸付

斯東亞細亞銀行が正金銀行や臺灣銀行と異なる所は此不動産に對する長期貸付制度のある事である此項目が即ち本銀行をして殖民政策の一助に資せしめんとする手段であつて內地不動産銀行とは其

目的が少々異つて居る、內地のはたゞ單に低利の資金を供給して農工界の發達を計ると云ふに止まつて居るが、此東亞銀行の不動產貸付は多くの場合政治上の意味を含むわけで、取りも直さず今回條約で取得した幾分の利權を有功に行使しよふと云ふ方針から割り出してくるのである、

貸付け年限には明記して置かぬが、大概本銀行の營業期間を標準とすれば善いので有る、日本勸業貸付期限は五拾年、北海道拓殖は參拾年、正金銀行の滿洲特別貸付法による者は貳拾年を限度として居る樣である、中華民國殖邊銀行は貳拾年限度、列國鐵道借款は約四十年平均、白耳義及「クリスプ」借款は第二繼續期を加へて參拾年である。

鐵道礦山其他不動產の貸付法は如何なる方法に據るか又た其始末は如何であるかと言ふ事を說明する代りに茲に二三の實例を擧げて見よう、民國元年六月印度支那銀行(東方滙業)は在北京の電車水道電燈等の事業費七千五百萬法を中華民國政府の保證と之等總ての不動產を低當として參拾年の期限にて貸與へて居る、又た安徽省の銅官山礦厰公司は礦山を抵當として我三井物產會社より百五十萬圓の貸出を需めたるが如きも其一例である、又た嘗て蒙旗撫墾公司が有する松花江流域の荒蕪地を露淸銀行に擔保として百五十萬元を借りて居たが、今では其荒蕪地が中々の美田と變じ、三天地即ち一方畝(我約拾五町步)が拾參兩に賣買出來て居るので今後滿蒙地方では此種の貸借が盛行するであらうと思はれる、又た黃海渤海民富漁業公司の捕魚船を抵當として大古洋行が貸付けをして居るのや、德華銀行が山東省內の短線鐵道或は各種工業會社へ其工場を抵當にして貸付をして居るのも不動產抵當貸付の例證である、

(四) 國債(借款)、公債、地方債、社債、株券擔保貸付、

國債即ち借款では支那は世界の名產國である、各種各樣の借款を所持して居る、舊いのは千八百六

十七年伊梨戰爭頃から始まつて次で阿片戰爭の償賠金英佛同盟軍圓明園燒拂の時の償金、清佛戰爭、日清戰爭(甲午賠欵)、拳匪事件(庚子賠欵)を重ねて「クルリスフ」借欵、白耳義借欵、四國借欵等と來て居る、頗る賑やかな次第で今後其多々增々繁昌する事で有ろふと思はれるが、將來の借欵は日本政府自ら其衝に當らずして、列强の例に倣ひ此東亞細亞銀行をして其任務を盡さして貰ひ度い者である、

公債、地方債、社債株劵等貸付の模樣に就て一々說明するも煩雜であるから、例に依つて二三の實例を擧げて說明に代へよふと想ふ、民國元年露西亞政府は俄亞銀行をして蒙古庫倫獨立政府へ將來財政上の監督者と成る可しとの條件附で同地獨立政府の發行公債參百萬留に應募した例が在る、大古洋行や美孚洋行や瑞記洋行が支那政府へのお世辭の爲めに愛國公債を擔保に各種興業に貸金をして居る事も又た一の例證である、支那で地方債(省欵)は即ち各省の借欵で有つて、十八省到る所ろ多少の省欵を有して居らぬ所は無い、嘗て廣東で不換紙幣取付騷動の有つた時、同省の收入押餉(質屋稅)、硝稅(硫黃稅)等を擔保として、我三井銀行臺灣銀行等から金百萬圓を貸した事がある、確か借主は同省の都督か布政使で有つたと記憶して居る又た張家口塞北徵收局漢陽新關の收入を抵當として俄亞銀行や豐滙銀行から借金をして居るのも地方債の一種である、民國二年漢口の道路市街の復舊工事費の爲め鄂府都督保證の下に我正金銀行や豐滙銀行や德華銀行から銀二千萬元を借入れたのは立派な市債の型である。

(五) 帝國政府及中華民國政府ノ公金取立及取扱、

我邦の公金取扱の事は別段申すまでも無い事であるが、此東亞細亞銀行の公金取扱ひと云ふのは重に中華民國政府の官金を指すので有る、或る人は將來假令ひ本銀行から公金取扱の事に關して支那政府へ請求しても容易な事では囑托すまいと言ふ

のであるが、夫れは大なる間違ひで事實は全く反對の顯象を呈するで在らうと思はれるのである、此公金取扱と云ふ事は我國内では何等危險も無い仕事で有るが支那内地であ非常な危險な業務であつて、土匪騷ぎなどある時は一番に官金掠奪と出懸けられるので、此官金の保護及輸送と云ふ事は頗る冒險的の營業と成つて居る、支那内地の事情は今日と雖も尚ほ南宋末の水滸傳時代と毫も異なる所はなく、吳學究や入雲龍が黄泥岡上で生辰綱と曰ふ公金掠奪の大芝居と同樣の演劇は屢々行はれて居るので有る、現に一昨年頃の事四川省の田舍で邊外地方へ輸送する公金（濬川源官銀）六十萬兩を捧客と云ふ土匪に掠奪せられた事がある、由來四川、山西、方面には捧客と呼ばるゝ剽盜專門の君子先生が巣を構へて居つて、信局（問屋）相互の輸送品は勿論の事兵勇若干の護衛して居る官金すら時に掠奪するのである、故に若し爰に安全に一定の貴重品を甲地から乙地へ輸送せんとするには、是非共其捧客の頭目（哥老會の大爺株）へ奉加金を納め護符（保險切符）を受取つて行かねば成らぬやうに成つて居る、又た滿洲内地にても同樣の事柄が行はれて居る、即ち營口から通江口まで貴重品を送らんとする時は鏢局と呼ばるゝ保險會社に到りて保險料を收めて其安全を保證して貰ふ譯だが、其保險料は鏢局から更らに一種の手續を以て馬賊の目頭（毛匪頭）へ送附する事に成つて居る、今後本銀行が設立されて我武力擁護の下に業務を採るやうに成れば之等弊害は一掃する事が出來よう、先年長江に革命の起つた時に、支那政府から武昌や南京の官金を保護して貰ひ度ひと云ふ事を外國銀行に依賴して謝絕せられ、漸く軍艦保護の下に在る我正金銀行の情けで安全に保管せられた事實が有る、此公金取扱ひは我より彼れに請求せずとも場合に依れば彼國政府から依賴して來る事と信ずるのである。

（六）預金、金銀珠玉各種類の信托、

支那人の習慣として金錢は總て金櫃に收めて自分の寢臺の下に隱して置くのであつて、銀行に預金すると云ふ慣例が少ない、開埠地ですら支那土着人の預金(存欵)は當座(浮存)に於て僅かに見る丈けで定期(長存)などは皆無の姿で有る。我臺灣銀行厦門支店で見ても其預金額の過半は居留內地人の者で土人の預金は頗る少額である、又た支那內地で非常に信用の有る交通銀行でも其北京の店で預金は僅かに參百拾六萬七千圓、(民國二年十二月調)に過ぎぬのである、目下定期の利子は約四分、當座が二分五厘位の者である。

金銀珠玉及貴重書類の保護預りは支那內地にては大切な業務の一つで有る、內地が常に不穩であつて、何日革命騷ぎや土匪騷ぎが起るか知れぬから自分の所有する貴重動產を何とかして安全の地位に保護して置き度と云ふ觀念から、比較的安全なる外國銀行へ保護預りを委賴するのは無理がない嘗て我が一部の政客に依つて設立せられたる北京信托公司も其趣旨に據つて出來た者である、此事に關聯して一つ面白い話しは前の滿洲朝廷の顯貴連や袁政府の大官逹が親獨派の敎唆により、何んでも獨逸にさへ委賴して置けば生命財產は安全に在ると云ふ考へから無暗に德華銀行に保護預りを委賴し同銀行は夫れを悉く靑島の銀行倉庫に收めて居た所ろ、今回征獨の天兵が突然靑島攻擊を開始したので、折角委托して有つた支那親獨派の貴重品は過半行衛不明と成つたと云ふ事である、確かに價格に見積り一億四五千萬圓(新王方の預金參千萬弗を含む)だと言ふ事である、悉敷い事は吾輩の寄稿したる中央公論昨年十一月發行「山東經略論」に出て居るから見て貰ひたいのである。

(七)　地金銀賣買及貨幣交換、

支那の銀行業務では、官銀號でも、錢行、銀棧、金店、鈔莊、票莊、當舖、押棧、質店の何れを問はず皆地金銀賣買と貨幣交換が重なる仕事である、何故であるかと言へば前に述べたる通り、支

那の四周は悉く金貨本位國であるのに自國丈けが銀貨本位で在る上に、各種の貨幣に統一が無いので、止を得ず地金銀賣買と(物々交換)、貨幣兩替業が盛行するので有る、今地金銀の輸出入を調べて見るに大正三年度我邦から支那へ輸送した金貨八百八十一萬七千七百圓であるが之れは直に上海の金店で免赤、標金、足赤など稱せらるゝ地金に改鑄せらるゝので有る、又銀塊の輸送は(我邦の生產品のみの數)參百貳拾萬兩、銅塊參百八十六萬兩で在る、支那市場の地金銀賣買は維新前後我橫濱で盛行した弗相場と同じ事で頗る危險の性質を含んで居るから、餘程注意を加へねばならぬ事である、現に民國元年の春香港上海銀行が六國借款を見越して銀塊參千萬兩を買込んだ所ろ其後借款が想ふやうに運ばず夫れが爲め銀塊の價大暴落を爲し同銀行は一千萬兩近い損失を招いた事は著明な事實である。

貨幣交換即ち兩替業は支那市場で大切な業務である、支那程ど貨幣の種類の多い邦は他に其類を見ざる所で、實に其の錯雜したる模樣はお話しもならぬ始末であつて、嚴格に言へば一絲一物を購ふにも何貨幣では幾千何貨幣では幾干と一々の貨幣に照じ合はして價格を定めねばならぬ仕儀と成つて居るのである、現今市場で通用して居る重なる貨幣を擧げて見れば、官府用康平銀、海關道海關兩、上海九八銀、天津化寶銀、漢口紋銀、廣東番銀、滿洲日銀、香港龍銀等が圓銀の標本である、又た補助貨幣では五仙、十仙、五十仙の小銀貨の外官制白銅、日本白銅、德華白銅、上海白銅を始めとし鍋錢、吊錢、串文、制錢、小錢等の黃銅小錢に到るまで各種の別がある、猶ほ其上へに支那人鑄造の貨幣は一枚一枚に其量分と品質を異にして居るので有るから受取る際には一枚一枚吟味して受取らねばならぬ、其煩雜な事は想察の外である、尙之等硬貨は悉く自由鑄造制であつて其流通高は民國二年の調査に據るに圓銀二億六百二十七

萬八千六百枚、小銀貨十五億八千萬枚、銅錢小錢は幾億萬あるか統計が作れぬとの事である、其他軟貨も殆と無制限の發兌制度であるから、各種各樣の者が通用して居る、(紙幣ヵ約束手形も、債券も兌換券も、爲換手形も小切手も殆と同樣の取扱也)其中重なる分類は、官帳、私帳子の別であつて、鈔票の內には銀票もあり錢票もあり、吊票もありて皆な各種店舖が思ひ〳〵に發行するのである、我東京で例を取つて見れば日本銀行の兌換券も人扇の鰹魚の切手も、風呂屋の湯札も同樣の姿で通用して居るわけで在る、我勢力範圍の北支那方面にて流通して居る官廳發兌の紙幣發行高を見るに(民國二年の調)、奉天官帳五百六十萬元、吉林官帳千四百萬元、黑龍省官帳三百七萬元、山東省官帳四百六十八萬元と、外に獨逸德華銀行の準官帳六百十五萬元である、

支那政府も此貨幣統一に就ては餘程苦心して居る者と見へて、清朝時代から今日まで屢々此統一を企てても何日も成功せずに終つて居る、日本を始め各國の條約にも常に此幣制改革の事が請合はれて居るに係らず未だ實行が出來ないのである、我東亞細亞銀行をしてせめて我勢力範圍の治下丈けでも貨幣統一の實を擧けさせ度い者である、

第三章　補助及積立金

第七條　帝國政府ハ東亞細亞銀行株式拾萬株(金貨壹千萬圓)ヲ引受ケ銀行營業期間之ヲ賣却セス

日清銀行法案第三十條に政府は同銀行の株式價格六百萬圓を引受くる事に成つて居つたのである、明治三十四五年の頃でさへ政府は自ら六百萬圓引受を申出して居るのであるから、六億の歲入を保つて居る現今の帝國政府が壹千萬圓の支出は何んでも無からう、いくら氣の小い慳吝坊の當局者でもまさか反對もすまい。

第八條　政府引受株ニ對シ向フ貳拾ケ年間ハ利益ノ配當ヲ爲スヲ要セス

日清銀行法案第三十二條に、向ふ拾五ヶ年間は政府へ對する利益の配當を要せずと明記してある條文を參酌して本銀行も向ふ貳拾ヶ年間政府支出の資金に對して利益配當を爲さぬ事に取り極めて置たのである、臺灣銀行や朝鮮銀行の補助法に據ると政府支出の資本に對する利益配當は欠損塡補の準備金に組込めよとか、或は特別積立に組入れとか云ふて、頗る複雜の規定であるが本銀行は法律思想の洽ねからぬ支那人對手であるから可成的簡明な方が善いと想ふて本條文の樣にしたのである

第九條　東亞細亞銀行ノ利益配當金ニシテ毎年營業年度ニ於テ一年間百分六ノ割合ニ達セザルトキハ政府ハ創立初期拾箇年間ニ限リ之ニ達スル利益ヲ補給ス

本銀行は支店設置の事や其他政府の命令によつて業務を營まざるを得ざる多大の義務を負ふて居る銀行であつて旁々日支合辦の事でも有るので株主に不安を與へるのは宜しく無いと言ふので此條文を作つた者だが、實際は空文同然の者で有る、今日迄の經驗に據つて見るも、苟も政府保護の特種銀行で六朱以下の配當をした銀行は一つも無い、臺灣銀行は一割平均、朝鮮銀行七朱以上、北海道拓殖銀行は九朱平均である、本銀行とても六朱以下に落ちる事は無からうから實際政府からお手當を頂戴する樣な事は萬々無からうと想ふ、

第十條　本銀行ハ毎營業年度ニ於テ資本ノ欠損ヲ補フカ爲メ利益金ノ百分八以上ヲ積立テ且ツ利益配當ノ平均ヲ得セシムルカ爲メ利益ノ百分二以上ヲ特別ニ積立テシム、

東洋の治亂は實に明日を計る可らざる者が有るので、假令本年は平和で有つて利益を收め得られても、明年は如何なる變亂があつて損失を來すかも知れぬから、銀行の基礎を强固にし且株主に安心を與へんか爲め此積立法を設けたわけである、

第四章　銀行券及債券發行

第十一條　東亞細亞銀行ハ券面金額一圓以上ノ銀行券

ヲ發行スル事ヲ得

一圓券以上の銀行券發行と明記したるは滿蒙及び山東省の現狀に照し、一圓、五圓、十圓の三種類位を最初に發行し漸を追ふて五十圓券百圓券をも發行する考へなので有る、日本の軍票は一圓五圓十圓の三種と十仙二十仙五十仙の三種補助貨であつた、正金銀行の滿洲通用の兌換券一圓五圓十圓の三種、臺灣銀行の發行券は一圓二圓五圓、俄亞銀行の羌票は一留より百留に到る十二種、德華銀行券は一元五元貳拾元五拾元、中國銀行券は一元五元十元五十元百元と補助貨の五角一角の二種類、滙豐銀行券は一弗より一千弗に到る各種の者を發行せり

右銀行券ハ何時ニテモ直ニ金銀貨ニ引替ヘ得ラルヽ方法ヲ取ルヘシ

臺灣銀行や朝鮮銀行でも取付の場合に處する時間の模樣や、本社支店の關係など掲げて在るが本銀行は遠地に本店支店の有る事で巨細法律で極める譯には行かぬから一切銀行で責任を持たすやうにしたのである、此兌換券引き替への事は頗る大切な事で一朝機宜を誤る時は忽ち銀行の信用は地に陷ちてしまひ不測の變を起す事があるから餘程愼重にやらねばならぬ仕事である、現に一昨年廣東恐慌の場合官銀號の引替へが日曜日越しになつたと言ふので翌日は直に半値迄下落した例がある、

本銀行ハ銀行券發行高ト同額ノ地金銀或ハ金銀貨ヲ供ヘ置クヘシ

右準備ノ外更ラニ銀行券ヲ發行セントスルトキハ金壹億萬圓ヲ限度トシテ日本銀行兌換券其他確實ナル有價證券ヲ保證トシテ發行スルコトヲ得、

臺灣銀行は資本金五百萬圓にて千萬までの發行を許され(大正三年度調實際發行高千五百萬圓)、朝鮮銀行資本金三千萬圓にて千萬圓までの發行を許され(實際發行高貳千萬圓)である、此保證準備金は兌券發行に伴ふ最要件であるので、若し之の制度が完全に行はれぬ時は兌換券は總て不換紙幣の形

と成つて市場に大恐慌を惹起する事があるのである、支那銀行の兌換制度は實に不整頓であつて準備金無くして無暗に鈔票を亂發するので屢々取付け騷ぎや恐慌が起つて來た次第であつたので、北京政府も能く能く懲りた者と見へて、昨年に到り、兌換券の保證準備章程とでも言ふやうな者を發布した、其法律に據ると、(第一條)銀號發行の鈔票は總資本の十分六を超過すべからず(第二條)資本以外兌換券發行せんとする時は其發行高と同額の地金銀或は官票を財務部或は地方廳に提供すべし、

準備金は發行紙幣總額の四分一を供へ置くべし、

本行カ債券發行ヲ望ム時ハ主務大臣ニ申請シ其認可條件ニ隨テ發行スルコトヲ得

債權發行を別種法律の制定に待つ事にしたのは外ではない、此銀行の債券發行は內地の勸業銀行や農工銀行が債權發行するのとは多少意味が異なつて居つて、一種特定の目的に對して特種の資本を要する場合に發行を許可するのであるから、豫め一定の規欵を定めて置く譯けにも行かぬ場合があるのである（實際は命令で有つて認可の形式を裝ふ事もあるべし）、譬令を以て言へば山東省內の某鐵道が兼て獨逸人と支那人と共同して資本を注入して居たのを今度改めて日支合辨として仕事を仕やうと云ふので東亞細亞銀行に援助を請ふたと云ふが如き場合、本銀行の流通資本を多額に固定さす譯けには行かず、サラバとて此利權を放擲する譯けには行かぬと云ふので、茲に始めて債券發行の要が起つてくる次第である。

或論者は此際彩票的の增割債券を發行して、四百余州の隅々から零碎の資本を集めたらドーかと言ふのであるが、米國は「マニラ」無盡を禁止し、我關東洲政廳も大連の彩票を中止し、中華民國政府すら先きに廣東の勸業有獎公債辨法を嚴禁し近く南京公議所の籌餉獎勵彩券を禁止せしめた幾多事例を眼前に見る時に、マサカ此東亞細亞銀行をして富籤興行を爲さしめやうと言ふ譯けにも行くま

いでは無いが、

債券發行高の制限は如何であるかと言ふに、日本勸業銀行は資本四千萬圓で債權高約貳億圓に近く興業銀行は資本千七百五十萬圓で現在債券發行高が五千六百六十八萬圓、北海道拓殖銀行は資本參百萬圓で發行高千五百萬圓である、大凡の標準は公稱資本の五倍と見て差支へ無いから、從て東亞細亞銀行もいよ〳〵必要の場合には貳億圓位は債券を發行して差支へ無い譯で有る。

第十二條　東亞細亞銀行ヨリ發行スル銀行券ハ南滿州內蒙古、山東省內ニ於テ無制限ニ通用スル者トス

本條は朝鮮銀行法第二十三條に「本銀行ノ發行券ハ朝鮮總督府管內ニ於テ無制限ニ通用ス」と言ふ文章を其儘に持つて來たのである、舊く露淸銀行の滿州に於ける、近く德華銀行の山東省に於ける各自國銀行が發行したる兌換券を官札同樣に通用せしめた例證を繼承するので有る、(日支新條約山東省ニ關スル第一條獨逸ノ有セル權利ノ全部ヲ繼承ス)、德華銀行の鈔票は法貨で有つたのみならず郵便電信及汽車の切符代まで此鈔票で無けねば賓渡さず剩へ青島市內にては他國の貨幣の通用を禁止した事があつた、又た英吉利は一昨年五月に到り香港政廳をして一片の法律を出さしめ、今後香港九龍一帶の地に於ては外國貨幣の通用を禁す、犯す者は罰金千弗を科すと云ふ果斷を決行した、廣東督府から抗議が有つたが一切はね付けて今日に及んで居る、此一擧で英國銀行(滙豐、楂打、有利)の兌換券が廣東省福建省等で非常の威力で流通する事に成つたツーである、我邦も將來自己の勢力範圍地方に於ての法貨問題に就ては果斷の處置が取つて貰ひたい者である。

第五章　役　員

第十三條　東亞細亞銀行ハ總裁一人副總裁二人理事四人以上監事三人以上ヲ置ク

此役員制度は取りも直さず日支合辦の實を談る者

である、日韓合邦前の韓國銀行や拓植會社の例に倣ふた者で內地の普通銀行とは余程變つた組織で有る、

第十四條　總裁ハ帝國臣民ヨリ政府之レヲ任命シ東亞細亞銀行ヲ代表シテ其業務ヲ總理ス

此總裁の件に就て面白い話が有る、北清事變拳匪の亂の時、吾輩は北京に遊び時の公使故小村壽太郎氏と貴族院議員故三崎龜之助氏と三人で慶親皇の邸に伺候したる事があつた、其時は皇帝、西大后共に蒙塵されて居つて、北京城は列國兵に據て占領せられ、僅かに日本の好意の爲めに辛じて社稷を保つて居ると云ふ始末の時であつた、今の鄭書記官の通辯で種々浮世話しが有つた末に、吾輩から日清銀行の話しを持ち出した所、慶邸は余程滿足の趣きで「若し將來日本が日清合辦の一大銀行を起す事があつたなら、其總裁には督撫（總督巡撫）同樣の資格を與へ一切「ロバートハート」氏の例に準せしめやう、又其銀行發行の鈔票は官票又は宮欵（禁裏金札）と同樣の取扱ひをせしめやうから、是非速かに創立して貰ひ度い者だ』との話しがあつた事を記憶して居るが、其節は未だ度支部銀行も大淸銀行も出來て居なかつた前の事である、今から想ふと丸で隔世の思ひがする、

副總裁ハ總裁ニ代リ或ハ總裁ヲ補助スルノ任務ヲ負フ一人ヲ日本人トシ一人ヲ華人トス

副總裁ノ日人ハ帝國政府之ヲ任命シ華人ハ中華民國政府ノ推薦ニ待ツ

本銀行が日支合辦である以上は副總裁一人は之れを華人より採るが當りまへである、之に對する一二の例證を擧ぐれば、中華民國漢治萍煤鐵廠礦有限公司では役員十一名の內六名華人五人日人にして社長は華人副社長に日人とす、又佛人華人合辦の滙理銀行では總裁佛人、理事三分一支那政府の推薦に依る華人を以て之れに充つると定てある、又日支合辦の銅官山礦務公司では社長二人を置き日支人各一人づゝとし理事は日支人各參人づゝで

執務する事に成つて居る、

理事ハ總裁副總裁ヲ補助シテ本銀行ノ業務ヲ擔當スルモノトシテ帝國政府之ヲ任命ス、但シ半數ヲ超過セサル數ニ於テ中華民國政府ノ推薦セル華人ヲ用ユ、

監事ハ株主總會ニ於テ百株以上ヲ所有スル株主中ヨリ之ヲ選擧ス

第十五條　總裁副總裁及理事ハ任期ヲ五年トシ監事ノ任期ハ三年トス、

第十六條　監事ヲ除ク他ノ役員ハ何等ノ名稱ヲ用ユルニ係ラス他ノ職務ニ從事スルコトヲ得ス、

第六章　株主總會

第十七條　通常株主總會ハ定疑ニ定メタル期間ニ於テ總裁之ヲ招集ス

第十八條　臨時總會ハ必要ノ場合總裁之ヲ招集スルコトアルヘシ

資本金五分一以上ニ當ル株主ハ會議ノ目的ヲ明示シ臨時總會開會ヲ會社ニ請求スルコトヲ得此場合總裁ハ直ニ開會ノ通知ヲ爲スヘシ

第十九條　株主ノ議決權ハ十株一個トス

六個月以上株主名簿ニ登錄シタル株主ニ非サレハ議決權ヲ有セス

株主ハ株主ニ非サル者ヲ代理人トスルコトヲ得ス

前章屢々述べたるが如く本銀行は細民の金融機關に非ず國際的國權振張の意味に依て設立されたる者にして其株主會も日支兩國間の有力者に倚つて組織さるゝ事が希望であるから、株主の議決權も十株を一束して一個の權利を與へる事としたのである、又た無責任な會社荒しや支那人の投機者流に弄ばるゝを防ぐが爲めに六個月以上株主たる者に非ざれば株主會へ出席する事の出來ぬやうに規定したので有る、我邦の銀行法案には餘り之等の例無く、却て外國銀行及支那銀行に此例があるので吾輩は採つて爰に容れたのである、中國銀行條例第二十二條、及興華滙業銀行法程第二十條に同樣の規定が有る、

第二十條　定欵變更ハ全資本ノ半額以上ニ當ル株主出席シ其議決權ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス

第七章　監督及保證

第二十一條　主務大臣ハ東亞細亞銀行ノ監理官ヲ置キ銀行ノ業務ヲ監視セシム

第二十二條　監理官ハ何時ニテモ銀行ノ金庫帳簿及諸般ノ文書ヲ檢査スルコトヲ得尙必要ノ場合ハ營業上諸般ノ計算及景況ヲ報告セシムルコトアルヘシ

監理官ハ株主總會及役員會ニ出席シ意見ヲ述フルコトヲ得蓋シ議決ノ數ニ加ハルヽヲ得ス

第二十三條　主務大臣ハ銀行劵發行高又ハ貸付金額ノ制限ヲ命シ又ハ營業上違法ト認メタルトキハ之ヲ制止スルコトアルヘシ

第二十四條　特種物件特種團體ニ對シ主務大臣ノ認可或ハ命令ニヨリテ貸付タル者ニシテ債務者カ中華民國政府及人民ニ關スル場合ハ銀行ノ請求ニヨリ帝國政府ハ其債權擁護ノ手段ヲ取ルヘシ

此條項は斯銀行に取つて頗る緊要な條目であつて今日までに成立したる銀行法中には未だ甞て見ざる法文である、東亞細亞銀行が正金銀行や臺灣銀行の如く開埠地のみで營業して居る商業銀行ならば別段此規定の必要が無いが、苟も茫漠たる滿蒙の內地に侵入して業務を執るに於ては必ず政治上の擁護を必要とするのである、且つ其上へ特種物件（鐵道礦山の如き不動產貸付）又は特殊團體（借欵或は省欵）への貸出をしたる場合は（命令或は認可）此貸借は全く國際(インターナショナル)的の性質を含んで來るのであるから若し其貸借事項が混雜を惹起した場合は嫌や共外交部(ヂプロマチツク)の手に移さねばならぬ次第に成つて來る、政府で此債權擁護が出來ぬと云ふのなら百の亞細亞銀行を作つてゝ利權を獲得する事は出來ぬ譯けである、今本銀行を作る以上は是非此條は此法案の內に容れて置きたいと云ふ事を改めて切言して置く、

第八章　罰則

第二十二條　東亞細亞銀行營業上ニ於テ左ノ違法行爲アルトキ總裁以下役員ヲ其行爲ノ輕重ニヨリテ百圓以上千圓以下ノ科料ニ處ス

（一）第六條ノ規定以外ノ業務ヲ爲シタルトキ、（二）第十條ノ積立金ヲ怠リタルトキ（三）第十一條ノ銀行券發行違犯ノ場合、

附則

第二十三條　政府ハ東亞細亞銀行創立委員ヲ任命シ其設立免許ヲ與ルマデ一切ノ事務ヲ所理セシム

第二十四條　創立委員は定款ヲ作リ政府ノ認可ヲ得タル後チ株主ヲ募集ス

創立委員株主ノ募集終リタルトキハ株式申込書ヲ政府ニ提出シ東亞細亞銀行設立ノ免許ヲ申請スヘシ

創立委員ハ前條項ノ免許ヲ得タルトキハ其事務ヲ東亞細亞銀行總裁ニ引繼クヘシ、（終）

政黨政治の將來

小山東助

政黨政治の玉成は、久しく國民の翹望する所である。政友會も國民黨も同志會も、等しく此根本理想に立つて居る。大隈内閣は此理想を大膽に宣言しなかつたけれども、決して此理想を沒却する者では無からうと思はれる。大隈内閣は積極的に政黨内閣の樹立を叫ばずして、消極的に黨弊打破を其一大旗幟とした。政友會

全盛時代に議會の少數黨を基礎として立つた大隈内閣としては、事情當に然るべき者と察せられる。要するに大隈内閣の黨弊打破なる者は、政友會打破の異名であつて、同時に現政府黨の勢力扶植を意味し、その窮竟に政黨政治の玉成といふ理想を目指して居るに相違ない。吾々は現内閣の此意圖を是認し贊助するを惜まないのである。

併しながら政黨政治の理想は、果して容易に實現せられるであらうか、少くとも吾々が希望し滿足するやうな政黨政治を近き將來に庶幾し得るだらふか、こゝに大いなる疑問がある。本來政黨政治の理論的基礎とも言ふべきものは、國政の上に國民最大多數の意思を實現するに在る。從つて政黨政治の價値は、二つの條件に根ざさねばならぬ。一は健全なる輿論の存在、一は輿論を代表する人物の存在夫れである。今日の我が政界に於て、此二條件が果して充分に滿足せられるであらふか、充分とは言はぬまでも可なり相應に滿足せられるであらふか。公平冷靜に、虚心坦懷に政界の實情を觀察したら、何人も容易に之を肯定し得ないかと思ふ。健全なる輿論なる者が存在するか、切言すれば輿論なる者が本來存在するか、政黨者流の間に兎も角も輿論の代表者として、國家の運命を擔當するに足る丈けの識力あり信望ある者が果して幾何あらうか、政黨政治の謳歌者も流石に之を肯定す可く躊躇せざるを得ない。不幸にして政黨政治の基礎は猶ほ未だ强固と言へないで無いか。

輿論にも種々あらうが、特殊階級の利害から來る要求もあり、國家本位の考察から來る主張もある。何れにしても吾々の眼には輿論の色彩が鮮かで無い。例へば減債基金の問題である。毎年五千萬圓を償還するといふ政策は、桂公時代より殆んど動かす可からざる財政策上の金科玉條と言はれた。東京大阪の銀行家は、此政策の維持を以て財界の一大支柱と叫んだ。昨年の春頃までも此政策を變更したら内閣は當然致命傷を負ふ可き者の如く論ぜられた。之が全國銀行家の輿論であると呼號せられた。今や即ち如何、五千萬圓が三千

萬圓となつても、東西の銀行家團は肅として聲ヶ立てないのである。財界に於ける形勢の一大變化か抑も亦銀行家連の定見なく恒心なき活證據か、吾々は何れにしても實業家といふ階級の輿論なる者が、左程彈力あり執着力あり牽制力ありとは信じ得ないのである。又例へば廢減税の要求である。第三十六議會には、政國兩黨から地租と營業税との廢減税案が提出された。而かも農民階級に果して地租輕減の輿論なるものが存在して居るか、その存在を立證すべき活ける公的運動でもあるか、吾々は之を發見し得ないのである。營業税の輕減若くは全廢に關する全國商業會議所聯合會などの態度を知るものは、益々輿論の健在を疑はざるを得ない。單に議論が區々であると謂ふのでは無い、根柢に確信を缺くのである。廢減税の問題はやがて第三十七議會を賑はすであらうが、吾々は之に對する健全なる輿論の何處に在るかを確かめたい。

特殊な階級の要求も、畢竟國家全體の考察から割り出されねば、到底實現の希望が無い。國家本位の考察は、何人が能く之に當るのであるか。若し現在の政黨にして眞に國事を擔當するの責任感を有するならば、人氣と俗論の外に一歩を進めて、問題を大局から見ねばならぬ。此點から政友會の廢減税論を觀察すると、吾々は竊かに其心術を怪しまざるを得ないのである。吾々は廢減税の急務を辨知して居る、廢減税の主張は從來非政友派の獨占事業のやうであつた。無論政友會と雖日露戰後の地租輕減が無いとは言へないが、併しその所謂積極政策は、概して廢減税乃至税制整理を第二義の者として等閑視して來た。今度臨時議會には政友會自ら進んで之を提唱し、來るべき地方遊説には專ら之を題目として民衆に訴へる計劃があるとか聞く。而かも政友會の減税案は減債基金の二千萬圓を財源として提唱せられたのである、その二千萬圓の使途が明白に決定せられた後に於て提唱せられつゝあるのである。政友會の諸君は猶ほ飽くまで此基金の減額せられた部分を唯一財源として廢減税を斷行せんとするのであるか。然らば他の鐵道資金の財源は如何。三

十六議會に於ける政友會の代表演說者は、此點に論及せないでは無かつた。けれどもその鐵道資金論は、要するに鐵道の建設改良を不可能ならしむる程度の消極論であつた。茲に於て人多くは政友會の積極政策を今果して如何なる狀態に在るかを疑ひ、その久しく採り來つた鐵道利用策の廢棄を笑はざるを得なかつたのである。廢減稅の財源問題、鐵道資金の問題、共に將來の大問題ではあるが、政友會が現に提唱しつゝある廢減稅論は國政全體の大局から割り出した者と認むべき根據は乏しくして、只人氣を煽り俗論に媚ぶるの嫌あるを免れ得ないと思はれる。是れ多年責任ある政論を叫び來つた政友會としては、寧ろ甚しき恥辱であるまいか。今日此問題に就て政友會の態度を裁判するには時機尙早と思ふが、併し政友會が健全なる輿論を造らんとせずして、只性急に俗論を煽動せんとする傾向あるを惜まざるを得ないのである。對支外交問題に就て、吾々は特に此感を深うした。政友會は政友會としても、現內閣の與黨を以て任ずる同志會は如何、廢減稅に關する多年の主張を將來如何にせんとするか、現內閣の言責を如何にして遂行せしめんとするか、是等の點に就て、同志會は果して世間の人氣に反對してまでも、所謂健全なる輿論を起すべく幾何の努力を爲し得る事であらうか。吾々は刮目して同志會が果して健全なる輿論の製造者たり嚮導者たる資格ありや否やを監視せんとする者である。

輿論の健全不健全は、何によつて之を診斷するか。無論診斷法は種々あるであらふ、その輿論なるものが一時的勃發的であるか又は持久的彈力的であるか、感情的であるか又は理智的であるか、局部少數の利害から出たのか又は多數民衆の要求に根底を有するものか黨派的であるか國家的であるか、診斷の標準はいくらもある。併し眞の輿論は必ずしも多數の聲で無い、却つて少數識者の聲に現はれるといふ事實を閑却してはならぬ。而して診斷の困難は實に此處に存する。又或る意味からは、輿論を捉へる事の時として案外容易な理由も實に此處に存する。輿論特に政治上の輿論は

首領の頭腦に存すと言つても過言で無い場合が多い。立憲國に於て最も然りである。政黨の首領乃至嚮導者は、事實上輿論の代表者であり製造者であり而して同時に實行者である可き筈だ。故に一般社會を見渡して何處に輿論ありやと疑ふ場合に於ても、若し政界の長老先達の見識力量にして信頼せらるる場合には、安んじて輿論の標的を見出し得るのである。此點から現在の我國が政黨界を見る、吾々は果して輿論の指導者たる多くの明星を發見し得るであらうか。試みに衆議院の最大多數黨たる同志會の議席を物色し來れ。その幹部席を仔細に點檢し來れ。同志會は胴體はあるが頭腦がないと誰やらの批評が果して不穩當であるか何うか吾々は之を疑問とさへも考へ得ないのである。昨今參政官副參政官の採用が問題となつて居る。而して世間の識者達は卓然高擧、所謂獵官運動を淺ましいと言つて笑つて居る。吾々は聊か見解を異にする。自薦運動は淺ましいに相違ないが、人材拔擢は素より必要である。吾々は獵官運動の淺ましさを嗟歎するも、寧ろ拔擢せらる可き人材の缺乏を嗟歎すべきではあるまいか。政黨界人物に乏し、官僚系に比して恐らく多くを誇り得まい。政黨政治の基礎猶ほ薄弱なる所以である。政黨政治家は多く研究力を缺いて居る、從つて多くは頭腦空疎である。輿論を嚮導し、國事を擔當する意氣抱負があつて而かも之に相應する識力なきを奈何。黨界今日の急は、自己充實である、人物吸收である。然らずんば政黨政治の基礎は到底堅固とはなり得ない。元老の干渉、貴族の跋扈、官僚の飛躍は當然の結果となる。本來政治は現實の力を本とす、政黨政治の理想は如何に美しく光輝すとも、人物の政黨に集らざる限り空想の嘲りも畢竟餘儀ない事となる。吾々は有爲の人物が、或は官界より或は實業界より、政友會と言はず、同志會と言はず、漸然政黨に入り來らんとする大勢の既に動けるを見て大に之を歡迎する者であるが、政黨自身は更に一段の自覺を必要とする。

日本に於ける政黨政治の基礎、猶ほ未だ强固ならざるに拘らず、吾々は素より政黨政治の信者である。大

勢は既に抑え難く、弱點も漸次に矯心せられるゝと思ふ。而かも此頃に至つて政黨政治に對する不信の聲が何時となく高まつて來た。その動機は主として失脚せる官僚政治家の活路を求めむとする煩悶に存するかも知れないが、英國に於ける最近の政變が偶々その論議の傍證に引き出される。アスキス首相の下に自由統一兩黨の領袖を網羅した所謂擧國一致内閣は、英國憲政史上破天荒の一大事件である。日本に於ける官僚政治の謳歌者は、之を以て政黨政治の終焉と言はんばかりに力說して居る。吾々は寧ろその短見淺慮を惜しむのである。英國の擧國一致内閣は無論非常の場合に於ける例外の出來事である。未曾有の例外であつて、素より憲政の常道では無い。何故に英國は此例外なる破格の政態を採用したか。その理由他にあらず、現下の歐洲大陸戰がまさしく未曾有の例外であつて、之が對應の策としては、憲政上に於ても亦未曾有の例外を採用す可く餘儀なくせられたのである。二大政黨の聯立内閣は英國政治史上絕無の事も言へぬ。ナポレオン戰爭の當時、ピットはフォックスを誘つて入閣せしめんと試みた事もある。ピットに對抗したが、國家非常の場合に際して出來得る限りコンプロマイズの精神を發揮するのは由來英國政治家の特徵と言つて宜しい、ジョン・モーレーの如きは、英國憲政の進步を以てコムプロマイズの結果とさへ論じて居る。歐洲の大亂は列强をして擧國一致の精神を極度まで發現せしめて居る。例へば獨逸帝國に於けるカイゼルと社會民主黨との不倶戴天的葛藤の歷史を知るものは、戰爭突發後に於ける兩者の協同一致を見て、驚駭せざるを得ないでは無いか。社會民主黨の領袖連は、皆力を盡して軍隊の後援となつて居る。一時銃殺せられたかの樣に誤傳せられたりしプクネヒトを始めとして、ローザ・リユクセンブルグの如き、フランクの如き、社會民主黨の首領株は、國の內外に亙つて母國愛護の爲め奔走盡力して居る。獨逸の社會民主黨すら斯の如しである、況んや聰明、寬容、交讓の精神を誇りとして居る英國朝野の政治家が、和衷協同の

實を擧げずして將た何とかす可き。英國の擧國一致內閣は、政治史上の常道としては、確かに破天荒の例外であるが、併し時局の乾光に照せば、寧ろ當然の事實と言はねばならぬ。之を以て平和時代に於ける政黨政治の壞滅と見る如きは、早計も亦甚しいでは無いか。平和時代は何時來るか知らんが、その來るの日、英國の憲政が常規に復して、自由黨統一黨各々その行く可き道を踏み行く事は、決して疑ふ餘地が無い。

只今度の經驗に鑑み、英國でも獨逸でも多少政治狀態に見る可き變化を生ずる丈けは、豫想するに難くない。思ふにカイゼルの對社會民主黨政策の如きも、戰後に於ては幾分寬和せられるであるまいか、最早國賊呼ばはりをして挑戰する如き事は無くなりはしないか英國に於ける愛蘭問題の解決なども、戰前の如き熱狂擾亂を再びすると考へられない。是れ亦何等か妥協の道を發見するに相違あるまい。左すれは例外非常の擧國一致內閣は、英國の政黨政治史上に何等かの大いなる足跡を殘すに至るかも知れぬ。吾々は之れを豫想し得ると信ずる。併し政黨政治其者が、之によつて終息するかの如き臆斷を下すものは、時局の大事を忘れた非常手段の意義を解せざる議論ではあるまいか。英國の擧國一致內閣は、アスキス內閣自らを支ふる爲めの方便として出來たもので無い。又統一黨領袖連が權勢に對する渴望から出來た者でも無い。全く大英帝國の決心を內外に表白する爲めの國家的必要から出來たものである。寧ろ英國の新內閣組織は、政黨政治の有効力を大に發揮し得たものであると言つて宜しい。蓋し政黨政治の理想は、單なる黨派的勢力の競爭には非ずして、主義政策の競爭である。國家有事の日に當つて主義政策上爭ふ可きの餘地無くば、即ち交讓妥協して共通の國家的目標に進むのが、政黨政治の極意を得たものと言ひ得ないでは無い。吾々は英國の內閣改造を見るにつけても、英國流の政黨政治を益々欽仰措かざる者である。

序に一言して置くが、英國の新內閣組織は、その主眼とする所擧國一致の精神を實現するに在つて、必ず

しも人材網羅の目的から來たのでは無い。人材網羅は兩黨聯合の自然的結果で、人材網羅其者が內閣改造の目的で無い事を注意せねばならぬ。人材網羅は一見極めて結構である、けれども政治のエフキシエンシーは單なる人材網羅で發揮し得らるゝ者で無い。一致が根本である、協同が必要である、一致協同から有効な總ての働きが湧いて出る。我國の或る部分には、近來頻りに人材網羅內閣論を聞く、その目的は要するに浪人救濟策乃至官僚政治復活策であるかも知れぬが、吾々は所謂人材を寄木細工的に網羅した內閣よりも、國民多數の意思を基礎とする堅固な有効力に富む統一的內閣を歡迎する。斯の如き內閣は充實せる政黨の所產である可き筈であるが、不幸にして現在の政黨が內容につて貧弱とすれば、政黨自身の自己充實が眼頭の急務と言はねばならぬ。その方法果して如何、黨界の先達は深く慮る所が無ければならぬ。（六月二十日）

陸海軍首腦の諸將耳を假せ

（軍規の弛廢を慨す）

福本日南

日露戰爭の將に始らんとする際であります。歐洲の新聞雜誌は爭うて日本の軍備を論じた。其中で日本海軍に對しては十の七八までは惡評を加へた。今に自分が記憶する。ゼネラル・ドラ・マリーヌといふ有名な海軍專門の雜誌、それに斯う云ふ事を云つてある。黃金はよく總ての有形のものを買ひ得る。今の日本海軍は歐洲のそれと少しもかはらぬ。戰鬪艦も有して居れば又大口徑の大砲も有して居る。乃至巡洋艦、砲艦、驅

逐艇、水雷艇等有せざるところはない。これは皆黄金の力に依つて買ひ得たのである。然しながら之を運用する精錬なる士官と兵卒とは買ふことは出來ない。之に反して露國の海軍は他の先進なる歐洲海軍國のそれには或は一籌を輸するかも知れねど、兎に角ペートル以來鍛え上げた軍人を以てそれを率ゆるのである。今にも見よ、日本海軍とうちつける時には、黄金力丈けでは戰爭が出來ぬといふ事を痛切に極東人に感ぜしめるであらうと評した。然る後渤海黄海等の海戰となり遂には對島海峽の大海戰によつて日本海軍はバルチック艦隊にとゞめを刺した。先の雜誌の評論を見た際に餘り腹が立つたのと、後の戰捷が餘り嬉しかつたので其雜誌の餘白に、御教示の程誠に忝い、いかにも黄金の力丈けでは戰爭は出來ないと云ふ事をお互にしみ〴〵事實に於て感じたといふ事を書きつけて、其雜誌社に送り返した事がある。此際に當つては獨り自分のみならず我國民全體は如何に我が海軍の信頼すべきか、又如何に世界に對して肩巾廣いかを感じたであらう。然るに今日の狀態は如何であるか、吾人をして憂慮に堪へざらしむるもの一にして足らぬ。自分をして云はしむれば、第一に少壯國民の心得からが間違つて來た。就中最惡にして最劣等なのが學生の一部である。彼等は國民中で智識階級に屬する。申さば國民の提撕者である。それが兵役を厭ふ事實に甚だしい。全體國は國民によつて捍衞せられずして誰が之を維持するか。然るに年壯有爲にして而かも提撕者たるべき智識階級の彼等から軍隊を忌避するに至つては實に言語道斷と言はねばならぬ。尤も彼等に言はすれば、智識ある我々は一兵卒となつて國に盡すよりも、此智識を他の方面に働かしてそれによつて國家に貢献する方が幾倍の効力があると言ふのを屢々耳にする。然しそれが理由になれば士農工商一般に兵に取らるゝ者は皆云ふであらう。百姓は一人の兵卒となつて彈丸を打つよりも多量の米を作り出して國に報ずる事が利益であると。商人は言ふであらう。同じく兵隊たるよりも、商賈によつて富國に培ふ方がよいではないかと。此等の御托を勝

手につかはしめたなら、兵になつてよいといふ者は一人もなくなる。何に依つて國を維持せんやである。箇様な事をいふと學生の氣に入らぬに極つて居る。氣に入らぬからと言つて控ゆる譯けには行かぬ。今や國の立場は益々軍備の必要を感ずるのである。全體低い地位即ち一兵卒で働いてそれで戰死した日には詰らないといふ考、此考が實に詰らないのである。將軍になつて國に奉ずるも、一兵卒となつて國に奉ずるも其價値は同一である。彼の文豪ミシユレーかパリーの凱旋門下に立つて發したところの嘆聲を聞かずや。「この大凱旋門は大英雄ナポレオン一世を紀念するに相違ない。然しながら其大ナポレオンを椽の下から力持して大英雄たらしめた無數の小英雄が恐ろしい。之あればこそ此凱旋門の一大紀念碑は現出したのである」と言つて居る。國に對し、世界に對しては精神に於て大英雄も小英雄も同一である。此の所を思へば小さな功名心などは何んでもない。寧ろ喜んで銃を肩にして一兵卒として飛出したラツール・ドウ・ベルニユーのエラサを思はしめる。彼は其家柄を問へば公爵であり又其壯時には曾て一度佐官にまで上つたのである。それが一切の官職を抛つて悠々として古言學の研鑽に從事したのである。就中セント語は彼の專長するところである。然るに佛國の國難急なるに當つて自分の亡友の子が兵役に當つた。彼は極めて友情に富んだ男である。亡友の一粒種の子を今度失へば其後が絶ゆる。寧ろ之は自分が代つて遣らうといふので、當時徵兵制度のまだ疎かな時であるから申し出て代つて兵役についたのである。爾後彼は擲彈兵の一卒として各所に轉戰したが、彼は仲間の兵卒に無限の同情を有したが故に、彼の就くところの中隊では聯隊長よりも大隊長よりも又其專屬の中隊長よりも一般が彼を尊敬した。而して「兵卒の父」といふ稱號まで得たのであつた。彼が獨逸のオベルハーデンの戰に討死したといふ凶報が一度傳つた時には、全軍の卒が皆名譽の戰死と叫んだ。名譽の戰死といふ語の歷史に見ゆるのは恐らく之が最初であらうと思ふ。今に於て彼の生氣をカレーに聳立せる彼の銅像は

尙よく佛國人の佛國魂を昂騰させる一つの種となつて居る。一卒だからとて一將軍だからとて、其人の國に對する効果は變りがない。學生間にある昨今の厭ふべき氣習、之から一掃せねば國は興りさうもない。

第二には一般國民の心得も亦大間違である。何を以て左樣言ふかとならば、都市村落から出る兵卒を送り出す狀況は如何である。其郷黨の同情として見るべきものは單に何々君入營の數字を書した旗丈けである。其旗丈を見ても厭いやな感じをさせる。金持の息子が入營すると縮緬で染め拔きの旗などを推し立てる。貧乏者に對する同情の旗は天竺木綿か晒の切れぐらゐの處もある。これからが己に厭やである。全體此兵卒を送り出す郷黨の奴原は何と心得てゐる。自家に代つて護國の任務につくのである。此等の任務につく者があればこそ、國家も安泰であり、自家も落付いて職業を取れるのである。然るに一人が入營するといふ事になると、それを見舞ふとか犒ぶとかいふ口實の下にさん〲其家を喰ひ倒さなければ承知せぬ。全國を通じて計算してみたなら一家から一人の兵を出せば平均二三百圓は入營前に喰ひ倒される。それからまた喰ひ倒した丈でも滿足せぬ。最初さん〲喰ひ倒された後、出かけた兵卒が滿足に徵兵年期を勤め上げて歸郷すると今度は土産を持つて來なければ承知しないらしい。土産か！其兵卒が任期間國家を護し郷黨を護して來た此土産ほど大なる土産はない。之に對して無限の感謝を捧ぐべきであるのに、ナマの物質を持つて來なければ承知せぬに至つて、何たる淺間しい卑しい國民であらう。自分は曾て田中中將から聞いたことがある。中將が軍務局長をして居る時に何とかして此土産持參の歸郷を止めやうと思つて種々取調べた。ところが除隊前になると其の兵營に出入する御用商人が高い物を賣りつける弊を發見した。そこで之れを禁じて見た。すると兵隊は外に出て矢張り買ふ。普通の店から買ふので尙其出費が高い。御用商人から買はする以上に上つたのである。爲めに大失敗をしたと言つて居つた。兵隊たるもの無けなしの金で何で土産が買ひたからう。然

しそれを持參せねば鄕黨の父老がイヤな顏をするから玆に出るのである。斯かる厭ふべく卑むべき惡風を一掃せねば、兵隊にならうといふ者は益々減ずる許りである。之を歐洲の社會に見れば、此點は極めてオリヂナルなところがある。彼の地に於ては町でも村でも徵兵の抽籤に當つていよ／＼入營となつた者は古來からの習慣と見えて、多くは紙で作つたローマ時代の軍服を衣裳の上に着けて其町内なり村中なりを一巡する。彼等は尙其軍服の上に襷をあやどつて居る。すると暇乞を受けた家では或は手巾なり或は靴下なり若しくは若干の金を紙に包んだおひねりなりそれを紙の襷に結びつけて遣る。恰も我國に於ける子供のお宮參りの際によく似て居る。其物は大概しれたものではあれど、之を遣る心持がいかにも結構である。「君は御苦勞にも我々の爲めに代つて護國の任に就いて與れるか、いかにも忝い。詰らぬ物ながら何かのはしに之れを用ひて與れよ」といふのである。斯くてこそ初めて其鄕黨が代表的兵卒を送り出す意に適ふのである。此故に自分は云はんと欲する。今や政府では地方に在鄕軍人團などゝ云ふものを作らしていろ／＼世話を燒かれるさうな。無論それも結構な事であらう。が、それは主として軍事の當局者の勸誘に出るものらしい。自分はそれ等では滿足せぬ。これは一つ中央の政府から地方の行政官に命じて各市町村に存する之れまでの惡弊を嚴禁せしむると共に、各市町村をして相議し相醵して貧窮人の家から出した兵隊には或は多少の小遣を貢ぐとか、若しくは此兵を出したが爲めに其家の自活に困ると云ふやうなものへは多少の補助をなさせると云ふ事を奬勵して、少しは强制的でもいゝから實行をさして貰ひたいと思ふのである。

次に言はんと欲する所は、其陸軍と海軍とを問はず上長官たる者、將校たるものゝ兵卒に對する心得の間違である。上にも述べた通り劍銃を執て戰陣に莅み本國の爲めに害敵を防ぐと云ふ事は將校も兵卒も同一である。就中卒伍に編せられた人々に對し我々は特に無限の感謝を捧げるものである。何となれば將校以上に

あつては自ら薦めて軍職に就いたのである。國家も亦之を待つに禮遇を以つてする。それで一旦緩急あれば身を献じて之に答ふるのは固より當然と云はねばならぬ。之に反して一兵一卒に在つては特殊の優遇を蒙るでもなければ多額の俸給を受くるのでもない。眞に國民國を守るの最高義務を充たすものである。尚進んで之れを云へば將校以上にあつては殊功を樹つれば勳位も伴へば名譽も伴ふ。一朝不幸にして戰場に倒るれば此遺族に對して扶助料の下賜もある。一言にして之を云へば死生共に名利の二つを離れぬのである。之に反して兵卒に在つては中勇を振ふも世に知られず、身命を抛つも家に酬いられず、且彼等は家に在つては多くは一家の支持者である。それが一旦銃を負うて家を出づれば父兄は賴む所を失ひ妻子は饑に泣くと云ふのも少なくない。而かも親愛なる本國の爲めに其身を捧ぐるのである。此故に先帝は軍人に下された勅語の中にも「上級の者は下級の者に向つて些かも輕侮驕傲の振舞あるべからず、公務の爲めに威嚴を主とする時は格別なれども其外は務めて懇に取扱ひ慈愛を專一と心掛け上下一致して王事に勤勞せよ」と仰せさせられたのである。此等の勅諭は朝夕に誦しながら實際には殆んど忘れられた氣味はないか。殊に下級士官の士卒に對する屢々暴狀を極めるのを見聞する。僅かに古參であればとて何程の差があるか。然るに兵營の中では曹長殿、軍曹殿などの意地のわるい先生に出會ふと天子樣より恐ろしいと云つてゐる。少しは歐洲近時の狀態などを見るがよい。獨逸の如き陸軍國でも下士官が馬鹿威張りする爲めに兵卒との結合力を次第に失つて來てそれで社會主義者などが一度入營すると、事實はそれが無形の心理に對する元帥となつて中間の兵卒の心理を支配するやうになつて來た。獨逸では之を强制する事について非常な苦心を費やしてゐるのである。之れは獨り他所の事ではない。軍務の當局は社會主義者などを蛇蝎のやうに惡んで此種の學說を衞所の門內に入り立てぬ事に熱中すれども、それを歡迎する要素を刻々に產み出しつゝある事はお氣が附かれぬと見える。

生の身を持つて居る人間ぢやもの、殘虐に扱はるれば反抗心は誰でも起る。此起つた反抗心が社會主義などを歡迎するのである。要するに護國の最高義務を負つて出で丶其任に當る兵卒であるから能ふ丈けは大事にして貰ひたい。之について今一つ附け加へたいのは今後兵員增加の必要もあらう。或は二師團增設等の急務もあらう。それを無用とは云はぬが、現在の兵を今少し優遇する方法を講じて貰ひたい。一日五錢ぢや追つつかぬ。之をいふと軍務の當局はイヤナ顏をする。帝國議會の議員などは政府の出費を矢釜しく言ふ。おまけに政費の增加などを滅茶苦茶に攻擊する。其癖之は極く內々であるが、歲費の二千圓では遣り切れぬなど丶控室に引下つてはこぼして居るではないか。いかに國家の爲めとはいへ、一日五錢では朝日の煙草の一袋も買へぬ。それでは心が疲れやうぢやないか。せめて十錢位はきばつて貰ひ度いものである。之がために國費は增さう。然しそれは何處かを少し縮めたなら出せやうぢやないか。一國の干城に油を差さなくて何とする。

此際に當つて昨今聞くとなろによれば、免役稅を取り上げて、それが陸軍の收入を增す何かのたそくにしようといふ議さへ行はれるといふ事である。之こそ國民皆兵の根本義を打壞する骨頂である。云ふ迄もなく國は國民が負ふのである。國民の貧者が荷ふのぢやない。富者も貴者も國民たる以上は同じく其肩を貸さねばならぬ。免役稅などゝいふて勝手に忌避する事が出來れば、貴族富豪は皆逃げる。馬鹿を見るのは正直な貧乏な國民のみである。斯樣な仕向けをされて奉國の赤誠が振へやうと思ふか。一體軍務の當局者の何といふ奴が左樣な議を唱へるか。名乘り出て見よ。面を見せよ。只では置かぬぞ。今日軍規の紊亂しかけたといふのも、斯樣な奴等があるからである。軍人にして一度軍規を失へば、其軍は猛獸になるか、若しくは傀儡同樣な木偶かになるのである。今の陸海軍で大將位の地位に居る連中はまだ記憶して居る筈である。彼の幕末の旗下八萬騎が一戰にも堪へずして、三百年の宗祉を

見捨てたのは、要するに軍規を失つたからである。軍規を失ふ程恐るべきものはない。之を歐洲に見てもナポレオン一世が卒ゐた佛軍は天下に敵なしではなかつたか。其佛軍が今日甚だ振はぬといふのも、要は軍規の弛廢にある。一八九九年であつたと思ふ。當時の佛國大統領のフリックフォールが葬儀に際して巴里に一時革命が起らうとした。それは葬儀に當り儀仗兵に立つた巴里軍團の一將官が、不平黨であつたのを奇貨として、之を味方に引入れ、其兵力を以てサンゼルゼーの大統領官舍を襲ふて、新大統領を引捕へて革命の目的を達せようといふのであつた。自分は途上で當時の行列を見て居た。すると革命黨の連中は或プラスの角に集つて不平將軍が部下の軍隊を率ゐて通行する際萬歲をきつかけに革命黨連は手に〱或は花、或はシガーなどを携へて軍隊の行列中に交り込み、或は其花を襟に差して遣るのがある。或はシガーに火を附けて與へるのがあり、それを軍では禁ずる事が出來ないらしかつた之を見た時に自分は慨じた。こゝまで來ては軍規は立たぬ。佛蘭西軍知るべきのみと見てとつたが、近頃の戰爭などに徴して見ても此考は餘り間違つてゐないと思ふ。而してそれは必ずしも他所事ではない。我陸軍の間にも隨分軍規の弛廢を見るのである。其中で殊に指斥せねばならぬのは、上長官から將校に亘つての驕傲と墜落である。殊に奢侈に傾いた事は非常である。ゼネラル・マジョルかそこらの高官になるともう立派な邸宅などを飾りたがる。立派な邸宅と將官と何の關係があるか。それから女房や娘を馬鹿にめかさせる。之に就いてもいやな事のみ行はれる。軍人の女房は交際せねばいかぬとやら、それで陸軍でも海軍でも是れまで毎月のやうに、親睦會とかをやつたではないか、あれで何れ丈けの利益を得た。めかしたい、しやれたいといふのは女の特質である。そいつを毎月引出して會合させる。アラあの奧さんは今月着て居る着物も、先月着て來た着物も同じである。あの夫人の指環は三年先より同じ物であるなどと、大抵批評に上り話頭に上るのは此邊である。亭主の野郎にせがんで指環もル

ピーかトツパースかサフイアかエミロードか流行の奴をおごらせる。衣裳も之までのでは行かぬ。白木屋か三越に驅け込まねばならぬ。而して亭主の野郞少額な武官の月給でさう〱それが賄へるものか。其下に何が來る。取らん哉〱とお出でなさるより外はない。斯くの如くして一國の軍規が打壞せざらんと欲すと雖も豈得んやである。山縣殿を始め元師大將以下に向つて希望する。其家を燒け。燒くのが犯罪になるといふならば叩き壞して賣つて了へ。自働車に乘る代りに馬に乘れ。將軍が馬に乘つたからとて何の威嚴を損ずるものか。奢る下には大抵如何なるものが隨伴すると思ふか。收賄なり、探なり、獨探、袁探、何々探、探毒ほど恐ろしいものは御座らぬぞ。下の方で智慧の廻らぬ薄給な連中になれば賊と御座る。軍に在つては金庫を切る。家を出てはちよつとくら持ちも遣りかねぬ。それが墮落の結果は軍人の情死なども段々新聞の上に見える。あれで氣の毒と思はぬか。弊を矯めんとする時には少しは矯激に出るの外はない。軍人に在つては詰腹の制を恢復よるも亦よからう。例へば海軍から而も將官にして數十萬圓の賄賂を取つた奴を出したのである。苟も身軍人の上に立つ者は斯る場合には相約して其臭い奴を一掃してこそ國家の干城である。然るに元帥と呼ばれ大將と呼はるゝ連中にして百方之を庇護しようとしたではないか。何たるザマであるか。そこに至ると何といつても西鄕殿ぢや。彼は曾て參議であつた時に、東京府の書記官をしてゐた薩摩人に收賄の嫌疑を受けたものがある。それが偶閣議に上つた。それで時の東京府知事なども參考人に呼出して聞いて見ると、評判はあれど證據はないといふのである。それで一座の閣員も證據の無き者を免黜するのも氣の毒だ先づ其儘におくより外はなからうといふ事に決定しかけた。先刻から一言も發せずして之を聞いてゐた西鄕は新かる不潔な者を其儘にさしおかれるか。只今は維新中興の最初で御座るぞ。一書記官と雖も長官の端である。それが不正をしたといふの評判を措いて問はねば朝廷の威信に關する。皆さん御評議で其儘におくと

言はれるなら私に方法がある。私呼附けて彼に詰腹切らせると言つた。一座の閣員はギョッとした。之が爲めに議は再び改まり即日免官になつたといふ事である勿論それは軍人ではない、普通の文官に對して彼は斯くして士道を維持せしめんと欲したのである。況んや軍人に於てをや。詰腹などは至極よいと思ふ。詰腹と雖も自家が自ら其腹に刀を立つるのであるから、任意の自殺と見ればよい。斯やうな風を起せば積弊は一朝にして改まる。恐れ多い事であるが、先帝の御末年に畏き勤儉の御詔勅が出た。その翌日之に副署した時の內閣總理大臣桂太郎は、愛妾のお鯉を引連れて內國勸業博覽會に臨んで、八百圓の眞珠の腕環を買つて遣つたといふ事が當時の新聞に見えた。彼の地位と彼の富を以てすれば、八百圓は何でもあるまい。さりながら一國の大政を預る總理大臣である。それも勤儉の勅語に副署しておきながら翌日自分は愛妾の爲めに八百圓の腕環を買ふ。之を見て國民の勤儉の詔勅に對する感情は如何である。時代は違はうが、場所が異らうが、在上者が身を以て率ゐねば百の法令ありと雖も其弊を除くことが出來ぬ。今日の軍規を引緊めんと欲すれば左樣多數を要しない。八人か十人位の陸海軍に首腦たる先生等が猛然として己から責めてかゝれば、此弊風は斷々として去ることが出來る。

終りに臨んで尙一言する。軍人に對する勅諭としては先帝のお下しになつたいかにも結構な五條のそれがある。然しながら、時代は又時に其時代に相當する訓戒を要する。思想の簡單なる兵卒などに對しては簡明にして服膺し易く、而もそれが多衆の心頭を支配するに足る勅諭を近き今上陛下の御即位の大典に於て今一度煥發あらせられんことを自分は深く希望するものである。陛下が此千載一時の大盛典に當り祖宗神明に誓はれて大號令を下されたら、其效果は帝國の國防に一師團や一戰艦を加へた位のものではなからうと拜察し奉る。

歐洲動亂史論（六）

吉野作造

土耳其の運命

▽土耳其の戰爭參加

土耳其が今度の戰爭に參加したのは、昨年の十月二十九日である。けれども土國が早晩戰爭に參加するだらうといふことは、開戰の初めから總ての人の豫期して居つたところであつた。たゞ英・佛・露は土國をして終りまで中立を守らしむべく非常に苦心したのであつたが、遂に其効を見ず、土は獨逸の壓迫に堪へずして戰爭に參加したのである。此戰爭に參加することに依つて結局土耳其は何の得るところもない、徒らに獨逸の弄ぶところとなるに過ぎないことは、尙ほ後章に於て詳しく之れを說かう。而して此邊の道理は、土國の識者に於て決して解らない筈はない。且つ土耳其の政界には親英黨や親佛黨と認むべきもの決して少なくはない。のみならず、國民の多數は佛・英の西歐文明の謳歌者であつて、大體に於て彼等は獨逸の事物を好まない。されば戰爭が始まつてから後にも、民間には隨分反獨的示威運動が盛に行はれたといふことである。然らば戰爭開始の當初に在つては、政府の內外に於て、進んで英・佛・露の側の味方をせよといふ程には立ち到

らぬまでも、少なくとも獨逸の誘拐に應じて戰亂の渦中に投ずるの妄を說くの議論は、必らずや盛んであつたらうと思ふ。それにも拘らず、政府が遂に獨逸の味方となつて、敢て三國を敵とするといふ無謀の擧に出でたのを見れば、吾人は今更ながらいかに土耳政府部內に‖殊に其陸海軍部內に‖當時獨逸の勢力が彌蔓して居つたかを想像することが出來る。今此事を明かにする爲めに、戰爭開始前土國の陸軍が既に全然獨逸の勢力の下にあつた關係を一言して置かう。

土耳其は、一九一二―一三年のバルカン戰爭後、其の敗北に顧みて更に陸軍に大改革を施すの必要を認め、新たに多數の將校を獨逸から傭聘した。土國の陸軍は三十年この方獨逸の式に則つて居ることは、已に人の知るところである。而して今度新に招聘に應じて遣つて來たのは、將軍リマン・フォン・ザンデルス以下將校四十名で、彼等は一昨年即一九一三年の十二月十三日午後一時といふに堂々としてコンスタンチノープルに乘込んだ。此時已に彼等は土耳其の軍人として土耳其の軍服を着けて居つたといふことである。而して政府は先づ以て第一軍團を模範軍團たらしめんといふ理由で、同將軍を第一軍團司令長官に任じて同軍團改善の全權を托した。十二月十五日、陸軍省は各地軍團に通牒を發して曰く、「政府はリマン・フォン・ザンデルス將軍を五ヶ年の期限を以て雇入れ、軍事改良の事業を托せり。將軍は差當り第一軍團司令長官たるべし」と。之れと同時に、部下四十名の將校をも各方面の樞要な地位に分遣した。

土國に於て第一軍團司令長官といふ職務は、他の軍團長に比して特に重大の意味がある。そは第一軍團の所在地はコンスタンチノープルであつて、其司令長官は同時にダーダネルス及ボスフォラス兩海峽の防備を管掌することになつて居るからである。されば第一軍團長の職務は、謂はゞ日本で近衞師團長と東京灣衛戍總督と橫須賀要塞司令官を兼ねたやうなものである。さういふ重要な地位に獨逸の將軍を擧げたのである。土耳其の死命を扼する最も樞要な土地の防備を外國人

の全權に托したのである。そこで各國は非常に驚いた。而して最も之に對して不快の念を抱いたのは露西亞である。十二月の末、英・佛・露の各大使は土國の宰相を訪ふて此事の説明を求めた。中にも露西亞は更に單獨に外國人を擧げて此重要な地位に置いたことに對して抗議を申込んだ。そこで、土耳其政府では止むを得ず昨年一月七日に將軍の第一軍團司令長官の職を解き、之に代うるに軍隊及び陸軍學校の總檢閲官といふ役目を以てした。けれども政府は之れと同時に、ダーダネス及ボスフォラス兩海峽の管理は之れを第一軍團司令長官の管轄から引離して陸軍大臣の直轄とするといふことに改めた。是れ畢竟同海峽の管理をば、陸軍大臣直轄の名義の下に、獨逸將軍をして之れに當らしめんとするの意に出でたるものであらう。超えて一月十四日にはリマン・フォン・ザンデルス將軍を元帥に任命し、又將軍と一所に行つたブロンサルト・フォン・シエレンドルフを參謀總長代理に任命した。一體外國人を擧げて之れに重要な職務を授くるといふ例は、後進國に在つて敢て珍らしいことではないが、然し、多くは顧問として採用するを常と爲し、この土耳其の場合の如く、直接に參謀總長なり軍團司令長官なりに任じたといふやうな事は、從來曾て其例を聞かない。而かも各國の利害關係の斯くまで錯綜し、且つ其の勢力扶殖の競爭の斯くまでに烈しき土國に於て、斯くの如き露骨なる任命を見るとは、以ていかに獨逸の勢力が土國の陸軍部内に深く泌み込んで居るかを知ることが出來るのである。

斯ういふ形勢であつたから、若しも其中に歐洲の眞中に戰爭が勃發し、獨逸が其一方の相手方となつたとすれば、土國は必らずや獨逸の命のまゝに動くだらうといふことは、初めから明瞭であつた。されば去年八月、列國間に國交の破裂するや、早くも土耳其はリマン・フォン・ザンデルス將軍の指揮の下に動員を初めたといふ噂があつたが、列強は敢て之れを意想外の事とは思はなかつた。尤も土國政府は、英・佛等の質問に逢つて多少手を緩め、八月の中旬には動員中止の宣言を

なしたのではあつたけれども、事實に於ては全然動員を止めたのではなかつたらしい。それに八月十日には、ゲーベン及ブレスラウ二戰鬪艦のダーダネルス海峽遯竄事件なるものが起つて、尙一層土國の親獨的態度を露骨に世界に表示せしめた。之は開戰の當初暫く地中海の貿易を荒らした獨逸の二艦ゲーベン及ブレスラウが、英佛聯合艦隊に追はれて逃ぐるに處なく、遂にダーダネルス海峽の中に逃げて入つたといふ事件である。ダーダネルス海峽は、列國の條約に依つて外國軍艦の通航を許さないといふことになつて居る。左れば獨逸軍艦が此海峽を突破して中に這入つたのは、正に條約違反であるので、英・佛は乃ち土國に向ひ兩艦の武裝解除と其艦員の抑留とを要求した。然るに土國は詭辯を弄して、此二艦は土國で買つたのである。ダーダネルス海峽に入る時は、土耳其の軍艦として土耳其の國旗を掲げて居つた。之れに乘つて居るところの兵員は、土耳其に雇はれた獨逸軍人である。故に武裝解除の必要もなければ兵員抑留の必要もないとて之れに應じない。且つ附言して曰ふ。土耳其は先きに英國に戰鬪艦二隻を注文したのであるが、戰爭勃發の結果、英國は殆んど落成しかけて居た我が注文の二艦を沒收して土耳其に渡さない。斯くては土國は最近新戰鬪艦を用意した希臘に對し、多島海方面に於ける均勢を保つことは出來なくなる。そこで、恰度英國に拂ふべき金が浮いたのであるから、獨逸の好意に依つて此二艦を買つたのであると。けれども、英佛は此辯解に滿足せず、尙先きの武裝解除要求を繰返して熄まぬ。其結果、土國は八月十五日に至り、表面上兎も角も其要求を入れたのである。けれども、實際に於ては武裝解除を實行しなかつた。斯くても英佛は尙いかにかして土國をして中立を守らしめようとの考で、忍んで之れを責めなかつた。後に十月の末から十一月の初めにかけて英佛兩國政府の發表したる對土交渉顚末に依れば、土國が此獨逸の二艦に對して取つたところの所置に如何にも不都合の點の多かつた事や、土國は自國の他の艦艇にもそれ〲獨逸軍人を配附して戰鬪參加の

用意に怠らなかつたといふ事や、又獨逸から盛んに軍人及軍用物資の供給を仰いで居つたといふやうな事が明かになつて居る。それでも英佛諸國は出來る丈け土國を中立させやうと非常に苦心したのであるが、其苦心も水泡に歸して、遂に十月二十九日に至り、戰鬪行爲の開始を見ることゝなつたのである。此日土耳其の軍艦がオデッサ附近に於て佛國の商船を砲擊した事、及びクリミヤ半島の東側及び其對岸のトランス・カウカシアの西北部に向ひ突然砲擊を加へた事は、今仍ほ我々の耳目に明かな事であるから詳くしは述べぬ。當時歐羅巴の人々は、何れ土耳其は遠からず何か事を起すであらうと豫期して居つたのであるけれども、斯く急に而かも寢耳に水の突擊に出づると豫期せなかつたから、一般に世間では、之は政府の關知せざる出來事であらう、軍艦に乘つて居つた獨逸の將校が早く土耳其を退つ引ならぬ地位に引き込まんが爲めに勝手にやつた仕事であらう、といふ風に見た。尤も英佛側は殊更に斯く解釋して、土耳其政府に辯解の餘地を與へ、彼を止むなく戰爭に參加するの窮地より救ひ、出來るものならば其儘中立を守らしめやうと努めた形跡がある。又土耳其の大藏大臣も現に之は政府の關知した事ではないと辯明したと外電は報じて居つた。然し英佛側はいかに土耳其に中立を守らしめやうと希望しても、此事件を此の儘に葬り去るといふ譯には行かないから、一方には今度の事件はお前の知つた事ではなからうと言ひながら、他方には畢竟如斯事の起るのは獨逸人を雇つて居るからである、就ては一切の土耳其の艦隊から獨逸人を逐ひ拂ひ、且つゲーベン、ブレスラウ二艦の武裝解除を斷行せよと手嚴しく要求し、且つ若し應ぜざるに於ては外交關係を起つと脅かした。此要求に對して土國の政府は丁寧に陳謝した。けれども何分獨逸人及び獨逸派が跋扈して居るが爲め、政府は斷然英佛の要求に應じて之を所置する丈の勇氣がない。謝するには謝したけれども、要求の個條に一々應ずるといふ事は能くし得なかつた。それ丈けでも英佛側から外交關係を絕たるゝ價値はあつたのである。而して當時土國の政府

部內には、一方には英佛に親まないでも出來る丈け平和の間に局を結ばうといふ派と、何處までも獨逸軍人の獻策に從はうといふ派と、兩々相對抗して居つたらしい。予は數に於ては平和派が多數であつたらうと想像するけれども、何分獨逸派は少數でも兵力を擁して居る。そこで獨逸派の壓迫を抑へて英佛と調子を合すといふことは、政府に取つては餘程困難であつたやうに見える。而かも獨逸派は速に戰鬪に參加せんと欲し、平和派の意向を顧みず勝手な命令を發したりなどしたので、爲めに當時政府の命令は二途に出でた傾もあつた。されば、一方には二十九日の事件は政府の關知せざるところであると辯明して居る傍、三十日には何等の豫告なく突然英國大使館の電報通信の道を遮斷して、まるで英國に敵國の取扱ひを加へて居る。斯くて形勢が段々に切迫して、到底土國政府の內部から獨逸派を押し除けることが出來ないことが明かになるや、十一月一日露西亞先づ國交斷絕を宣言し、英佛兩國の大使亦土京から引上げて、玆に土國は公然獨逸に加擔して英・佛・露を敵とするの戰爭に參加する事となつた。

土耳其の戰爭參加後の形勢は、深く之を問はずして我々の耳目に新たなるところである。成程之に依つて英・佛・露は幾分か勢力を東方に裂くことになつた。斯くして獨逸は一面には多少の利益を得た譯けになる。けれども、埃及や印度が豫想の如く起たない爲めに、聯合軍側の割かねばならぬ力はそれ程大なるものではない、却つて土國が今や困難なる防禦者の地位に立つことゝなつた結果として、獨逸が、土國を助ける爲めに英佛が割いたよりもより以上の力を土國の方に割かねばならない羽目になつた。聯合軍側は、土國の挑戰に對して、一方は海より英佛聯合艦隊を以てダーダネルス攻擊に出かけた。他方はコーカサス方面より露の陸軍をして土國の領土に殺到せしめて居る。加之土國の內部に於ては、戰鬪參加に不平なる民間の動搖容易ならざるものありと、十一月の初め此方屢々報道せらるゝのである。或は獨逸の大使が日々無名の脅迫狀を受くるとか、又リマン・フォン・ザンデルス將軍及び其一

味の將校の暗殺の陰謀を企つる者があつたとか、甚だしきは皇帝暗殺・政府顚覆の陰謀をすらも企つる者があつたといふやうな報道が傳つた。如斯土國は今や內外敵を受けて其の防衛に之れ日も足らざるの有樣である。而かも獨逸は自分の國が不安だからと言つて、土國を放棄する譯けには行かない。如何樣にもして終局まで土國の獨立の體面を維持するといふ事は獨逸にとつて絕對に必要である。何となれば土國が全敗すれば其方面から北方指して襲ひ來るところの聯合軍側の勢力と云ふものは、獨逸にとつて極めて恐るべきものであり、假令しんば土國が全敗しなくとも、段々に土國の勢力が縮つて聯合軍側の景氣が加はれば、之に依つて長らく形勢を觀望して居つたギリシヤ、ルーマニア、ブルガリア等のバルカン諸邦が、段々聯合軍側に味方して立つといふ恐れがあるからである。現に二月十八日よりいよ〳〵英佛聯合艦隊がダーダネルス海峽の砲擊を初め、露國の黑海艦隊亦東より土京を脅かし、次で三月に入つて更に英佛艦隊が多島海沿岸のスミルナ方面の砲擊を始むるや、此等の策戰によりて如何にバルカン諸邦の戰爭熱が煽られたかは、日々の電報によりて吾人の悉知する所である。中にも希臘の如きは、今にして起たずんば將來何の時か東方發展の大望を達すべきと言つて、國民皆腕を鳴らして振ひ起つて居る。國王コンスタンチンが、獨逸皇帝の實妹を娶つて居るの關係から容易に此要求に應じなかつた爲めに、三月七日首相ヴェニッェロスの辭職を見るに至り、而して先達の總選擧の結果は、ヴェニッェロスの主戰派が大多數を占めたといふ事を見ても、いかに英・佛・露の東西より土國に加ふるところの壓迫が、バルカン諸邦を振ひ興さしめて居ることとかが解る。されば此等の地方を鎭め、出來る丈け我に敵するものを少くしやうとするには、獨逸は餘程土國に力を注がなければならぬ。今日どれ丈獨逸が土國の方に力を入れて居るかは分らない。けれども、恐らく彼が土國の爲めに割く力は、英佛・露が土國方面に割く力と比較して決して劣らざるものがあるだらうと思ふ。之に依つて之を觀れば、獨

逸の土國煽動の策は、今になつて見れば、鋏をつゝいて蛇を出した感がないでもない。

△土耳其と獨逸との關係

予は前章に於て、戰前の土耳其が全然獨逸の藥籠中のものであつたといふ事を説いた。然らば獨逸と土國との斯の如き密接なる關係は何時頃から始つたかといふに、之は決して左程古いものではない。歴史的に觀て、土國と最も古く親交を結んだものは歐羅巴の大國中では佛蘭西である。十九世紀の初に至つては、佛國の外、尚露、墺、英の三國が土國と通交を開いて居つたが、プロシヤ其他の獨逸諸邦に至つては、當時殆ど何等の關係をもなかつたのである。而して佛、露、英、墺の四國中、一番に深い關係を持つて居つたものは、前々からの引續きで矢張り佛國であつた。

一體佛國が土國に於て自由に貿易するといふ特權を得たのは一五三五年である。此の頃は他國の人民でも佛國の國旗を揭げなければ土國と商賣が出來なかつた。十七世紀の頃から、英國、和蘭、ヴェネチヤの商人が段々盛にやつて來たけれども、而かも尚佛國の保護を受けなければ安全に取引することは出來なかつた。十七世紀の央ば過ぎ、一時佛國は土國と衝突した。けれども、十八世紀に至つては再び友好の關係を回復し、而して此の頃から土國は漸く北方墺・露の壓迫を感ずるに至り、爲めに益々佛國に頼るといふ事になつた。佛國の軍人が入つて來て軍隊の組織並びに其の改良に從事することになつたのは此頃からのことである。斯くして佛國陸軍が土國に勢力を有するに至つた事は、恰度今日の獨逸の如くであつた。斯んな風で十八世紀の央ば過ぎまでは、土國に於ては佛國が獨り隆々たる勢力を振つて居つたのである。そこへ恐るべき勁敵として現れて來たのはロシアである。ロシアが佛國と對抗する勢力として土國に臨むに至つたのは、先づ一七七四年のクチック・カイナルジ條約以後と見てよからう。此條約に依つてロシアはダーダネルス海峽の自由通航權を得、公使を土京に派遣するの關係を拓き、且つクリミヤを獨立せしめ、後には之を合併してセバストポールに砲臺を築くの素地を作つた。斯くしてロシアは東北の方から段々土國に壓迫し來るの形勢を占めた。且つ此時露國が土國領内の耶蘇教徒の保護權を得たのが、後に至つて公然佛國と爭ふの原因になる。斯く一方には露西亞が段々勢力を揭げて來るのに、佛國の方は大革命の爲めに暫く東の方から手を引かねばならぬといふ事になつた。其隙に乘じて現に段々手を出して來たのが英國である。十九世紀の初めに至れば、土國に於て勢力を振ふ國としては英露の二者を數ふる事になつた。佛國はナポレオンに至りて再び土國に着眼し始めたけれども、彼は十分此方面に發展するに及ばずして世を去り、更に半世紀を過ぎて奈翁三世が初めて土國方面に手を出すことになつた。一八五三年のクリミヤ戰爭は即ち其結果として起つたものである。奈翁三世の失敗後は、佛國は内部の整理に忙しくて、到底外を省みるに暇なかつた。從つてまた土國よりも手を引いた形になつた。其頃から墺國は佛に

代つて段々に西北の方から壓倒し來る事になる。斯くして英、墺、露の三國が土國に於て勢力を競爭するといふ事になつたのである。尤も初めの間は、墺國は土國に於て未だ英・露に對抗する程の大勢力ではなかつた。墺國が土國方面に有力なる競爭者の一人となつたのは、實は獨の後援を得てからである。其前は先づ大體に於て、英・露の競爭に墺が附隨するといふ位の所であつた。斯く歴史的に觀察すると、十九世紀の央は過ぎまでは、獨逸といふものは殆んど土國方面には何等著しき勢力を有つて居なかつたのである。而して獨逸が積極的に土國方面に大いに活動するやうになつたのは、實に現皇帝ウヰルヘルム二世の登極以後である。

一體獨逸人が土國並びに小亞細亞方面に眼をつけたのは、も少し遠い淵源を有つて居る。最初に眼をつけたのは實は小亞細亞である。主として獨逸の經濟の發達の目的の爲めに此方面に注意を向けたのである。而して此種の考を率先して唱へたのは、リヒトホーヘンといふ學者である。曾て支那の山東省を踏査して富源の潤澤なるを唱道したあの同じ人である。其後東洋學者のスプリンガー博士の如き、メソポタミヤを以て世界中獨逸の殖民に最も適當したる地方なりとの説を發表するものあり、これより漸く學者實業家にして、或は食料品の產地として、或は工業品の市場として、此地方に眼を着くるもの多くなり、一部の人は之を「獨逸の印度」(ニユー、インディア、フオア、ジアーマニー)なりとまで持ち上ぐるに至つた。斯くて段々に小亞細亞の方に着眼する者が多くなつたけれども、然し政治家は未だ此方面への發展に十分金と力とを注ぐといふ氣にはならなかつた。當時獨逸に於ける政界の主人は無論ビスマルクである。彼は新帝國の中歐に於ける地歩を確立し、反獨同盟の成立を妨ぐるに忙しく、深く其他を省みる事が出來なかつた。一部の政治家實業家などが東方に經濟的發展を計らんとすることに對しては固より異議はなかつたのであるが、更に之を利用して政治的發展の踏み臺にしやうといふまでの考は彼には無かつたらしい。左れば一八八三年土國がいよく獨逸に向つて陸軍教官の傭聘を申込むまでは、獨逸は土國方面の問題には現實に接觸しなかつたのである。

土國の申込に應じて陸軍教官を派遣したのは、獨國が政治的に東方と關係を開くに至つた始めである。此時に土國に行つたのはケーラー將軍である。有名なフオンデル・ゴルツ將軍も此時一所に行つた。一八八五年ケーラー將軍の死するに及んで、ゴルツ將軍乃ち其後を襲ひ、土國軍政整備の全權を握つた。之より彼は鋭意土國陸軍内に獨逸の勢力を扶殖するに努めた。一體土國の陸軍は、前にも申した如く、昔から引續いて佛國の勢力の下にあつたのであるが、普佛戰爭の際、佛國將校の本國に引上ぐるに及んで、暫く外國人の教官がなかつた。而して今や土國が再び教官の必要を認むるに及び、從來東方との關係が比較的に薄いところから、獨逸の軍人を招聘することにしたのである。當時佛國は内部の整頓に忙殺され、露國も亦露土戰爭の終つた許りで深く外國に力を用ゆるの餘裕がない。英は又一八八〇年グラツトストーンがビーコンスフイールドの帝國主義的内閣に代る事になつた結果、今迄とは對外政策の方針

を改めた。そこで、獨逸にとつては、土國に自由な手腕を揮ふに頗る都合がよかつたのである。此機會に乘じて、獨逸は漸々土國に大いなる勢力を振ふやうになつたのである。

此頃から始めて獨逸の勢力が土國に於て今日あの様な深い根據を据え得たといふ事に就いては三つの原因を擧げなくてはならぬ。第一にはゴルッ將軍の盡力である。將軍はプロシヤの名門の出である。彼の家からは古來文武の高官を輩出せること頗る多く、其系圖の中に大將の職に就いた者のみ數へて二十二人の多きに及ぶといふ事である。一八四三年八月の生れであるから、當時恰度四十歳の血氣盛んな年配であつた。七十年の戰役に從軍して功勞があり、且つ戰史に通じて陸軍大學の教官を勤めた事もある。學者としても一隻眼を有する事は、彼の多くの著書に觀ても明かであるとの事である。加ふるに人格も亦甚だ高い。留ること十二年、其間深く土國人の敬服を博し、又實際土國の爲めに盡すところも少くなかつた。獨逸と土國との關係が、彼の十二年の盡力の結果、どれ程深くせられたか分らない。殊に土國の陸軍が全然獨逸の勢力の下に歸したのは、專ら彼の功勞に歸せざるを得ない。第二には獨逸皇帝の骨折りを數へなければならぬ。獨逸の帝國主義が現皇帝に至つて初つたといふ事は、今更ら申すまでもない。昔者フレテリック大王プロシヤを以て獨逸帝國内の雄邦たらしめんが爲めに心を碎き、次でビスマルクは獨逸の統一を完成し、之を歐羅巴に於ける雄國たらしめんが爲め努力したと傳へられて居るが、ウヰルヘルム二世陛下は、更に獨逸帝國を世界の雄邦たらしめんとの大野心を抱いてあらはれて來た人である。思ふに陛下は、其未だ皇太子たりし時、獨逸と東方土國との間に交渉の開けたのを見て、獨り密かに欣然たるものがあつたらう。彼が皇太子たりし間、獨逸の勢力は土國に於て、獨り軍事上ばかりではなく、經濟的にも段々に發展して、暫くにして獨逸銀行(ドイッテエ・バンク)の支店の設置を土京に見、八八年には、ボスフォラスよりマルモラ海の彼岸に沿つて短かき鐵道を布くの權を得、後之をアンゴラまで延長するの權利を得た。斯くて獨逸と土國との經濟關係も密接になる。多數の青年將校は盛んに獨逸に遊學に來る。斯かる形勢の下に現獨逸皇帝は登極した。即ち一八八八年の六月である。而して翌八九年には新皇帝は土國皇帝を公式に訪問すると言ひ出した。之は流石のビスマルクも喜ばなかつたと傳へられて居る。然しビスマルクのなまぬるい態度に飽き足らずして翌九〇年三月には此國家元勳の老宰相の職を免じて顧みなかつた程のカイゼルであるから、ビスマルクが何と言はうが構はず土國に出掛けて行つた。尤も之は後に傳へられた事であるが、ビスマルクは之が偶々獨逸の東方問題に對して發言權を得るの端緒となるだらうといふ考で必ずしも非常に反對はしなかつたといふ事である。兎に角皇帝は出掛けて行つた。而して此第一回の會見の狀況は今詳かでないけれども圓轉滑脫なる皇帝は巧みにサルタンに取入つて其歡心を買つたには相違あるまい。而して更に九年の後即ち一八九八年十月には獨逸皇帝は第二回の訪問を試みたが是には實に非常なる成功を齎らしたもので、これに依つて獨土今日の關係の基礎に實

然と定まる事となつた。尚此事は後にも少し委しく說かう。終りに第三の要素は時の土國皇帝アブドル・ハミッド二世陛下である。アブドル・ハミッド二世陛下は本來露西亞を嫌ひ。又英國をも喜ばなかつた。而して英露の壓迫を感じて他に便るべき友を求めて居つたやうなところへ獨逸が入つて來た。而かも獨逸は巧にサルタンの意に迎合したので、土帝が喜んで獨逸の勢力を歡迎するといふ事になつた。之が抑も獨逸今日の勢力の重なる源因である。アブドル・ハミッド陛下は一八七六年の即位である。當時國の内外麻の如く亂れて國家の危き事累卵の如き有樣であつた。而して此際に生れて兎も角もあれ迄に土國を持ち堪へたのであるから彼の尋常一樣の人物でないことは明かである。彼は即位する迄は宮庭奧深い處に育つて公の事には何等の經驗もなかつた。けれども彼は先代の王にして自分の長兄たるムーラッド五世とは似も付かぬ意氣の旺んな人物で何事も人に任かせるを欲せず、何も彼も獨裁的に遣つて名實共にサルタンたらんとしたのである。蓋しまた一代の傑物たるを失はない。傳ふるところに依れば彼は頗る聰明にして物を記憶し物を理解するの能に富み又人を見るの明と人を魅(チャーム)するの魔力とを有つて居つたと云ふ事である。且つ頗る事に勤勉であつて而かも計數の才にも富んで居つた。只不幸にして多年腐敗したる宮庭の中に育ち陰謀詭詐の間に人となつたから頗る陰險な性格を有し又甚だ猜疑心に富んで居つた。彼が何事も人に任せなかつたといふのは一つには此性格からも來る。彼が何人をも信じなかつたといふ證據は登極早々あらゆる勢力ある者を斥け、股肱を擧げて政府を組織せしめたが、之れすらも十分信用する事が出來ず、常を密偵に放つて其行動を監視せしめた事に依ても分る。故に昨日まで皇帝のお氣に入つた者で、今日暗殺の厄に會つた者も少くない。如斯性格を有する君主の當然執るべき政策として彼は一方には回々敎に執して異教徒を虐待し、又他の一方には純然たる專制主義を固執してあらゆる自由改革の運動に反對した。此點に於てアブドル・ハミット陛下は英露と反撥せねばならぬ事となつたのである。彼が回々教に熱心で常に宮殿を策源地として世界の回々教徒の統一を計つて居つた、其抱負や實に雄大なるものがある。而かも彼は世界の回々教徒をして自分を仰いで救世主と崇めしめんとの大野心を有つて居つた。彼が宮庭より新聞を發行して印度に頒布し、之に依つてサルタンの名を印度人の間にも稱へしむるに多少の成功を見たといふ事は今尙人の驚嘆して居るところである。如斯は實に政治的野心から出て來るばかりでない。實際に彼は回々教に凝り固つて居つたものである。而して此回々教に凝り固るといふ事の他の一面には異教徒を迫害するといふ事になる。異教徒とは即ち主として基督教徒である。バルカン半島に於て回々教徒と基督教徒との反目は其歷史的根柢は實に深いのである、されば十九世紀の初め以來、これ等の耶蘇教諸民族は土國の覊絆を脫し自由獨立の樂を享けんが爲め多年運動して居つた。即ち其督教徒は自由獨立の主義を以て土國朝廷に對抗して居る。斯くして基督教徒と土國朝廷とは異教の關係で反目する外尙自由專制の主義の點で反目する。而して英國は近世自由思想のチャンピオンを以て任じ、土國

に對して行政の改革を迫つて止まない。而して露西亞は自分と宗教を同じくして居るスラブ民族の境遇に同情するといふ點から、同じく異民族取扱の改善を求めて止まない。斯くして英國とロシアは其理由と其動機とを異にするも、共に土國の下に屈服して居る基督教諸民族の爲め、熱心に行政の改革を迫つて居る。之がアブドル・ハミツドの氣に入らないのである。彼は本來耶蘇教を嫌ひ、從つて西歐の文明を嫌ふ事が甚だしい。彼は曾て列國の要求に應じて、諸民族の同等の待遇と地方行政の改善とを屢々約束したけれども、一つとして實行しない。一八七六年には憲法を布いたけれども、翌々年の露土戰爭の開始を機として之を中止し、一九〇八年の革命の時まで專制の變態を繼續して居つた。而かも彼が止むなく憲法を發布したものゝ其自由政治を嫌ふの念の盛んなるは間もなく立憲制の創設者ミダート・パシャを免職しやがて之を追放し、後之を暗殺したといふ事によつても分る。坊主が憎ければ袈裟まで憎しとやら、彼は自由主義を嫌ふのあまりあらゆる西歐文明の果實を嫌つた、一九〇九年四月彼が土國の第二革命の結果として其位を斥けらるゝまでは、土國の町には電信もなければ電話もなく、電燈は勿論、自働車の如きも之を乘廻す事は禁じられて居つたといふ事である。兎も角も世界文明の中心たる歐羅巴に國を成して居りながら電信電話等の文明的設備すらなかつといふのは、一に皇帝が西歐文明の產物は何も彼も嫌つたといふ事の結果である。斯ういふ性格の人に獨逸が巧に取入つたのである。獨逸は本來專制主義の國である。中にも獨逸の軍人の如きは何れも相當に極端なる專制思想を抱く連中と觀てよい。英國が人道問題を提げて政治的改善を迫る際に、獨逸は決して斯んな六ケしい事は言はない。却て暗に英國の態度を批難して皇帝の專制主義に媚びた。異民族の虐待に就ても獨逸のみは獨り土國を責めなかつた。現に一八九六年コンスタンチノープルに於て平穩に商業を營んで居る多數のアルメニア人を虐殺し、而かも其眞相を新聞に發表せしめず、之を隱密の間に葬り去らんとして端なく世界の物議を招いだ際に英國は率先して此非人道的行爲を詰り、土國に迫つて行政の改善を決行せしめん事を列國に謀つた際に、獨逸は墺國と共に辭を設けて此の誘ひに應ぜず、却つてこの機を利用して土國朝廷に取入らん事を努めた事がある。獨逸は道德とか人道などゝいふ事は眼中に置かず、土國に接近する目的を達する爲めには敢て其手段を擇はなかつたのである。それ計りではない、又獨逸は巧みにサルタンの弱點につけ入つた。それはサルタンが公私共に放埒贅澤にして頗る財政に困難して居つたに乘じ獨逸銀行をして盛んに金を融通せしめたのである。之が皇帝に取入るに最も直接の功果があつたらしい。斯くして獨逸に瞬く間に土國の朝廷をしつかりと手に入れて了つたのである。

以上三つの要素は土國に於ける獨逸勢力の擴張の主たる原因である。

此外尙近代獨逸の神速なる進步などが、著しく土國の眼を驚かしたことも疑を入れない。一八九七年の希土戰爭に於ける土軍大勝利、即ち百年此の方回々教徒が基督教徒に勝つた初めての戰爭、この戰爭に於て土國は此度の戰捷は畢竟獨逸軍人の教育の結果なりとして喜んだ。如斯獨

遂は段々に土國に取入つた。其最も著しき成果は極めて有利なる條件を以てバグダッド鐵道の布設權を獲得した事である。之は一八九八年のカイゼルの第二回訪問に關係がある。此年十月ベルリンを發した獨逸皇帝は皇后陛下と共にパレスタイン、シリア地方を巡つてコンスタンチノープルに行つたのであるが、十一月七日カイゼルはダマスカスに於て『サルタン陛下及び陛下に臣從する全世界の回々教徒は永へに朕の友情に信賴して可なり』との史上に有名な電報を發して、自ら回々教徒の保護者を以て任ずるの意思を宣明した。斯くてコンスタンチノープルに入り巧に土國に取入つて後日獨逸が莫大なる利權を獲得するの素地を作つて歸つた。而して其結果は翌九九年六月アナトリア鐵道會社長シーメンス博士と土國政府との間に締結せられたる所謂バグダット鐵道の條約として表れた。本條約の調印は一九〇三年に出來上つたのであるが、兎に角其本元を作つたものは獨逸皇帝であると言はねばならぬ。而して之は小亞細亞のコニアを起點として波斯灣に近きバスラに至る鐵道であるが、詰り獨逸の期するところは之を他の獨逸の勢力の下にある鐵道と聯結してベルリンよりビザンチン(土京の舊名)を經てバグダットに至る所謂B.B.B大鐵道計劃の一部をなすものである。之に依つて獨逸はベルリンより遂に土國、小亞細亞に命令せんとするのである。さて此鐵道の布設權を得た事に依つて獨逸の東方に於ける勢力は俄然として昂まつた。いかに獨逸の勢力が急激に昂まつたかといふ事は、從來敵味方であつた英露の二國が舊怨を忘れ相結んで獨逸に當らんとした事でも分る。單にこればかりではない。其後土國の內部には各地方に獨逸の銀行又は其支店が設立せられ、又政府の莫大な保護金を得て航海業や海底電信事業が設けられた。中にも此海底電信の如きは獨逸と土國との電信の交通を獨立させるといふ點に於て政治上亦重大の意義を有つて居るものである。其他學校及び病院等の方面にも少からざる力を致して居る。英人の所謂平和的侵略（ピースフルペネトレーション）の鋒先近年實に素晴らしいものがあつたのである。

然し獨逸の土國に於ける勢力の根柢は一部の軍人を外にしては土國の宮廷である。故に一九〇八年の革命、續いて一九〇九年の革命でアブドル・ハミッド陛下が從來の專制主義と共に倒れた際には、世間では獨逸の勢力も亦之と共に終焉を告ぐべしと考へた。一九〇八年四月の憲法回復の革命の事は今更ら事新らしく之を述べぬ。この革命に依つて自由主義者が勝を制し、實權は多年外勢の侵略に憤慨措く能はざりし青年土耳其黨の手に歸した。青年土耳其黨はサロニカに中心を有する團隊で、之は同じ土國人でも少し毛色の變つた部族が中堅となつて居るのである。多年專制政治に反對で外國に放浪して居つた者が、初めパリーで起つたのが本で、之がサロニカに於て軍人の間に勢力を扶殖して侮るべからざる團隊となつて居つた。彼等は土國の獨立保全を完うして之を外勢の侵犯より救はんには國民全體の一致を要すとなし國民の一致を見るには宗敎人種の別なく平等に其權利自由を保護するを必要なりと爲し斯くして各種民族の同情を求め、其力に依つて專制政治を打破するに成功しアブドル・ハミットをして全く虛位を擁するに過ぎざるものたらしめたのであ

る。翌年四月アブドル・ハミットが再び專制政治を回復せんと欲してクーデーターを行ふや、青年土耳其黨はサロニカの軍團を擁して東上し遂にアブドル・ハミットに迫りて其位を退くに至らしめた。其後を襲うて帝位に即いたのは多年幽閉の浮き目を見て居つた末弟の現皇帝モハメット五世である。之を以て獨逸と結托して居つたサルタンが亡びた、當時國人は憲法の回復に狂喜すると共に自由平等の美名に醉ひ獨逸皇帝の名はアブドル・ハミットの名と共に一時人の嫌忌する所となつた。左れば當時獨逸の勢力は之を機として全く地に落つべく思はれた。革命後第一の內閣は永く英國に人となり當時親英派の頭領として知られた開明主義のキヤミル・パシヤである。彼が獨逸嫌ひであつた事は人の知るところである。最初の議會も亦其調子は何となく中歐の獨逸的であるよりは西歐の英佛的であつた。然るに不思議にも獨逸の勢力は一時地に落ちたのであつたけれども、間もなく回復した。而かも獨逸は革命後の土國政界の中心勢力たる青年土耳其黨に取入つて、之を獨逸藥籠中のものとした。之には流石の英佛諸國も舌を捲いて驚いたのである。如何にして獨逸が斯くの如き大成功を收めたかといふに就ては、種々の原因があるが、玆に見遁す事の出來ないのは當時土國駐剳の獨逸大使であつたマーシヤル・フオン・ビーベルスタイン男爵と、今日の土國の陸軍大臣たるエンベル・パシヤとの二人格である。

マーシヤル・フオン・ビーベルスタイン男爵が近代に於ける最も辛辣の手腕を有する外交官であつたといふ事は、今更玆に說明するの必要は

ない。彼は一八四二年十月、バーデン國の首都カールスルーエに生れた。八三年同國の使臣として伯林に駐剳し、兼ねて聯邦參議院の一員であつた。其間ビスマルクに知られ、次で九〇年三月ビ翁の退隱後、其後を繼いで帝國外相の職に就いた。九七年政黨の操縱に失敗して伯林を去らざるべからざる羽目に陷り、十一月大使として土京に赴任したのである。當時土京に在つては、英露兩國の勢力隆々たるものがあつた。彼は本國の外相ビユーロー公と相呼應して、獨逸勢力の發展の爲めに盡したのである。此間巧みにアブドル・ハミットに取入り、帝をして獨逸に心醉せしめたるを手始めとして、滯留十五年の間、拮据黽勉、獨逸の爲めに盡す所尠少でない。斯くして彼は現代第一等の外交家たるの榮譽を博したのであつた。而して今や皇帝の沒落を見、彼は直ちに鞍を換へて青年土耳其黨に乘り移り、之をうま〱と丸めた手腕に至つては、只啞然として驚歎するの外はない、兎に角彼の變幻出沒極りなき而かも圓轉滑脫の妙を極むる外交的手腕は、近代の歷史上に於ける一異彩である。獨逸勢力の回復は畢竟彼の賜物である。因に云ふ、彼は土京に於て示したる非凡の技倆により、モロッコ事件以來緊張したる英獨の關係を調理按排するには此人を措いて他に適任者なしといふ譯になり、一九一二年　月英京駐剳に轉ぜられた。世人は多く彼の活動の上に英獨關係の本當の改善を期待して居つたのに、不幸にして天彼に年を藉さず、此年九月二十四日故國バーデンワイラーの避暑先に於て、七十歲を一期として頓死した。彼の死は實に獨逸に取つて一大損失であつた。而して當時世界の新聞は

常に獨逸に好意を有するものと否らざるものとに論なく、彼を以て一代の傑物とするには悉く一致したやうであつた。

然しながら、マーシャル・フオン・ビーベルスタインあつても、若しエンヴエル・ベーなかりせば、獨逸勢力の隆々たること今日の如きを得しや否やはこれ亦疑はしい。エンヴエル・ベーは獨逸に遊學を命ぜられた當年の最も優秀なる土國青年將校の一人にして、一九〇八年には少佐として伯林に赴任し、大使館附武官たりしこともある。此間彼が自ら獨逸に傾倒するに至つた事は、之を想像するに難くない。單にこれのみでも。エンヴエル・ベーのマーシャル・フオン・ビーベルスタイン男に接近する機會のあるべき事は、之を想像するに難くないが、男爵は特に一九〇八年以來彼に目を附けたのである。之には重大の理由がある。それは恐らくエンヴエル・ベーが年齒尙未だ壯なるに拘らず、靑年土耳其黨に於ける最も大いなる人格の一人であつたからであらう。傳ふる所に依れば、エンヴエル・ベーは凡ての方面に於て一個の天才である。加之彼の胸中には改革の精神が燃えて居る。アブドル・ハミツドを倒した革命派の最高幹部の一人として全運動の牛耳を握つたのは彼であつた。一九〇八年革命後、一且伯林に赴任したが、翌三年四月再び動亂起るや彼は直ぐ樣歸國して革命軍の爲めに奮鬪し、終つて復た伯林に歸任した。彼はまた身命を抛つて戰場に馳驅するの勇氣にも富んで居る。トリポリ戰爭の際には、又もや伯林より歸り、挺身阿弗利加に赴き、アラビヤ人を集めて義勇隊を作り、激しく伊太利を苦しめた。一九一二年四月には、重傷を負ひ、一時戰死の風說の傳はつたのを見ても、如何に彼が花々しく戰場に馳驅したかゞ分る。彼にはまた愛國の熱情火の如きものがある。バルカン戰爭の起るや、乃ち起て祖國の難に赴き、殊に第二次の戰爭に於ては、奮戰大に勉めてアドリアノープルを囘復した。彼は斯くの如く其技量に於て將た其人格に於て眞に敬服に價するものがある。且つ胸中の野心亦勃々たるものあり、自ら土耳其の奈翁を以て任じて居つた。而して其部下も亦奈翁の如く彼の一身に信望を繫いで居るとの事である。如斯有力な人物であつたから、マーシャル・フオン・ビーベルスタインも忽ち彼に目を着け、一旦地に落ちた獨逸の勢力を一擧に囘復するには、此エンヴエル・ベーを手に入るゝに若くはないと考へたのであらう。斯くして兩雄の默契は何時の間にやら成立つた。獨逸が再び土國に於て昔に優る勢力を囘復し得たのは、決して怪しむに足らぬ。

之に加ふるに彼のボスニア・ヘルツエゴヴィナを墺が合併した際に、西歐の諸國が徒らに紙上の辯を弄して居るに反し、獨り獨逸皇帝が一喝を以て露國を屈服した腕の冴え、此一事はいたく土國の軍人を動かし、敵ながらも獨逸は流石にエライと思はしめた。(此時獨は墺を援けて合併を決行せしめたから、土國に取りては敵になる)。その後にトリポリ戰爭の際は、獨逸は三國同盟の誼に背いて、伊太利に對してよりは寧ろ土國に對してより多くの同情を注いだので、土國の軍人は、一轉して更に深く獨逸を賴み甲斐のある友達と思つたのである。獨逸も亦頻りに此勢に乘じて全然土國を手に入れるといふ事に務めたから、獨逸の勢力は囘復す

るどころか著に倍して隆々たる勢力を示すやうになつたのである。

茲に一應注意までに申し度いのは、獨逸ば何故に斯くまで土國に力を注いだかといふ事である。固より、折角勢力を扶植したのを失ふのは惜しい、之を回復せやうと欲するのは當然の要求である。然しながら、獨逸が三國同盟の誼に背き、伊太利の反感を買つてまで、土國の肩を持つたといふ事については、尙更らに深い理由がある。それは獨逸の立場から言へば、土國を助け土國を獨逸の最も親密なる友邦として强大なるものにするといふ事は、獨逸の將來の國運の發展の上に緊急缺ぐべからざる關係があるからである。それは何ういふ譯かといふに、獨逸の發展の爲めに、何うしても邪魔になる所の唯一の强敵たる英國を壓倒するには到底土國の力をからねはならぬと信じたからである。獨逸の殖民學者にして、經世的論說を以て常に獨逸國民を警告して居るところのパウル・ロールバッパ氏は、其著『世界に於ける獨逸思想』に於て斯ういふ事を述べて居る。『今後世界を支配する國民は、先づアングロ・サクソン民族と獨逸民族とである。獨逸民族は將來世界の唯一の支配者たるを得ずとしても、少くともアングロ・サクソン民族と相並んで世界を支配し度いものだ』と。斯く彼は流石にアングロ・サクソン民族には初めから一目を置いて居る。更に彼は進んで『我隣邦のアングロ・サクソン人は、其領土の廣大なる、其國民の夥多なる、並びに物質的精神的活動力の豐富なる、優に世界列國の覇者である。ロシアは領土も廣く人間も多いけれども、文化の程度低く國内の狀態も散漫である。佛國は十八世紀の頃には大西洋の彼方此方に於て英國と角逐し大いなる勢力を振つたけれども、今日は活力が萎靡し人口も少く、到底今後の競爭場裏に覇を稱し得べくも思はれない。然らは今後我々獨逸民族にとつて競爭の相手となるべき者はアングロ・サクソン人のみである。而して我々が歐洲に於ける一小國として一偶に屛息するを甘んぜざる以上　四方に發展してアングロ・サクソン人と衝突するのは止を得ない。其結果、若し彼から進んで彼が世界の各方面に有する利益を讓り、以て我が獨逸民族の要求に調和するを努めざる以上、彼と我との武力を以てする競爭は到底免れない。斯く考ふれば、獨逸の運命は取りも直さず英國の運命である。我れ英國を亡ぼさずんば、英國必ず我を亡ぼさん』と述べて居る。此考は恐らく獨逸の識者の多數の抱いて居る考であらう。そこで近年に於ける獨逸のあらゆる施設は、皆如何にして英國を凌ぐ事が出來るか、少くとも、如何にして英國と雁行して進む事が出來るか、といふ問題に集中して居る。而して何う考へても獨逸は英國に勝つ見込みが立たない。そこで彼等は、幾分なりとも英國をして其の戰線を外に轉向せしめ、以て其絶えざる脅迫より多少免れ得るが爲め、遂に土國の力を藉りて、埃及に於て英國に不安を感ぜしめてやらうといふ事に思ひ付いたのである。此事に就いて右のパウル・ロールバッパ氏は、一九一一年に公けにした『バグダット鐵道論』に於て、次のやうな事を言つてゐる。『今日獨逸は、世界に於て最早恐るべき多くの敵を有たない。只一つ獨逸の發展の前途を遮るものは英國のみである。英國も亦我國を眼の敵にして、何とかして我國を孤立せしめ、我國の發

展を阻害せんとして居る。そこで英獨の競爭は到底免るゝ事は出來ない。が、然し、獨逸は今のところ、悲しい哉、英を屈服する事は出來ない。此英獨の競爭に於て、萬一獨逸が有利の地位に立ち得る場合があるとすれば、それは唯一つ英國をして或危險を感ずるの地位に落すといふ事に依つてゞある。然し、英國に危險を感ぜしむるといふ事は、獨逸が直接英國本土を攻撃するといふ事に依つては到底不可能である。人はよく北海を超えて獨逸の陸軍を英國に上陸さすべしなどといふけれども、之は全然空想に過ぎない。況んや海の彼方に於ける英國の殖民地を侵すといふ事は、到底獨逸のよくせざるところである。如何に藻掻いても、獨逸は英國を困める事は出來ない。若し玆に英國に多少の危險を感ぜしめる方法がありとすれば、それは只一つある。即ち獨逸の勢力の下に土國を強くすると云ふ事である。獨逸の勢力の下に土國が強くなれば、何故英國が危險を感ずるかといふに、英國は爲めに埃及に不安を感ずるからである。埃及それ自身が英國にとつて何れ丈けの價値があるかは、一つの問題であるが、然し、埃及の領有を失ふ事によつて蘇士運河の領有を失ふ事は、彼の到底堪へ得るところではない。何んとなれば、之が爲めに彼は印度並びに極東との安全なる連絡を失ひ、又恐らくは、中央及び東アフリカの領地を失ふの懸念があるからである。故に少くとも此意味に於て埃及の領有は英國の死命に關する大問題である。此埃及の領有に不安を感ぜしめる事が出來れば、英國を困める目的の一部は達せらるゝ。而して之は一に土國を强くするといふ事に依つてのみ達せらるゝのである」と。如斯論じて彼は、土國が強くなれば強くなる程英國は益々危險を感ずる。而して其危險は、一つには埃及の領有が不安になるといふ懸念と、モウ一つは土國の强大になつた結果として、同じく回々教を奉ずる印度や、アフガニスタンや、或は埃及方面の同教民が振ひ起るだらうといふ心配と、此二種の危險を感ずるといふて居る。而して如斯危險を感ずれば感ずる程、英國は獨逸に對する鋒鋩を緩むるであらう。故に獨は英國をして挑戰的態度を緩和せしめるといふ點から云つても、土國を援け土國の隆盛を計るの必要がある。況んや土國を强大にし且つ之を手懐けて置く時は、一朝事ある時、土國の兵力をして亦一方の備たらしむることを得るに於てをや。是れ獨が心力を盡して土耳其を援けた理由である。

△土耳其の戰爭參加の目的

土耳其が今度の戰爭に參加した目的は如何。凡そ國家が戰爭に參加するに方つては、それが名實共に純然たる防禦的の戰爭でない限りは、兎も角表向き其戰鬪參加を辯護（ジャスチファイ）すべき理屈があり、又事實に於て期するところの目的がなければならぬ。實際に何等の期するところなく、又表向き相當の名義も立たないで、漫然と戰爭に參加するといふ事はない。現に今度の戰爭

の中心となつて居る墺國・セルビアは勿論、獨・佛にしても、英・露にしても、各相當の理由と相當の目的を以て戰つて居る。然らは土耳其には如何なる名義あり、又何の期するところあつて此大戰爭に參加したのであるか。此點は何う考へても我々に理解が出來ない。土國は歷史的にロシヤからは隨分虐められて居る。けれども、最近土國が特にロシアから非常に虐められたといふ事實はない。英佛からは寧ろこれまで幾多の好意をこそ受けて居れ、何等怨を抱くべき關係がないのである。其他經濟上の點や軍事上の點等を考へて見ても、今英・佛・露を敵として立たねばならぬといふ必要は毛頭ない。然らは土國は謂はゞ無名の師を起したやうなものだ。又今假りに表面上辯護すべき何等の理由はないとしても、實際上何か此戰爭に依つて期する所のものがあるかと考へて見るに、之も亦甚だ覺束ない。露國を敵として土國の期するところの萬一の望みは、黑海沿岸に於て領地を割取するといふ事であらう。けれども今日の土國が、南ロシア又はカウカサス方面に於て露國より領土を割き取る事が出來、且又之れを將來に維持し得るほど有力なものとはどうしても思へない。次に英國を敵として萬一に期するところの目的は、埃及の回復であらう。然しながら土國が埃及を英より奪ふ事の困難は、露國の領土を割き取るよりも數層倍大なる事業である。之等の點は少しく東歐の形勢に通ずる者の疑はざるところである。のみならず、土耳其人自身と雖も、恐らく吾人と格別異つた見解を有つて居る譯ではあるまいと思ふ。要するに、土國は今度の戰爭で英露を敵としては何等得るところがないと覺悟せねばならぬのである。所謂骨折り損の草臥れ儲けである。

若し土國が今度の戰爭で何等か獲物を得るの餘地があるとするならば、それは英露の領土の方面に非ずして、バルカン半島に於ける舊領土の回復といふ方面であらねばならぬ。土國は一九一二年のバルカン戰爭に於て廣大なる領土を失ひ、自分は半島の東南端に蟄伏する事になつた。一九一三年五月三十日の平和條約で

は、コンスタンチノープルの周圍に僅かの領土を保有するのみに過ぎないものとなつた。後此年の夏の二度目のバルカン戰爭の騷ぎに乘じて、多少ブルガリアから其舊領土を回復したけれども、それでも以前の版圖の大部分は、ギリシア、モンテネグロ、セルビヤ、ブルガリアの四國の奪ひ去るところとなつて居る。此恨は歷史が新しい丈けに恐らく土國人の頭にも今日尚鮮かに印せられて居ることゝ思ふ。而して今や歐羅巴諸强國は未曾有の大亂に際會して東方問題を顧みるの違はない。先きの敵國の一つは現に此次戰爭の張本人である。又勃牙利とは曾て攻守仝盟の密約を結んだと云ふ噂があつた。然らば土國は此機會を利用して一仕事をしようと云ふならば、且つ武器を執つて立つ丈けの餘力があるものとするならば、必ずや舊領土の回復と云ふ方面に向ふべきであつた。即ち彼は今度の戰爭のゴタゴタに乘じ、勃牙利と仝盟結托して、一方は塞耳比亞の背後を衝き、他方希臘に兵を送つて、一つには奪はれたる領土の回復をはかり、尙一つには當時希臘との間に懸案となつて居つた多島海問題の如きを一擧に而かも有利に解決せんと心懸くべき筈であつた。斯う云ふ方面に兵力を用ふると云ふのであれば、或は世界の動亂に乘じて徒らに事端を繁くするものと云ふ批難はあるにしても、然し兎も角も相當の理由があり又相當の實益のある戰爭と見らるゝのである。然るに土耳其は斯くの如き手段には出でない。飛んでもない芝居氣を起して、露國や英國を敵として起つことになつたのは、如何に考へても其の思惑の程が分らないのである。

尤も今度の戰爭の勝敗の數が、初めから極めて明白であつて、獨墺側の全勝が世界の耳目の上に一點の疑のないものであるか、或は少くとも土國の參加することによつて三國協商側は全然敗北し、獨墺側が全然勝利を占めると云ふ目算の極めて明白になつて居るものであれば、土國の戰爭參加は强ち無意味と云ふことは出來ない。何となれば、之によつて土國は獨墺の戰勝の後援により、露國からは黑海沿岸の土地を要求し、

英國からは埃及の還附を要求することも、強ち出來ない事もないからである。併し之は獨墺側の全勝の見込が極めて明白に立つて居る場合に限る談である。然らば斯くの如き見込の上に立つて土國は戰爭參加を決定したものであらうかと云ふに、我々はまた之に對して大いに疑を挾まざるを得ない。何となれば、如何に最屓眼に見ても、獨墺側が全勝を占めると云ふ事は到底信ぜられぬ、而して土耳其人中にも同樣の考を有つて居つたもの決して尠くなかつたからである。成程獨墺側、殊に獨逸は、兵備の點に於ては、何れの國にも勝つて居つた。故に兵力に於て獨逸は極めて強大な國であると云ふ事は、何人も之を認める。けれども、戰爭の勝敗は必ずしも兵力其物の強弱のみによつては極まらない。斯う云ふ着眼點から觀ると、獨墺側が全勝を占むると云ふ事は、到底之を考ふることは出來ない。精々の所五分五分。大多數の人は、當初より今日に至るまで、仍ほ獨墺側の結局に於て敗者たるべきを信じて疑はない。土國の識者は、如何に事物を洞察するの聰明を缺くとしても、歐羅巴の一角に居つて而かも此形勢が分らぬ筈はない。故に我々は、土國が獨墺全勝の確信の上に多大なる前途の希望を抱きつゝ、此戰爭に參加したと云ふ風には考へられない。**然らば土國は何の名義もなく、何の期する所もなく、只盲目的に此戰に馳せ參じたものと見るの外解釋の仕樣がない**。況んや不幸にして獨墺側が、多くの人の豫期するが如くに、敗北の運命を免れぬとすれば、之によつて最も多く損害と苦痛とを蒙るものは、獨墺にあらずして土耳其であることを考ふる時に、土耳其たるものは、決して輕々しく此戰爭に對する態度を極めることは出來ない筈の國柄であつたのである。今度の戰爭で、獨墺側が負けたとしてさて墺獨の失ふ所は如何といふに、墺は東南にあつてはボスニア、ヘルツェゴヴィナ、西南にあつてはトレンチノー、北にあつてはガリシアを失ふに止り、又獨は東にあつては露波蘭領、西にあつてはアルサス、ローレンと海外に於ける殖民地とを失ふに過ぎぬだらう。それ以上になほ損害苦痛を受くべ

きや否やは問題である。少くとも歐洲に於ける一等國たるの地位と體面とを損ずる程の大打擊は受けまい。縱令んば大打擊は受けても、更に數年を期して再び國力を回復し得るの希望と基礎とを失ふ程までの大いなる打擊は加へられないだらうと豫想されて居る。然るに土國は如何と云ふに、彼は先づ埃及を名實共に失ふだらうし、小亞細亞に於ける領土も大部分外國の手に歸するのみならず、多島海に於ける一切の島嶼を失ひ歐大陸からは全然驅逐さるゝかも知れない。即ち歐洲の一國としての土國の存在は永遠に終りを告げしめらるゝことになるの惧がある。一八五六年、彼は國際法上歐洲の一國として認められた。而して今や彼は此仲間から除外されて、波斯や暹羅などゝ其運命を共にせねばならぬ狀態に落ちんとしつゝある。斯かる悲慘の運命が目の先にブラ付いて居るに拘らず、敢て彼の戈を執つて起つたと云ふ事は、其何の意に出づるやを知るに困むのである。斯く考へて見ると、殘る所の解釋は只一つある。それは土國自身は何の見る所もあつたのではない、何の期する所もあつたのではないが、只獨逸に導かれ、獨逸に嗾かされて起つたのである。即ち獨逸の傀儡となつて其命令に盲從して起つたと見るの外、解釋の仕樣はない。是に於て問題は一轉する。曰く、土國を戰爭に參加せしむることによつて獨逸の期する所の目的は如何。

土國を戰亂の渦中に誘ひ出したことによつて獨逸の期する所の目的は二つあり得る。一つは之によつて英・露を牽制することである。他の一つは之によつて英・佛・露の治下にある回教徒を背かしむることである。此二つを外にしては格別の目的はないやうに思ふ。然らば此二つの目的に於て、獨逸は今日までの處成功して居るかどうか。又元來斯くの如き目的は斯くの如くにして果してよく到達せらるべきものであつたかどうか。

先づ第一に英露の牽制と云ふ問題から考へて見よう。土國が其全力を傾けてどれ丈け英と露とを苦しめ得るかと云ふ事は、軍事專門家の眼から觀て一つの問題であると思ふ。此邊の事は、我々門外漢には精確明

瞭には分らないのであるけれども、只我々の此問題を考ふるに方つて念頭に置かねばならぬ事は、今日の戰爭に於て軍の强弱を決定するの要素は、只個人的勇氣ばかりではない、尙其上に金と頭とが大切であるといふ事である。成程土耳其兵が勇猛にして死を怖れず、よく艱難に堪へ、不屈不撓の好戰士たることは、何人も之を認める。一八七八年の露土戰爭に際して、オスマン・パシャの率ゐる一隊が露の大軍を苦しめた當年の勇氣は、今日尙之を士兵に認むることが出來ると云ふ事である。併しながら、今日の戰爭はあの時に比して尙一層科學的に行はるゝ。兵隊が個人〳〵にエラクとも、更に之を運用するの頭がなく、又更に之に潤澤なる材料の備へがなければ、今日の戰爭には到底勝つことは出來ない。然るに土國軍には此頭と金とが缺乏して居る。尤も此不足は今度の戰爭に於て獨逸が少からず補充して居るやうではある。先きに派遣されたリマン・フオン・ザンデルス將軍以下約四十名の將校は、戰爭が始つても召還されずに其儘土國の軍務に服して居る。開戰後間もなくゲーヘン、ブレスラウの二大戰鬪艦が賣却の名義の下に獨逸より土國に供給せられた。此頃では潜水艇さへ陸路土耳其に送られて居るとの事である。其上尙財政上いろ〳〵の補助をも獨逸が與へて居ると云ふ事である。が、併し、それとても實は大したものではあるまい。何となれば、獨逸は本國に於てすら己に人と金とに缺乏して居る際であるから、さう澤山土國方面に無盡藏に供給することは出來まいと思ふからである。して見れば、土國が獨逸によつて大に智識と金との補充を受けたとしても、到底英露に拮抗する程の大勢力となり得ると云ふ事は信ぜられない。尤も黑海に於ける土國の海軍は、優に露國の黑海艦隊に對抗することが出來るさうだ。けれども、今日までの處まだ土國が黑海の制海權を握つたと云ふ報道に接しない。高加索方面に於ては、土露共に未だ十分に相手方を壓倒し得ないやうであるけれども、併し結局に於て土は露に對して到底勝味がないと云ふ事は、洽ねく認められて居る。若し夫れ英に對しては、

ベドウィン族は多少英を困しめ得んも、大局には影響なかるべく、土國の正規兵が埃及を襲ふと云ふ事に至ては、談決して容易ではない。土兵が埃及に侵入し得ざる限りは、到底十分に英を牽制することの出來ない事は明白である。而して土が海路埃及に兵を送ることの不可能なるは、地中海の制海權が協商側の獨占する所たるの事實より疑を容れない。然らば陸路シリアの方面から埃及に侵入し得るやと云ふに、之れ亦非常に困難である。シリアの沙漠を通つて阿弗利加に向ふの難事業は、土が自分の領域内を行くのだから如何か斯うか成し遂げたとしても、扨て夫れからいよ／＼埃及領内に入つて蘇士運河に接近するまでが大變な仕事である。埃及は蘇士運河の東の方に尙掌大の領地を有つて居る。之と土國領との境から蘇士運河までの間にはタッタ二本の道路があるのみである。距離は凡そ百八九十哩であるが、此處には食物もなければ水も無い、純然たる沙漠であつてどんなに勉强しても先づ十日程の行軍を値する。そこで糧食や水などを用意して行軍すると云ふ事になれば、どんなに内輪に見積つても、兵隊二人について三頭の駱駝が要るさうだ。此事は本年二月の米國「評論之評論」に埃及の人ナハス博士が出して居る「如何にして埃及は土國の攻擊に對して安全なりや」と云ふ論文に書いてある。斯う云ふ譯であれば、蘇士運河まで行き着くと云ふ事が已に非常の困難である。而かも幸に運河まで來ても、之を渡つて埃及に行くと云ふ事は是れ亦決して容易の事ではない。尤も運河の幅は平均二百十三尺、最も廣きも二百六十二尺に過ぎない。けれども、英國は其運河の岸に相當の用意をして待つて居るに違ひないから、所謂逸を以て勞を待つと云ふ理屈で、十日も沙漠を通つて來た土國兵では、到底英國の此軍備を突破して埃及の方に入ると云ふ事は出來ないだらう。現に新聞の報ずる所によれば、本年の二月二日、約一萬二千の土國兵が蘇士附近にあらはれたが、英國の邀擊に會つて大敗し、捕虜六百を超へ、四百の死骸を殘し、二千餘の負傷者を抱いて退いたと云ふ事である。之に由つて觀ても、土國は此方

面に於て到底英國に大なる打撃を加ふると云ふ見込のない事は明である。尤も予は土國が斯くの如き見込のない抵抗を英國に對して試むるのを、萬更ら無謀とのみは思はない。何となれば、次に述ぶるが如く、土國兵が段々埃及に壓倒し來ると云ふことにすれば、埃及に於ける回教徒は之に應じて起つかも知れないと云ふ萬一の希望があるし、又僥倖にして土國兵が埃及の領內に入つて了へば、必ずや埃及に於ける回教徒は獨立の戰爭を英に對して挑むだらうと思ふからである。併し之は土國兵が埃及の中に入るか、又は少くとも之に接近して强力なる壓迫を加ふるといふ事にならない以上は、容易に實現しない問題である。けれども、萬に一つの場合が實現すれば、非常に英を苦しめ得るのである。故に此萬一を僥倖して土國が事を擧げたのは、必ずしも無謀とのみはいへないと思ふ。現に英國も之については非常に警戒したやうである。然し此英國の警戒したのも、又土國が多少の希望を置いたのも、畢竟共に萬一に起るべき結果が重大であるが爲めであつて、決して土國の希望を容易に實現し得るものと考へたが爲めではない。之を要するに、土國は英を牽制すると云ふ目的の爲めには公平に云へばそれ程有力なものではない。ヴレンチン・チロルの記する所によれば、（本年一月發行「四季評論」所載「獨逸藥籠中の土耳古」參照）獨逸ボーン大學教授ベッケル博士は、獨逸が土國をして戰鬪に參加せしめた一の目的は、彼をして埃及に侵入せしめ、以て英國を困しむるにありと云つたさうであるが、無論之も一つの目的ではあつたらうが、併し之は決して獨逸の最も重きを置いた所ではあるまいと思ふ。

然らば獨逸の最も重きを置いた目的は、第二の回教徒の煽動と云ふ事であらねばならぬ。前記ベッケル博士も、土國參加の第二の目的は印度を動亂せしむるにありと云つて居る。印度の動亂と云ふのは、只代表的に印度丈けを擧げたのであつて、其眞意は想ふに印度ばかりではない、其他すべての方面に亘つて居る所の回教徒を煽動して、廣く協商側を苦しめんとの意味て

あつたらうと思ふ。今日回教徒は、偶然にも大部分は英・佛・露の治下にある。印度は勿論の事、其外アフガニスタンの住氏も亦回教徒であつて英國の支配する所である。阿弗利加の北岸には、チュニス、アルゼリア、モロッコの住民亦回教徒で、佛國の治に服して居る。中央亞細亞方面、例へば土耳其斯丹の住民は、露國の支配する所である。されば若し土國が英・佛・露を敵として起つたと云ふ事により、此等の地方の回教民も亦響應して起つものとすれば、之は英・佛・露にとつて實に由々しき大事でなければならぬ。中にも此うちで最も困難を感ずるのは、獨逸の視て以て最大の敵となす所の英國である。獨逸は英國をさへ大に苦しめ得れば、聯合軍を屈することは譯はないと思つてゐる。外の二國も固よりだが、中にも英國を最も多く困めるのは彼の熱心に冀ふ所である。從つて獨が回教徒の動亂と云ふ事を目安にして、**土國を誘つたのは固より當然であるといはねばならぬ**。然らば世界中の回教徒は、土國の音頭に從つてみんな起つだらうかどうか。之に**ついて先づ第一に考ふべき點は、マホメット教徒の間には、同教と云ふ觀念が非常に强い、殊にアラビヤ人の間には、此觀念が最も强烈であると云ふ事である**。平常は其居る所が遠く離れて居るため何等の交渉もないものが、一旦教門の大事だと云ふと、直ちに起つて來り援くると云ふ事は、從來歷史上に其例に乏しくない。例へば最近の例を擧ぐれば、一九一一年のトリポリ戰爭の際に、サハラ砂漠の奥の方に居つた多數のアラビヤ人は、此戰爭を以て回教に對する基督教の攻擊なりと爲し、不信者(回教徒の眼より)の手より北亞の同胞を救はんとの意氣込を以て、遙かに來り援けたのである。而して彼等は之を「神聖なる戰爭」と稱し、自らはまた「神の武士」を以て任じて居つた。更に遡つてトリポリ戰爭開始當時には次のやうな現象もあつた。即ち其前の年の暮から、トリポリ戰爭開始の年の初めに掛けて、小亞細亞のエーメン地方に土國政府反對の謀反が起つてゐた。叛軍の勢猖獗にして、一九一一年の六月頃には到底獨立を承認するの外あるまいと

いはれて居つたが、此年九月の末、トリポリ戰爭の初まるや、彼等は教門の大事の爲めには內紛を事とすべきにあらずとて、暫く本國政府と休戰して、共に基督教徒の攻擊に當らうと決心したのである。恰度英國に於て愛蘭土に於ける保守黨が將さに內亂を起さんとして居つた際に歐洲大亂の勃發に際會し、暫く內爭を廢めて擧國一致國難に赴いたと異曲同巧の美談である。而かも之が愛蘭土と英本國と云ふやうな、兎も角も同一の國民で利害關係の密接な處ならば格別、エーメンに於けるアラビヤ人と土國との如く、歷史上深い反目の關係があり、現在に於て何等共通の利害關係なき民族の間に、單純に宗教を同じうすると云ふ事丈けで、右の如き現象を見ると云ふのは、如何に回教が教民の精神を統一するに有力なものであるかといふことが分る。斯くの如く、回々教徒の間には本來同教の念が非常に强い。其上近年土國は自ら覇者となつて回教徒の大帝國を建設せんとするの空想を抱き、此目的の爲めに土國の宮廷から時々密使が世界の各地に派遣せられその運動の爲めに相當の金も使はれて居つたと云ふ事である。此事はジー、エフ、アボットが昨年十二月發行の「四季評論」に載せたる「回教徒の謀反」と題する論文の中にも說いてある。斯う云ふやうな點を考へて見ると、土國が英・佛・露を向ふに廻はして起ち、而して之がマホメットの死活に關する大戰爭であると云ふ風に言ひ觸らせば、之によつて直ちに埃及も動搖し、印度も動搖するだらうと考ふるのは無理もない次第であると思ふ。そこで獨逸は此等の點を期待して土國を戰鬪に參加せしめたものであらう。予の考では、獨逸が斯くの如き目的に土國を利用すると云ふ事は、今度の戰爭で偶然に思ひつかれたのではない、寧ろ獨逸は實は多年此事の爲めに苦心し準備する所があつたものであると思ふ。尤も獨逸の土國に肩を入れて居る詳しい理由は、其外にもいろ／＼あらう。けれども、英・佛・露殊に英の治下にある多數の回教徒の教主が即ち土國の君主(サルタン)であると云ふ點に、最も重きを置いたものなる事は爭はれない。されば土國が戰爭に參加した當時、

流石の英國も之には餘程困つたやうである。そは、英は只埃及の侵入を防禦する丈けならば大した困難もないが、土國の參加によつて聯合軍側の蒙る少からざる損害を避くるためには、早く土國を屈服するの必要があるといふ考からして、間もなく土國に對して積極的攻撃の態度を執り、やがて聯合艦隊のダーダネル砲撃となつたのであるが、此時に英は自國の兵力を以て土耳其本國の攻撃に當らしむるを欲せず、某國を誘ひ其國の艦隊に請うて其任を引き受けしめんとしたのであつた。某國は之に應じなかつたので、止むを得ず英佛連合艦隊が直接之に當ると云ふ事になつたが、抑も當初英國が土國攻撃の爲めに某國を誘うた理由は如何といふに、表向きは北海方面の警備は目下餘力を東方に割くを許さずと云ふやうな事にあつたらうけれども、實際は彼が直接にマホメット教國を攻撃するの責任を免れんが爲めであつたに相違ない。蓋し英國自ら直接に此任務に當れば、事によると印度や埃及に於て其治下にある教民が反抗するといふ惧れがあるからである。斯く考へて見れば、回教徒煽動の目的を以て獨逸が土耳其を誘ふたと云ふ事は、兎も角も當初は敵も味方も共に之を相當に重要視したのである。之は第一の英露牽制の目的の如く、萬一を僥倖したものでもなければ又確たる成算がなくて遣つた仕事と見るべきものでもない。然るに**いよ／＼戰爭を進めて見ると、當初獨逸の期待したやうな、又英國の密かに怖れて居つたやうな現象は遂に起らなかつた**。印度に於ても、埃及に於ても、回教徒の動亂は殆んど起らざるのみならず却て印度からは澤山の兵隊を西歐に送つて對獨戰爭に參加せしめて居る。佛國の殖民地よりも、昨年の暮の報道によれば、約五萬の回教徒を從軍せしめて居ると云ふ事である。之は英佛兩國も獨逸も恐らく共に意外に感じた所であらう。尤も戰局未だ半ばであるから、今後どう變るか之は豫言は出來ない。若し戰局の進行が聯合軍側に不利益なやうに進めば、中途埃及や印度で動亂が起らないとも限らない。殊に足一度び土兵が埃及の土地に入らんか、必ずや埃及に大動亂が起るだ

らうと掛念せらるる。併し戰局が今の儘で進めば、此等は所謂杞憂に屬して、結局土國の大敗、獨逸の誤算と云ふ事に歸するだらう。要するに、今日までは無難である。然らば將來はどうなるだらうか。將來の事は容易に豫言は出來ぬが、併し今日迄の經過を研究すれば、多少將來を揣摩することが出來ぬでもない。依つて予は次に今日までのところ多くの人の豫期に反して回敎徒が起たなかつた所以を明かにし、以て將來回敎徒が如何なる變に際して如何に動くかと云ふ事を判斷するの材料に供しようと思ふ。

回敎徒の起たなかつた理由は、之を積極消極の兩面から觀察することが出來る。積極の理由としては、回敎徒の多數は今日實は基督敎國の支配に滿足して居ると云ふ點を擧げねばならぬ。先きにも引いた米國「評論之評論」中のナハス博士の論文の中にも、成程宗敎の點から云へば埃及人は土國と同感の所はあるけれども、併し英國の親切なる政治には國民は十分に滿足して居ると書いてある。但し埃及には、所謂靑年埃及黨など丶云ふ年少客氣の所謂愛國團とでも云ふべきものがあつて、此等は數は少いけれども新聞や雜誌などを利用して盛んに國民の敵愾心を煽つて居る。斯の如きは獨り埃及に限つた事ではない。チユニスにもあれば、アルゼリアにもある。無論印度にもある。而して此等の議論を見て、世間では反英思想が中々盛んだとか、反佛思想も盛んだとか云ふけれども、併し之は實際聲の大なる割合に勢力のあるものではない。大多數のものは實は默つて居る。騷ぐのは少數者であるが、局外の眼には大した勢を有つて居る者のやうに映ずるのである。それで新聞雜誌の上では、印度にも段々英國の政治に不平なものが多くなつたとか、埃及にも獨立思想が勃興して居るとか云ふやうに見えるけれども、併し爲めに其實際の勢力を過重視しては不可ない。此事は前記アボツト氏の「四季評論」中の論文にも書いてある。ナハス博士の論文の中には、埃及に於ける反英思想を鼓吹するもの丶多數は、靑年客氣のハイカラにして、西歐諸國で一知半解の自由思想にかぶれたものに

多いと云つて居る。中には土國の密かに此熱を煽動するに乘りて騷ぐものもあると云ふ事である。尤も大體に於ては、彼等の間にも民族的自負心と云ふものはあるから、出來るならば獨立を遂げて、外國の支配は之を受けたくないと云ふ希望はある。けれども、若しこゝに土國に附くか英佛に附くかと云ふ二者擇一の現實の問題に逢へば、彼等は必ずや英佛の下に附くを以て自家の利益なりと斷定するであらう。其譯は、彼等が昔土國の支配を受けて居つた時代には、決して個人の自由、生命財產の安全、裁判の公平と云ふやうな事はなかつた。彼等は土國人は自分達の財產を奪ひ取りに來たものだと考へて居た。故に宗敎的には同感の所があるけれども、土國の政府に對しては、相當に反感を持つて居つたのである。だから埃及人は後治者を代へて英人の下に附くやうになつても、割合に無頓着であつた。而かも却つて段々年を經て見ると、英人は漫りに自分達の財產を奪はない。却て疾病饑餓に對する救濟の法などが完備し、產業も繁昌して、人民の生活上の幸福と云ふものが段々に增して來る。そこで實際土國に附くよりも英國の支配を受けて居る方が利益だと考ふるやうになつた。此等の點は、佛領の方でも同一である。斯う云ふ風に、英佛の政治は大體に於て土民を滿足せしめて居るから、宗敎が同一なりと云ふ一片の感情では、當節は容易に彼等の心情を飜すことが出來ないやうになつた。無論土民は屢々申した如く、もとく外國の支配を受くることを快しとしない。茲に乘ずべき隙があるといへばある。けれども此隙に乘じ、彼等をして斷然英佛に反對するに決せしむるには、彼等が從來英佛に附いて居るを利益なりとせる考を打捨てしむる程に、有力な理由を提供しなければならぬ。土國はそれ丈け有力な理由を有つてゐない。況んや土國は近年に至り巴爾幹戰爭等に於て共無能を暴露し、今又埃及の境や高加索方面に於てマゴツイて居つて、他の回敎民をして漸く鼎の輕重を問はしめて居るに於てをや。尤も今度の戰爭が始まつてから、土民の叛亂と見るべきものは印度の新嘉坡に起つた。けれども之

は間もなく治まつたので、大體に於て、印度に於ても今度の戰爭に關聯して特に反英の思想が昂まつたと見るべき形跡はない。否、却つて、印度の有力者が寄附金々募つて出征軍人の遺族救濟に勉めて居るとか、其寄附金が本年三月の初めまでに已に一千萬圓に達し、尙續々申込ありとか、又は回々敎徒の有力者が各所に大集會を催し、英國政府に對して忠實なるべきの決議をなし、印度大守の手を經て本國に電達したとか(國際法外交雜誌第十三卷第九號伊吹山法學士論文參照)の報道があつて、寧ろ土國の戰鬪參加が、偶々印度の土民をして一層英國に親ましむるの機會となつてゐるやうにも見えるのである。次に消極的の理由としては、現今世界の回敎徒の間には、信條の同一といふ事の外何等共同の結帶がないといふ事を擧げねばならぬ。宗敎が同一であるといふ事は、成程有力な結帶には相違ない。けれども、之を外にして彼等は何等共同の文明を有つて居るではなし、又何等共同の政治的並びに經濟的の利害關係を有つて居るでもない。昔は十字軍などと云つて、單純に一片の宗敎的信仰のみに動いて、各種の人民を同一戰爭に馳せ向はしめたといふ時代もあるけれども、今日の人間は餘程實際的になつて、なか〳〵空名には動かない。今日の國民を動かす所の最も重大な要素は、何と言つても實利實益である。然るに回敎徒の間には、實利實益の協同が無い。故に、信仰を同じうする者の艱難に對しては、遙に大いなる同情を寄せるけれども、それは所謂口舌の同情に止つて、現實の力を以て來り援けるといふ事は極めて少いやうである。現に先年トリポリ土民の奮戰苦鬪に對しては、各地の回々敎徒は大いに同情を表したのであるけれども、實際肉と血とを以て現實の援けを與へたものは、只サハラ沙漠地方の土民のみではなかつたか。遠い印度の回敎徒の冷淡であつた事は暫く措き、せめて隣の埃及や、チュニス、アルゼリアの方に、多少の動搖の起るべき筈であつたのに、それも起らない。之に依つて見ても、今日回敎徒の間には、共同の目的の上に均しく起つといふ適切の原因は缺けて居ると謂はなけれ

ばならぬ。單に夫れ丈けならば未だい丶が、實は土耳其人とアラビヤ人とは、本來動もすれば反撥し易き關係にある。此事も亦看過してはならぬ。なぜ斯ういふ譯になつたかといふに、之れに就いてはいろ〳〵の理由がある。前記アボット氏は、其原因の一つとして、アラビア人と土耳其人との性質の差違を擧げて居る。二者の差は、恰度チユートン人とラテン人との差に似て居る。次に又アラビア人は、土耳其人に對して歷史上反感を有して居るといふ事を原因の一つに數ふる者もある。之も爭ふべからざる事實である。何となれば、アラビア人は古來土耳其皇帝に對して、同時に教首たるの資格を認むる事を爭ひ來つた。歷史上から言へば、回教の教首は、紀元一五一七年迄は、アバッシット家の占むる所であつたのを、此年オスマン王セリム一世が同家を脅迫して教首たる地位を自分に讓らしめたのである。此事を楯に取つて、アラビア人は、サルタンの教首たる地位は、劍の力を以て獲たるものである、從つて又劍の力に依つてのみ維持せらる丶ものである。我等は其劍の力を恐るゝが故に、已むなく之に服するのであると云つて居る。更に第三には、歷代のサルタンの不用意を擧げる事が出來る。アラビア人が本來自分に悅服したのでないことが明な以上、彼等は徐ろにアラビア人の感情を和げ、漸を以て之を歸服するの手段を講ずべきであつた。然るに事實歷代のサルタンは、却てアラビア人に隨分と烈しき壓迫を加へ爲に益々アラビア人の反感を甚だしくした。それでも從來は、土耳其は優に其兵力を以て之を威服することは出來たけれども、最近の戰爭に於けるが如く、全然無氣力なる事を暴露しては、最早アラビア人は土耳其に敬重を拂はない。土耳其を敬重しなくなれば、さらでも統一的結帶の缺乏してをる回教徒の間に、最早有力なる中心點が缺けて仕舞う。何を以て彼等を一致協同せしむる事が出來やうか。所謂土國が三國協商側に對して神聖戰爭を宣言し、世界の回教徒を團結して到る處英・佛・露を苦しめんとするには、今日は最早其時代ではない。せめて土耳其が今日よりもモット强盛な國であつた

ら、何とか目鼻もついたらう。少くともモット有力なものと視られてゐない以上は、土耳其の蹶起は、今の儘では世界に散在する數千萬の回教民の上に、何等の影響を與へずして終るの外はあるまい。

▽土耳其將來の運命

土耳其將來の運命を論ずるには、今日は些か時期が早過ぎる感がある。土耳其は目下カウカサス方面に於て露國と戰ひ、小亞細亞方面に於て英と戰ひ、更にダーダネルス海峽方面に於て聯合艦隊の砲擊を受けて居る。併し此戰爭が何う結果がついてもそれに依つて土國の運命は必しも定まるのではない。土國の運命の決定は、獨墺對英佛露の本舞臺の戰爭の結果によつて始めて終局的に定るのであらう。而して此本舞臺の戰爭の結果が如何なる形に終るかの未だ明かならざる今日、輕々しく土耳其の運命を論斷することは出來ない。但し獨墺側が勝つても、土國の之に依つて得るところの極めて少なかるべき事丈けは、豫め之を想像する事が出來る。併し獨墺が結局勝つといふことは信ぜられぬから、主として我々の胸中に往來するのは、獨墺側が敗けた場合に土國は果して如何なる運命を取らねばならぬかといふ問題である。

土國將來の運命を考ふるに方つて、先づ第一に起る考は領土の減縮といふ事である。土國の歷史は一六九九年テメスヴアール州を匈牙利に奪はれたのを初めとして、先度のバルカン戰爭の結末に至るまで、領土減縮の歷史を以て始終した。今度の戰鬪參加に於ても、已に彼は三ケ所に於て領土を英國に奪はれて居る。十一月の上旬には英國はサイプラス島の公式合併を宣言した。尤も此島は一八七八年以來條約上英國の占領に歸して居つたのである。從つて實際上の占領を名義上亦完全に合併したといふに止るのであるけれども、之に依つて土國は永久に同島回復の希望を失つた譯である。之れ亦領土減縮に外ならぬ。十一月下旬に於ては英國は小亞細亞の波斯灣の方面に於てバグダツト鐵道の終點たるベスラ地方の占領を聲明した。之に依つて英國は將來バグダツト鐵道の死命を制するの大決心あることは明である。更に進んで英は十二月十七日には埃及を保護國となすの宣言を發表した。即ち英國外務大臣は宣言して曰く『土耳其の行動より起る交戰狀態に省み、埃及はこゝに陛下の保護の下に置かる。即ち今後埃及はブリテン國の保護國たるべし。土國の埃及に對する宗主權は斯くの如くにして消滅し、而して陛下の政府は埃及の防禦

並びに其住民及び其利益を保護する爲めに、必要なる總ての手段を施すべし』。之と同時に土耳其に加擔せる從來の王（ケデフ）は廢せられ、メヘメットアリー家の一親王が新たに埃及のサルタンなる稱號を以て迎へられ、十二月二十日を以て王宮に入り、同時に新らたなる政府をも組織任命せられた。埃及も亦從來事實上英國の占領に歸し、その領土と同様の取扱ひを受けて居つたのであるけれども、名義上は仍ほ土耳其の藩屬國であつた。而して之が今度名實共に完全に土國より失はれたのである。尤も此等の地域は、若し獨墺側が戰爭に勝てば、無論土國に回復する事が出來る。けれども、終局の勝利が聯合軍側に歸すれば、最早や永久に之を回復するの望はない。而して戰爭の終局は恐らく聯合軍側の勝利に歸すると思ふのであるが、若し果して然らば、土國は差當り以上三つの地方を失ふのは無論であるが、尙其外に一層重大なる損失をも蒙らねばならないだらうと思ふ。現に目下聯合艦隊の攻撃して居る小亞細亞の多島海沿岸の地は、幾分割讓を求めらるであらう。多年歐州外交界の疑問であつたダーダネルス海峽の自由通航の問題も、亦恐らく決定を見るに至るであらう。ロシアを初め各國の軍艦が、地中海より黑海に自由に通航する事が出來るとすれば、土國の近東に於ける軍事的地位は眞にいふに足らぬものになる。其他も一つ重大な問題は、恐らくコンスタンチノープルの問題であらう。即ちコンスタンチノープルを中心とする歐羅巴土耳其の所分如何といふ問題であらう。

戰爭後に於けるコンスタンナノープルの處分如何といふ問題は、今日まで已に多くの人より最も興味ある外交問題として說かれて居る。而してコンスタンチノープル其ものの國際關係に於ける地位が從來極めて重要視されて居つただけ、其の處分問題の研究も亦非常に重要視されて居る。而して此問題に付て先づ疑のない點は、獨墺側敗戰の結果、土國が全然歐羅巴より追ひ除けらるゝに至るといふ事である。此點は何人も異存はないやうだ。佛國の有名なる外交史家アルベル・ソレルが云つたやうに、歐羅巴に土耳其人の蟠據して居る間は、東方問題は跡を絕たないといふのが、今も昔も歐州人一般の考である。夫の兇暴なる土耳其民族の歐羅巴大陸から逐ひ除けられない間は、基督敎徒は枕を高うして眠る事が出來ないといふのである。併し公平に見て土耳其人の歐羅巴に居る事が、事實上夫れ程基督敎徒を不安ならしむるものか何うかは、一つの疑問であると思ふ。歐羅巴の書物に土耳其人を如何にも殘酷無道なものゝやうに書いてあるのは、一つには宗敎的偏見の結果であると思ふ。此神聖なる歐羅巴の天地に、異敎徒の存在を許すのは神と基督とに對して申譯けがないといふやうに、基督敎徒は考へて居る。且つ又土耳其人が殘酷の態度に出づるといふ事は、實は一部分基督敎徒の挑發に依ると云ふ點もある。去ればとて、予は土耳其人に全然責任がないといふのではない。只土民族は歐羅巴の書物に書いてある程殘酷なものであるか何うかを疑ふのである。けれども、兎に角歐羅巴人が一般に斯く考へて居る以上は、此際彼が小亞細亞の方に逐ひ除けらるゝのは必むを得ない運命であらう。そこで次に其の後の處分が何うなるかといふ重大な問題が起る。

土耳其人を驅逐した跡の歐羅巴土耳其を如何樣に處分するかの問題に就ては、今日までのところ四つの案がある。第一はロシア多年の希望に應じて之を其占領に與ふべしとの案。第二はバルカン半島中の一邦例へばギリシャとかブルガリアとかに與ふべしとの案。第三は例へば之を南北二部に分割してギリシャ及びブルガリアの兩邦に各其一半を與ふべしとの案。第四は全然之を中立とすべしとの案である。英や佛に之れを與ふべしとの案は未だ唱へられて居らぬやうだ。而して此中にて最も有力な案は、第一のロシア占領説である。

土領歐羅巴の地をロシアに與ふべしといふやうな議論が表はれると、西歐殊に英國に於ては眼を聳てゝ論難辯駁する。それは英國などに於ては歷史的にコンスタンチノープルといふものに從來非常に重きを置いて居るからである。之は例へばナポレオンの言つた言葉として傳つて居る『コンスタンチノープルは世界の鍵なり』といふ思想や、又は『コンスタンチノープルを得るものは世界の運命を決定するものなり』といふ言葉に依つても分る。中にも英國ではコンスタンチノープルに更に特別重要な意義を認め、此地が若し他國の據る所となる時は印度に於ける英國の地位は即ち失はるゝといふ風に考へて居る。之も或點までは事實である。併し今日の歷史家の研究するところに依れば、右の如き説の流布されたのは、實はナポレオンが英露間を離間せんが爲めに言ひふらした奸策に出づるものであるさうだ。然し夫れは何れにしても、十九世紀の初以來英露兩國が鎬を削つて土京に於ける覇を爭つた歷史はある。從つて露國と土京との關係については、英國人は因襲的に神經過敏になつて居るの傾がある。然しよく考へて見るとロシアのコンスタンチノープルに垂涎するのは必しも英國に對抗する爲めではない。之には別に正當の理由があると思ふ。元來コンスタンチノープルを經て、地中海に出づべしといふのは、露國に於てペートル大帝の遺策であるといふ事だ(之も那翁の僞作であるといふ事は、今日明かに説明されて居

るやうであるが)。女帝カタリナ二世に至つては、先づ黒海沿岸を占領し、之より進んでコンスタンチノープルを得んと心掛け、現に墺國のマリアテレーザ並びにヨセフ二世に土國の分割を相談した事がある。此等の事實を捉へて、那翁は、ロシアのコンスタンチノープルを得んと欲するは、即ち英國の印度に對する連絡を脅かすを目的とするものなりと言つて、英人の間に反露感情を起さしめんとしたとの事である。併し露がコンスタンチノープルを得れば、英は爲めに實際非常に不安を感ずるだらうか。成程昔のやうに、英國が埃及に勢力を確立せず、マルタやサイプラスのやうな足場も得てない時には、露國のコンスタンチノープル占據は、英國の海軍に取つて不安の源であらう。又よしんば此等の地方に英國が勢力を占めて居つたとしても、昔の帆船時代ならば、一朝事ある時、英國が有力なる海軍を送る間に、露國は早くも埃及、マルタ、ジブラルタルを占領して了ふことも出來るから、矢張り不安と感ぜずには居られない。然し今日となつては斯くの如き危險はあるまい。少くとも危險の程度は昔の如きものではなからう。要之ロシアのコンスタンチノープル占領と英國との關係は、從來頗る誇張されて居る傾がある。尤も英國が其昔土國に於て、ロシアと烈しく覇を爭つて居つた時代には、土國の保全を以て埃及と印度との安全の爲めに絕對に必要と認めて居つた。ロシアが一人バルカンに跳梁せんとした時には、獨墺と聯合して露國を抑へんとした事もある。其爲めにはロシアとの開戰をすら辭せなかつた。けれども今日は著しく事情が違ふ。無論今日と雖もコンスタンチノープルのロシアの如き强國に占領せらるゝ事は、出來るならば避けたいと思つて居るだらう。併し共同作戰の結果、獲物の分配の上に必要があるといふなら、敢て今日之を固く爭はなくともよからうと思ふのである。斯く考ふると、ロシアが他日コンスタンチノープルを取るといふ問題が起つた場合に、英國より必しも有力な反對が起るとは限るまいと思はるゝ。少くとも英國は今日までのところ進んでコンスタンチノープルを自分

に要求しては居ないやうだ。

尤もコンスタンチノープルは場合に依つては之を中立とするといふ事にならぬとも限らない。或は之が一番無難な解決法であるかも知れぬ。けれども、若し之を何處かの國に遣つて了ふといふ事になれば、差當り之に相當の要求權を有する者はロシアである。本來の關係から言へば、コンスタンチノープル占領の希望を有するものとしては、ロシアの外に、尚ギリシャとブルガリアとがある。然し此二國は戰爭に參加して居ない。戰爭に參加して居ない以上、土地の占領を要求するといふ事は出來ない。よし戰爭に參加しても、强大なるロシアを差措いて無理に占領の目的を達するといふ事は困難であらう。況んやロシアはコンスタンチノープルを要求するの相當の理由を有するに於てをや。

然らば露國が土京を要求するの正當なる理由とは何ぞ。昔時英國と露國とが近東に於ける二大競爭者であつた時代には、印度の領有を脅かすを以て、ロシアがコンスタンチノープルを占領せんとする唯一の目的と認むる者が多かつたけれども、之は少くとも今日に在ては正當な見解ではない。又土京の領有はペートル大帝の遺策にして、其以來露國傳來の國是なりと云ふものもあるが、元來ペートル大帝の遺言なるものは、前にも述べた如く、帝の死後百年許り後に書かれた僞作である。之が初めて世に發表されたのは、千八百十一年公けにされたルジュールの『露國の政治及び進步』といふ本に於てである。ペートル大帝はバルチックへの出口を求めて今日のペトログラードを建設した人で、更に南方への出口を求め土京方面に志を伸したのは、實際カタリナ女帝以後である。而もカタリナ女帝は、初め黑海に出口を求める事のみに主として力を注いだのである。然らば今日露西亞がコンスタンチノープルを要求する眞實の根據は何處に在るかといふに、一つには歷史的並に宗敎的感情である。露西亞は古來自らスラヴ民族の覇を以て居り、且つ耶蘇正敎の宗を以て任じて居る。而して耶蘇正敎を根柢とする東方文明の中心は、歷史上昔のビザンチーヌ、即ち今のコン

スタンチノープルである。コンスタンチノープルを占むるにあらずんば、東歐に於ける正教民族に對する威嚴に聊か缺くる所あるかの感なきを得ない。然し之にも增して肝要なのは、コンスタンチノープルを要求する露國實際の必要である。こゝに實際の必要とは、積極的には、之によりて黑海と地中海とを連絡し、南露西亞と中央歐羅巴との自由なる通商關係を開き、以てロシアの經濟的發達に資する事と、又消極的には、此地に他の强國が據る事により、黑海の防備が著しく不安になるといふことを避くる事である。詳言すれば、ロシアは南部地方の經濟的發展と其安全の爲めには到底コンスタンチノープルを他の外國の手に委する事が出來ないのである。只土京占領の決行に就て障害となるのは英國の思惑であるが、元來此土京占領の一事はこれ迄考へられてをつた程英國を不安ならしむるものであるか何うかは一つの問題である。抑も英の生命は印度である。而して露がコンスタンチノープルに據つたからと云つて、そこから直ぐに露が印度の方に手を出すと云ふ地理的關係にはなつてゐない。印度の安全の爲めに英の大切とするところは直接には埃及である。コンスタンチノープルは埃及の安全に關係があるといふ點に於て間接に印度に關係があるといへばいへる。されば英は埃及も土耳其も兩方之を得ることが出來れば之に增した事はないが。さう一人で慾張る事が出來ないとすれば、寧ろ土耳其を捨てゝ埃及の確實なる領有を取るべきである。いかに英が埃及に重大の關係を有するやは、曾て那翁が到底直接に英國を屈すること能はずと見るや、先づ埃及を征し遠く印度を脅かして之に依つて英國の勢力を殺さんとした事に依つても解る。彼は嘗て「埃及の主人たる者は印度の主人たり」と言つた。恰度那翁が埃及を脅すことに依つて英を困らしてやらうとしたのは、今日獨逸の對英政策と符節を合する者がある。之を觀ても、英が埃及に於ける地歩を十分固めるといふ事の如何に必要なるかゞ分るであらう。流石に賢明なる英國の外務當局者は、今次の戰爭に於て、土國に對しては如何に露西亞占領の

説が傳はつても神經を昂奮せず、只逸早くも埃及の保護を宣明して自分の據るべきものゝ何れに在るかと云ふ事を明白に天下に發表した。而して此等の點は、屢々予の援用するエリス・バーカー氏も之を論じて居る。氏は本年三月の「十九世紀及び其後」誌上に「コンスタンチノープルの將來」なる論文を寄せ、歐領土耳其を露に與ふることに英國の異議なき旨を諷示し、最後に斯う云ふ事を言つてゐる。「露西亞がコンスタンチノープルに據るといふ事は、決して從來の政治家の想像して居つた如く、之を以て地中海沿岸の諸國を脅かす根據地とする爲めではなからう。加之コンスタンチノープルの占有は、一つには同地人口の半數を占むる土耳其民族の回復の希望、又は希臘人等の同地を奪ひ去られた事に對する不平などの爲めに、絶えず警戒を要する地位に立ち、從つて露國政府の態度は著しく平和的にならざるを得ないだらう」と。此説は些か牽强附會の感なきを得ぬが、又以て最近英國政論家のコンスタンチノープル問題に關する見解の如何に變遷しつゝあるかを窺ふに足ると思ふ。



夏期休業論

△春秋の休暇をも作れ

早稻田大學長 法學博士 高田早苗

暑中休暇を廢するか何うかといふやうな問題は私はまだ考へて見たことがない。若し暑中休暇を取ることが學生の健康上によいとか惡いとかの問題になれば醫學者の研究すべき範圍で我々門外漢の知るところではない。然しながら學生の體育といふことに就いては常に私共の頭を惱すところであつて、學生の體育上から見て夏期休業といふものが何うであるかいふことになれば私共の一通り考へて見なければならぬところがある。昨年私が西洋を漫遊して來て最も深く感じたところの點は西洋の體育の盛んなことゝ、それと同時に日本の體育の甚だ振はないといふこととであつた。西洋では身體の發達といふことに最も重きを置いて其設備なり氣組なりが總て體育を先きにして居る。この空氣が至るところに充滿して居るからその爲めには費用を惜しまず遣つて居るのを見ると實に驚き入るの外はない。暑中休暇を休まずに利用するのがよいか或は勉强をする時には勉强をして遊ぶ時には遊ぶ樣にするのがよいかといふとは嚴密にはお醫者さんが決定すべきもので、我々の兎や角いふべき範圍ではないが、暑中休暇をするしないに拘らず今の制度では學生の負擔をもつと輕くしなければならぬ。體育の方から言つてもつと時間と設備とを與へるやうにしなければならぬ。學校で總てを學ばせるといふことにせず、如何に學ぶべきかといふ道を知らしめるに止めなければならぬ。如何に學ぶべきかといふことの道を知らしめるだけならば學生の負擔が輕くなる譯である。何でも彼でも頭から詰込まうとする根本誤謬を先づ改めてかゝらねばならぬ。

其上に尙暑中休暇をするかしないかといふ問題は、これは第一に氣候の問題であらうと思ふ、アメリカは別としてベルリンでもロンドンでも現に昨年私が居つた經驗に依ると＝左樣昨年の今頃はブダペストからベルリンに入る時分で＝七月一杯ベルリンに居つたが、其中で二日三日は暑い日もあつたが、後は大抵日本の袷着の氣候であつた。ニューヨークの夏は非常に暑いさうであるがロンドンも決してさう暑くはない。スイスは勿論のことである。であるから日本と西洋とを比較して見れば日本の方が遙かに西洋よりも暑中休暇を取る必要があると思ふ。齊暑中休暇の前後を短縮するといふことならば實際問題になるかも知れぬが、これを廢

止するといふことは無理なことだらうと想ふ。夏に限らず學生をして何の懸念もなく遊ぶシーズンを作つて遣つてよからうと思ふ。私の考へから言へば、實際論として暑中休暇の三月はやゝ永過ぎるの感があるから、其前段を短縮してこれを春夏秋冬に振り當てたらよからう。前に言つたやうに何でも彼でも學校で詰込まねばならぬといふ根本誤謬を除いて、如何に學ぶべきかといふ道を敎へるだけに止めたならばそれ位の餘裕は當然出て來るであらうと思ふ。何でも詰込まうとする結果は學生が書物といふものに對して壓迫を感じるやうになる。趣味を有つて書物を讀む樣にさへして置けば、學校では單に其道を敎へるだけでも終生書物を讀むことになつて一生學問を勉强することが出來るけれども、今のやうでは書物を厭がつて學校を出ると最早書物を讀まなくなつて了ふ弊がある。私はこの弊風を除いてもつと學生の負擔を輕くし、冬期夏期の休暇ばかりでなく、氣候のよい春秋にも一二週間の休暇を與へて學生をして何の拘束せられる所もなく自由に遊ぶ天地を作つて遣りたいと思ふのである。

△短縮論は兎も角癈止論は非

文部次官　福原鐐二郎

暑中休暇の廢止といふことは今日のところでは問題にならない。或は短縮といふことになればいくらか問題になるかも知れないが、八月一月ぐらゐは仕方があるまい。一體今日の學校は遣り過ぎて居る。毎日〳〵幾時間も先生が講義をし、生徒がこれを聞いて居るといふのでは面白くない。自習し研究して其結果を質問應答するといふ風にしなければならないのである。

であるから休業すると言つても、何も其間を休んで了ふ爲めではない。其間を利用して學生が平素研究して居る以外のものを研究し或は旅行をし、或は水泳をし、敎師も其間に旅行研究を續けてお互に見聞したところを授業が始つてから更に勉强するといふ風にしたいものだと思ふ。今日の暑中休暇といふものは暑いから勉强が出來ぬといふではない。遣れば出來る。然しながら學校でも何でも餘り續いて遣つて居ると厭やになるから時に休暇といふものはあつてよいのである。が、其間は全然休止するといふ意味ではない。違つた能力を動かせるといふ意味で平素の課業を休むだけである。平素の課業を休んで自由な潑溂な日子を與へて淸新の力を養はせ、秋風の立ち初める頃になつて折角休養した力で大いに勉强するといふことは、だら〳〵と休みなしに遣つて居るよりはよからうと思ふ。行政整理の結果官吏の暑中休暇を廢せよといふ說もあるが、學校も同じことで何うもこれは休まなくてはいかぬやうだ。極端に言へば日曜一日でも休むといふことは非常な助けになる。六日の間思ひ切り働いて一日休む。其休んで居る間も學校では得られない智見を廣め身體を丈夫にするやうにすれば、其得るところの利益は必ずしも少くはなか

らう。

特に今の中學以上の學校では家庭から直接通學して居る者は至つて少ない。この意味から言つても一年に一度や二度は父母兄弟相集つて所謂家庭の團欒の樂しみをするといふのは極めて有益なことである。でなければ成業の曉まで父母子弟相集るといふ機會がないことになる。父兄にしては子弟の顔も見たからうし、又何ういふ生活をして居るかと案ぜられるだらうし、又子弟にしても偶には親に會ひ兄弟に會つて親しく話をする機會も欲しからう。これは社會的に大た意味のあることで、謂はゞ教育の一種である。

こんな譯であるから休暇の間は必ずしも勉强する必要はない。旅をしたり水泳の練習を遣つたり或は家庭にあつて色々の經驗をしたりすればそれでよいのである。啻大學高等學校の休暇が永過ぎはしないか、これは問題である。それならば幾日を適當とするか、今のところではそれも解らぬ。小學校は兎も角中學以上の學校では一月の休暇は先づ已むを得ないであらう。專門の學校の休暇が稍永過ぎるといふならば其短縮論には一考の價値があらうと思ふけれど廢止論に至つては問題にならない。

△夏期授業論

成蹊實務學校長　中村春二

勞せずして功を收めんと希ひ、難に遇つてはひたすら避けんとつとむる卑屈な現代の人心から考へると、僅かに百度に到らぬ暑氣も猛虎より恐るべく、消極的衛生を衛生の全部と考へ、身體の物質的半面ばかりを知つてゐる所謂醫家に取つては、夏の授業は大禁物であらう。而も吾人の心は左程卑屈でもなく、吾人の身體は左程弱いものでもない以上は、少年老い易し一寸の光陰も空費すべきものではあるまい。

そもそも暑中休暇といふものは外國の眞似て、社會上の諸機關が凡て休止せざる限り、日本あたり温帶の國では暑中休暇の必要がない。否他日の奮闘の準備を整へる學生時代にあつては、大に暑氣の壓迫を利用して困難に堪へる確固たる氣象を養はなければならぬ。

それ故余が設立の學校にあつては暑中休暇を置かないのであるが、何故暑中授業をなすかとの質問をしば〳〵受けるが、その時余は言下に反問していふには、「諸賢は生徒に唯知らしめて滿足せらるゝか、知らずとも行ひ得ざるに於ては何の效もない。諸賢は何によつてこの實行の力を與ふるか」と。今の教育家は教室にて知らせさへすればそれですむと思つてゐる。それゆゑ眞に腑甲斐ない學生ばかり出來上るのである。現今の教育は知らする點に於ては到れり盡くせりといふを得るが、その目的に向つて直進しうる力は少しも與へないのである。この力は何に依つて與へらるべきかといふに、種々な精神上の壓迫に打克ち打克ち得て漸次に養成せらるゝのである。然るに父兄の保護に浴せる學生にはこの精神上の壓迫は殆んどなく、隨つてこの邁進力の養成の機會なしといつていゝ。

この意味で余は外界の刺激を尊重しこれに依つてこの力の養成を計らうと思ふのである。この理由からして夏の炎暑及び冬の祁寒は教育上人に悦び歡迎すべき刺戟といつてよい。それゆゑ暑中休暇廢止如何は問題とならず。暑中如何に授業しこの好個の刺擊に對し十分なる效果を收めうべきかを研究しなければならぬ。然るに現今の有識者はこの點に思ひかけず、廢止如何に就て相論議してゐる。外國の例をその儘眞似て淡然暑中休暇を株守してゐた時からみれば、廢止問題を云々するは一進歩と認めてもよいが、更に竿頭歩をすゝめて、暑中授業の方法の研究に突入しなければならない。

夏期授業に就て反對論者の多く主張するところは、健康の點である。そして實行しない懸念からの空論でなければ、不用意に實行した結果から云つてゐる。

余は自分の經驗から敢へて云ふが、方法次第で夏期授業は衛生上は勿論智育德育凡ての點に於て他の季に優る大なる獲物があるのである。

實に暑中休暇の是非などは論ずべき問題ではない。今人があつて火は是か非か、水は是か非かといふ様な問題を論じてゐたらどうか。皆々はその愚を笑ふであらう。何となれば物質を變化せしむる必要がある以上、火をば適當に用ふるといふ事が大切である。水の場合もその通り、いかに水を利用すべきかといふ事が大切な問題である。學生は修業時代である。云ひかへれば奮闘の基礎作成時代であるとすれば、空費すべき一刻の時も惜しいのである。それゆゑこの時間をいかに用ふべきかといふ事が問題であらねばならぬ。暑い一ヶ月（小學）二ヶ月（中學）三ヶ月（高等專門校）間を學生の放縱に任かしておくといふ事は教育者の態度として不誠實至極と云つていゝ。

若しそれ教師が先づ暑氣に恐れて自己の安逸を希ふ様な薄志であるならばすべからく教鞭を捨つべしである。或る人は暑中休暇は生徒の主張でなく教師の主張であると云はれたが、現今の所謂教員氣質をよく表はした詞である。こんな教師で教育が徹底すると思ふのは大間違ひである教育の不徹底の一大原因は教師の意氣の貧弱の點にあると思ふ。

勇往邁進の氣象は幼年の時から養成せねば成人後では到底望ない。それゆゑ鍛錬的行爲は幼時より行はなければ、長じて後には只苦痛のみ多く、得るところは極めて少ないのである。外界の刺激としても精神上の壓迫はこれに對抗すること容易ではないが。肉體上の壓迫である寒暑などは氣象さへ僅かに置きさへすれば極めて容易に擊退し得るのである。この容易なる身體上の壓迫を擊退し得ない位でどうして精神上の壓迫を擊退し端然として坐し欣々として突進むやうな境地に到り得やう。

余が學校に於て生徒の氣を緊張せしめる時期が兩度ある。暑中と寒中である。夏の課業は炎暑の苦痛がある、家を出る時、今日も九十度を超すべきかといふ場合、一寸通學を厭ふの情が起る。この際暑氣何物ぞと意を決して飛出し、殊更綿入の冬支度にて正午半時炎暑と戰ひ一日の所課をすませて晩涼に浴する時、云ひ知れぬ勝利の諦を感得するのである。その時の感は避暑や温泉地で決して味ひえられぬもの、汗の結んだ果實

は彼の遊惰放恣の快適と比して雲泥の差がある。彼は死しこれは生きてある。彼は人生の旅路を妨げ、これは人生の旅路に力を供給するのである。かくて數多き刺激に對して師の指導庇護の下に同輩相共に炎暑に打克つ時、おのづから意氣の緊張するとは當然の事である。又嚴冬の二ケ月毎朝筑波颪に曝され乍ら卅分間の裸體端坐も畢竟まけじ魂養成の爲めに他ならぬ。この消息に通ぜざる士は耳語して曰く、裸體を以て學校の看板とすと。余は識者にしてかゝる輕薄なる言を敢てする現代を呪ひたい。肌を裂くべき零點以下數度の寒氣に裸體を以て向ふとき、附燒刃にては到底堪へえない。一念發起峻烈なる氣象を振起して寒冷と戰はなればならぬ。學校の看板などの考で到底能ふべきでない。眞摯の氣の凝るところ炎暑も襲ふなく嚴寒も犯し得ない。而してこの凝念こそ學道修業の基本ともなるものである。

暑しとて避け寒むしとて煖爐を擁く諸君は、何によりて有爲の學生に勇往邁進の力を與へんとはする。教育家の仕事は凡て教室にて實現し得るとの誤想は總て今日の如き不徹底の教育の結果を生みだしたのである

余は前述の如く暑中休暇は問題とするの價値がない、研究すべきは如何に暑中授業をなすべきかといふ事であると信ずるから、余が數年來行へる暑中授業の要點を左に記して參考としやう。(委しき記事は本校出版の「第三夏の學校」にて見られたし)

時期——七月廿日から九月十五日迄を夏期授業とす。

授業時間と學科の配當——午前七時から午後五時迄在校の事とす。これは午後一二時に歸宅すると、家に歸りてより間食をなし、暑氣の爲め、途中氷水を飲む機會多ければ、歸宅後直に夕飯となるやうに五時迄在校せしめる。

學科は平素より時間を減じ、學科日々三時間乃至四時間に止め、作業農業等の勞作を多く課し午後は二時間乃至三時間勞働せしむ。

特殊の仕事

イ、午前零時半から一時迄暑き最中、各自綿入を着、冬仕度にて端坐凝念寒氣と對抗せしむ。

ロ、徹夜會、裸體々操、夜行遠足、テント旅行、開墾等の鍛錬的仕事を課せしめ、師弟の教室外にて接觸する機會を多からしめた事。

訓育上特に注意する點

春秋は主として知らする方面に留意するかはり、夏冬は寒暑の刺戟を利用して實行方面を指導し時間の餘裕ある故專心特に訓育方面に留意する事。

雨天の時間の使ひ方

作業の間に講話をなし、自發自奮の精神を鼓吹する點に重きをおく事。時々各科の合併試驗(各級合併)を行ひて實力試めしをする事。

注意の習慣自治心養成の事

菊や朝顔の手入れをなさしめ、周到なる注意力の養成及び種々なる命令を下し、これを遵奉するや否やを調べて服從の精神と自治心養成の實地指導をする事。

▲夏期授業の結果

一、自發自奮の精神を著しく强め得た。

二、困難に堪ふる習慣を養ひ得た。

三、師弟間の親密を期し得た。

四、皮膚を强め抵抗力を增し身體の健康の度を著しく增し得た。暑中二三度病床に臥し又は下痢の習慣のあつたのを打破し得た。

五、一箇月乃至一箇月半の硏學の中絕なき爲め九月の學期初めの苦痛なく一般學生の未だ氣乘せざる九月の末より硏學の快さを强く感ずるに至つた。

六、在校時間一日十時間もある故、學術劣等生には學科の上に特別に指導の時間を得、之に反して學術優等にして身體虛弱の者には體育上の指導を取り得、個人主義の學生に對して作業上の事實よりして戒飾の結果を擧げ得たこともある。

七、歸宅は六時乃至七時で、朝は五時頃は必ず起床しなければならず、その上學校にては種々の勞作を課するゆゑ、身體疲勞し歸宅するや直に食事し、食後雜談の後就寢を何よりの樂しみと感ずるやうになつた、それゆゑ外出して種々誘惑に接するの機會を減じた。

一言に約めて云へば今の學校敎育に於ての欠陷を夏期授業に於て充實補足し得るのである。この樣な好機會をわざ〳〵避けるのは敎師が自己の安逸を希ふ爲めと余は斷言するを憚らぬ。

以上列記の結果は實行しない者に對しては種々の疑を起すであらう。敎育家諸賢は徒らに頭腦の判斷を避けて先づ自ら暑中の授業を實行しなければならぬ。自ら行はずしては是非を論ずる資格はない。諸賢が御役目的に講習會に出席して不徹底なる講師の講義に睡魔と戰ふ事より推して暑中授業を觀察判斷する事は以ての外である。彼と是とは雲泥の差がある。彼の草樹萠え金石とろくるの時流汗淋漓として鍬を取り教を聽く時、心頭一たび定まれば炎暑散じ淸泉しきりに胸中におどるを感ず。茫然として夢醒の間に炎暑をかこつと同一の論ではない。予は此邊の消息を委しく記すの餘裕がない。敎育者諸君、講習會に赴く足避暑地に赴く足をして諸賢が家たる、學校に向かはしめよ。生活の對手たる兒童に向はしめよ。愛する生徒と共にこの炎暑と戰ふの時諸賢は豫期しなかつた種々の共鳴を感ずるであらう。

意氣地なき敎育に呪はれた現今の小中學生は夏期の暑に驚き恐るゝであらう。されば今夏先づ有志の者を招いて諸賢は相共に炎暑と戰ひたまへ。一級廿名を數へればこれ理想的である、更に小數なればいよ〳〵よろしい、この小閑と共に失はれた敎育の意義精神を再現させなければならぬ。これ諸賢にあつては重大な問題で、夏期はこの重大問題解決の好時期なのである。

附記。右は敎師へ對しての言である。學生へ對し學生の父兄へ對しては、現今の學校は只智育のみに傾いて居り、それが爲め學生は知り乍ら行ひ得ない傾向を以て居るゆゑ、この夏期休業を利

用して、力ある人となるが爲め、なるべく餘裕のない何等かの仕事に從事することをおすゝめする。即ち米國の學生のやうに、中學生以上のものは商店に見習として働いたり、小兒であればなるべく相當な忙しい仕事を與へるのである。これが最良の鍛夏法で、以て學校教育の欠陷を補ひ眞の人となる基礎の一部をつくるであらう。

△學校以外の知識を養へ

慶應義塾々長　鎌田榮吉

學生の夏期休業といふものは、學生が平常學校で研究するところの以外のものを研究し、所謂一般に社會的智識を養ふに最もよい機會である。平常の學校生活から遁れて自由に或は旅行をしたり或は水泳をしたり自分の好むところに從つて體育と同時に智育を發ふことが出來る。この學校でも夏期には特に水泳部を設けて遣らして居るが、それは一部の學生にとゞまつて一般に亙らない怨みがあるけれども、それ〳〵何かしら自分の好むところを遣つて居れば其間に知らず〳〵智識をも養ふことが出來る。期間も今のところ今日のやうで、果して永過ぎるといふ程でもなからう。此學校でも二月程は休むがそれ位の休みは當り前かと思ふ。別に今問題とする程のことでもなからう。

△暑中休暇改良論

女子大學校長　成瀬仁藏

一年中の休養を一纏にして夏期二ケ月にしておくなどいふことは身體の組織から見て合理的ではない。日々の生活に活動、休養、瞑想等の時間が適度に必要なのであつて、働く時には少しも遊ぶこと、即ち運動も體操も、修養もせずにゐて、遊ぶ時には二ケ月の間一度に遊ぶといふやうな傾きになつてゐるが、これは健康の上から觀ても、修養の上から觀ても、又時間的に考へても、いづれにしても不經濟な遣り方だと思ふ。

であるから、これは改良をする必要があるのであるが、それならば、學生の暑中休暇といふものが不必要であるかといへばさうではない。否寧ろ今日のやうな狀態では、學生に夏期休業を與へるといふことは實に巳むを得ない事だらうと思ふ。今日の學生は殆ど十分に眠つてゐない。其他の生活に於ても非常に不平均を來してをる。であるから此制度を改め內容を改善して、總ての生活を平均することが出來さへすれば、二月の休みは取らぬでもよい事になるかと思ふのであるが、何しろ今日のやうな狀態では巳むを得ず休暇を與へる必要があらうと思ふ。それで私の方では每年生徒々輕井澤の方へ遣るが、此處は暑さに苦しめられることがないから、仕事が非常に有功に出來る。今一般にさういふ地に轉じて仕事を爲ることにすれば、夏期二ケ月間に一學期間の仕事を爲る事が出來

て、一年を四期に用ふることが出來る譯である。生活費も此方と同じ位であるから、特に男子ならば天幕生活をするやうにでもすれば東京よりも安く附くかも知れない。さういふ事になれば今迄は一年の四分の三を利用してゐたのが、四分の一だけ儲かることになる。大體日本の暑中休暇といふものは熱いから仕事をせぬとか、學生が受業に堪へぬとかいふ意味のものではない。只仕事を變へるといふだけの事である。況して二ケ月の間といふものは怠けて遊んでよいと思ふなどは甚だしい心得違ひといふものである。

今日我國で夏二月を休んで、それ〳〵避暑地に出掛けるといふやうな事は西洋の眞似をしたのであるが、西洋でも殊に紐育とか市俄古とかいふ處は非常に熱くて仕事が出來ないから避暑をするのであるが、其避暑にしても三ケ月の間を決して遊んで暮すのではない。仕事を變へるのである。勞働をして其間に一年中の學資を作るのもあれば、又實地の取調や演習探檢のやうな事を遣つて、日本の學生のやうに只海岸に行つてブラ〳〵遊んで暮すやうな者は、極めて少數な金持の息子ででも無ければ遣らない。それにそれ程の熱さでも矢張り夏期を一タームとしてゐる。それ位の暑さにでも堪へられぬこともないのだから、日本のやうなこれ位の暑さに若い者が堪へられぬといふ筈がないのである。今後教育の內容を改めて、平常無理な仕事さへせぬやうにすれば、夏の二ケ月を役に立つやうに利用することが出來る。輕井澤や其他の山地に行つて適當な仕事や研究をするがよからう。又仕事を轉換して各自專門々々に應じて探檢に出掛けるもよからう。實地演習に行くもよからう。最初から、學生として其時季々々に爲すべき仕事に力を集中して行くやうにすれば、全體から觀て餘程効力を増すことにならうと思ふのである。只暑中休暇といふものはブラ〳〵して其日々々を送つてゐればよいといふ考へを改めねばならぬ。殊には大磯其他の人の出盛る土地に行つて、面白くない風を作るやうな事は學生の爲めに非常に有害な事である。眞に水泳を練習するならば、餘り人の行かぬ處へ行つて稽古をするといふ風にでもするがよからう、何しろ暑中休暇といふものに對して根本から今迄の考を改めるやうにせねばならぬと思ふのである。

△廢止反對論

安部磯雄

夏期休業と學生との關係に就いて、私は從來から考へて居るのであるが、現在の制度では小學生徒は夏期休業が最も短かく、中學生徒は少しく永く、大學に至つては一層其期間が永い。是はどういふ理由かは知らぬが、實際から云ふならばどれも平等にする方がよい。卽ち何れも夏期休業をもつと永くする方がよいのである。若し不平等にするならば、寧ろ大學が短くつて小學が永い方が良くはないかと思ふ。其の譯は敎師の方から言つても小學校の方が餘程苦しい。小學校では、單に敎へると云

ふのみでなく、取締つて行かねばならぬから大抵の努力では無い。生徒を温順く行儀好くさせる爲めには隨分喧しく云はなければならないし、暑くても扇も使へないと云ふ譯で、それ丈教師の方でも又生徒の方でも苦しい譯である。特に發育に大切な時季であるから、夏の暑い時にも喧しく云うて勉强をさせるのは無理である。思ふ存分に遊ばせて置く方がよい。大抵の家庭では兒童を學校に置く方が面倒がなくてよいと思つて居るであらうが、中には子供の健康の爲めに轉地をさせようと思つて居る者が有つても今日では期間が短くて充分させられぬ憾がある。であるから私は小學校の休みをもう些し永くする方が好いと思ふ。短くすることとには絶對に反對である。

中學、大學と上の方の學校になれば、自分の利害關係から云ふのではないが、學問と云ふものは智識を無暗と詰込む意味ではないのであるから學校を休んで居ても學問を廢して居る譯ではなく、寧ろ色々の方法に於いて學問もし修養もすることが出來るのである。現に今の大學生などは色々の方法で夏を費やして居る。勉强をする者もあらう。或は海に、或は故郷に夫々自由に夏を過ごして居る。

唯玆に一つ考ふ可きことは、大學中學ともに若し夏期休暇を短くするならば、勉强をして勉强の出來ないことはないと云ふ事である。此の點になると小學校よりも容易い。教師は講義をする丈で、取締りとか其の他のことに努力を費す必要がない。現にどんな暑い時でも夏季講習會と云ふ樣なものもあるのであるから、東京にしても地方にしても此位の暑さに堪へて勉强することはさして困難なことでは無い。若し日本に於いて一つ新機軸を出す學校があるならば、一年を三ケ月づゝ四期に別つて、現在多くの大學は其の一期の夏三ケ月を休すんで後の三期を勉强することにして居るのを、四期ともに勉强するのも好からうと思ふ。現に市俄古大學の如きはさうであるから日本に於ても遣つて遣れぬことは無からうと思ふ。即ち夏期休暇を全廢することは實行し得ることであると思ふが、此の市俄古大學の四期制度は贅澤な趣味であつて我が國に於いては其實行は六ケ敷い。即ち學生も教師も一年に三期丈け教へたり教へられたりすればよいので、四年で卒業するものならば十二期やればよい譯である。然るに或學生が晩學の爲めとか何かの理由で三年の間に遣らうと思へば、即ち夏休みを抜きにして一年四期をぶつ通しにやれば三年で卒業が出來ることになるのである。故に學校は年ケ年中遣る譯であるが、教師も矢張一年に三期だけ教へればよい。それを若し都合で暑中休暇を抜きにして一年四期を三年間續いて教へれば次の一年間は其の教師の休養の爲めに自由の日が與へられることになる。其の間も無論俸給は貰へるのであるから、或は外國に行つて遊ぶなり、專心に勉强をするなり思ふ樣に修養が出來る譯である。斯う云ふ風に根本的に遣るならば全廢も大學生には行はれる。唯强制的でなく市俄古の樣にしなければならぬ。暑さも市俄古と東京とでは殆んど違はない。唯玆に注意す可きは米國邊りの大學では今日の日本の樣に授業の時間が多くない。或學校では土曜日曜を休んで、一日に三時間か、精々で四時間、平均三時間、教師

にしても一日一時間か二時間を上らない。斯う云ふ風にするならば學生の負擔も輕ろく反つて自習的に勉强が出來るゝのである。で、夏期休業の全廢もよいが、返す〳〵も强制的であつてはならない。それが出來ねば、仕方が無いから二月半位の休暇は已むを得ないであらう。否寧ろそれの方が結果がよいであらう。可成氣候の好い時に充分勉强をして、暑い時には靜かに休養をする方が體の爲めにも又學問の爲めにも好からうと思ふ。

△夏期休業最高の利用

法學博士 農學博士 新渡戸稻造

私は夏期休業は何うしてもなくてはならんと思ふ。休みの間に碌な事を覺えない、學年中に覺えた事は皆忘れて了ふ、故に之を廢するに如かず、といふ議論は、一應尤もな事である。或は父兄で覿面此休業の害を感じた人も澤山あらう。然るに此議論は恐らく實際弊害の多い事を感じて起る議論ではなくて、只我が國民の心理的の癖ともいふべき、何でも物を消極的に見る所ろより起る議論であると思ふ『小人閑居すれば不善をなす』といふ一言を捉へて、閑居は害であると論ずるのは、要するに人を擧げて小人と見做しての話で、人を君子視して居らぬ。人の短所のみに重きを置いて、人を見れば直ちに小人なりと言つた議論である。もつと普通なる言葉で之を言ひ換へて見れば『暇あればカサかく』と云ふのである。勿論暇があれは不善をなし、カサもかく者も少くない。これ閑居其物が惡いのでなくて、閑居の利用法を知らぬからである。或は暇を利用したならば、最早や暇でないといふ議論もあらう。我輩のこゝでいふ暇とは――閑時とは强制的になすべき業務以外の事を暇と言ふのである。學生であれば日課のない時を暇といふ。官吏であれば職務以外の時を暇といふ。音樂學校の學生にあらざる以上は音樂でも學ぶ時は暇の時の利用といふ。然るに所謂課業以外の時は、學生の生活に於て甚だ少ないのである。外國の例を以て直ちに我國の例を判斷するの不可ぬ事は萬々承知であるが、然し外國人も日本人も同じく人間だといふ以上は、暇さへあればカサかくのは、日本人ばかりであると、我れ自身に卑下し、見縊る事は判斷の最も酷なるものと思ふ。而かも口癖に我國は君子國と言つて居る。國は君子國で其住民は悉く小人であるか。左程に謙遜するの要はあるまい。若し小人は閑居して不善をなす者ならば、君子は閑居して善をなす者であらう。然るに其閑居する機會が、君子國に最も少いと云ふ事は甚だ惜むべきである。外國の教育家が日本に來て最も驚くのは詰込み時間の多い事である。大學生等は、米國は殊更ら此點については遣方が違ふから、我國と比すれば兩極端を列擧するの感があるが、米國の大學では講義は一週間に八時間十時間位の所もある。二十時間といふはやゝ多い方である。日本の大學は三十時間を超へない事はない。然らば大學生は卒業して日本のものは米國に比して智識が倍

もあるかと訊せば、少くとも多い事はない。又學んだる智識を活用する力に於ては恐らく半分も及ばぬかとも思ふのである。我々はノートを取る事に精力を使ひ盡して世の中へ出た時には精力の精髓は消耗されて居るやうな形がある。其代り卒業した翌日役人にして或は役に立つ事があるかも知れない。然し之は役人と一定して、やゝ大學の出張所見たいな官衙に行けばの事であるが、少しく新らしい境遇に利用すれば、恐らく米國の大學卒業生に比して、理屈に於ては、或は本の書目だとか、學者の說を列べる事は上手か知らんが、事務を所理したり事業を計劃する點に於ては遙かに劣るものと思ふ。此事が夏の休業とどれ程の關係があるかといふに、斯の如き詰込みの、ノートを取る丈けの敎育を受けて居る學生、之れは大學に限らず中學校に於ても其弊がある。此等の人には餘裕が出來ない。從つて彼等のイニシエチーブの發揚の機會は全然なくなる。僅か休業間に人らしい生活をするのである。日本の青年は學年間は器械となつて、夏の間丈け人間となつて居るのである。故に夏の休業を廢すれば全然器械化する事になる。

然らば休業を益ありと論ずる者は無論休業を善用するといふ前提の下にいふのである。善用するといふ事は身體なり或は精神なりの休養及び修養に資するの意に外ならぬので、それには自ら休業を如何にして且つ如何なる處で費すかといふ問題によつて定るのである。甚だ遺憾ながら避暑地には怪しげなる、いかゞはしい處が段々殖えて居る。偏僻にして質朴で、學生が休みを送るに最も適すと思つた處も、數年經つ中には誘惑の途を新たに開くことは我等も屢々目擊して居る。即ち此等が休業廢止論者の根據となるのであるが、然るに斯くの如き場所を避けて、然らざる處を選んで進めばよいのである。進むといふよりは寧ろ退くとの言葉が一層適當であるかも知れない。別に山深く退くのである。ウエルス氏が未來の理想社會を描いた中に高等なる職務に就く者は、即ち所謂自由業の人＝官吏、敎育家、或は高等なる實業家の如きの類は必ず一年に何週間かを期して全く獨りで山に踏み入り、其期限間に要する食物は自ら運んで行つて、炊焚も己れに爲し、一時の小屋掛けも自ら手に斧を揮つて之を造り、只一卷の書物も携帶する事を許さない。途中でよし人に逢うても言葉を交ふる事をも許さない。毎年斯く閑居する事を條件としてあげて居るが、これぞ實に重んずべき思想である。僕は豫て口にも言ひ、筆にも書き、人類は社會的動物であるから、可成人に接して社會を離れぬやうに、所謂ソシアリチー(社會的性質)を發揮する事を主張すると同時に、折々世を去つて超然の思想を養ふの必要をも幾分か自分にも行ひ人にも勸めて居るが、ウエルス氏の書物を讀んで一層此感を深くした。休業の最高の利用は即ち此處であると思ふ。此心を以て觀たならば夏の休業の如きは缺くべからざるものでなからうか。然るにそれは議論及び希望にして實際は之に遠かると斷ずる人もあらう。少しく話が極端になるかも知れぬが、百人の中九十九人惡用するものがあり、只一人今述べたる意味に於て善用する者があつたならば、それでも休業の利益があるものと思ふ。而して勿論之は極端な議論である。實際に於ては濫用する恐ある九十九人も指導したならば不善を爲して休業を費す者は甚だ少いものでなからうか。我等實際學生に接して休業をして歸つた學生の墮落の徵候を土產にする者は甚だ少い、身心共に何か一種のものを獲得して歸つた者が多いやうに見受けた。時には學期中敎場で得たより以上のものを得しにあらざるやと思ふ事も決して少くなかつたのである。

高濱虚子著 中村不折畫 （定價壹圓拾錢 郵税十二錢）

小説 柿二つ

批評抄

（東京日日）著者獨特の寫生文致は殆ど理想に近く洗錬されて情韻兩つながら紙表に充つ。

（東京朝日）故子規居士を主題とせし寫生小説として本朝日新聞紙上に於て世人の眼を欹てしめし作品なること今更言ふまでもなし。

（國民新聞）著者が我文章の道に於ける努力と貢獻は眞に特筆すべきものであるが此作に於ても其抱負は遺憾なく體現されて居る。

◉蘆花 徳富健次郎著 （定價壹圓廿錢 郵税拾貳錢）

小説 黒い眼と茶色の目

第十七版

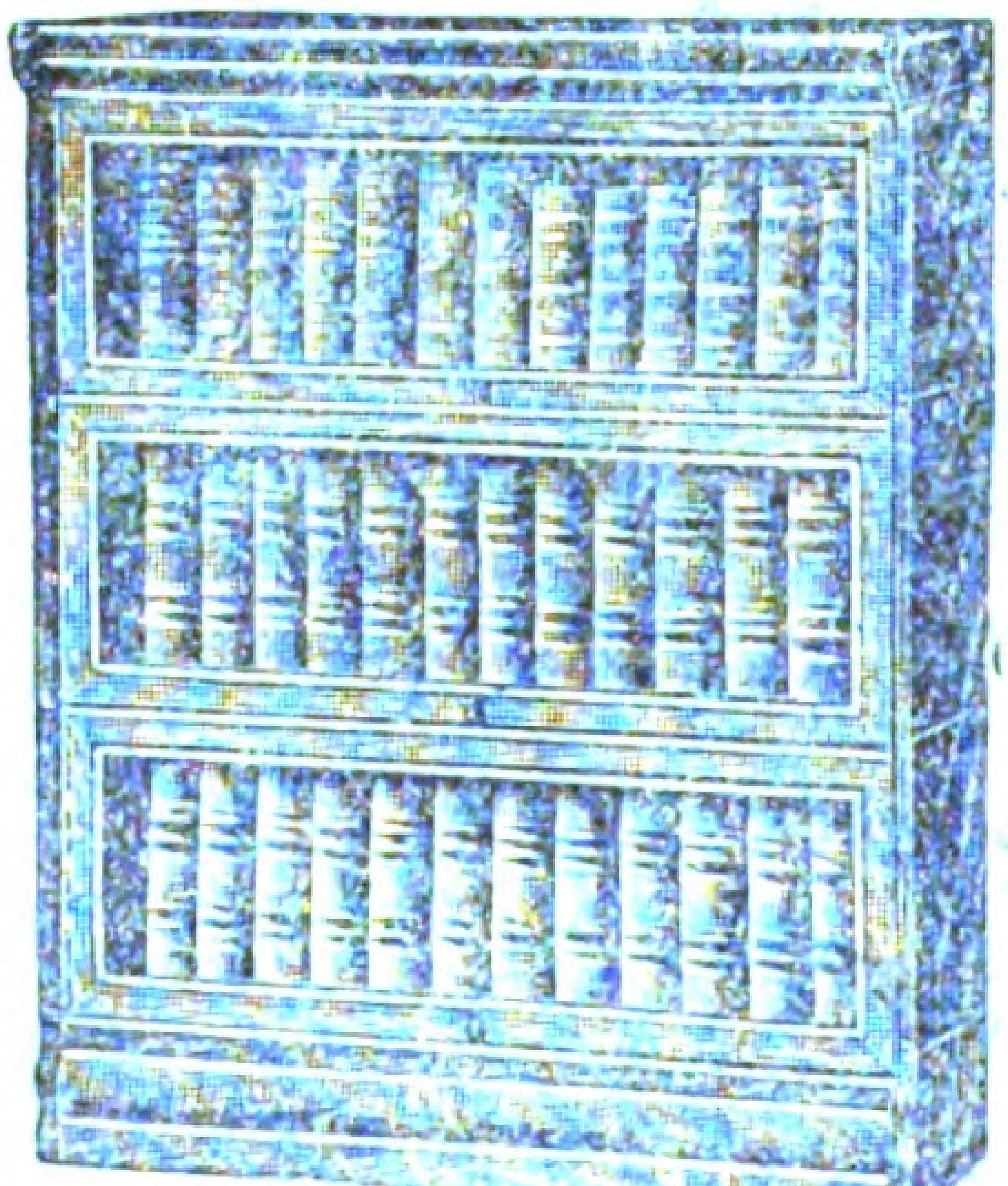
十九の夏から二十の冬まで著者青春の生活を如實に現出す。夢の如く起り而して著者の半生に大打撃を與へた初戀の挿話が大部分を占む。懺悔の一片また「新思出の記」の一部。從來さまざまの形を以て著者を愛しくれた四圍四周の生命に對しこれ迄の水臭い態度をよして更に露骨に而して深刻に愛を酬ひたい心から著者は新しい企畫の手始めに先づ此れを書いた『著者白』

◉蘆花 徳富健次郎著

訂正縮刷 みゝずのたはこと

五十七版

みゝずのたはことは、著者が過る六年間田舍に引込み、みゝずの眞似して土ほじくりする間に、折にふれて吐き出したるたは言共をかき集めたるものなり。其内容には。村落生活の卽興寫生あり、鍬とるひまの偶感偶想あり、短篇小説あり、日記の斷片あり、長短の手紙あり、稀に村より這ひ出してのろ／＼と旅しまわりたる紀行あり。著者居村の風物を撮影したる印畫數葉を挿みて、趣を助く。



組合せ本箱

▲某宮家大隈伯爵家を始め其他の諸名家より御注文の榮を辱ふせる本箱!!

▲多數の優れたる特徴を有し現時歐米諸國に大流行を極め居れる本箱!!

▲構造並に其價格を示せる目録……往復ハガキにて御申越次第呈す

無代進呈 圖書分類目録

東京市内に於ける代表的出版業者代表的出版圖書分類目録無代進呈す御希望の方は郵送料二錢封入御申越あれ

發賣元 新橋堂

東京市銀座通新橋際 電話新橋一九九一番（振替東京二〇〇〇番）

（中付一の一）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

最新刊

小島烏水先生新著

日本アルプス

第四巻

近代稀有の名著として、毎巻知識ある階級の愛讀と歡迎を受けたる本書は、本年亦第四巻の新作を美裝して世に出すに至れり、日本アルプスは著者が地理上に、文藝上に或は發見し、或は開拓したる、別天地新領土にして太古ながらの秘密境は本書に依りて今や普ねく天下に紹介され俄かに登山の氣風と山岳研究の勃興を見るに至れり。

第四巻日本アルプスに對する最新の事實と知識とを供給し、記述は明快にして深奥なる大山岳の骨髓まで透徹せり、日本アルプスの都市、深谷、危峰、火山、氷雪、森林、高山、植物等は、文藝、美術、及學術の三方面より、精刻緻密に解剖せられ、豐麗豪奢に描寫せられ日本アルプスの無盡藏なる大繪巻物を展開する如く、山光水色紙上に滿つるを覺ゆべし。

第四巻 裝釘繪畫寫眞

織田一磨先生書(表紙、木版、扉紙、石版十數度密畫色刷)

中澤弘光先生書(表、裏、見返シ二枚極彩色木版十數度刷)

丸山晩霞先生書(挿畫三色版數葉)

茨木猪之吉氏書

日本山岳會員諸氏の撮影に係る高山深谷の奇巧を極めたる寫眞を精巧なるコロタイプ版及網版にして十數葉を挿入し、明細なる探檢地圖や珍奇なる古代繪本の復寫を添へ、外に小木版數個を本文にも挿入し製本は例に依り善美を極盡せり。

第一巻再版成

表紙繪(織田一磨)扉繪(丸山晩霞、小杉未醒)

挿繪(大下藤次郎、茨木猪之吉)コロタイプ寫眞版數十葉挿入

論文 山岳描寫の藝術、ラスキンの山岳論、富士山保護論、溪谷の水。自然と作家等

紀行文 縱斷記十八篇を收む、本巻に挿入せる 日高南アルプス白峰山脈

白峰赤石山脈地圖 高頭式氏作は今回再版に際して

改正新圖 を作製したる者にして現在の地圖中最新最密同山脈探檢家に最便利なるものなり

第二巻再版成

表紙繪(中澤弘光)見返し(中澤弘光)扉(杉浦非水)

繪(中澤弘光)挿繪(大下藤次郎、茨木猪之吉、中村清太郎)コロタイプ木版寫眞亞鉛凸版數十葉挿入

創作 は富士裾野八篇、日本北アルプス槍ケ岳山脈及び立山々脈

紀行八篇

論文 は日本アルプス風景論、山岳紀行文の趣味、信州と風景畫トルストイと冬の自然、新綠の富士裾野外數篇

(本巻附圖)信濃飛驒境上の日本アルプス(高野鷹藏印畫)コロタイプ版八切三枚續きの珍品

第三巻再版成

表紙繪(橋本邦助)見返し(武井眞澄)扉繪(茨木猪之吉中村清太郎)挿畫(森田恒友)コロタイプ木版寫眞網版數十挿入

論文 日本アルプス探檢地理、山岳の氷雪飛驒山脈の類似氷河や、其遺跡や、萬年雪に就て最新の評論を以て充たされたり

創作 飛驒山脈最大最高の花崗岩塊奥穗高岳、明神岳澗澤岳、大喰岳より槍ケ岳まで山頂を縱斷し蒲田谷に下り噴烟中の活火山燒岳を越へ再び新登路より南方穗高岳に登り下宮川谷に下るまでの紀行文にして碧空、雲霧、峽谷、岩壁、森林、水色、高山の動植物を精細縱横に描寫せり

毎巻讀切各巻菊判三百餘頁金縁附函入美術的裝釘

定價各金貳圓

郵税各十六錢

發兌元 東京市京橋區中橋廣小路六番地 振替東京四一〇九 電話京橋三七七 前川文榮閣

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

無代進呈

■新しき自然と人生を理解し省察し其處に旅行の趣味を共鳴し「生の福音」を求めんと欲せる者は讀め！

吉江孤雁氏著　新刊

紀行文集　縮刷　旅路

自然描寫に就ては現代文壇の第一人者たる吉江孤雁先生の旅行記中最も傑作として推奨さるゝもの及び著者會心の作を自撰せるものなり。

透明爽快なる感味と清新にして明るい強い感觸を以て居る著者が獨得の流暢爽快なる筆致は旅の詩趣を透して此の全集に充溢して居る。

■野口柾夫氏装幀　瀟洒ポケット型　函入美本　全一冊

■定價金壹圓拾錢　■郵稅金八錢

「三百名を限り『旅路』を直接に注文せる者に『近代評傳叢書』1、ストリンドベルヒ2、ドストエフスキーの内一部を進呈す。（但し中央公論讀者と明記の事）」

新刊

早稻田大學教授武信由太郎先生閲　矢口達先生譯　中倉治先生註

英和對譯　小泉八雲文抄

ハーン先生の文集中より幽玄微妙なる諸種の物語を抜き流暢なる譯文と懇切なる譯註を附し興味の間に語學の力を得せしめんことを圖りたるもの、夏季の讀み物として清新恰當の新著なりと評せらる。

■野口柾夫装幀■　新案譯文別刷　中判上製全一冊

■定價金六拾五錢　■郵稅金六錢

（中付一の三）

發行所　東京神田區表神保町　電話本局一七六五番　振替東京四一二三番　中興館

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

青春男女の必讀書

近來續出の類書中最傑出せる一大快著

花柳病專門羽太醫院長 ドクトル、メヂチーネ 羽太鋭治先生
眞泉病院前外科部長 醫學士 頓宮寛先生
順天堂病院婦人科 ドクトル、メヂチーネ 近江湖雄三先生
日本橋病院副院長 ドクトル、メヂチーネ 松尾峯太郎先生
共著

男女 生殖器病の研究と賣春論

■ポケット形總クロース模樣入頗美本紙數五百五十頁
原色版及密書數十個入新意匠體裁優雅●定價金貳圓 特價金壹圓卅錢 密封送料金八錢■

生殖器に關する著書多しと雖多くは二三成書を基礎とせる粗雜の編纂物にして遺憾此上なし本書は知名の臨床家たる四先生が各其專門の部面を分擔執筆せられたる本邦未曾有の完全嶄新なる著述にして從來の類書の比に非ず特に**花柳病泌尿生殖器病の療法及豫防法、姙娠論避姙法**に至ては精緻正確他に比類なく其他男女生殖器の解剖、手淫障害、陰萎、精液缺乏、早漏、遺精、夢精、發育不全、神經衰弱、性慾論、性慾と戀愛、性慾と結婚、早婚と晩婚の害、交接器の構造變化、不姙症、人工姙娠、人工流產、姙婦の攝生、坐產と臥產、其他婦人病一切等悉く網羅して餘蘊なし加ふるに文章通俗平易全文總ふり假名を附し一々實物挿繪を指適して說明したれば一讀快を叫び卷を措く能はざらしむ產婆看護婦は勿論一般男女の必讀書たり從來斯病の難治に失望せる者と雖本書を一讀せば豁然大悟一大光明に接するを得ん裝幀優雅電車汽車乘人稠座の間にても繙讀し得べく最も苦心したるものなり乞ふ一讀を

健康と子孫の繁榮を望むの士は速に一本を購へ

（中付一の四）

東京市神田區西小川町二ノ三 **竹內出版部** 電話本局五四四〇番 振替口座東京三九三四番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絕す



A辯護士の取扱ひたる犯罪ロマンス（三）

松崎天民

少壯辯護士A君が、過去八年間に取扱ふた事件の中には、同情すべき憫れな罪人が澤山あつた。彼等の多くは、國の定めた法律の下に罪せられて、黒い牢獄に赤い囚衣の人となつた。現に各所の監獄に繋がれて、日夜を汗の苦役に從つて居る男女も、四五人を數えるほど有る。彼等が世に印した過去の足迹には、暗い罪の陰影が、物凄いほど色濃く漾つて居る。罪惡そのものは憎むべく、憤るべく、戰慄すべきであつても、罪を犯した人々の心情には、人しれぬ熱い涙があらう。私は其の苦しい悲しい痛ましい涙の滴りから、人生の一面を掬はうとするものである。

毒殺事件の後

瀧田樗蔭兄へ

瀧田樗蔭兄、昨日、中央公論社の方へ電話を掛けましたら、社長の麻田さんが電話口へ出られて、「瀧田君は、毎日の樣に、國技館へ通勤して居ますよ」と申されました。其の日は何でも、「兩國」が勝つて、「栃木山」が負けた日であつたと思ひますが、相變らずの角力見物で、定めてお疲れになつたことでせう。

しと／＼と降る春雨の夜、赤坂の待合「永樂」の二階で、辯護士と三人で高興を

盡した以來、生憎とお目にかゝる機會がありませんでした。貴兄はお子供達の御病氣やら、日夜の車上奔走やらで、いろ〳〵とお多忙しかつたでせうが、私の身の上にも相應の變化がありました。それは半ヶ年の浪人生活に、一先づ一段落を着けて、再び新聞記者生活に入つた事と、何時ぞやお話した「戀の女」を娶つた事と、私にとつては輕からぬ出來事でありました。

そんな次第で、毎月、日を期して、A辯護士と三人で會食する豫定は、「永樂」の一夜だけで、其の後は實行する機會がなく、今月も亦、原稿締切の日が迫りました。A辯護士には、明後日から梅雨だといふ雨の一夜、麹町の宅で會して、先月號に豫告した「△△△△△△」の談話を、詳しく聽いて歸りました。そして今度は、何んな標題を附けたら宜いかと、今まで三四日間と云ふものは、標題一つに就いて、いろ〳〵と苦心して居ましたが、やつとのことで「毒殺事件の後」と題する事に極めました。

標題だけは極りましたが、次に困つたのは、事實の内容を其の儘に、欺らず飾らず發表する事が出來ない事情の有る一事です。それは事件に關係した當面の人々が、幸福らしい顏をして生活して居る今日、事件の場所と姓名と事實とを、明ら樣に細叙しますと、それ等の人達が、到底、今日までの幸福な月日を、平然として送ることが出來なくなるからです。事件に關係した人達の中には、地方裁判所の檢事も居りますし、地方の金滿家も居ますし、××局長の職に在る人も居ますし、金持の妻と云ふ事を唯一の誇とする婦人も居ます。私の興味と私の使命から云ひますと、たとへそれ等の人達から怨まれても、事件の眞相全部を發表したいのですが、平地に波瀾を起して、折角無事に納つて居る秘密を公にして、戰慄すべき犯罪の眞相を摘くのも氣の毒ですから、暫く變名を使つて、遠慮する事にいたしませう。

從つて此の「毒殺事件の後」は、お讀みになつても、實感を強く刺戟する點がなく、何だか小說の眞似見たいなものを讀む樣な。一種のアッ氣なさと物足り無さ

を感ずるでせうが、それは私の罪ではありません。土地も人名も總て假想的ですし、事實の徑路にも、多少の取捨按配をしましたが、事件の骨や人物の心情などに至つては、努めて眞實を傳へた積で居ます。そして、いろ／＼の人物が出て、隨分複雜になつて居ますから、餘計な事は一切省いて、A辯護士の談話體に、順を追うて書くより他には、仕方が無いと思ひました。

その上、事件に少しも色氣が無いのと、何所が山だと云ふ樣な、高潮な點に達した所が無いのが、少しく面白味を殺ぐ樣ですが、空想的物語でない以上は、それも致し方がありますまい。私は唯、A辯護士の談話を或る程度まで忠實に紹介する筆記者たることが出來れば、それで滿足せねばなりますまい。

兎に角、相撲でも千秋樂になりましたら、久し振りに何處かへ落合つて、A辯護士と三人で、更に數杯を傾け樣ではありませんか。その内に、私も一度お訪ねしますから、貴兄も何うかお立寄下さい。珍しい蓄音機の音譜が、四五枚位は殖えましたから……。

一、高利貸毒殺の噂

明治四十年の秋、飛騨國の××町に、不思議な事件が起つた。それは土地の名家で、二十萬からの資産を有する男が、或る夜、突然、死亡したと云ふ椿事である。何一つ不自由を知らぬ金滿家でありながら、高利貸を本業の樣にして居た男だけあつて、いろ／＼の取沙汰が、忽ち狹い××町に傳はつた。

死だ男は、姓を山田名を憲二と云つて、死でも惜しからぬ六十路を越えた老人であつた。多くの金を高利で貸付けて、貪つて飽くを知らず、隨分、沒義道な、苛酷な事をして、近在の人々を泣かせた老人である。大阪の高利貸木村權右衛門が、「鬼權」と呼ばれた樣に、山田憲二も何時の間にか、「鬼憲」と云ふ異名を呼ばれて居た。たゞ鬼權の樣に奇怪の容貌ではなく、見たところでは田舍の好老爺で、地方の長者らしい風采を備へて居たが、高利貸に「涙」のある男は滅多に無い。二十萬も財産が有れば、金の光で德望が購へさうなもの

であるのに、山田憲二は、狭い××町の人達から、蛇蝎の様に呪はれて居た。

山田憲二は娘の里子に、勇太郎と云ふ養子を娶つて居たが、其の家庭は黄昏の森の様に、何時も陰氣にして且つ淋しかつた。金に眼の無い憲二が、娘夫婦を遇する風は、無情な地主が小作人に對する樣で、少しも親子と云ふ情愛が無かった。憲二にとつては、世間よりも、親戚よりも、娘よりも、婿よりも、自分よりも、生命よりも、大切なものは唯一つ「金」であつた。人生觀も、生死觀も、運命觀も、金に出發して金に到着するより外には、何の智識も、何の興味も有つて居ないのが、山田憲二の全生活であつた。外に出ては、高利貸として、許し難い惡虐を敢てし、内に在つては父として、恕し難い無情を事としながら、憲二の歳月は遷つて居た。「あんな鬼見たいな奴は、一日も早くたばつてしまへば宜いに……」それと明ら樣に、口外はせぬけれど、山田憲二の半生を知る者で、誰一人として斯う思はぬ者はなかつた。

その憎むべき山田憲二が、突然、死亡したと知れ渡つた時、××町の人々は、互に顔を見合せて、默つて面白さうに微笑んだ。たとへ其の死か、病死であらうとも、自殺であらうとも、また他殺であらうとも、鬼憲が死だと云ふ一つの事實は、人々の胸に何とも云へぬ痛快な感を起させた。「今日まで生きて居たのが不思議である」と思つた者もあるし、「死ぬるのが當然である」と囁き合ふ者もあつた。「それにしても、何うして死んだのか」と怪しむ者があれば、「金が大切だから、自殺したのではあるまい」と獨語する者もあつた。果は「殺されたのだ、毒殺されたのだ」と一人が云へは、「誰が殺したのか」と他の一人が取沙汰すると云ふ風で、山田憲二の死は、其の裏面に容易ならぬ秘密が伏在するのかの如くに風說された。そして、いろ〳〵の風說と取沙汰とが、最後に生だ事實は、「山田憲二は、養子の勇太郎と娘里子に毒殺された」と云ふ一語であつた。病死ならば天命とも云はう、自殺ならば自業自得とも笑はうが、毒殺されたとあつては、多少とも憲

二が不慣である。けれども××町の人々は擧つて、殺された憲二の最期を氣味好い事に取沙汰して、殺した勇太郎夫婦に同情し、且つ殺した二人を庇ふ樣な傾向があつた。

「火の無い所に煙は立たぬ」と云ふ、古い比喩がある樣に、山田憲二が毒殺されたと云ふ風說には、多少の據る所があつたらしい。それが警察署の耳に入り、檢事局の知る處となつて、勇太郎の訊問となり、關係者の取調と爲つても、事實の眞相は容易に解らなかつた。憲二が殺されたのは、痛快であつても、殺した事件を有耶無耶の間に葬り去ることを快しとせぬ人々の間には、更に樣々の取沙汰が傳へられた。或る者は警察の無能を攻擊して、山田家に買收されたのだと云ひ、或者は檢事の不起訴を痛擊して、山田家より收賄したとまで評判した。これが爲めには、主任の檢事が他へ更迭されて、新任の檢事に依つて事件の調査を繰返して居たが、更に何の要領も得なかつた。憲二の死が他殺の疑ある事や、其の加害者が勇太郎夫妻である事は、これを明かに認めて居る人々の中にも、結句、此の事件が曖昧の間に沒了し去ることを、何となく喜ぶ樣な氣配も見えた。

たとへ何の根據も無い風說にしても、殺された男が好い氣味だと嘲けられて、殺した男が無理も無いと同情されるなどは、眞に奇怪至極の事である。山田憲二の死に對しては、單り憲二の平生を憎んだ世間の人達が、斯う思つたのみならず、山田家と親戚の關係ある一族も、多くは世間と同じ樣な眼を以つて、憲二の死を眺めて居た。現に山田家の本家分に當る憲二の兄で、近所に住む佐藤唯一の一家は、平生から憲二の一家と仲の惡い間柄であるにも拘はらず。鬼の樣な憲二が、養子に毒殺されたのは、當然の運命であるかの如くに思つて、强て沈默を守つて居た程であつた。

二、本家分家の暗鬪

山田憲二は財產があつても、沒義道な高利貸をして居た爲め、狹い町內にも更に人望と云ふものがなく、

死だ後まで悪し樣に罵しられた。それに反して憲二の兄の佐藤唯一は、弟憲二の半分にも足らぬ資產を有つて居るに過ぎないが、町内の德望は一身に集つて、××町長の職を勤續して、一種の羽振りを利かして居た。××町の人々は、佐藤と山田とを比較して、同じ血統の兄弟でありながら、斯うも性格が異るものか、と不思議らしく取沙汰するのが例であつた。

兄弟の間柄であり、本家分家の關係でありながら、憲二が生きて居た頃から兩家の間は、兎角圓滿を缺いで居た。弟の憲二の方では、「財產も無い癖に、本家分と云ふを鼻に掛けて、何かに附けては威張りやがる」とて、兄の德望あるを嫉む樣子があつた。兄の唯一の方では、「相當の財產を有つて居ながら、高利貸などをしなくても宜さ相なものだ」とて、世間と同じ心持で、弟の酷薄な言動を卑しみ嘲ける風があつた。憲二の方では、「分家でも金が有るぞ」と大きくなれば、唯一の方でも、「本家で町長であるぞ」と敗けては居らず、何かに付けて世間體を爭ふ樣子があつた。狹い田舍町の金持同士の間には、能く見る一種の門地爭ひで、果はそれが、日常の茶飯事にまで曝露して、世間の物笑ひいになる樣な例は、決して珍しい事はない。

殊にそれが婦人同士になると、淺間しい一種の虛榮心が手傳つて、知らず識らずの間に、反目や暗鬪を一層大きくするものである。本家の唯一の妻節子は、分家よりも資產の少いことを、肩身狹く思ふ心はあつたが、町長夫人として世間へ出られる事を、何よりの誇りとし何よりの滿足として居た。從つて日常の生活向や、衣類調度などには贅澤を盡して、分家の人達に見せびらかす風があつた。節子の心では、財產が少いと云ふ一事だけが分家に對する弱味であるけれど、その他の事に就いては、何一つ分家に頭を下げることは無いと思つて居た。町内の人望から言つても、町長といふ公職の上から言つても、また本家といふ家柄から云つても、山田一家の者に、指一本を觸れさせはしない、と云ふだけの腹はあつた。分家が金で爭へば、此方は華やかな生活で爭ふと云ふのが、節子の山田一家に對す

る態度であり、覺悟であつた。

財産も無い癖に、本家の人達が町長と云ふを鼻に掛けて、これ見よがしの生活をするのが、分家の人達は嫉ましくて堪らなかつた。金で爭ひ得る生活向の事ならば、決して後ろ指はさゝせないと云ふのが、憲二の娘里子の腹で、また養子勇太郎の心持であつた。けれども父憲二が現世に在る間は、有餘る資産を有つて居ながら、本家に對抗して切廻す事が出來なかつた。守錢奴に等しい父憲二さへ此の世に亡くば、本家から受ける一種の侮蔑に對しても、決して引込では居ないものをと云ふのが、里子の人知れぬ不平であつた。今に見て居れ、父憲二が他界して、一家の財産を自由に收支し得られる身の上になつたら、必らず引けは取らぬから……、これが里子の燃える樣な慾望であつた。さうした時に、突如として父憲二が死亡したので、世間の人達は小氣味好く思ひながらも、唯云ふとなく、憲二が死んだのは毒殺で、殺した者は勇太郎夫妻であるとの風說を傳へたのである。そして憲二が普通の人間であつたならば、勇太郎夫妻が疑惑の中心になつて、檢擧されたかも知れないが、幸にして死だ憲二の方が惡る者視せられた爲めに、二人は反つて同情を受ける樣な、正反對の結果を見たのであつた。

憲二が死だ後、勇太郎と里子夫妻の生活が、急に贅澤になり華美（はなやか）になつたのは、二人に取つて豫定の行動であつた。父憲二の不名譽を回復すると云ふのが、其の主なる條件にしても、それは世間體を裝ふ申譯で、勇太郎夫妻が當面の仕事は、本家の伯父夫婦に對する一種の復讎にあつた。久しく幽閉に等しい生活を送つて居た勇太郎は、父憲二の死後二年の間に、直往邁進して郡會議員となり、更に進んで縣會議員となつて、町長たる伯父よりも、少しく高い社會的地位を得た。養父毒殺の加害者に疑はれて居ながら、勇太郎が斯うした地位を獲得したのは、主として金の力であつたかも知れないが、勇太郎に取つては、目的の爲めに手段を選んで居る暇などは無かつたに違ひない。

父の死亡後は里子も亦、籠の中から放たれた鳥の樣

に喜んで、本家の節子に對して、競爭の火蓋を開く様になつた。節子が三越や白木屋から、五十圓内外の呉服物を取寄せると、里子は百圓内外の品を新調して、節子の購買慾をそゝつたりした。節子が六十圓の金時計を新調すれば、自分は百二十圓の金時計を注文して、節子の上に立たうと云ふのが、虚榮心の强い里子の復讐手段であつた。山田憲二の死後二年間、本家と分家には、斯うした淺間しい暗鬪と競爭の月日が續いて、やがて明治四十三年の春となつた。

三、犯罪裏面の申告

　四十三年の春、櫻花が咲いて、世間が陽氣に浮かれ初めた頃、分家の憲二の遺子益太郎と、本家の唯一の長男謙太郎とは、共に同志社の神學部を卒業して、二人連で久し振りに故郷へ歸つた。本家分家の親しい間柄であるべき自分等の實家に、淺間しい暗鬪があらうとは夢にも知らず、益太郎と謙太郎とは、何所までも親しい從兄弟であり學友であつた。

血統の繋がる從兄弟同士でも、二人は全然その性格を異にして、益太郎の思想に遁世的傾向があるに反し、謙太郎の頭腦は常に世間的であつた。强慾非道な憲二を父とする益太郎が、極端に基督教徒的で、一郷の德望を一身に負ふ唯一の子謙太郎が、才子肌であるのも不思議であつた。從つて憲二の死に對する二人の態度も、全然反對で、益太郎の無關心なるに反して、謙太郎は沒交渉では濟まされなかつた。二人は從兄弟であり學友であつても、父たり叔父たる憲二の死に對しては、別れ〳〵の見解を抱いて居た。

　益太郎は父の死を神の御旨と感じ、抗すべからざる運命の力と觀ずる他には、多くの事を考へ様としなかつた。そして自分に分ち與へられた若干の財産は、管理方總てを姉婿勇太郎に賴んで、遠く亞米利加へ遊學の途に就いた。世間で風說する様に、果して姉婿が父を毒殺したにしても、益太郎は何うする事も出來ない身の上であつた。「秘密も、罪惡も、神これを知ろし召す上は、安んじてこれを日月の審判に委ねて、自分は

自分の行くべき道を辿らう」と云ふのが益太郎の心であつた。「生者必滅、會者定離は、單り佛の消極的悟のみでなく、聖書の中にも積極的に説いてあるが、死はそれが不斷に見舞ふ事あつても、それほどの大問題ではない」と云ふのが、益太郎の信仰であり、益太郎の死生觀であつた。

けれども、謙太郎は、叔父の死を未解決の儘に放つて置く事は、家門の爲めにも、名譽の爲めにも、また甥たる義務の上からも、忍び難い事の樣に考へた。久し振りに逢つた故郷の人達から、いろ〳〵の風説を聞くにつけても、謙太郎は勇太郎と里子を憎むよりも、先づ第一に其筋の不徹底な態度に憤激した。殺された叔父憲二は强慾非道の惡人であつても、それが爲めに殺した者の罪を不問に附すると云ふ樣な、馬鹿〳〵しい理窟が何處の世界にあると怒鳴り立た。親戚も町の人々も、殺された叔父を憎んで、殺した疑ある勇太郎夫妻に同情を寄せるとは、事の大小本來を誤つた見解であるとも論じて見た。そして狹い田舍町の常として、何か事件でも持上つて、其筋の檢擧がある樣な騷ぎになると、いろんな方面から手を廻して、情實に依つて揉み消し運動をする實例を考へた。司法權の獨立だなど〻云つても、狹い田舍町の人氣の力の方が、時に無罪を有罪にし、有罪を無罪にする事がある事實を考へて、謙太郎は我知らず戰慄した。

分家の叔父山田憲二が、横死當時の模樣を調査した謙太郎は、○○の中に或る毒藥を混じて、それを叔父に服用させた事は、○○の分拆檢査に依つて、最早一點の疑ふ餘地が無い事を確めた。現に其の有力なる證據物件は、其筋の一室に藏して居るにも拘らず、此の事件の檢擧と審理とを放任して居るには、何等かの仔細が無くてはならぬと考へた。謙太郎は取調るに從つて、迷宮裡に一點の光を發見した樣に喜んで、更に其筋の人々が、何故に此の事件を不問に附して置くか、と云ふ事に就いて、人知れず調査の歩を進めて見た。その結果有力な證據物件が有るにも拘らず、養子勇太郎を下手人として檢擧せぬのは、交迭した檢事の各自

に、收賄行爲があつた爲めだと云ふ事を、謙太郎は確信するに至つた。警察官や檢事にして、黄白の爲めに犯罪の檢擧を二三にするが如きは、聖代に有るまじき奇怪至極の沙汰であると云ふのが、謙太郎の得た結論であつた。國法のためにも、正義のためにも、打捨て置かれぬ大事件であると云つて、謙太郎は血相を變へて、憤慨したり騒ぎ廻つたりした。

それから間もなく、謙太郎は事の詳細を認めた申告書を檢事長、檢事總長、司法大臣へ宛て進達した。――自分一族の秘密を摘發するのは、私情に於て忍び難いが、斯る殺人の大事件が、私情と黄白の授受に依つて、不問に附せられて居るのは、其筋の威信に關する大問題である。願くは適當の機關に依つて、長く疑問の雲に閉されて居る此の事件に、明白な解決を與へらる事は、單り自分一族の幸福のみでなく、國家の慶事である。――と云ふ樣な事を、議論や意見を加へて、激越な調子で書いて、其筋へ進達したのであつた。

本家と分家の暗闘を知つて居る謙太郎が、分家の夫婦に對しては、殆ど其の死命を制する樣な事を敢てしたのは、いろんな點に於て誤解される弱味があつた。謙太郎の主意には、國法と正義の爲め以外に、更に何等の私心が無かつたか、何うか。何れにしても、此の事件に對する其筋の態度を難ずる條だけは、××町の心ある人々が同感を表したさうである。

四、意外千萬な入獄

其筋へ申告書を進達した謙太郎は、やがて起るべき樣々の結果を想像して、人知れず微笑むで居た。分家の勇太郎夫妻が檢擧されて、恐るべき毒殺犯の嫌疑者として、暗い牢獄の中に繋がれるのが、自分の申告に對する第一の反響であると信じて居た。

けれども世間の事は、謙太郎が思ふ程に、然く單純ではなく、底には底があつて、計畫通りに實現せぬのが例であつた。勇太郎夫妻の檢擧に初つて、叔父憲二毒殺事件の眞相が、世に明かになるのが大詰である、と信じて居た謙太郎の豫期は、意外にも驚くべき反對の

結果を見る樣になつた。それは謙太郎が檢事長、檢事總長、司法大臣へ進達した申告書は、檢事を誹毀したものと認められて、輕からぬ誹毀罪に問はれ、其筋へ拘引された事である。豫期に反した意外の結果を見た時、謙太郎の驚愕は無論のことで、父母も親戚も町の人々も、暫時は開いた口が閉がらなかつた。

所轄裁判所の檢事局が、憲二の橫死事件を何んな風に見て居つたかは、容易に忖度し難い謎であつた。檢擧も不檢擧も、起訴も不起訴も、謂ば檢事の方寸にあることで、第三者から彼是と云ふべき限りのことではなかつた。然るに或る立證を得た謙太郎は、奮然として檢事當局の非を鳴らして、裏面に潜む風說や事實を楯として、當路の長官に申告した。たとへ其の言ふ所に正當の理由があつても、檢事局は自己の威信を保つ上から、先づ第一に申告者たる謙太郎を罰せずには居られなかつた。强い者は何所までも强く、弱い者は何所までも弱いと云ふ理法は、斯うした場合にも明かに證據立てられた。正義者であるべかりし自分が、反つて不正義者視せられて、誹毀罪として拘引された時、謙太郎は心外千萬に堪えなかつた。檢事局は自己の非を掩はんがために、何の罪も無い自分を罪すると云ふ反感が、謙太郎の心にムラ／＼と起つた。

本家分家でありながら、殺された憲二の家と、豫てより相反目して居る間柄である事は、謙太郎にとつて大なる不利益であつた。檢事局は兩家が暗鬪して居る多年の事實に、謙太郎の誹毀を結び付けて、分家の勇太郎夫妻を苦しめんために、斯る申告をしたものと認めた。そして斯る申告をしたのは、謙太郎の一存ばかりではなく、父の唯一や母の節子が敎唆したに違ひない、との豫斷を下して取調べに着手した。互に反目して居ても、弟の憲二が橫死した一件のみは、これを有耶無耶の間に葬り去ることに、同意を表して居た唯一夫妻が、謙太郎を敎唆した形跡の無いことは、豫審で判明して免訴となつた。たゞ謙太郎一人のみは、檢事の威信を傷ける樣な、虚僞の申告をしたとあつて、

公判に附せせられることになつた。謙太郎の父母は此の事件に何の關係も無いが、分家夫婦の舊惡を摘かうとして、反つて罪せられた謙太郎の行爲に對しては、人知れず頭腦を惱まして居た。この上は謙太郎が無罪になつて、何も彼も圓滿に解決する樣にと、たゞ其の事のみを祈つて居たが、檢事當局の心證は、謙太郎に取つて不利益になるのみであつた。謙太郎は遂に思ひ設けぬ被告人として、法廷に立ねばならぬ飛でも無い身の上になつた。

Ａ辯護士が本件に關係したのは、謙太郎の辯護人として、法廷に立つた時からであつた。少しく仔細あつて、毒殺事件からの內情や、兩家の暗鬪を知つて居た辯護士は、謙太郎のために二人とない力ある辯護人であつた。謙太郎の申告が檢事を誹毀したもので無い理由として、Ａ辯護士は××町に於ける樣々の風說を引用し、謙太郎は其の風說を事實と信じて申告した由を辯論した。事實を虛僞と信じて居ながら、他を傷ける意思で申告したのならば、謂ふ所の誹毀罪も成立し樣が、謙太郎は決して不正の申告をした者で無いとて、力を極めて無罪である事を主張した。けれども謙太郎を無罪にしては、暗黑に葬つて居た憲二の毒殺事件が、復活して來ると云ふ大關係があるので、其筋では一も二もなく謙太郎を罪しやうと努めた。そして第一審では一年の懲役を宣告されたが、第二審では僅に四ヶ月の宣告を受けて、謙太郎は何うしても、服役せねばならぬ身の上になつた。

謙太郎が獄裡の人と爲つたのは、四十四年の春も盛の頃で、都會には櫻花が咲いて、人々の浮かれ狂ふ時であつた。謙太郎の所爲を憎んで、檢事局と同じ樣に、伯父夫婦も教唆者であるかの樣に信じて居た勇太郎夫婦は、謙太郎の入獄を人知れず喜んだ、「本家の人達が、何んなに悶えても、父憲二の横死事件は、永久に判明しない」と云ふのが、勇太郎夫妻の强味であり、また誇であつた。

××町に門地を構へて居る兩家も、こんな事があつて以來、一層、相反目する樣になつて、遂には絕交同

樣の間柄になつた。殊に勇太郎夫妻は、本家の伯父伯母に對して、益々反抗的態度を執る樣になつて、兩家の間には何うする事も出來ない深い溝渠が出來た。

五、自暴自棄の出奔

暗い牢獄に四ヶ月の苦役を終へて、謙太郎が世間に出た時、櫻花はもう散り果て、暑い夏の盛りになつて居た。生れて初めて監獄の味を知つた謙太郎は、たとへ刑餘の身の上であつても、自分の入獄は犧牲の血祭に上げられた樣なものだと信じて居た。多くの出獄者は、日の光を避ける樣にして、故郷に歸るのが例であるが、謙太郎は何の憚るところなく、大手を振つて我家の門をくゞつた。

久し振りに生れた家へ歸つた時、何よりも先づ謙太郎の眼に映じたのは、本家と分家の軋轢が、自分の入獄後、一層甚だしくなつて居た事であつた。一家一族中の本家株と云ふ事と、××町に於ける地位名望とに依つて、飽く迄も勢力を張つて居た兩親の立場に、多少の動搖が起つて居たことを、謙太郎は意外千萬に思つた。それも主として自分が入獄した一事が原因となつて、一家の名譽と勢力とを失墜せしめ、兩親に多大の迷惑を掛けて居たことが、謙太郎は心外で堪らなかつた。自分を教唆こそせざれ、毒殺事件裏面の申告に依つて、勇太郎夫妻に大打擊を與へることは、兩親も暗默の間に合點して居た意志であつたが、結果は悉く本家の上に不利であつた。

久しい間、本家の伯父夫婦に壓迫されて、その下風に立つて居た分家の勇太郎夫妻は、父憲二の横死した後、その全力を傾倒して本家に對抗し、著々として勢力を扶植して居た。殊に謙太郎の申告事件は意外の結果となつて、本家の爲めに不利益となつたが、分家の勇太郎夫妻に取つては、謙太郎の入獄が、反つて勢力と德望を得る適い口實となつた。且つ謙太郎の申告が、誹毀罪に問はれた以上は、勇太郎夫妻に係る嫌疑の雲も、一先霽れたと同じ樣な結果になつた。本家に對する勇太郎の態度が、それ以來一層強硬になると共に、

狹い町に於ける勢力や信用が、次第に分家の方に集つたのも、謙太郎が入獄後のことであつた。正しかるべき謙太郎と其の一家が、次第に名望を失したに反して、正しからざる勇太郎夫妻が世を出る様になつたのも、謙太郎が出獄前後からの事であつた。本家の唯一と節子とが喜ばざる色あるに反して、勇太郎と里子とは、勝ち誇つた將軍夫妻の面持をして、××町の界隈を横行濶歩する様になつた。

　謙太郎の申告事件に對して、或る結果を豫期して居た兩親は、意外の成行きを見るに及んで、俄に謙太郎の行爲を輕擧妄動なりとし、藪をつゝいて蛇を出だした謙太郎の行爲を、憤り憎む様になつた。誹毀罪に問はれること無くして、勇太郎夫妻が檢擧されたのならば、兩親も謙太郎の勞を多としたであらうが、親子骨肉の間柄でも、事の成果如何に依つて、その行爲を是非する傾向があるのは、眞に嘆ずべき次第である。謙太郎の父母は、分家に對しても世間に對しても、何だか片身が狹くなつた様で、それが何よりも苦痛であり、また不面目であつた。そこで唯一と節子とは、謙太郎が誹毀罪で入獄したのは、佐藤本家の家名を傷けたのみならず、一家一族の平和を破つたものとして、俄かに謙太郎を冷遇する様になつた。果は謙太郎を刑餘の前科者扱いにして、一度、監獄の門を出入した者には、家督を相續させる事が出來ない、との口吻さへ漏す様になつた。狹い田舍町に羽振りを爭ふ、古風な金持氣質とは云ひながら、毒殺の嫌疑を受けても平然たる勇太郎夫妻や、我が子に對する信を二三にしても平氣な唯一夫妻は、共に淺間しい虚榮の權化であつた。本家分家の間柄であつても、唯一と勇太郎とは、何うしても握手して和解する事が出來ず、何處でも其の門地と勢力との暗鬪を續けて居た。

　こゝに於てか、最も詰らない境遇に落ちたのは、平地に波瀾を起して、反つて窮地に陷れられた謙太郎であつた。不幸にして誹毀罪に問はれ、生れて初めて獄に下されたのみでなく、本家分家の軋轢を一層大きくして、兩親の立場を無くしたけれども、もと／＼叔父[illegible]

二の横死事件を、解決すると云ふのが目的であつた。然るに反對に自分が罪せられたばかりでなく、四ヶ月の苦役を終へて歸つて見れば、兩親からは家名を傷けた者として、前科者扱ひを受ける樣になつた。正しからずとも强い者は世に時を得るが、正しくても弱い者は世に容れられぬと云ふ事を、謙太郎は自分の身の上に見て、今更の樣に無量の感慨に耽つた。そして、狹い××町ばかりが世間では無いと云ふ樣な、自棄自暴の心を起して、陰慘な空氣に掩はれて居る一家一門の中から、暫く姿を陰してしまはうと決心した。

流落の人に似た感慨を抱いて、謙太郎が放浪の旅路に就いたのは、四十四年の秋風が、袖に冷たい十月の中旬であつた。何處から何處へと云ふ、行く方定めた旅ではないが、最初に鞄を下した都會は、女で名高い名古屋の町であつた。謙太郎は暫らく名古屋に滯在して、徐ろに時機の到るを待つた上で、叔父の横死事件にも、本家分家の煩な軋轢にも、何とかして解決を下したいと考へたのであつた。

六、金が敵の世の中

少くとも三年間は實家に歸らぬ積で、千圓近い金を持つて出奔した謙太郎は、名古屋市に落着くや否や、金の有るにまかせて、燈火の巷に出入した。曾て自分の家に女中奉公して居た女が、春月と云ふ待合を開いて居たので、謙太郎は日夜の如く春月に入浸つて、酒と女とに依つて、悶々の情を慰めて居た。

春月の女將はお時と云つて、謙太郎の實家佐藤家が、××町でも門地ある舊家で、十萬内外の資産有ることを知つて居た。その長男に生れた謙太郎は、遲かれ早かれ家督を相續して、佐藤家の主人となるべき身分である事も、お時は能く知つて居た。誹毀罪で入獄した事や、本家分家に軋轢の有ることや、新らしい事實は何一つ知らないだけ、それだけお時は謙太郎を懷しがつて、いろ〳〵と歡待した。十二分の信用と敬意とを謙太郎に拂つて、毎日毎夜の樣に歡待するので、久しく人情の溫味に飢ゑて居た謙太郎は、一切の過去を忘

却して、歡樂の月日を送つて居た。

女から女へと移り歩いて居た謙太郎も、何時しか小時と云ふ藝妓と馴染を重ねて、夢の様な戀心地を味はう身の上になつた。持て出た小千圓の金は、三四ヶ月の間に費消してしまつて、果ては其の日の小遣錢にも困る身の上になつたが、春月の女將お時は、相變らず謙太郎を歡待して居た。その實家に資産がある事を知つて居るお時は、何んなに間違つても、損をする様な事は無いと安心して、謙太郎を遊ばせて居たのであつた。けれども藝妓の小時だけは、謙太郎が不如意になり初めた頃から、次第に逃げ足を踏む様になつて、果はお座敷にも顔を見せぬ様な夜が續いた。酒の香と白粉の匂の中に沒頭して、遊蕩淫逸な月日を送つて居た謙太郎も、他郷に四十五年の正月を迎へた頃から、昔の我に復り初めた。久しく忘れて居た過去の月日や、胸に負ふた深い創痍が、今更の様に思ひ出に浮かんで、何とはなしは涙を誘ふのであつた。

謙太郎は同志社の神學部で、キリストの道を究めたけれど、人生の幸福は其の總てが金である事を否定する譯に行かなかつた。金さへ得たならば、美しい藝妓小時を我が有にすることも出來るし、金さへあれば限り無い慾も、或る程度までは遂げ得られると思つた。疑問の雲に閉されて居る、叔父の毒殺事件も、金さへあれば充分に檢査して、其の眞相を明かにする事が出來ると考へた。一郷を我が物顔に横行して居る勇太郎夫妻に、痛烈な制裁を加へるのも、また分家の横行に依つて、人知れず煩悶して居る兩親に、安堵の思をさせるのも、其の總てが金であると考へた。こゝに數萬の金さへ有れば、一家一門の上に漲る妖雲を掃つて、必ず幸福な月日に導いて遣らうものをと考へても、當時の謙太郎にとつては、百圓の金も意の如くにならなかつた。殊に差迫つての必要は、春月に支拂ふべき千圓近い遊興費と、藝妓小時の心を呼び戻すべき數百圓の金であるが、謙太郎は更に金の出來る見込がなかつた。たゞ何んなに間違つたところで、實家には相當の資産が有るから、まさかの場合には兩親が何とかしてくれやう

と云ふのが、謙太郎の最後の心頼みであり、また最後の氣安めであつた。

此の最後の心頼と、一度監獄の飯を食つたと云ふ思ひ出とは、遂に謙太郎の心を大膽にして、容易ならぬ罪惡を犯させる事になつた。それは實家の不動產の登記謄本を僞造して、如何にも大資產家であるかの樣に吹聽して、或る金持の老婆と某銀行から、二口で五千圓を借出した事であつた。萬一の事が發覺した場合には、兩親の方で何とか始末を附けてくれるであらうと信じて、謙太郎は太した惡事を働いたとは思はなかつた。そして金さへあれば、人生の事すべて意の如しと云つて、相變らず酒色の巷に出入し、果は京都や大阪地方を遊び歩いたりした。金に困つて居た時には、有用に費はねばならぬ豫定の金であつたが、さて其の金が手に入つて見ると、酒と女とが第一の費途であつた。金の有る間だけは過去のこと一切を忘却して、純然たる遊蕩兒となり、酒色の間に沒頭して、半ケ年を夢か現かの心地で浮かれ暮して居た。

謙太郎の所爲が、私印私書僞造行使詐欺取財として、其筋に訴へられたのは、五千圓の金が千圓足らずになつて居た頃であつた。××町の兩親の方に談判して、賠償方を申込だけれど、兩親が頑として應じなかつた爲め、謙太郎は再び拘禁の身となつて、法廷に立ねばならぬ事となつた。今度も亦、A辯護士が辯護人と爲つたが、罪跡極めて明瞭であつた爲め、三年の刑を宣告されて、再び暗い監獄に送られたのは、大正二年の十月末であつた。

高利貸山田憲二の毒殺事件は、一名の下手人も檢擧されず、疑問のまゝ今日に及んで居るが、謙太郎は唯一人の犧牲者として、二度までも入獄した。謙太郎にして出獄せぬ限りは、疑問の毒殺事件も永久の謎として、遂に解決される事なくして終るであらう。

七、不幸なる犧牲兒

一度ならず二度までも、獄裡の人と爲つた謙太郎は、今も尙××監獄に苦役して居るが、神學を修めた男だ

けあつて、獄中の感慨は人一倍痛烈であるらしい。そして、一年後に出獄した上は、必ず新生涯に入つて、人のため世のために、大に力を盡さうと覺悟してゐる樣子が見える。謙太郎が入獄後二三ヶ月經て、A辯護士に送つた手紙の中には、左の意味の事が、感傷的の調子で書いてあつたさうである。

私は今度の入獄に依つて、今までに經驗した事の無い、心靈上の敎訓を得ましたことを、先づ神に向つて感謝せねばなりません。私が過去の半生は、何の思慮も何の分別もない輕擧妄動に終始しましたが、今度と云ふ今度は、初めて自分自身の姿を反省することが出來ました。佐藤謙太郎と云ふ一個の青年は、今日までに樣々の道を歩きましたけれど、それは虛僞、嫉妬、僞善、姦淫、詐欺、あらゆる罪惡の道でありました。人間として行くべからざる道を歩いて居た私は、神の審判を受けて、神の牢獄の中に、樣々の過去を追懷して慟哭しました。

今度の入獄に依つて、何よりも痛切に感じました事は、人は先づ自己を救はねばならぬと云ふ事でありました。世の中に自己を完全に救濟し得る人が、僅に十人ありましたならば、以て全人類と全社會とを救ふことが出來ませう。私は同志社に學んだ當時から、志業徒らに世に存して、自分を正しく完成すると云ふ、最も大切な肝要な一事を忘れて居ました。國分家の横死事件に就いても、正義のためと稱し、國法のためと稱して、大に爭ひましたけれど、それも空しき努力に過ぎませんでした。不幸にして自己を救ふことを知らなかつたが爲めに、私は其の中途から墮落してしまつて、反つて自分が罪せられる樣な結果を見ました。分家の叔父の横死は、何人の所爲であつたにせよ、今日の私から見れば、何の益もない小事件で、また小問題に過ぎませんでした。

私は此度の入獄に依つて、多大の迷惑を掛けた人々に對して、私の罪が完全に償はれたものとは信じて居ません。物質上にせよ、精神上にせよ、私に依つて樣々の苦痛を受けた人々に對しては、私は未だ多

くの罪責を負擔せねばならぬと信じて居ます。そして此度の獄中生活に依つて、私は先づ第一に自己を救うて、キリストに接近し得たならば、それが何よりも自己救濟の第一歩であると考へます。私は正しい人間の一人になつて世間に出ることを、私の世間に對する第一の義務であると信じて居ます。

學生時代から、肺を病で居ますから、長い間の獄中生活に堪えるか何うか、と心配して居ましたが、幸にして入獄後は益々壯健に、毎日樂んで勞役に服して居ます。斯うした健康と心情とは、自分を救はうと覺悟した熱い信仰の賜であると感謝して居ます。

謙太郎が入獄後、いろ／＼調査して見たら、名古屋の料理屋、待合、旅宿などに、合計千二百圓の借金があつた。謙太郎の實家へ行つても、更に寄付けられないので、債權者一同は當惑して、A辯護士の宅に詰め掛け、何うしたものかと相談した。其の時A辯護士は、右の手紙を數名の者に示して、謙太郎は滿期出獄の後、必ず負債を償却する考へで居る由を聞かせた。そして、出獄した後ならば、必ず償却し得る見込もあるし、萬一の場合には、身分が引受けて支拂ふても宜いと話して、一同を引取らせた。その時、後日の證明にとて、債權者一同に交付したのは、謙太郎から來た右の手紙であつた。

藝妓小時は、謙太郎が欺詐取財で入獄したと聞いた時、身を慄はせて憤り、男の腑甲斐無ふを罵つて居たが、手紙を讀でからは非常に感激して、謙太郎の健氣な心掛を喜んだ。當時、小時は自前の店借りで出て居たが、自分のために多額の金を費つて、遂に入獄の身になつた謙太郎に對して、俄に濟まない樣な、空恐しい樣な氣持がした。何とかして謙太郎に對する藝妓の道を立たいとて、いろ／＼思案した揚句、小時は店借から丸抱への身になつて、取敢ず千圓の金を調達した。そして謙太郎の不義理した料理店や待合へ、半金又は三分の一を入金して、僅に謙太郎に對する心意氣を立た。この事を獄中の謙太郎が知つたならば、憂き流れの女の群にも、一分の俠氣がある事を、何んなに嬉

しく思ふことであらう。

それにしても佐藤謙太郎は、本家分家の暗闘と、高利貸の横死事件が生んだ、最も不幸なる犠牲兒であつた。謙太郎は二度も入獄して、様々の辛苦を經驗したけれど、叔父の横死事件は、終に永久の謎として、誰あつて解かうとする者が無かつた。下手人と目された勇太郎夫妻は、今も尙いよ〳〵榮えて居るに反し、謙太郎の父母は聲望また昔日の如くならず、たゞ本家分家の暗闘のみは、相も變らず激しいさうである。どうしても、一番つまらない目に逢つたのは、不幸なる犠牲兒謙太郎であつた。(六、一八曉)

次號に揭ぐべき「犯罪ロマンス」の(四)には、

旅團長邸内の小間使殺し

と云ふ、不思議にして妖艶に、奇怪にして凄慘なる或る地方の事件を細叙すべし。

時局の人・裏面の人

鐵拳禪

▼第三十六議會の政爭劇は、島田議長狼狽の場で大入満員の景氣となり、齋藤珪次、藪内次郎作、武藤金吉等の懲罰で、與黨大喝采の裡に幕が下りた。幕が下りて了へば、大風の吹き過ぎた後の靜寂に歸つて、政界も頓に鎭靜したやうだが、夫れは表面だけの鎭靜で、裏面の暗黑に魔の題の今にも旋風を起さうとする物凄さだ。耳を澄まして聞いて居ると『第三十七議會まで』と云ふ聲が、其の物凄い暗黑を破つて、現内閣を呪ふ匕首(あいくち)の鋭を以て響いて來る。

▼大隈伯の人氣は、總選擧を頂點として、段々下り坂に向ひつゝある。

從つて仲の人氣で立つ現內閣の人氣も、亦漸く下火になりつゝある。非立憲の火の手が是れ以上に燃え盛り、無責任の風が今日以上に烈しくなつては、折角築き上げた憲政の聖堂が灰燼に歸するだらうとの恐怖と、戰慄と、不安とが、國民の眼に鮮かに浮んで來た。人氣の下火になつたのを幸に、風上に置くことの危險な現內閣は、飽くまでも破壞せねばならぬと敦圍く者が多くなつた。

▼元老の頭には、大隈は無責任な奴だと云ふ印象がある。無責任の爲めに滅びる、斯う云ふ腹もある。彼等自身の滅亡は何うでも可いとして、國家の興廢に關係する問題には、何時までも瞑目し、沈默することが出來ぬと云ふ杞憂がある。淸浦內閣の流產で、一時は餘儀なく瞑目した樣な者の、今日は此の杞憂の浮草が日一日と心の沼に蔓延つて來るので、何うか始末を付けやうと云ふ風になつた。元老は憲政とか、新思想とかに對しては、毫も理解を持つて居ないが、國家の爲めと云ふことだけは口にする事を忘れないやうだ。大隈內閣は遠からず、元老から『國家の爲め』と云ふ名義に依つて斃されるであらう。

▼大隈內閣を突崩するのは、仲小路君で無くとも今にも出來さうだが、元老等の敢て之を實行しないのは、今秋の大典を控へて居るからである。大典前に、政爭を繰返すは、望ましいことでない。縱合對支外交の失敗があるにせよ、選擧干涉責任支出等の違憲の行爲あるにせよ、年來の懸案たる二個師團の解決を付けたのだから、暫く大隈に花を持たせて自ら散る紅葉の上に時雨する日を待たうと、呪咀の魔手が温かな手套に褁んでゐるやうな傾きがある。松方侯などは、別段に野心の眼を輝かしても、山縣侯の素知らぬ顔をして居るのは、今秋と云ふ大切な菊の薫る日を目前に控へて居るからなさうだ。

▼して見ると、『第三十七議會まで』と云ふ暗黑の聲には、何等かの暗示はある。恐らく其の『まで』は準備の期間で、必ず『には』と變ずるを豫想するに難くない。仲小路君の『には』は少し早過ぎたので、『まで』と云ふ延期に讓步する止むなきに至つたが、胸中には絕えず『には』の成功を描いて居るだらう。而して此の仲小路君の『には』に額を鳩めて居る人々には、後藤新平男、秋山定輔君、長島隆二君などがゐる。夫れが何れも同志會に叛逆した、所謂野心滿々たる顔觸だから面白いではないか。

▼後藤男の色氣の多いことは、何人でも知つてゐる。政權を把握せんが爲めに、焦躁り過ぎる程あせつてゐる。政友會に接近したのは、入黨せんが爲めではなくて、目的の日に之を利用せんが爲めである。彼れが同志會を去つて以來の畫策は、一に寺內內閣を組織せんが爲めださうだ。寺內伯を擔いで、長閥の超然內閣を作るのは、憲政の逆轉だ位は知らない男ではないのだが、手ッ取早く仕事をするには、斯うするより外仕方がないと思つて居るらしい。寺內伯は今日こそ芋の葉のやうな首を振つて居れ、事成るの曉には、疾風の如く海を渡つて東に歸ることは明かである。

▼與黨の三派大同合は勿論、中正會と無所屬の中合同も、議會中に成立

しなかつた。一體無所屬と稱する隈伯後援派は、主義も人物も灰色で、到底長く同一步調を取ることは出來ない。名を隈伯後援に假りて當選しても、中には政友會内應者もあれば、後藤男の伏兵もゐる。蛙兒が蛙になるまでの、一時の足溜りの觀がある、法博小林丑三郎君や、加藤彰廉君や、無所屬の灰色に慊らず思ふ者は、啻に一二人のみでない。小林君の解散說は、尠からず無所屬の齡煎連を驚かしたやうだが、夫れが動機となつて、中正會程度に染色を施す事になつたさうだ。併し、何時まで現内閣謳歌でもあるまいから、早晚異分子の分裂は免れなからう。

▼小林君は曾て政府委員で議會に臨んだ事もあり、議員としては新米でも、壇上に立つには、處女の戰慄を覺える樣な事はなかつたのだが、與黨なるが故に折角質問の矢を放つても、當局者の内甲まで射拔く譯には行かず、其の初陣に味噌を附けた。之に反して、華々しい質問振で、男をあげたのは長島隆二君だ。彼れは桂公の女婿であり、元老にも親近（ちかづき）があるので、有力なる政府攻擊の材料を得る便宜があつたのと、長く役人生活をして居て、頭腦が事務に精練されてあつたのと、夫れから一種の觀察眼を備へて居たので、痛快に其の急所を抉ることが出來たのである。

▼毒を以て毒を制すと云ふが、官僚出身が官僚に對抗すると、攻める方が必ず有利の地步を占めて、敵の急所を突くことが出來る。長島君は勿論、下院で犬塚勝太郎君が濱口大藏次官を苦めたのも、上院で仲小路廉君が政府者を辟易させたのも、畢竟彼等の經驗の眼が内部に光つて居たからである。黨人は辯舌が旨いが駄論となり。調査が行屆いて居ない爲めに空節が多い。殊に今次の議會で、此の感を深うした。

▼貴族院は氣樂院と稱された程、暢氣なものであつたが、新緑の議會は珍しくも生彩煥發して、奇特院なるを思はしめた。と云ふは、後藤男、仲小路君、目賀種太郎男、澤柳政太郎が、正攻法を取つて堂々と論戰したからで。貴族院は、是れが爲めに一層の光彩を添へた。衆族院が徒らに政爭の巷と化し、鬧市のやうな喧騷で、其の論議を盡さしめなかつたに比すれば、貴院族の態度は靜粛で、相互の言論に敬意を拂つて居るやうに見えた。

▼理想伯の下に行はれた總選擧後の下院は、議員の人格が下落したのか沒分曉漢（わからずや）が多くなつたのか、期待した程の新味がなかつた。非常な意氣組て議會に入つた新人も、票決器械以上の活動振を見せなかつた。偶ま聲を發するかと思ふと、『馬鹿野郎』とか『引込め』とか、『青二才』とか、野卑なる叫をあげて居た。望月圭介の『賣國奴』と加藤男を罵つたのは世人の記憶に新なる所だが、斯樣な彌次振を發揮して恬然たる者は、與黨では小山松壽、戶井嘉作、加賀卯之吉、民黨では廣岡守一郎、藏內次郎作、佐々木安五郎、伊東知也等であつだ。野球軍の彌次振が國技館に移り、夫れが又神聖なる議會に輸入されたのは、決して國民の選良たる者の名譽では無からう。

▼東京市長の椅子は、久しく塵を被つた儘になつて居たが、首なしの大蛇が濱町河岸に潛著した陰霖の月に、漸く法博奧田義人君の當選を見

た。市會は全會一致であつたが、唯一人横山某は、最に常盤會打破を叫んだ行掛り上、政友會所屬の博士を推すに反對したが、其の人格、閲歴、才幹には尊敬を拂ふ旨を要明してゐる。夫れは單に辭令に過ぎないと云ふ者もあるが、奥田君の人物、手腕は何人も認める所で、横山某の裏書を待つまでも無からう。

▼阪谷男の辭職後、五個月間と云ふもの、色んな人物が候補者に指目され、將た候補者に自薦したが、種種の事情と、黨爭の爲めに、目鼻のつかない間に葬られた。其の中で、角田眞平君が稍ものになりかけたが、人格の非難や、勢力の排擠やらで、自薦を取消すの已むなきに至つた。爾後暗中模索の體で、犬のやうに諸方を嗅ぎ廻つて居たが、紛擾解決の夜明方に嗅ぎつけたのは、奥田博士と云ふ美味のある人物だ。

▼東京市會議長で、兼て肝煎で有名な中野武營君は、早速奥田博士に相談を持ち掛けると、博士は其の任に非ずと體よく斷り、而して牧野伸顯男を推薦した。て、中野君は轉じて牧野男に交渉したが話が纏まらず、再び奥田博士に懇請する事となつた。博士は加藤正義君と縁戚關係があるので、夫れを辿つて百方說いた所が、瓦斯問題解決の條件次第で、承諾しようと固い蕾が破られた。是れ　加藤君が奥田博士と仕組んだ芝居だとも云ふが、奥田君の平生を知る者は之を信じない。

▼又中野、豐川等の實業派が、奥田博士を擔ぎ出したのは、博士を政友會と絕緣させやうとする現内閣側の指金だと解する者がある。愈々詮衡會を開からとすると、記者倶樂部の人々が、『市會の建議を蹂躙する如き就職條件を附するは怪しからぬ』と威張り出した。其の顧問は、黒岩周六、松下軍治、須崎芳三郎、大谷誠夫等、與黨臭を帶びた人々であつた。彼の横山某の反對と云ひ、是れと云ひ、博士の黨籍を政友會に置く事を喜ばず、一歩誤れば、黨爭を釀しさうな傾きがある。奥田市長の前途も決して光明に輝くと言ひ難いやうだ。

▼奥田博士は、學者的頭腦と、事務的手腕とがある。思想は古いが、公正態度を持する人である。山本内閣の文相となり、次で法相に轉じたが、何れの椅子も役相應に勤めた。知事の更迭に際しては、原敬君に助言して、自家腹心の徒や其の系統と目さるべき人物を拔擢したが、官僚的偏頗や、黨派的暴慢を敢てする樣な事はなかつた。多少勇氣に乏しいやうだが、疾言遽色の人でないだけ、衆心を得るだらう。同志會臭味の人々が、政友會だからと云うて非難するが、彼れは今日政友會に居ても何程か政友會に超立してるから、森久保の殘黨と腹を合せて弊根を深くする樣なことは無からう。

▼鐵道院總裁仙石博士の眼に、政友會の弊根が映じたものか、先頃幹部の大更迭を試みた。其の餘波がまだ收まらぬと見えて、部内の空氣は陰鬱な動搖に呻いて居るやうだ。古川副總裁も京濱電車失態の責任を負うて、辭職するさうだから、床次時代の高級者は隻影を留めぬ事となる。で、是れからが仙石總裁の得意時代に入るのだが、彼れの所謂廓清などば、到底實現することは出來まい。同志會と云ふ影が、隨處に附き纏うて居るのだから。

▼現內閣は人氣取り、黨閥打破に腐心してるので、其の遣り口が總て變則だ。正副參政官を新設する爲めに官制だけを改正し、費目が無いので任命を差控へてゐた。今次の鐵道院のは之と反對で、官制改正の準備として、馘首したのださうだ。官制改正の結果罷免するのが普通だが、準備の爲めにやると云ふのは、縱令總裁の心事が公明あつても、何かあるやうに非難するのは世の中である。況んや仙石博士が、腹心を登用して、政友系を貶黜したるに於てをやだ。

▼仙石總裁の斧鉞の下に首の飛んだのは、技監石丸重美君を筆頭とし、遠藤剛太郎、玉木辨太郎等二十數名である。總數は官制改正の準備と、老朽淘汰の實現だと濟ましてゐるが、少壯の手腕家もあるから、情實馘首の實行だと非難の聲が高い。石丸君は床次總裁に拔擢された溫厚な人物で、反對派の誣ふるが如く政友會の犬ではないが、古川副總裁等と技術方面で反りが合はない所から排斥されゐた。森本邦治郎や、木下淑夫等は或時期から原敬君や、床次君に反感を持つて居たので、仙石總裁の救濟に與つたやうな譯だ。

▼大學自治問題で學界を騷がした京都帝國大學も、醫科大學長の荒木寅三郎君が總長に任ぜられて、玆に始めて宿志を遂した樣なものだ。澤柳總長辭職當時、奧田文相は何程か教授側に同情したが、時期尙早と見て全然其の希望を容れるには至らなかつた。一時衆望ある荒木君を總長事務取扱に任命し、次で山川東大總長の兼任となり、空氣の新鮮なるものを待つて居たが、今日漸く其の氣運が熟したので、山川博士が荒木教授を推薦したのださうだ。

▼荒木總長は、明治二十年の醫科大學別科の出身で、獨逸のドクトル・メデチーネである。專攻の學科は生理化學で、二十八年歸朝後、三高の教授となり、三十年醫學博士の學位を授けられた。三十三年京大の醫化學講座擔任以來、今日まで勤續したので、教授中の古參者である。智腦の豐かなせゐか頭が大きく、多少の禪趣味を帶びて、包容力が有りさうだから、總長としては可もなく不可もなからう。

▼可もなく不可もなくで想起したが、河野廣中君が農相就任當時、同鄉人が彼れの爲めに祝賀會を開いた。其の席上に於て盤州例の黃色い咳拂ひをして、さて答辭を述べたが、其の中に『私は可もなく不可もなく勤める積りであります』と云ふ一語があつたさうだ。彼れが議會に於ける『エート、エー』の答辯振を見ると、可もなく不可もなく腹が出來てるだらうと、悲慘な滑稽のやうに感ぜざるを得なかつた。

夏季探勝に好適な 山と水

私の心を惹いた山と水のかず〳〵

田山花袋

〇

避暑は海よりも山の方が好いと思ふ。しかし避暑と言つても、半ば旅行が伴ふのであるから、ある所に長く滯在してゐるよりも、其處から彼處へと移つて行つて、見聞を博くするといふ方が趣味がある。

日本では山は中部、關東、東北地方に限ると言つても好い。九州や中國地方では、折角山の中に入つて行つても冷たい清水さへ湧いてゐないといふ處が多い。概して山勢が老衰して雄俊險拉の趣を缺いてゐる。それに比べると、中部、東北地方には、到る處に深い山がある。大きな谷がある。凄じい瀨をつくつて流れる溪流がある。匹練をかけたやうな瀑がある。齒に泌みるやうな冷めたい清水がある。雲の形や色彩や、さういふものも頗る複雜したカラーを持つてゐる。

東京近くでは、山では野州の山水が一番すぐれてゐる。これには異論があるまいと思ふ。即ち日光と鹽原とである。日光は溫泉まで行くには遠いけれど、鹽原は到る處に溫泉と溪流とが相交錯してゐて、避暑地には好いところである。鹽原と日光との間に横はつてゐる鬼怒川の峽谷も面白い。

日光から野州の南部に横つてゐる山の中もかなりに世離れてゐる。

上野では、伊香保、それからずつと吾妻川の峽谷を溯つて、川原湯など景色の好いところである。草津は

白根の焼山の原の一隅に位置してゐるから、樹木が少く幽邃といふ趣は缺けてゐるが、兎に角海拔高距が高いので涼しいには涼しい。風景にも何處か大陸風なところがある。こゝから草津峠を越して、信濃の澁温泉に出る路がある。

妙義碓氷の嶮峋はやゝ淺少ぎる。輕井澤は溫泉はないが、榛、山毛欅の木などが多くつて、疎らな林の中に溪流が流れ、白毛の教會堂に外國人が日曜日の集りをしてゐるさまなど、ちよつと日本の避暑地には見られないやうなカラーがある。淺間の噴烟が夕日に彩られたさまは日本にも澤山見ることの出來ない光景である。

北信濃では、山水寺が好かつたのだが、汽車が出來て、犀川の舟路が絶えたために、今ではちよつと行くのに面倒である。上州境の山には世離れたところが澤山ある。淺間の裏に鹿澤溫泉があり、それからずつと北に寄つて山田溫泉がある。千曲川の下流では、野澤溫泉などが最も靜かな好いところだと言はれてゐる。しかし、飯山からまだ北に寄つてゐるので、交通はあまり便でない。

赤倉は越後ではあるけれど、何處かまだ北信濃のにほひのするやうなところである。日本でも屈指の高原である。輕井澤などは無論及ばない。甲斐の日野春あたりの高原も或はこれに及ばないだらうと思はれる。信越線の田口から一里半位で、その眺望のすぐれた溫泉に達することが出來る。此處からは裏日本の海が遠く日に光つて、米山の翠微が手に取るやうに見える。下野の那須の湯元の感じがやゝこれに似てるが、それとてこゝの眺望の廣濶なのに若くべくもない。

○

中央線では、桂川の谷がちよつと幽邃だ。鮎なども澤山獲れる。しかし下りて一夜泊つて見たいやうな旅舍の設備のあるところが、擂鉢の底のやうなところで餘り涼しいといふわけには行かない。甲府から鰍澤を經て富士川を下るか、御嶽の谷に入つて行くか、もつと東南に出て富士の八湖を探ぐるかすればちよつと

面白いが、矢張旅行の方の興味で避暑には適しない。處が、それが甲府をすぎて、例の七里岩の上の高原に行くと、忽ち無限の凉味を感ずる。日野春、小淵澤富士見あたりは殊に好い。

諏訪は夏は暑いところだ。湖水をめぐる山もイヤに赤ちやけてゐて暑苦しい。

犀川の峽谷、木曾川の峽谷、其分水嶺は例の鳥居峠である。流石に日本アルプスに近いだけに、凉しい靜かな山の中である。檜の木の林相なども美觀である。沿線で有名な棧だとか寢覺の床だとかいふものよりも、木曾の特色は、むしろその溪山の深く幽邃なところにある。王瀧川の上流あたりには殊にすぐれた溪流がある。

美濃に入つてから、虎溪山の勝があるが、此處は餘り凉しい處ではない。

○

東海道線は、山よりも寧ろ海だ。山では、箱根だけである。箱根の溫泉の設備はすぐれて氣がきいてゐるけれども、避暑地としてはあまり雜遝しすぎる。是非箱根といふならば、堂ヶ島、木賀、新强羅あたりまで行かなければ山の凉しい感じは受けられないと思ふ。

伊豆半島には山にも海にも好いところが非常にある。しかし交通は便なりとは言へない。夏行くには、山では湯ヶ島、海では戸田、土肥、松崎あたりが好いと思ふ。修善寺も伊東もさう凉しいところではない。熱海は一層暑苦しい。比較的山の中にある湯河原もややせゝこましい感じがする。唯、海が近く、新しい魚の食へるのが好い。

駿河の海岸の海水浴は何處も皆好い。相模の海岸から比べると、ぐつとすぐれてゐる。それといふのも、富士といふ大きなものを背景に持つてゐるからであらう。

辨天島はそこに行つて泊るよりも却つて汽車の中から見た方が凉しさうだと思はれてゐる。豐橋から豐川線に乘換へて、鳳來寺山に行くと、好いすぐれた溪流がある。例の長篠の古戰場のある附近である。

蒲郡はちよつと好い。しかし、此處に來ると、蒲郡そのものばかりでなく、衣ヶ浦と知多灣と伊勢內海とこの三つを一緒にして遊び廻りたくなる。蒲郡からは伊勢の神社から志摩の鳥羽に向つて毎日出て行く汽船がある。このひろい一帶の形勝は、優に旅客の興を惹くことが出來ると私は思ふ。伊良湖岬の絕端などは殊に海山の勝を盡してゐる。知多灣には、例の後村上天皇の遺蹟のある篠島海水浴がある。知多半島の絕端には師崎がある。こゝらから見ると、伊良湖岬と志摩の諸島と相接した鳥羽水道の大觀が一目に見える。知多半島の西面には、名古屋あたりからよく出かけて行く大野海水浴がある。

伊勢灣には、辛洲、二見などの海水浴があるが、さう大したものではない。この線では却つて菰野の湯山にでも行つて見る方が避暑の目的に適つてゐる。

○

東京から東の方では、安房は私は餘り好きでない。館山あたりの內海も、白濱あたりの外海もさう好いとは思はない。却つて私は上總の大東岬八幡岬あたりの雄大な風景を取る。九十里濱の太古に似た漁村生活を取る。しかし東海岸では、矢張銚子の酉明か、飯岡あたりが一番好きだ。

利根の下流と霞浦と相接してゐるあたりも中々好い。利根を上下する小蒸汽の中は暑いけれど、芦荻が一面に茂つて、その中から白帆がチラチラ見える形は水彩畫のやうである。概して霞浦一帶の地は秋が好いが、夏もまたわるくない。水樓の簾のかげで剖葦の聲を聞くのも趣に富んでゐる。

常盤線にある海水浴場は、設備の點では無論劣つてゐるだらうけれど、下孫、河原田、助川、河尻皆な松が多い。弓弦を張つたやうに滑かな沙濱はつゞいてゐる。大洗も湊町もわるくはないが、何うせ行つたら、其處まで踏み出して見る方が好い。もつと先へ行つては、久の濱、原釜などといふところがある。山には、殆ど他の奇がない。

東北線では、福島の飯坂、あれはやゝ俗すぎる。白石

川の谷にある小原などといふ温泉や、鎌先、遠刈田、などといふ温泉の方が餘程涼しい。青根温泉から遠く陸前の平野に起伏する丘陵を隔てゝ日本海を望んだ形もちよつと他に見ることが出來ない。海では、矢張松島だ。鹽竈近所に一軒家(うち)を借りて、ボートでも備へてこの風景のすぐれた灣内を遊び廻つたなら、夏なんか何處かに行つて了ふであらうと思はれる。

もつと先に行つては、青森近くの淺蟲温泉が好い。概して東北は氣候が涼しいから、何處ゝ處と言はずに避暑には持つて來いだ。羽前にも羽後にも好い所が澤山ある。最上川は中でも殊にすぐれた峽谷を以て聞えてゐる。月山の雄姿もまた忘れることの出來ない一つである。今では新庄から酒田まで汽車が連絡するやうになつたので、庄内地方にもわけなく行ける。湯ヶ濱、温海(あつみ)、鼠ヶ關、皆な旅客の一度は行つて見るべきところである。酒田から吹浦を通つて、鳥海の裾を越えて、象潟を見て、秋田に出る路も中一晩とまれば樂に行ける。

○北國では、前に書いた赤倉から、直江津に出て行く。米山の下に青海川、鯨波などゝいふすぐれた海水浴場がある。親不知の方へ行つて見ても面白い。しかし越後では、新潟の夏が一番私の心を惹いた。濁つた掘割に靡く楊柳の緑、橋、灯の影、夜毎に白山公園にある榜きぬた、絽の單衣を着た涼しさうな女肌、氷賣の呼聲、いかにも北國の狹斜街(いろまち)といふ感じがはつきりと私の頭に殘つた。涼しいところではないけれど、新潟は夏行つて見るべきところだと私は思ふ。

越中には私の心を惹くやうなところはなかつた。能登では和倉は賑かなところだが、すこし俗すぎる。山中、山代、片山津、加賀の三つの温泉の中では、山中が矢張一番好いけれど、一番温泉場らしい感じがするけれど、長々と滯在してゐたいやうなところではない。越前では芦原(あはら)といふ温泉が鳥渡特色に富んでゐる。海では、敦賀附近が一番好い。

○

京都以西は夏は暑い。避暑地としてすぐれてゐるやうなところはたんとない。しかし山陰線にはやゝ涼しいところがある。舞鶴の海、宮津の海、天橋立、海を一つ向ふに越えて、若狹の小濱、これなどは先づ涼しい方だ。但馬の城の崎は暑い。鳥取から西では、松崎の東郷温泉、これがちよつと靜かな好いところだ。

松江、宍道湖、美保の關、夜見の濱、いづれも海山のすぐれた風景を持つてゐる。

瀨戸内海の汽船の甲板の上は涼しいといふ說だが、特別にさういふ設備のしてあるものなら格別、普通の汽船では、とても涼しいといふわけには行かない。しかし大阪を出て四國をめぐつて九州の油津に行く汽船は、船も大きく、設備も整つてゐて、乘心地が好い。小豆島あたり、屋島あたり、來島瀨戸あたり、伊豫の高濱あたり、中々景色が好い。高濱からは音戶瀨戶を通つて、宇品から宮島に行く汽船もある。嚴島の紅葉谷公園の綠蔭は中國地方に稀に見ると言つて好い位涼しいところだ。岩惣の離座敷で、さゝれ落ちる瀧の流を下に見ながら、欄干に凭つてゐると、暑い夏も忘れて了ふやうに思はれる。

下の關では、赤間宮の下の大吉樓あたりで一晚泊つて見たい。暑いところではあるけれど、流石に港といふ氣分が漂つてゐて、海を渡つて朝鮮まで行つて見たくなるやうな處である。

太宰府のわきの田圃の中にある武藏温泉はいかにも田舍田舍した温泉場で好い。蘆の綠が涼しい蔭をつくつてゐる。ねむの花が咲いてゐたりする。

耶馬溪は夏は涼しいところだなどゝ思つて入つて行くと、大間違だ。旨い鮨は食へるが、蟲が多く蚊が多く、夜は蚊帳の中でなければ食事も出來ないやうなところだ。海では、矢張唐津が好い。虹の松原、西の濱、それから湊の立神岩あたりまで行つて見ると、かなり世離れた靜かな好い心持がする。

別府は色彩の濃やかなところだ。湯の多いのが何より好い。何んな家にも湯があるといふ點だけでも羨しい。海岸に沿つたところよりも、山の中に入つて行つ

たところの方が避暑に適してゐる。

しかし避暑と言ふ方から言はずに、旅行の方から言ふて、まだ行つて見るべき名勝は澤山にある。それに、南に行けば南に行くほど、熱帶的色彩が加はつて、榕樹だの蒲葵だの、芭蕉だのが深く茂つてゐて、ちよつと内地とは思へないやうな濃いカラーがある。海の色なども思ひ切つて碧い。

熊本以南では、球磨川の谷が大きい。人吉あたりは九州にはめつらしいほど嵐氣の多いところである。八代から三太郎の険の方へ行く道には、日奈久といふかなり特色のある好い温泉がある。霧島の山の中腹から錦江灣を見た眺望なども他に多く得られぬものであらうと思ふ。

金泉湯と瑞垣山

遲塚麗水

一

瑞垣山の懐からは、藥草入りの紫水晶が多く出る、其の水晶の髓から滲み出す人肌ほどの温味をもつた泉を引いて、金泉湯の名に呼ばれる温泉の宿である、深山の中の一軒屋、山の名は自から、浮世の外の淸淨の一寰區を劃 その瑞垣である。

甲州は韮崎驛から、須玉川の岸を傳ひ、山に入つて七里の金泉湯と、九里の瑞垣山とは、凡そ東京の四近の山のうちで、罕に看るの奇勝である、殊にこの瑞垣山は、私が今までに看た山のうちで、最も峻秀瑰奇を極めたものであつたと嘆美せざるを得ない、曾て私は、今の皇道館長、前の山梨縣知事武田千代三郎氏から、瑞垣山の勝槪を聽いてゐたが、今から四年前の夏六月、友人と共に八ヶ岳の絶頂を極めた其の翌日、始めて此の温泉に浴し、始めて此の名山を看めたのであつた。

二

私は友人と、丈なす山菅の草いきれに醉はされながら、日盛りの山路を那都玉といふ小さな村に辿りついた、唯ある木蔭に苔淸泉を見つけて、我れ知らず駈け

寄つて掬び飲んだ、手を浸すと、日に焦けた手首が象牙のやうに青白く見える、水の寒さに指が痺れる、木の陰の、犢の寢姿に似た石の上に、誰れが遺れて行つたのか、赤く塗つた鬢櫛が載つてゐた。

「巡禮の櫛遺れ行く清水かな」

と、友人は口吟みながら、髪を洗つて梳つた。

私は苔の石に腰を掛けて、二十萬分一の地圖を披けた、松の落葉を搔き集めたやうな甲斐の山山、其處に熊手の痕を曳き殘したやうな縣道や里道や谿谷や、蟻の群の隊を成して行くかと見える山村水廓、今宵の宿と定めた金泉湯までは、まだ五里にして遠いのである、用意の握飯を出して午餉をしたため、旋て苔の清水と分れた。

長澤の峯を踰えて、田の尻の澤にかゝつた時、路傍の木陰に管笠を敷いて、憩んでゐる若い女があつた、背から重い荷物を卸して、淋漓と流れる額の汗を拭ひながら、重さうに垂がる鬢の後毛を、小指で掬つて梳上げてゐた、銀杏返しに髮を綰ねて、手織の紺の袖なし單衣に、猿袴を穿いてゐた。

「姐さん、此の邊に清水は湧いてゐないか不知」

と友人は訊いて見た。

「此の澤にはありません、旦那さん方、那都玉からお出でになりましたか、彼處には氷のやうな清水が湧いてをりましたに。」

「姐さんも、那都玉の方から來たのか。」

「爾でございます。」

忘れ櫛の主は、巡禮ならで此の商人の娘であつた、復た清水に逢つた時の用意にと、衣兜に入れて來た、友人は　小櫛を出して娘に返した、娘は感謝の笑を捧げて、荷物を解いて梨子の罐詰と、糠をかそめたやうな堅パンを、廉く私達に讓つて呉れた、娘は津金の町から四邊の村へ、菓子や罐詰を卸して廻つてゐるといふ、娘から金泉湯路を詳しく聞いて、其の後から跟いて行つた、岐路へ來た時に、娘は紺の手甲を拑めた手を揚げて、遙かに行手の路を指し教へ、菅の小笠を傾げて會釋をした。

「縁で添ふとも柳澤嫌やよ、女子木を伐る萱を刈る。」

山の峽から風に吹かれて來る涼しい聲は、忘れ小櫛のその娘の歌ふ鄙謠である、私達は少時青嵐の中に立ち盡した。

三

幾つの峠を辿りたどれば、日向大橋の村となる、日は西に腹は何時しか北山時雨、斯る山奥の那處にか寺あつて、入相の鐘の音は晩風に散る、忘れ櫛の娘から求め得た梨子の罐詰、生憎罐切の用意がないので、食はうにも術がない、洋傘の鐺で孔を穿けて、交り〳〵にその甘美な液を吸つた、さて罐の中の梨子を出さうと、手頃の石で劈かうとしたが、罐は小鼓の胴のやうに歪やげたばかりで破れない、石を圍んで竈を作り、その上に罐を載せ、松葉を燃して罐の蠟金を熔かさうと、燻る烟に咽びながら火を吹いたが、これも徒勞に歸して了つた。

友人は流石に年が若いだけに元氣も好い、一足先に失敬して、溫泉の宿から迎ひの人を寄越さうといつて、疾歩に黃昏る丶山の懷へ向つて行く、私はとぼ〳〵と獨り歩んだ、暮れ殘る本谷川、石の淺瀨は雪を噴いて、淀む淵には宵の明星が靑く映る、東の山の背の空は眞珠の色にほの白い、月が山の陰にあるのだ、月よ早く昇れかしと心に念じて、不知案內の山路を心細くも登つて來ると、深い谷の崖路で、すれ〳〵に人の子一人通つて行く、人珍らしく振向くと、其の人の子も歩みを停めた。

「東京のお客さん衆。」

「金泉湯から迎ひに來たか。」

小慧しの少年は、まめやかに私の肩から外套と洋傘とを受け取つて、先に立つ、急雨のやうな谿の水音、吹き貫く風には木の香が高く薫じてゐる、晝ならば帽子も衣も翠微に繚く染まるであらう。

土橋を度ると、漆を盛つたやうな黑い山の陰に、黃いろい燈火が見える、私は今ま始めて溫泉の宿へ着いたのである、谷に枕んだ小窓の障子が、割平と烟脂いろに燈火に染つた、障子が開くと友人の顏が出た。

「おい君、此處だよ、此の部屋だよ。」

私はほの暗い門口を入つて、框に腰を卸して草鞋を解いた。辨慶蟹の爪のやうな洋燈の火影の淡い爐畔に坐つて、宛然夏の御禊でもしてゐるやうに、大きな石魚を刺した幾本の竹串を、灰の中に植えて炙つてゐた宿の主人は、草履と下駄を片足づゝ突つ掛けて、盥に生溫い溫泉を汲んで來て、私の足を洗つて呉れた、黒榴と見紛ふばかりの黒光りする大黒柱に懸けてある八角時計の、鍼は二時半を指したまゝ停つてゐる、山中暦日なし、嬉しいほど暢氣である。

四

夜の八時が晝の二時半、勿論その二時半が、何日の晝の二時半であるかは知らぬ、偶見ると、宿の下男の爺さんの頭の上に椎髷が乘つてゐる、正に現代から四十餘年を遡つた昔である、酷い疱瘡を煩らつた大痲面の、其のつるりと禿げた頭顱の項門に、小さな椎髷の乘つてゐる有樣は、種かぼちやに鹽辛蜻蛉が止つてゐるやうに見える、煤げた天井、山風の吹き入るたびに、黄いろい舌を吐く燻り障子、引手の金物が疾うに落ちて、小判形の双つの黒い眼で人を睨む間の襖子、其の總ての背景が、かぼちやと蜻蛉の其れと共に、驚かれるほど現代とは遠ざかつてゐる。

私は、ともすると山風に吹き消されさうになる手燭の火を、袖で庇ひながら、釘の頭の白く光る古廊下を辿つて行つた、廊下で盡きると其處が湯殿であつた、火の用心と御家流に書いた箱行燈に、菜種油を吸ふ燈心が蚯蚓のやうな鳴く音を靜かに立てゝゐた、浴池の濶さは十疊敷ぐらゐはあつたかと思はれる、人肌ほどの微溫い湯が盈々と湛えられた、私は徐かに肩まで溫泉に浸つた、酸冷の氣が肌に泌みてうそ寒い、浴池の傍に、その溫泉を沸かした鐵砲風呂がある、急いで風呂へ飛び込んだ。

風呂から上つて部屋に還ると、夜食の膳が出てゐた、一尺もある石魚の鹽燒が、黄金いろの鰭を張つて、窄い膳の上にのさばつてゐた、この山中の珍饌に對しては、酒なくばあるべからずだ、酒を喚んだ、淡泊な田

舍酒は、快よく私を醉はした、部屋の前は本谷川に注ぐ溪流である、雨のやうな水音に交つて、河鹿の啼くのが聞える、月は山の端に憩らつた、縹い雲が徐かに流れる、例の椎髻のお爺さんは、飯の給仕をしながら愬ういつた。

「檀那さん、此の山の紅葉は天下一でござります、俺この齢になりましても、秋になるのが樂みでございます、一日看てゐても飽きません。」

椎髻君は、勿論愬んな洗錬された都市的言葉を操らなかつた、武田信玄の軍國主義から出たと傳はる「出來ぬ」「行かず」の謎語めいた言葉であつた。

太古のやうな靜かな山、澄んだ月、縹い雲、私は唐の李白の「秦山楚山皆な白雲、白雲處々長へに君に從ふ、君は入る楚山の中、雲も亦た君に從ふて湘水を渡る、湘水の上、女蘿の衣、白雲臥すに堪へたり君早く歸れ」の詩を歌つた。

青い光を曳いて螢が一つ流れて來て、私の肩を掠めた。

五

鞨鼓鳥の啼く音に曉の夢は覺めた、朝餐の前に一と風呂浴びて、溪の邊を散歩してゐると、宿の少年が鏨を持つて來て紀念の爲めに石に題字をしろといふ、見ると路傍に赭黝い大きな凝灰岩が立つてゐる、其の石の面には人の名が一杯に彫られてある、鐵釘流や鹿角菜流の中に交つて、不折流の字も見えた、私は少年の肩を借りて岩の頂に攀ぢ登り、一つ捻つて北魏雲峯山の題字の書體を眞似て彫つた、鏨を執つて石を劉ると、かん／＼と四邊の山に谺した、友人も弘法大師の風信帖の字を眞似て彫つた、石を劉る音が山に谺して、宛から雉子の鳴く音に聞かれる。

朝餐の膳にも、尺に餘る石魚が上せられた、香の物の菜が脆美な味をもつてゐた、給仕の少年に訊くと、うるひといふものだといふ、車前草に似た草だ、擬寶珠のやうな花が咲くので、東京では此の草を擬寶珠といふ、其の草の莖を鹽漬にしたものだ、これも山中の珍饌である、朝餐を濟ませて、少年に用意の握飯を持

せて、いよ／＼金泉湯八景と、瑞垣山を看に出懸けた。

溫泉の宿の背から、親不知の棧道を辿つて、針の山といふのを仰ぎ看た、御嶽の覺圓峯に背た山だ、其の山の陰を行くと、やがて本谷川の上流で、青葉の露も薄氷るといふ峯の木立は、昔からまだ斧の刄に木の脂が塗られないといふ處女林、其の繁つた間から、幾條となく靑い日影が散り落ちて、眞靑に澄んだ、深潭の上に敷く、ちらり／＼と靑く閃めき、白く閃めき、紫に閃めくは岩魚の游ぶ影である、こゝを日受の淵といふ、苔蒸す獨木橋を覺束なくも度つて行くと、奔湍二段の瀧となる二段瀧、銚子の嘴のやうな岩角から飛泉跳つてたぎり落ちる銚子岩、立ち昇る水烟に日が射して、不斷の虹を描き成すのである、峯の地を抽くやうな矢立岩、左右の崖も谷底も、縹碧の一枚岩で、水、綠礬の色を凝して聲なく流れる玉露谷、地藏瀧、龜藏瀧、大きな岩で劈けた天の岩戶、中に最も驚くべきは、谷の眞中に、形も大きさも千石船ほどある大磐石の其上に、生へた大杉三四本、さながら帆柱のさまに立つて、梢は雲を拂はんばかり、これほどの大巖が、磵中の石の上に乘つてゐて、瑞垣颪に動搖み立つ靑嵐、寄せては返す大波の音とばかり、天の磐船自づから搖ぎ出すかと想はれて、看る人の氣魄もをのゝく、御嶽道の昇仙峽は、萬右衞門その人あつて、道を拓きて奇勝を普ねく天下に知らせた、若し今代に二世萬右その人あつて金泉湯一帶の草萊を闢き、其の幽光を揚げたなら、應に第二の昇仙峽となるであらうと私は思つた。

六

溪を涉り叉た山に入る、眼界はからりと豁けて、奈良の嫩草山に似た草山が三つ五つ、笠を覆せたやうになだらかに重つてゐる、大楢、白樺、老松などが、繪の心に遠近に點綴された悠暢とした其の眺めは、今まで雪舟、山樂、探幽などの畫を看た眼を移して宗達、光琳、一蝶、抱一の繪を觀るやうな心地がする、野馬の幾群が、兒を伴れて遊んでゐる、驪や、騘や、鹿毛、栗毛、蘆毛など、立つもの、嘶くもの、飮むもの、樹の幹に背を摩るもの、草の中に臥てゐるもの、弄るも

の止まるもの、皆な自然の姿態あつて、人を見ても恐れない、草山の草青く烟つて、遙かに碧い雲に接するところ、其處に摩天の勢ひで瑞垣山はそゝり立つてゐるのである。

草山の頂の爽らな處に、これも自然に絵の心に適つた茅屋がある、樵と農とを兼ねた人が棲んでゐる、私は其の茅屋の縁に腰をかけて、少時は我を忘れてこの山を仰ぎ看めた。

私は、天下に這麼な美しい岩山が復とあらうかと嘆美しました、蜂巒のたゝずまゐを看めると、北から引いてそゝり立つ峯、それが大きな凹字を描いて、空を抽くかと見れば、劒を植えたやうな尖峯が攅り立つ、やがて爽らかに低くなると、忽ち多寶塔のやうな形の奇峯が湧く、其の根が寛やかに低くなつて、下に腰高饅頭のやうな巒が出る、巒に隣つて、烏帽子の形した大雄峯が現はれて其れが金峯山に續いてゐる、峯は皆な巖、巒は都て樹が生ひ茂る、其の峯の岩の色は日光の曲折で、稜は碧く皺は濃紫、好事家が涎を流す秦代の鏡、漢時の鼎、色も澤もそれに似て蒼古幽遠の看めである、巒はと見れば、積翠滴たるばかり、大小米點、今の世にある大畫家のうちで、誰か此の潑墨の妙を傳うものがあるかと、私は坐ろ此の山の美しき姿態に心酔して了つた。

茅屋の主人は手摘の新茶を淪れてくれた、茶請に出した澤庵のやうなものゝ摘んで食べたが、唯の澤庵ではないらしい、訊いて見ると、山の芋を乾して澤庵漬にしたものだといふ、これも亦た深山の中の異味である、家の周圍には、水晶屑が小礫のやうに敷いてある、

私は仙家の珠璣の庭の心地に水晶の巡を踏んで、更に青草烟る草山の巓へと登つた、仰ぎ見れば、瑞垣山の中ほどの峭峯の絶頂から、白く一綫、瀧が長く懸つて居た、曉の頃に降つた雨で新たに瀧が作られたのであるといふ、金泉湯の主人の話しでは、山の奥に七段の瀧があり、一段毎に潭となつて、湛えては復た落ち落ちては復た湛ふ、誠に奇觀であるといふ、併し山が餘りに奇峭である爲めに、登つた者は多くない、此の山

に棲む人でも、山路を知つてゐるのは、數年前武田知事が登つた時、案內に立つた杣人のみだといふ、私は登らずとも善いと思つた、看めるだけで滿足した。
歸途には其處から眞直に山を降り、黑森の橋で少年に分れ、御門、江草の寒村を過ぎ、須玉川を渡ること三たび、七里の路を大豆生田まで來て、其處で始めて圓太郎馬車を傭ひ、二里にして韮崎の驛に着いた。

七

私が此の地に游んだのは、四年前の夏の初であつた越えて一年、甲州の增富村に、ラヂユーム泉が湧くといふ噂さが世間に喧傳された、あの人肌ほどのぬくみのある、酸冷な溫泉を湛へる金泉湯は、正しく其のラヂユーム泉であつたのである、文明は一足飛に甲州の山奥へ飛び込んで來た、午後二時半の柱時計は、慌たゞしく鍼を動かし初めたであらう、かぼちや頭の鹽辛蜻蛉も、脆くも鋏の刄に落されたであらう、蠅の糞が銀沙子のやうに光つてゐる彼の天井も、杉の柾板と變つたであらう、風の吹く毎に、黃いろい舌を吐く破障子も、白い紙に張り代へられ、黑い小判形の眼で人を睨む古襖子も、漫遊畫家の塗鴉つた書や畫の襖子に換へられたであらう、が、其の自然の背景は、昔ながらであつて欲しい、本谷の水、瑞垣の山、長へに碧りに永しへに靑からむことを望むのである。

此の溫泉は、武田信玄時代に、病傷兵の保養湯であつたと人はいふ、爾うかも知れない、甲斐には信玄の隱し湯といふのがある、富士川緣の波木井から少し下流の、下部にも、金創に妙効のある溫泉がある、これも微溫泉で、金泉湯と同質の溫泉であらうと想はれる、信玄の隱湯と呼ばれて、當時は病傷兵の療養地であつたと云ふ。

私は、烟霞の痼癖ある天下の人に、瑞垣山を看ることをお勸めする、瑞垣山は、天下の奇峯である。

三浦三崎

大町桂月

一

古人曰く、小人窮すれば盜を爲し、君子窮すれば亂を爲すとかや、茲に裸男と自稱する男あり。何よりも旅行を好めど、旅行するにも何するにも先立つ例のものなし。知れる限りの書肆に前借を申込みたれど、見事跳付けられ、あゝ天なる哉、命なる哉と、空しく健脚を撫して歎息しけるが、君子にも非ず、小人にも非ざる裸男、窮して、山神の臍繰金を思ひ浮べ、拜一拜して曰く、南無山神大明神、海水浴ほど子供に効能あるものは無し、この年頃、犢鼻褌を質に入れても、海水浴に出掛くるが故に、一家皆健康になり、藥代も要らぬやうになりたり。今年も何處かの海水に浴せむと欲す。我れ先づ行きて、好き場所を探りて來むと云へば、妻も共にといふ。やれ〳〵、山神に附纒はれては思ふやうに酒も飮めず、又思ふやうに冒險も出來ず、一願叶ひて又一願、山神の船に弱きことを思ひ浮べ、目ざす處は三浦三崎、汽車は通ぜず、船に由らざるべからず。東京灣内は浪穩かなるが、觀音崎を過ぐれば浪大に荒く、劍ヶ崎を廻れば猶一層荒しと威して見たれど、子供の爲めならば、船暈も何のそのとて、頑として動かず。さらばとて、打連れて、靈岸島より船に乘る。

日よけの設なくして、炎天に照りつけらるれど、魚氣腥き室内よりはとて、甲板に上るより早く、山神は蝙蝠傘を顏にさしかけて横臥す。十七八の少女も同じく横臥しけるが。父と覺しき人、之に蝙蝠傘をさしかけたり。女は今一人、五十内外、田舍者と見えて、色赤黑く、船にも平氣、炎天にも傘さゝずして平氣也。男は十人ばかり、室内の人數は、甲板の上よりも少し多く、殊に老いたる男女がおもにて、都人士らしき人は居らず。迎へし鹿野山、いつしか送るやうになり、鋸山代りて迎ふ。右の方、追濱とおぼしきあたりの空、富士の頂よりは低く、箱根の頂よりは高き處を、飛行

機一つ飛ぶ。睡れる山神の顏を見返りて、子供つれて居らばなど思ふ。觀音崎を右に見る頃、南風强く吹き出でゝ、浪高し。二千年の昔、橘姬が夫の爲めに犧牲となり給ひし處、海神今も血に渇すらむ、驚濤舳頭を呑みて、飛沫甲板に散る。ボーイ氣を利かして、ブリキ製の吐器を三つばかり持ち來り、其一つを山神の口邊に置き、今一つを少女の口邊に置き、今一つを青白き顏せる男の側に置く。少女吐く。青白の男も吐く。山神は幸にも吐くには至らざりしが、始終頭があがらず。風光を賞する餘裕もなし。パンよ〳〵と叫びつゝせつぱつまりて世を渡る人も斯くやと氣の毒也。

三崎に上陸して二三時間も宿屋に休息するに非ずんば、山神の御輿は動かされざるべしと思ひの外、船中の樣子とは別人のやうに元氣也。最も海水浴に適する處と聞くまゝに、西の方さして、二町谷の濱に至り、貸屋は無きかと尋ね廻りたれども、何處にても斷られたり。兎も角も午食に有りつかむとて、城ヶ島に對する旅館に投じて、山神は食ひ、裸男は飮む。櫻の御所桃の御所、椿の御所などの跡さへありて、右大將家のしば〳〵遊覽せし處、山神は唯一目見て、箱庭的なりといふ。宿屋にて我慢せむかとて、費用の事など問へばそれは〳〵非常の込合にて、一室に五六人相宿を願ふ樣なれば、素人屋を借らるゝ方が御都合よからむと宿屋の女中にも體裁よく斷られたり。

二

渡舟にて、城ヶ島に渡る。東西二十町、南北五町、三崎の防波堤となれる島山也。常光寺の境内を通り、水難救濟會監視所の側を過ぎて、馬の脊に至る。怒濤脚下の巖を嚙む。左は房州、右は伊豆、前には雲の峰聳ゆ。その雲の峰少し薄らぎて、中より大島あらはる。馬の脊は、やがて馬の首となり、長巖海に突出す。之を赤羽根と稱す。懸崖を斜に刳りて、路を通ず。下りて右にゆけば、つき拔けたる穴あり。左に行きても、つき拔けたる穴あり。子供の土産にとて、親も子供の昔にかへり、山神は貝を拾ひ、裸男は寄居蟲を捕へて歩を返す。

常光寺の前を右折して、遊ヶ崎に至る。濱一面に赤色の海藻を干したり。一老婦を見付けて、何といふものぞと問へば、『てんぐさ』といふ。何にするぞと問へば信州にて『かんてん』にするなりといふ。凡そ二三町の間、砂白く、水澄み、遠淺にして、浪なく、海水浴場として、天下無類也。この島に、人家凡そ百軒あり。宿屋は無し。貸間ありと聞きつるまゝに、そこゝと見廻りたれど、思はしき家なかりければ、問ひあはせもせずして、三崎にもどり、松輪さして行く。

一里ばかり歩みて、漸く海に出でたるかと思へば、又山に上る。上りては下り、下りては又上る。人に逢ふ毎に路を問ひて、まだか〳〵と行く程に、日は暮れむとす。最後に一老婦に問ひけるが、その老婦追蹤して來り、日暮れては、不知案内の路さぞ困難ならむ。我には迂路なれど、宿屋のある處まで案内せむとて、先に立つて行く。數町にして、海邊に出づ。茅屋ぽつ〳〵あり。あれが宿屋なりと指す家を見れば、二階建にして、宿屋の看板を揭げたり。これが松輪唯一の宿屋也。やれ嬉しやと、入りて宿を乞へば、都合惡しとて斷る。これは意外千萬也。家の内を見れば、行燈の光ほのぐらきに、ます〳〵意外也。宿貸さぬ由を案内の老婦に告ぐれば、老婦往きて談判したれど、矢張り駄目也。菓子賣る店に至り、店の主人に談判して貰ひたれど、矢張り駄目也。主人氣の毒がりて、ともかくもとて、其家に請ず。主人は六十あまりの老人なるがさき頃、妻を失ひて、孤棲せる由也。案内の老婦、爲めに米を炊ぎ、主人爲めに魚と酒とを買ひ來る。これ亦以て意外也。意外の上にも又意外、案内の老婆とこゝの主人との情にて、一夜安らかに過しぬ。

松輪には、松輪館といふ海水浴の旅館ありけるが、今は嘉納治五郎先生の別莊となり、暑中休暇の際、講道館の學生など來たり宿して、水泳の稽古する外には海水浴に來るものもなしとの事也。塵外の別天地、海の波は寄すれども、文明の波は寄せず、電燈輝く二十世紀の世の中なほ行燈を用ゐるの一事にても、萬事推して知るべし。海水浴を爲す濱は北濱とて、東京灣に

面し、浪靜にして淸きこと、城ヶ島の遊ヶ崎に讓らず。海水浴に來らるゝならば、家は都合せむといふ。ます〳〵意外也。意外づくめにて、思ふこと、思ひがけずも叶ひたり。

三

汽船のみは日々出入すれども、人力車も馬車も通はぬ處、菊名へまではとて徒歩す。鰯船幾艘となく、赤旗を立てゝ、威勢よく漕ぎもどる。一老夫、鰯一杯入れたる味噌漉しを持ち行く。いくらにて買ひたるにかと山神問へば、唯貰ひたるなり。誰が行きても呉れるよといふ。東京なら、いくらするぞと裸男問へば、少くとも二十錢なりと山神答ふ。行きちがひたる一老女も、鰯を持てり。分量は老夫の二倍以上もあり。とかく女は慾張りなりと、山神さゝやきながら笑ふ。斯くいふ山神も五十步百步に非ずやと、裸男又笑ふ。菊名に至りて、横須賀より浦賀を經て三崎に通ずる縣道に出づ。閻魔堂の前の一店に就きて、ラムネを飮み、馬車はと問へば、一時間ばかり前に通りたり。次に來るは、午後二時頃なりといふ。時計を見れば、午前十時也。四時間も空しく待たれず。人力車はと問へば、唯一臺、二町ばかり先にあるのみなりといふ。山神だけ之に乘せむと、腹の中に決めて、行けど〳〵車は見當らず。日はぱつと照り付けて、暑さ甚し。口には出さねど、疲れたる證據には、山神浦賀への距離を問ふこと頻り也。久里濱のペルリ上陸紀念碑へは、往復半里の迂路、待つて居らずやと云へば、迂路は一時の苦、見落しては一生の殘念なりと氣張る。行く〳〵紀念碑の二階建の家よりも高く屹立するを見る。これや日本一の石碑なるべき、偉なる哉、大なる哉、高さ五丈三尺、『北米合衆國水師提督伯理上陸紀念碑』の十六字、伊藤博文公の書する所に係る、構內に掛茶屋あり。構外に酒樓あり。日本國民がペルリの恩を感謝するや、大に好し。されど、ペルリは使者也。知らず、日本國民にして、ペルリを遣はしたる主人公の大統領ミルラード、フイルモーアの名を記する者、幾人かある。六十年の昔、米國は、日本の開國を促したるが今は自から

國を鎖さむとす。日本のペルリを要する時世とはなりける也。

浦賀横須賀間は、凡そ二里、人力車も通へば、馬車も自動車も通ふ。人力車に乘りて横須賀に達し、軍港の見物は、子供つれたる時にとて、直に汽車に乘る。書生風の若き男、裸男に賣藥の廣告を呉るゝと共に、藥を四五粒呉れたり。世には深切なる人もあるものかなと、裸男うれし涙をこぼしながら、その藥をばくりと口に入るれば、やがて買つて呉れと、藥を入れたる袋を出す。さては、賣るための方便なりしかと、後悔臍を嚙むも及ばず。世には裸男の如き馬鹿者はあらざるべけれども、若しもやとの老婆心、旅の恥をそのまゝに書きしるすもの也。

能登の海

吉江喬松

富山灣の船上から眺めやつたくらゐ所謂日本アルプスの大景を一望におさめ得る場處は多く他にあるまいと思ふ。私達の常々眺めてゐるのは表日本アルプス――假りにさういふ字が用ひられるとすれば――である。この灣の船上から見る大景はその山嶺の裏面である。裏日本アルプスである。私は以前に飛驒へ旅行した時、その連嶺の中で乘鞍の後姿を遠く仰いで、妙になつかしい思ひをしたのであつたが、その連嶺の一列雲を凌いで聳立ち、走つてゐるのを見ると、いかにも大きな島山が眼前に展開せられてゐる感じがした。

北越の海で、私達に特殊の感じを與へた場處は、信濃川の河口と、親不知とであつた。一つは山國の信濃の中央以北の水を悉く集めて海へまで注ぎ出たところ、最一つはさしも巨きな山勢が、走れるだけ走り、伸びるだけ伸びて、その勢が盡きて海へ沒入した處であつた。いづれも信濃を構成してゐる山と水との結末の姿を見せる場處であつた。物の果て、勢の末を思はせる一種の寂しさが伴つてゐた。

それに北越の夏は、日光が明るく照りつけても、そ

れが地上から反射するのでもなく、謐く海濱の砂の中へ吸ひ込まれて行くやうな、波のひらめきにも、何物にかに押えられてわずかに頭をあげ、身をすべらして行くやうな氣合ひであつた。海水そのものにも不安が漂つてゐた。おだやかな波が、ゆるく寄せて來て、鈍さうな腕を伸ばして砂上へ、爬ひ上らうとして、それが出來ずに恨めしげに、陸を振り返りがちに退いて行つた。水中には重い冷たさが籠つてゐて、それが知らず〱深みへ人の體軀を運んで行つた。

富山灣の波もおだやかではあつた。併し冷たい重い潮の流れと深みに藏した濃紺の波はいつも海上にゐる人の味ふ爽かさばかりを與へなかつた。ホライゾンの上も遠州灘あたりに見る晴れやかさと、輝かしさとに欠けてゐた。いつも曇り勝ちで、何を包んでゐるか見果てがつかなかつた。この裏日本の海上から見やつた裏日本アルプスはまだ、嚴めしい中の晴かさではなく嚴めしい中の冷たさ寂しさを見せてゐた。

一列の雲が遙か遠い東南の果てから湧いて、みるみる山嶺の中腹以上を横に爬ひ伸びて來た。まろらかな八月の濃紺の空からは白い日の光がそれ等連山の頂へ直射して、登らうとする雲を中腹以下へ追ひ下げやうとしてゐるやうに見えた。今日あたりでも、やはり、あの雲を拔けて、あの連嶺の絶端に立つて、遠くに見える、そして今自分等の航行してゐるこの海上を眺めてゐる人があるに違ひない。遠い東南の果てなる御岳の頂から、稍々近き鎗ヶ岳、大蓮華、立山の頂から、岩の上や、傾斜地に立つて、遠く海上を見おろしてゐる人があるに違ひない。山の頂きに立つて第一に人が心を引かれるのは天際にひらめく遠波の藍の如き、太古の時代に見る如き、また大きな摸型圖に見る如き輝きである。自分等の船はいまその遠さ、藍の如き波のひらめきの中に包まれて、山上にゐる人々の視線の中におさめられてゐるのである。そんな考へが不圖私の頭へ浮んで來た。

陸地を歩いてゐる人は、必ずしも自分が何人にかによつて眺められてゐるとは意識しないのである。けれ

ど海へ出ると、そして周圍の廣やかな海上で、陸地の見える時、殊に山影が眺められる時、必ずその船が何人かの視線におさめられ、何人かの瞳にうつゝてゐるといふ感じを抱くものである。陸地にゐる時と、海上にゐる時との心持の相異は、人を見るものと、見らるゝ者との相異である。海上にゐる船は、大きな鏡に寫つた影の如きものである。

大蓮華の中腹にきたない温泉宿がある。「蓮華の湯」と信州の際では呼んでゐる。この大連嶺の北へ迫つた麓の高原を越えて、この湯まで登るには一日かゝる。夏花が寂しく咲いて、原上の涼しい寂しさを破る鶯の聲を聞きながら野から林へ、林から山へ登つて、そこまで辿りつくのであるが、眞夏でも朝は霜が置くかと思ふほど寒い。その宿の裏口から遠く雲の中に寄せる北越の海を見たことがあつた。能登の岬が薄黒く墨繪のやうに浮んでゐた。

自分等の船はいま富山灣の上を、その能登の岬へ向つてゐるのであつた。雲の卷きつ伸びつする姿は徐々として、しかもたえまがなかつた。處々に連峯の頂きを殘して、いまではもう連嶺の長さよりも伸びて、海上までも浮び出で、滑り出てゐた。山嶺の結末、親不知のあたりもその雲の下に隱れてしまつた。越中の國は船上から眺めると殆ど一帶の傾斜地をなしてゐた。山麓から海面へ走る僅かのスロープ、それが越中といふ一國を形成してゐるやうであつた。そしてその山と海とをつなぐ自然の經路は、宛かも逆落しのやうに、幾條の大きな瀑布のやうになつて、黄白く光つてゐる。射水、黒檜、その他の諸川であつた。

黒檜川の渡渉は日本アルプスの横斷者にとつては、是非しなければならない危險な、また興味多い經驗の一つである。流程三四十里もあらうか、この川は人跡絶えた大山嶺の背面の水を集めて、直ちに海に注ぎ出るのである。彼女が人寰に出づる時は、直ちに海に入る時である。天才が晩年にいたつて初めて人に知らるゝ如く、知られたる時は既に死期の迫つてゐる如く、同じ狀態を我が黒檜川に於て見るのである。その他

川にせよ裏日本アルプスを源泉地としてゐる河は、大方心急はしく海へ向つてゐる。信濃川が洋々として百里以上を流れて、眠るが如く、巨人の臨終の如き姿をして大海に流入するとは非常に趣きが異つてゐる。中越の諸川は山を脱れて、海に向ふ間にいかにも氣忙はしげな姿を呈してゐる。

併し越中といふ國は私一個にとつては妙なロマンスを與えてくれるので特殊な興味を持つてゐる。私はこの船へ乘る前夜、魚津へ泊つたのであつた。それは魚津の海上に現はれる蜃氣樓を見るためでもなかつた。濱邊に光る夜光虫を見るためもなかつた。併し私には魚津が特殊の興味を與えた。それは少年時に、老祖母などからいつも聞かせられてゐた昔譚であつた。それは私達の祖先が魚津の近くに昔し或る城を守つてゐたことがあるといふことであつた。その地の小さな城が上杉氏に攻め落されて多くの人が漂泊して信濃へ來たといふ事であつた、軍記類を讀むようになつてから私は、その頃のことを心にとめて、いろ〳〵漁つて見たりしたのであつた。幼なきロマンテシストの夢はよくその城の沒落を描いて、妙に悲壯な感じを抱いたりしたのであつた。

親不知で汽車を降りて、わざ〳〵山傳ひ古道の跡を海岸へ出て、丁度日沒頃の華かな寂しい感じを味つたその晩、富山まで行くつもりを、不圖そんなロマンスを思ひ出して、魚津へ泊つたのであつた。魚津の夜はなか〳〵に暑苦しく、海濱へ出で夜を更かしても、殆ど眠れなかつた。朝になつて雲をつかむやうな昔譚を何人にか尋ねて、古城の跡を搜がし出す元氣もなくなつて、昔のロマンスをそのまゝのロマンスにとゞめて伏木へ出て船に乘つたのであつた。けれど、何となくこの國が懷かしかつた。妙な時代錯誤が假令へ一瞬間でも私の頭の一隅を占めてゐたことは事實である。

船になれない私には不安な海上が何となく物憂かつた。實際あの雄大な山嶺の光景が、動きなき姿をもつて私の心を靜めてくれなかつたら、私の弱い頭はぐら〳〵したかもしれなかつた。私は小さな船の甲板の欄

にすがつて、船下の波をば見ないで、遠く山の姿ばかりを仰いでゐた。動ぎなき山の姿、假令へそれが後姿であつたにもせよ、たとへ、冷たい嚴しさであつたにせよ、私には不斷の力の源泉たることは同じであつた。いな私ばかりではなかつたらう。この灣上をこの船に乘つて行く人々にとつて、仰ぐ可きあの山嶺の姿がなかつたならば、必ず胸苦しい思ひに惱まされたに異ひない。山の姿は荒らぶる海を取鎭める巨きな神の姿であつた。

　雲の姿はもう長く海へ引き伸びて、海上は一層ぼんやりした姿をとるやうになつた。佐渡の島の影も見えない。海上の空も薄黄な色にどんよりした鈍い光を見せてゐるばかり、海氣の爽かさゝえないやうな氣がした。

　能登が次第に近づいて來た。七尾灣の入口は岬が兩側から迫り、小島が浮かび、それ等の岬角にも小島にも松が群生して、海面は一層平かになつて來た。大小の島の點在することが次第に多くなり、その間を縫ふやうに、めぐるやうにして船は奥へ奥へとはいつて行つた。七尾の港も至つて寂しい小港で、船がならす滊笛が冥冥の空寂を破るのに駭かされて、短艇があはてゝ棧橋から漕ぎ出して來た。

　七尾から奥は全くの多島海であつた。九十九灣とか呼ばれてゐるあたり、能登の岬角がさまぐ\に入り亂れて、幾つかの島に碎け、小部落のある島もあれば、ないのもある。全島が松の林で覆はれてゐるのもあれば、小さきながら猶奥深く入江をきざんで細かな狹谷を抱いてゐるのもある。海なのやら湖水なのやらけじめのつかない光景であつた。

　小さな汽船の走つて行くには富山灣の不安な廣大さよりもこの變化多い能登灣の方が遙かにふさはしかつた。船は初めてアット、ホームの心持ちを抱き得たかの如く、元氣よく船首を彼方此方とめぐらし曲げて、島の中を、灣の奥へ奥へと泳ぎ入つた。住みなれた水へ歸つて來た大きな波鳥のやうに、兩舷に波を搔き分けて、兩翼に波を浴びて、勢よく進んで行つた。

能登灣の海氣が立ちのぼつて、それが伏木の港からこの灣の口まで引き伸びてゐる半島の山々に遮られてそれが自由に外洋の海氣と流れ合はず、山上にたたなはつてゐる時、その海氣の中に船の姿や、人馬往來の形や、村落の光景やが浮び上つて、朦朧たる中に、それが暫くの間つゞいて見られるのである。丁度、それが對岸魚津の濱から眺める時、早曉のころ、日没のころ、不思議な姿を呈するのである。能登灣の奥の秘密が暫く空に反映して、人々の視線にはいるのであらう。

島と島との間の小さな瀬戸では潮の流れがさすがに急になつて、船の泳ぐになか〳〵骨が折れるやうに感じられる。水は兩方の島の岩壁に音を立てゝ打當り、力を籠めて、それより中へは、何者をも入れまいと努めてゞもゐるかのやうである。けれど、その瀬戸を突き切ると、稍々平かな、なほ少し奥へはいると、眞青な水が澄み切つて、深くよどんで、殆ど張り結めた金屬板の面のやうで、船はその上を滑つて行くやうにしか思はれない。

最う仰ぐべき巨きな山嶺の姿は、船が能登の灣口を廻ると同時に、視線をそれて、見えなくなつてゐた。けれど今は眼前に展開する島々が單調を破つて、限りなき慰籍を與えてくれる。實際小さな島に限られて、殆ど一生それから出たこともなく終る人もあらう。飛彈の山の中で、一生自分の村から出たことのない人の話を聞いたが、これ等の島にも確かにそんな人がゐるに違ひない。

松の樹の多い檜葉の樹の多い能登の岬角は、幾重にも折りたゝまれて、變化は果てしがなく思はれる。能登灣は、灣口を大きな島で遮られて、またその灣内は東西に分れ、それに幾つかの島を浮べてゐる。和倉の溫泉はその灣の分れ目にありて、兩側に海を控へ、前面を島で遮られてゐた。船は灣内の懐の奥深くはいつて、吸ひつくやうにその溫泉の岬角へとまつた。

私は明日この灣の岸づたひ、まだ奥深く、能登の絶端まで行く目的で歩くことを考へながら船から上つた。

盆踊

黒頭巾

其一

●趣味の盆踊は盆唄に表現さる。「揃うた〳〵踊子が揃うた。稲の出穂よりまだ揃うた」の唄を聞けば、盆踊は田舍の趣味なるを知るべし。

●盆踊には約束無し。踊子が、稲の出穂よりも善く揃うたといふは、踊子が揃うの、自然の動機に出で、期せずして、稲の出穂よりも揃うを見る、而して稲の出穂の一語、豐年を言はずして、豐年の氣分自から其の中に在り。豐年に、稲の出穂の善く揃うとき、踊子は稲の出穂よりも、更に善く揃う。

●踊子が、稲の出穂よりも善く揃うとき、彼等は踊つて、踊つて、踊り拔かずんば已まず。『音頭とる人、橋から落ちる、橋の下でも音頭とる』橋下に水ありや、無しや。橋下に水ありとも、水中の音頭取りは、音頭を取つて已まず、踊子が踊つて已まざるは、言はずして明らかなり。

●「盆が來たのに、踊らぬ奴は、白痴で、愚鈍で、尾が足とぬ」またいはく「盆の踊に踊らぬ奴は、地佛、金佛、石佛」およそ盆の踊に、人の形を爲すもの、地佛、金佛、石佛の外、踊らぬ者無きを見るべし。人に非ずと雖、また踊る。而して其の踊るや、「踊れ〳〵、品よくちやと、庭のお草の枯れるまで」

其二

●吾輩は、夏の草木の、茂りに茂れるが如く、盆唄の氣分の、放縱、自由にして、草木繁生の氣、人間の口より迸出するを愛す、濡れたる手拭を振れば水滴、迸發す。盆唄を唄へば、天地清新の精神、草木繁生の光景、水霧の如くに飛散して、人の眼前に在り。

●花咲き、山笑へども、人に、媚を寄するには非ず。草木の、茂りたき儘に、茂れるも、敢へて、人に向つて放縱を誇らんとするにも非ず。

●人の眼中に人あり。ゆゑに、人の言に、傍若無人

言少し、草木山川の眼中に人あること無し、故に、山川草木は、傍若無人の態を爲す。山川草木の氣分を野趣といふ。

●盆踊には野趣あり。盆唄は野趣の唄ならずんばあらず。其の踊るは人事の約束に依らず。自然の生動の氣分に冥合す。其の歌ふは、自然の聲に共鳴するものなり。

●「踊に見に來て、踊らぬ奴は、早く小便こいて、寝て仕舞へ」自然は放縱なり。盆唄は則ち放縱自由を極むるものならずんばあらず。

●人間の野趣は、官と野とに依らず。野人にも官趣無きに非ず。野草には官趣ある事無し。盆踊は、野草の揺曳する如くに踊る。些の官趣象徴するものは、すべて盆唄に排斥せらる。歌はずや「わしは小池の鯉鮒なれど、なまづ男はいやでそろ」

其三

●盆唄は、野の中に歌ひ初められたるが故に、其歌ふもの、皆。草木、自然を象徴せざるは無し。譬へばバイブルを讀むの氣分あり。基督は無學にして、草木、自然を語れり。日本にて、野趣の文學、第一は則ち盆唄ならずんばあらず。

●齊しく聖經といふと雖、論語は、餘りに人事に執著して、人臭多し。バイブルは草木、自然の中に放在するを以て野趣多し。譬へば、論語は煉瓦屋の如く、バイブルは茅屋の如し。而して盆唄は喬木の高枝に掛けたる鳥の巣の如し。

●鳥の巣は、野趣の凝結せるものなり。仰いで見れば高きより人を瞰下したる、傍若無人の態度、心惡くしとも心惡くし。人間、唯だ、詩情を以て、鳥巣に對す可きのみ。

●家に住める詩人は、詩を作るを得べし、鳥の巣を作る能はず。鳥の巣は自然の詩なり。町の、賢き詩人、學者は、盆唄を見る事、鳥の巣を望むが如くならずんばあらず。

●日本の古文學は、支那の影響を受けしこと餘りに多く、野趣を失ひ、自由放縱の氣を失ひ、技巧あれども不自然に流る。自由の文學は、士君子を去つて市井に落ち、田間に落ちたり。盆唄は、野趣を滋ふ、野趣を滋ゆるは則ち日本民族の自然の聲を響かしむる所以なり。

●盆唄に、「若い女子の、殿御の無いは、笠に、締緒の無い如く」といふ。昔の江戸に歌ふものといへども、

尙ほ盆唄には武藏野の氣分あり。「ぼん〳〵〳〵は今日、明日ばかり、明日は嫁の萎草、萎草、萎れた草を櫓へ上げて、下から見いれば木瓜の花、ぼけの花」

其四

●盆唄は自然の聲なるを以て、其の歌、皆、自然を詠じ、自然の草木に調せざるは無し。盆唄には人工の權威を認めず。唯だ自然の力の發動を見るのみ。

●盆唄は自然詩なるを以て、餘韻盡きず、含蓄は自から其の中に在りて露骨ならず。諷刺あり、寓意ありと思ふは、人の思ふに任かす。唄は唯だ自然の儘に歌ふのみなり。

●籠鳥の歌ふは、巧なれども、巧なるが故に、野趣無し。林鳥の歌ふは、訓練無きも、趣味、自から其の中に在り。夏の山路を行きて、鶯を聞き、杜鵑の啼くを聞く。此の刹那の詩味、人を涼殺すること、滿背の汗して、端無く、涼萬斛の淸泉に逢著するが如し。

●林鳥を聞くの快美なるは、背景の美なればなり。籠鳥には「自然」の背景無し。盆唄には「自然」の背景あり。盆唄の歌ふ可きは、其の背景に存せずんばあらず。

●「不二の裾野の一本薄、何時か穗に出て亂れあふ」或は「人が云ひます、此方の事を、梅や櫻のとり〳〵に」と唄ふを聞けば、背景の情味、盡きず。

●團十郎は江戸の誇なり。誇といふは、人間の誇なり人間の誇は、盆唄の前には其の威力を失ふ。盆唄は、眼中、團十郎無し。「見たか、見たか、團十郎を見たか身丈より高い刀を持ちて、今切る、切ると、おどかアしやる。おどかアしやる」と歌ふを見よ。

其五

●山川草木、自然に、地方色あるが如く、盆唄は自から地方色を發揮しつゝあり。若し盆唄の地方色を論ぜば一々、地方の盆唄を說からざる可らず。吾輩試みに其の一二を擧ぐ。

●大和國の盆唄の中に「梅と櫻と、吉野へいたら、梅は酸いとて戾された」といふ。或は「一に當麻の糸掛櫻、奈良の都は八重櫻、糸掛櫻」といふ。或は「人に物言や油の雫、落ちてひろがる何處までも」に至つては興趣盡きず。油は菜種の油なり。金色の菜花美は大和の平原を飾る。昔、奈良に、製墨の早く發達したりしも、菜花の國なりしに依らずんばあらず。

◉菜花の國は菜花の歌を生む。「蝶よ、胡蝶よ、菜の葉にとまれ、とまりや名が立つ。浮名立つ」と歌ふ。吉野川菜花の國には吉野川あり、吉野川の盆唄あり、「吉野川には住かよ鮎が、わしが胸には戀がすむ」吉野川の川風、涼しき處より唄ひ初めしなるべし。

◉吉野川の鮎を唄ふを聞けば、吾輩、吉野河畔の盆踊を想起せずんばあらず。吾輩、南船北馬して、詩趣の盆踊を見たるは、一たび吉野河畔の五條町に見たるのみなり。

◉七年前、吾輩、五條町に至りし夜、河畔の城山館に投ず。館は松倉氏の城跡に設く。廣庭に櫓を建て、音頭取り、櫓に登りて歌ひ、踊子は其の周圍を環りて歌ふ夜半にして散す。此の時、吾輩「四五人に、月落ちかゝる踊哉」の詩趣を味ひ得たり。

◉吉野河畔に踊れば、川風、水聲、踊子の面を吹く。水聲の中に鮎住めり。吉野川の水聲は、川原の石に象徴せらる。川原の石、石膚滑らかにして磨製せるかのよう、波線は石面に條起して、波勢の怒張せるを印象す。吾輩、試みに其の二三箇を齎らし歸る。靜かに、松實を耳に當てゝ、心耳を澄ませば、松風の音を聞くといふが如く、此の石に對すれば、吉野川の波瀾、急湍、恍然して眼前に見ゆ。

◉吉野川の鮎を漁るの法甚だ奇なり。長良川の鮎、鵜飼は天下に著聞す。長良川のみならず、鵜漁は到處にあり。唯だ吉野川は、人を以て鵜に代う。實は、鵜漁は則ち鵜を以て人に換うるものならずんばあらざるべし。知るべし、吉野川の鮎漁は、鵜漁發明以前の舊法を存するものなる事を。

◉人、退謝して、其の勞に代はるものは案山子なり。馬、退謝して、人、其の勞に代はるものは、芝居の「馬の脚」なり。鵜漁、既に發明せられて、鵜、人に代はるの時、尚ほ人を以て鵜に當つるものは吉野川の鮎漁なり。吉野川には、鵜を知らざる神代の面影あり。

◉吉野川に鮎を漁するの時、舟を中流に放ち、網を張り、漁夫、飛んで水中に沒す。水中に鮎を逐ひ、これを手攫し、或は口に啣へて水面に浮び出づ。眞黑の脊中を見せたる『人の鵜』炎日に輝きて、吉野川の碧淵に浮ぶ。此の時重ねて唄ふべし「吉野川には住かよ鮎が、わしが胸には戀が住む」

其六

◉人は、上方人を悧巧なりといふ。果して悧巧なりや

否やは暫らく措く。悧巧にして、多智なる上方人の面影は盆唄に見るべし。

◉攝津の盆唄に、「おれを云ふとて、隣をおしやる、濱の松風、うらを聞け」、「物を言やるな、言や屑になるいはでつゝめば屑も無い」豈、悧巧ならずや。

◉「人をつかはゞ川の瀬を見やれ、淺い瀬にこそ藻がとまる」又た或は「思ふてござるか、思はで來るか、なれが心を引いて見るか」、豈、多智ならずとせんや。

◉伊勢の盆唄の中に、「かけてよいのは、いかうに小袖かけてたもるなうすなさけ」と言ふ。或は、「心中しましよか、髮切りましよか、ヤアレ髮は生へもの、身はだいじヤアレヤレ／＼」に至つては、皮肉の嬉劇ありと雖、戀に經略あり、打算あるの機微、また自から其の間に微見せずんばあらず。

◉「かやもうりたし、むぎかりとりて、はおりしたてゝ、おやも子も」或は、「瓢屑屋に蚊遣りをたきて、綾や錦と夕涼」また或は「山椒、胡椒より辛いものは世帶、ならぬ世帶は、なほからい」に至つては、尾張は「經濟の國」なるを徴するに足るべし。

其七

◉盆踊に歌ふものを盆唄となせども、盆唄は、盆にばかり歌ふものにもあらず。鞠歌を盆踊に歌ふもあり、盆唄を鞠に唄ふもあり。

◉盆踊は熱時の踊なれば、踊も簡單に、盆唄も亦た簡單なるを可とす。或は、盆唄の、太だ長くして淨瑠璃十二段に類するものも無きには非ず。然れども全國の盆唄、概ね簡單にして、詩經の詩を歌ふの感無くんばあらず。

◉事實に於ては、詩經の詩の中には盆唄に比す可きものも少からず。民風を集めたりといふ中には、盆唄の種類も採錄せられたるや勿論なるべし。語簡に、意切に、而して情は長し。支那に於て、詩經の詩の、最も諷詠す可きが如く、日本に於て、盆唄の詩情、雋永なるを愛すべし。

◉支那の昔には、盆踊ありや、無しや。假令、盆踊といふもの無しとするも、盆踊に對稱すべきものなくんばあらざるべし。盆踊は、技巧に非ず、模倣に非ず、人情、自然の發動なればなり。而して彼に在つても、其の踊は、簡單、自由、放縱なること、吾が盆踊の如くなるべし。

◉我が國の舞踊といふもの、技巧の妙を極むるものは

あり、「自然」の氣分を磅礴せず。其の盤屈、幹旋して不自然の姿態を爲すこと、遠州流の活花の如くならずんばあらず。若し活花に比すれば、盆踊は投込ともいふべきものなるべし。

●「遠州流」の氣分は、我が舊文明の命脈を爲せり。文學、藝術、禮法、趣味の餘技に至るまで悉く然らざるは無し。「遠州流」は白蟻の如く、我が民族の精神的建造物を、悉く侵蝕し來つて、悉く、これを根本より崩壞し畢らずんば已まざりき。舊るきものも、新らしきものも悉く此の白蟻に襲はれざるはあらず。外觀の巍々堂々たるも、其の柱には、其の白蟻の糞に汚されざるは無し。「遠州流」は白蟻よりも怖る可かりし。

●我が舊文明に於て、白蟻の「遠州流」に腐蝕せられざりしは、唯だ僅に、盆踊と投込の活花とありしのみ盆踊を見よ、其の踊るや、「遠州流」の盤屈、幹旋、不自然の氣分を見ず。盆踊に技巧無しといふには非ず。盆踊と雖、巧拙の存すること、花木、自から婉容の優劣を現はすが如くなり。但だ盆踊は投込の花を見ると同じく、自然の姿態を失はざるを取る可きなり。

●我が舊文明より「遠州流」の氣分を驅除し、刷新したるば、則ち今の新文明なり。我が民族の太古の、特有の精神、文明は、地中に埋藏されたる土器石器と共に、盆踊は地上に殘りて、今日に至れり。地中に埋藏されたるものは、今の學術に依つて、ます／＼發掘、闡明され、盆踊は、則ち今の政治の爲に、却つて滅亡せんとしつゝあり。

●白蟻の害無しといふと雖、地中に伏在するものは、地氣に侵され、地上に放在されたるものは、大氣に侵されざる能はず。盆踊といへども數千年の文明を經て太古の建造物と同じく、大氣に酸蝕されたること無しとせず。今の盆踊を以て、直ちに太古の盆踊と速斷するを得ず。

其八

●「盆踊」の一語、既に、盆踊が、太古以來、多少の變遷と酸蝕とを受けたるを徵證するに足らずんばあらず。盆踊は、古の歌垣なりといふ說あり。歌垣は盆に踊るものには非ず。歌垣則ち盆踊なりといふを得ず。盆踊といふは、佛教文明の影響を意味す。

●歌垣則ち盆踊なりといふを得ざるも、盆踊は則ち歌垣なりといふを得ざるに非ず。畢竟、歌垣に尤も近きは、盆踊なるを疑はず。

●盆踊は、佛敎文明の影響を受くといふとも、其の影響は、語義の上に顯著なるが如くには非ず。中元の時季、恰も我が炎熱の時に當る。歌垣も亦た此の時に於て、自然に、尤も盛んなりしなれば、盆踊は、歌垣の時季を中元に局限したるものと解釋するを得る。

●盆踊の、氣分、踊の上には、盆の一字、必ずしも佛敎文明の影響を象徵すること無し。唯だ盆唄は、自から中元の色彩を帶び來るを免れず。

●盆踊及び歌垣の感興は、炎風時季なるに依つて生ず西洋の舞踏會といふもの、其の起原、歌垣に相似たるものありとするも、雪の夜に、ストウブを燒き、羽衣翩翩たる男女、電燈の下に盤舞するに由つて、盆踊の氣分と詩情とを醱酵せしむること無し。

●熱つかりし夏の日の夕、月斜めに懸り、涼風、地を吹いて、涼、水の如く、月に詩あり、風に詩あり。落後の、手拭被れる男女、瀟洒として、踊りまわる時、盆踊は自から詩篇を爲す。背景の山村、森林、蒼花として畫けるが如く、詩篇の挿畫を爲すにも似たるなり

●盆踊は、夏の夕、山村に、大氣に公開するに非ずんば、盆踊に非ず。盆は中元を意味すとも、中元の時は熱つし。炎熱季節は盆踊の性命なり。則ち盆踊の詩たる所以は、其の盆たるに在り。則ち盆の一字、佛敎臭を以て、之を嫌ふ可きに非ず。盆の一字は、歌垣の氣分を明確ならしむる所以ならずんばあらず。

其九

●盆踊は、熱の時節。熱の時節は草木發育の時、戀の時、則ち人間、詩心發揚の時なり。故に盆踊には必らず戀あり、盆唄にも必らず戀あり。

●草木の絢爛たる時は、人間、戀の時なり。戀の時は人、皆、美し。草木の美しき時、月も亦た美くし、世界を擧げて、戀を爲す時、則ち詩の世界なり。夏の夜の月は、詩の世界を照らしつゝ、盆踊、盆唄は、詩の世界のヴアースを爲しつゝあり。

●熱無き、戀無き盆踊は、泡立たざるビール、辛からざる胡椒、解けたる氷の如し。解けたる氷を想像するは難し。戀無き盆唄は盆唄に非ず。

●「さまの寢姿、今朝こそ見たれ、五月野に咲く百合の花」、戀の詩、天地にひろがるを見よ。「こなた思へば千里が一里、逢はず戻れば一里が千里」戀の波の最高潮に達しつゝあるを見よ。

●盆唄に、「雨の降り出に、名が立ちそめて、雨は已め

ども、名は已まぬ」「紅葉踏む鹿、惡くいといへど、戀の文書く筆となる」「女子好きなら、八丈へ行きやれ、八丈むかしは女子島」戀は世界に磅礴しつゝあり。濕分の大空に滿ちて、觸る、ところ皆、黴を爲すが如く戀は世界に滿ちて、言へば悉く戀を爲し、戀を歌へば悉く詩を爲す。人は、そこはかと無く、そゞろに、戀を爲しつゝあるなり。

◉「色のよいのは出口の柳、殿にしなへて、ゆら〳〵と」豈、唯だ出口の柳のみならん。踊子の花、柳と亂れ合ひて、詩の種、淨瑠璃の種、情死の種を蒔き始めしも、昔よりの盆踊に少からぬ例なるべし。

◉江戸の盆唄に「長い〳〵兩國橋、長い。お馬でやろか、お駕籠でやろか。お馬も嫌よ、お駕籠も嫌よ、十六七に、手を引かれ、手を引かれ」と。戀の時なる哉戀の世界なる哉。人、皆、戀を求めつゝあり。

◉熱の時、人の戀は、大空に湧く雲の如く、そこととも知れず湧きて、そことも知れず漂ひ行く。夏の戀は、夏の雲ならずんばあらず。而して戀の「雲」の氣分を象徵するものは、盆踊と盆唄となり。

◉「こんど來るなら裏からござれ、表、車戸で、音がする」「兄よ、働け、今年の暮は、小畑新田から嫁が來る」戀が、小さく表現されつゝあるを見よ。

◉戀の時は、もの皆おもしろし、おもしろき時は美し「面白いぞや、木曾路の道は、笠へ、木の葉が舞ひかゝる」木の葉の落るも面白かるべし。箸の轉ぶも美しかるべし。萬有、すべて、戀の人の前に、戀の詩を展開しつゝあるならずんばあらず。

◉盆踊といふもの、踊の技巧より見れば、固より言ふに足らず。而して踊る人も、見る人も、おもしろくして、おもしろくして、堪まらずと言ふは、戀の世界、戀の時、戀の人なるが故ならずんばあらず。

◉戀の目は盲に、戀の手は放膽なり。戀の心、自由、自在、電光を含める雲の如くに、變化、放縱、計り知られず。而して其の中より、閃々たる電光、詩を迸り來る。

◉「こゝらの町は、海ならよかろ、千石船に岡十郎を載せて、隅から隅へ引きまわす。隅から隅へ引きまわす」或は言ふ「彼奴の面へ、金釘打つて、拔けるな釘や、折れるな釘や、くたばる時にや、拔いて遣る。くたばる時にや、拔いて遣る」、放膽、放縱といふも愚なり。

◉人間の事、自由、自在を極むるは戀なり。戀は戀な

りと知るべし。夢の始は分らず。醒めたる時は明らかなり。夢の中に、夢なるを知るもの無し。夢は夢を生み、戀は戀を生み、戀の最中は夢の最中なり。夏の最中は夢の最中にして、夏の最中に、盆踊あり、盆唄あり。盆踊は、夏の夢の尤も美しきものならずや。

◉初後の盆唄に、「庭の青梅ふられて落ちる、裾にもまれて赤くなる。盆の踊子は急がしものを、襷（タスキ）掛けねば踊られぬ」、またいふ、「踊、踊らば三十まで踊れ、三十過ぎたら、後生願へ」、戀に急がしき夢の最中を三十までとなせるなり。戀に後生無し。戀は現在なり。後生願へといふは、戀の醒むるを意味す。

◉戀の人、三十までとは限らざること、暑に、殘暑あるが如し。三十過ぎて後生願ふとは定らず。盆踊の夢も、年に因つて濃淡はあるべし。

其十

◉傑作は熱に比例す。人の心的靈動は寒に萎縮し、熱に昂騰す。熱に非れば伸びず。興憤せず。熱は、則ち罪惡を生み、詩を生む。罪惡の中にも、戀あり、詩あり。戀と詩と罪惡と、傑作との時、則ち草木繁茂の時にして、盆踊の時なり。故に、およそ是等のものは悉く盆踊の中に在り。而して是等のもの悉く、詩のルツボに陶冶せられざるは無し。

◉熱を以て、夏を嫌ふこと莫れ。青葉のかげに詩あり傾なく月影に、盆踊あり。夏の生活は夢の生活ならずや。而して此の夢の繪卷物は則ち盆踊ならずや。

◉活火の燃ゆるとき詩あり。戀の燃ゆるとき、盆踊の夢あり。趣味の夏を見んとする者は、盆踊を見よ。見よ。見よ。踊れ、踊れ。月冷やかに、秋風吹くとき、火消えて、夢、醒めん。かくて新らしき詩は、又た成らん。

再襲、未だ多く盆踊を見ず。盆踊を說けば、少年時、郷國の家に遠く、盆踊ありて、月下に、悠揚たる太鼓の音を送り來りしを憶出す。

黑頭巾再記

蠅と蚤と蚊の話

理學博士　三宅恒方

　夏になると我々は蠅蚊及び蚤からして非常に苦められる。大抵の人間は夏の一部分は此等の蟲と鬪つて暮すのである。併し單に普通の意味に於て苦しめられ又鬪ふと云ふのならまだよいが、此等の蟲は大抵惡疫の傳染を媒介する者であつて、換言すれば傳染病と此等の蟲との間には非常に密接の關係がある。故に昆蟲學の內でも近頃は特に醫用昆蟲學と云ふやうな一分科が出來て、昆蟲學者と醫學者と相待つて此等の昆蟲殊に茲に云ふ三昆蟲の性質を研究し同時に傳染病との關係を取調べて居る。斯う云ふ關係上傳染病研究所でも、以前は私の知人の二三の動物學者が此等傳染病に關係ある動物について頻りに研究して時々其成績を報告した事がある。が今度の新研究所になつてからは未だ私の知人の動物學者は一人も居らないやうであるが、傳染病との關係上此種の研究を忽かにすることは出來ないから、醫學者のみでも何れ相當の事はやつて居るに相違ないと思ひ大に安心してゐるのである。

　勿論此等の蠅、蚊、蚤についてはお話することは非常に澤山あつて、到底僅かばかりの紙幅の中には盡し難い。それでこゝでは成るべく乾燥無味な學理上の事はヌキにして極く一般の人にも多少興味のありさうな事をかい摘んでお話しようと思ふ。

　先づ蠅の事から申し述べませう。一概に蠅と云つても其範圍が非常に弘いのであるが、こゝに私の云ふのは家に居る所の蠅――つまり日常諸君の眼に觸れて居る所の蠅丈けについてゞある。併し家にゐる所の蠅でも決して一種ではなく、普通大抵五六種もあるのであるが、其中で特に家蠅と稱する、普通家に一番多い所

の蛆についてお話しようと思ふ。

此家蠅は夏は常に我々の室に居るのであるが、特に家が不潔であると大變に多い。のみならず食物を喰べる室には非常に多く集つて食物などに留まつて之に卵を産みつけて蛆が生ずるのは諸君の御承知の事である。併し一寸こゝに誤解を避けて貰はなくてはならぬ事は、それは家に最も澤山居る家蠅が處々方々に卵を産んでそれが蛆になることは勿論であるが、一般の家にある澤山の蛆は寧ろ家蠅よりも銀蠅の方が多いのである。例へばさしみを喰べると蠅がついてゐたり。臺所のいろ／＼の物に蛆がつくのは大抵は前申した銀蠅の方が多い。いろ／＼の本などに、人の死骸を隱すと段々蛆が出て來た爲めに死骸のあるとが分つたなどゝ云ふ事が書いてあるが、此場合の蛆などは大抵銀蠅の方が多いやうである。又汚ない話だが、便所の中に居る蛆は外の種類――即ち花虻と稱するものゝ蛆が多いやうである。

家蠅は我々の日常生活に向つて可なりの損害を與ふるばかりでなく、已に申述べた通り悪疫を傳染する媒介となることは甚だ盛んである。此事については自分は専門家でないから外國の學者の説を引くと、先づチブスは勿論の事、コレラ其外夏に澤山ある各種の悪疫が家蠅によつて傳染せらるゝことが多い。甚だ面白い事は英國のある都會での調査があるが、一年間を通じて前記の病氣の患者の數が蠅の多少と正比例すると云ふ事である。即ち蠅の多い月には該病患者の數も多く、蠅の少い月は少いと云ふ實蹟がある。又戰地でチブスの流行した時、蠅を防禦した隊が、其爲めに患者を出さなかつたと云ふ例も各國にあるやうである。蠅が此等の病氣を傳染することは世人も大抵薄々知つて居るだらうが、然し蠅は此等の病氣のみに限らず、肺結核や又場合によると黴毒までも傳染すると云ふ事である。又外國の本には蠅が尿道に卵を産んだ爲めに其蛆が孵化して尿道を侵すと云ふ例が折々ある。之は決して婦人ばかりでなく男子にもあつて、原因は勿論其部分を裸出してゐるのによると云ふ事である

が、此點から見ると箇樣なる事は我國にも相應にあるべき筈であるが、私の知つて居る相當の醫者に聞いて見たが未だ見聞しないと云ふ事である。

箇樣に家蠅が傳染病の媒介をすると云ふのは詰り家蠅の體に各種の病源菌を背負つてゐて、それをいろいろな所に留まつて、食物なり身體なりに其菌を落して歩くからである。その菌を身體に背負つて居ることの澤山な事は實に想像以上である。學者の研究によると、不潔な處にゐる家蠅は一匹で、小いものでも八十萬位の黴菌を、多いものに至つては實に五億の黴菌を背負つて居る。又極く淸潔な所にゐる蠅でも、少いので二萬一千、多いのは十萬位の黴菌を持つてゐるのである。勿論此等の黴菌は悉く病菌と限らぬが、其中には各種のわるい黴菌を含んでゐることは想像することは出來る。箇樣な次第であるから家蠅に關する書物（夫のみを標題とした）不思議にも日本には一冊もないに拘らず。歐米各國には非常に多いもので、ザッと計算して家蠅及び其近種に關するもの丈けで七百種位ある。其中にはなかなか大部のものがあつて優に七百ページ以上の大冊もある。加之今でも家蠅專門の學者があつて絕えずいろいろ家蠅のみに關する硏究を繼續して種々の新發見を發表して居るのは大いに驚かざるを得ない。

然らば家蠅は前申した如く單に病氣の傳染と云ふ事の爲めに學者の注意を惹くかと云ふに決してさうではなく、家蠅に限らず、一般の蠅について學問上からも非常の大問題がある。之は甚だ六つかしい事であるが簡單にいつて見ると、家蠅は前申した如く、蛆が變るのであるが、扨此蛆は眼もなく頭もなく勿論脚もなく翅もないのである。それが或時期を經て此等のものを完備した蠅になるとすれば、何處から此等の器關が出來るかと云ふ事の問題である。詰り蛆の體の中には後に此等の器關になる所が潜んで居なければならぬ筈である。處が千里眼を有せざる限り外から透かして見ることが出來ぬ故に、いろいろの學者（此事は私もやつて見たのである）が蛆を縱、橫、十文字に少くも三百、

多くは五六百の切片に截りこなして、そして其中を仔細に調べて、各種の器關が何處に潛んで居るかを突き止めたのである。其結果によると前申した翅や眼や頭や脚などは恰度小さな點のやうなもので、それが木が芽を吹いて葉や花を出すと同様に、次第〳〵に大きくなつてそれ等の器關となるのである。故に學者は之を翅の芽、眼の芽、脚の芽など稱へて居るのである。扨、さうすれば其芽はどうして出來るかと云ふ問題が起るが、之は更に六つかしい問題で未だ解決がついてゐないやうである。何にしろ、卵から出たばかりの蛆が既に前申した芽を持つているのであるから卵の中でどう云ふ方法かで芽が出來るに相違ない。之等の事柄も大問題で之に關する本は、前に擧げた本以外に又可なり大部なものが澤山あり、お互にいろ〳〵な議論を闘はしてゐるのである。

　蠅の話は長くなるから大抵之れ位にして置くが、詰り外國では如何に蠅が盛んに研究されて居るかと分れば十分である。之に關してもう一つ附け加へて置きたい事は、例へば蠅が硝子戸に留まつたとすれば斑點を附ける。此斑點には二通りあつて茶色の斑點と、白色半透明の斑點とある。諸君の中には此等の二つの斑點のある事さへも御承知ない方が多からうが學者は此等二種の斑點のある事を知るのみならず、例へば十四の蠅で二十二時間の中に茶色の方の斑點を三・九、白色半透明の斑點を一二・五の割合で附することさへの調査までが屆いて居る。

　次に蚤について申しませう。蚤も蠅と同じく外國では非常に其研究が行き屆いて、極めて精密に調査されて居る。各種の器關は勿論の事腸のウネリの有様迄もちやんと分つて居る。蚤も我々を刺すが、之は通常人間にタカル蚤であつて此外に犬には犬の蚤あり、猫には猫の蚤あり、鼠には鼠の蚤あり、蝙蝠には蝙蝠の蚤がある。然し不思議な事には猿のみには蚤が殆んどゐないのである。勿論動物園などに飼はれて居る猿には見物人の蚤が偶然に附くことがあるかも知れぬが、之は例

外と見なければならぬ。さう云ふと諸君は猿はよく蚤を取つてゐるではないかと云ふだらう。併しあれは決して蚤を取つてゐるのではなく、何か塵(ごみ)とか或は場合によれば虱などを取るのである。（虱は猿に居る）扨、犬の蚤の人間を刺すことあり、鼠や猫の蚤も人間を刺すことがある。それで鼠がペストに罹つてゐる場合に、其血を吸うた蚤が人間を刺せば其人間はペストとなるのである。詮り繩同様に恐るべき傳染病の媒介者であつて、若しペスト菌を持つて居る蚤に刺さるれば諸君は忽ちペスト患者となり忽ち生命を失ふかも知れぬのである。

蚤も此等の病氣の事以外に學問上いろ〳〵の問題がある。其中で翅の有無などはなか〳〵大問題であるが、何故に蚤があんなに高く且つ遠くに飛び得るかと云ふ事も一寸興味を惹く問題である。先づ人間が蚤のやうに飛び上ることが出來るとすれば一躍して十二階の上に昇れる譯である。然し筋肉其れ自身を比較すると人間の方が蚤よりも遙かにいゝので、人間が蚤の割合に飛び上れないのは、いろ〳〵の所で差引かれる爲めである。

蚤については學問上以外にも面白い話がある。それは「蚤の見世物」の事である。私はまだ實際に見ないが、根據のある本でいろ〳〵讀んだし、又實際見て來た人の話も聞いたから、「蚤の見世物」のあることは實際である。それは萬事緻密なる研究で有名なる獨逸にあるので、之には多少秘密があるやうですが、先づ要領を云へば、蚤を平らな所（詰り二枚の硝子の間の如き所）か管の様な所に入れて養ふのである。勿論食物は飼養者の體にたからして其血を犠牲に供するのである。箇様にして養ふと蚤は跳ぶことを忘れて了つて、歩く一方になるのである。かうなると極めて小さい馬車や汽車の形をしたものに細い白金の針金を附け、其一端を蚤の躰に結び着けて、そして蚤に曳かせるのである。之は一頭曳ばかりでなく二頭、四頭、或は六頭曳のもある。見物人は一人づゝ順番に與へられたる蟲眼鏡を以て實際蚤か曳くに相違ないのを覗いて見るの

である。此蚤遣ひは實に蚤の事は悉しいもので、獨逸の各地方の蚤の性質を知り、例へば伯林の蚤は箇樣な癖があつて可けぬとかハノーヴァーの蚤は箇樣な所が勝れて居るとかよく心得て居るさうである。日本では何でもすべての新らしい事が輸入され、文學などは逸早く傳はるに拘らず、此「蚤の見世物」の未だ輸入されないのは一寸不思議に思はれる。蚤の事は之れ位にして之から蚊の話を致しませう。

蚊に關しても蚤や蝿に劣らぬ澤山の參考書がある。學者としても蚊の事ばかり調べて居る人が諸國にある。其調べは非常に悉しいものであつて、體にある鱗のやうなものまでも細かく詮索が行屆いてゐるのである。斯うなると却つてよしあしで、之について外國に面白い話がある。さる人が何氣なく一匹の蚊を、以前蝶々を入れて居つた函の中に入れて、ある學者の所へ持つて行つた。處が其學者は極めて普通にあるべき蚊に頻りに頸を傾けて、今まで斯う云ふのを見た事がない。どうしても分らぬと云して大騒ぎをしたのである、處が其後段々調べて見ると、偶然にも以前入れて居つた蝶々の鱗が少し脱落して、蚊にくつついたと云ふ事が分つた。之を以て觀ても如何に研究が細かい所まで進んで居るかと云ふ事が分りませう。

蚊も蚤や蝿と同じく矢張り病氣の傳染を媒介する。殊に普通に知られて居るのはマラリヤの傳染である。此マラリヤを傳染する蚊は特にマラリヤ蚊一名翅斑蚊と申して普通の蚊とは少し違つて居る。最も見分け易い仕方は普通の蚊の壁に留まつて居るのを見ると躰と壁と並行して居る。處がマラリヤ蚊は尻を上げ、換言すれば躰を壁の面に角度をなして留まつて居る。然し此マラリヤ蚊も東京でも方々にゐる者であつて現に近年向島で會のあつた時分に料理屋に盛んに居つた。又昨年は信州から木曾にかけて旅行したが到る所に此マラリヤ蚊の多かつたには驚いた。然し一寸誤解を避けて置いたのは、マラリヤ蚊と云つても決してマラリヤの病源躰ではなく、詰り病氣を媒介するに過ぎぬ。(マ

ラリヤには病源蟲のある事を知つてもらひたい）詰りマラリヤ患者を蚊が刺してマラリヤに罹り、今度此マラリヤに罹つた蚊が人間の健康躰を刺す時に初めてマラリヤに罹るのである。故に近處にマラリヤ患者の居ざる限り此蚊に刺されても差支ない。現に私も向島及ひ木曾地方で盛んに刺れたに拘らずマラリヤに罹らぬ。詰り蚊から云へば却つて其病源たる人間を大いに恨むべきであるから、若し假りに蚊に非常に權力ありとすれば、マラリヤを撲滅する爲めに必らず人間を處分するに相違ない。ですから若しマラリヤ患者が偶然信州から木曾地方を旅行して此等のマラリヤ蚊に吸はれたとしたら、あの邊には定めし患者が殖えることであらう。蚊は御承知の通り惡水に棲息する孑々から出るのであるから此等の溜水などを處分すれば（例へば石油などを入れて）蚊の減少を見ることが出來るのである。勿論地方によつては蚊のゐない所もあつて、我々蚊の居る處に住んで居るものは大いに羨ましい次第である。東京でも下町には蚊の居らぬ所があるそうながら日光などでは全然居らぬそして其近くの鹿沼などには盛んに蚊が居ると云ふことである。蚊ばかりでなく蚤にも其例がある。現に臺灣などには不思議にも蚤がゐないのである。

以上述べた事からして諸君は蠅、蚤、蚊など丶云つて詰らんもの丶やうに思はれて居るが、實は人生に大關係のあることを悟らる丶ことと同時に、歐米では非常に盛んなる研究のある事を知られ、且つ此等の純學問上にも幾多の面白い問題があると云ふことに氣が附かれて、若し以前よりも多少此等の蟲に對する新たなる注意をせらる丶事があらば、私の此お話の目的は達せらる丶のである。（六月十七日）

人物評論（六十一）

奥田新東京市長論



▽奥田新市長論

田川大吉郎

一、親切の人

◎奥田新市長に對しては、新任匆々、折角、潑溂の英氣、武運の長久を祈るとの外に、一語を加ふる餘地は無い、僕は、東京市のために、才幹あり、思慮ある好市長を得たことを、欽祝して居る。

○十二年前、僕が、初めて東京市の腰辨と爲つた時の事である、一日、市參事會で、道路撒水の事につき、散々な小言、非難を受けた、その主なる發難者は、政友會の某氏であつた、而してその非難の趣旨は、水道の淨水を以て、道路の撒水をやれ、道路は、風塵の飛揚に堪へぬ、ちと目を刮して、市民の迷惑の狀をも視るが可いといふのであつた、僕は、理に於ては、之に反對する者では無い、今でも、東京市の道路は、更に、淨水を以て、拂拭すべき必要のあり、餘力のあり（使ひやうに困る）そのやうの性質のものでは無いかと思ふて居る。

◎去り乍ら、その一切の自由を束縛せる水道の規定及び精神を如何、そこで、僕は、水道關係の法規を、概略、説明して、これを改正して、自由に爲し得らるゝ途を開けば、兎も角、然らざる限りは、市參事會の説といへども、直に、奉行する譯には往かぬと、解答した。

◎政友會の某氏は、それを氣に障へられて、これは、怪しからぬ、まるで、三百代言の言ふことだ、水道の屬吏から、そんな說法は聞かぬと、激して、叱れた、僕は、大變に、お覺えの目出度ない目に逢つた譯である。

○その會の終つた時、尾崎氏は、僕を、懇々慰撫された、而して自家の境遇を述べ、此の如きことは、毎々有ることだ、一向珍らしくない。何も氣にし玉ふな、忍んで貰はねばならぬと、諭された、固より忍ぶ積りで入つて居る、僕は、何とも感じなかつた、取り立てゝ感ずべき節もなかつた。

◎その際、奥田氏は僕に對し、今日の解答は善く出來た、總て貴說の通り、一言も無つたが、あの説明の終りに、此樣な譯で、御注文の事は、實行しやうにも、しやうが無くて困つて居ります、夫れを如何いたしたら、いゝでせう、と、餘地を遺して、考を促したら、何、可かつたら、さうしたら、一層好い出來だつたと思ふと、眞綿で首の教示をされた、僕は、此際、はたと、自分の足らざる所に氣着き、同時に、奥田氏を、注意の深い、親切の人だと感じた、此教訓は、身に泌みて居る、爾來、常に、その心持で説明に當らうと期して居る、即ち、説明の都度、奥田氏當日の注意を想ひ起して、感謝して居る次第である。

◎奥田氏、今、市長として、市政の衝に當る、東京市參事會の風は、その頃の如く、荒びては居ない。東京市會の風は、その頃よりも、少しは練れて居る、東京市民の風は、その頃よりも、市政に關する注意を深厚にして居る、つまり、市民も、市會も、市參事會も、幾分か戒むゝ所を知り、憚る所を知り、且、足らざる所を承知して居る、奥田氏にして、以上の注意深く、而して親切なる態度を以て、倦まず、焦らずに、臨まれたなら、東京市政の一段の進歩は、期して待つべしと思はるゝ、僕は氣持よく、その結果を待ちたいと思ふて居る。

二、非消極論

◎東京市の經營につき、第一に、注意すべきは、例の消極論である、市會、市參事會の中には、此消極論の氣分が。存外強い、僕は、奥田氏が、此氣分に捲き込まれざらんことを祈る。

◎消極論の第一の氣鋒は、例の減稅論である、帝國議會に、此種の意向ある如く、東京市會にも此種の意向がある、東京市會の人は、何かなしに、減稅論を要求し、これを、その唯一の事業とし、誇りとし、手柄として居る傾向がある。

◎僕は、此希望を、一概に無理とは申さない、去り乍ら、此希望の由つて來る源は、帝國の租稅負擔の、一般に重くなつて居るためであつて、東京市の市稅が割合に重いからのためでは無い、中央政府が、有らん限りの稅を渉り盡して居る、思い切り重く課して居る、そこで、地方政府の、これを課する餘地が無くなつて居る、そこで、市會が苦情を言ふ、斯樣な次第である、市の、當然の責任、計畫から言へば、東京市の爲すべき事業は、さま〳〵殘つて居る、殆んど未だ手を着けられずにあると言つても、差支無い、それ程に、怠られ、棄てられ、手後れに爲つて居る。

◎故に、僕は消極論の由來に對しては、相應の同情を抱いて居るけれど、何、東京市の當然の事業は、當然の事業として、その、奮發、努力、經營を望んで居る、此點から考へると、なか〳〵にて消極どころの沙汰で無い、減稅どころか、寧ろ増稅もしたいやうな氣がする、増稅してでも、やるだけは、やつて置かなければ、東京市民の義務が濟まない、現代の市民の、後の市民に對する義務が濟まない、東洋の一等帝國の、世界の同盟帝國に對する面目、申譯が濟まないと思ふて居る、但、面目、申譯と、體裁の上からのみは申さない、實利の上から申す、利益の上から申す、經濟の上から申す、將來のためから申す、それらの上から考へて、東京市は、今日、此際、せつせと、精出して、企て、遂がねばならぬものが、山ほども堆積して居ると考へる、從つて、僕は、消極論に與みしない、反つて、消極論を、所謂一文惜みの百損の類で、東京市の繁榮、發達のための大禁物だと考て居る、僕は、帝國の中央政府に對しては、幾分か消極の希望もあるが、東京市に對しては、斷乎たる積極の施設、邁往の計畫を希望して居る。

◎而して租稅を增徴するにも、増徴の方法はあらう、増稅は、何日でも惡い、不可行のものだとばかしは考へない、東京市の理事者にして、屹度、考へを据へ、誠實、眞劍に之を要求したら、東京市民は、強ち不同意を唱へる者でも無いと考へて居る、のみならず、増稅しないでも、まだ可からう、それでも、まだやる途はいろ〳〵あらうと考へて居る、その途も、世間の往々言ふ如く、全く、行き盡きて、最早、絶壁に乘せかけて居るものとは、僕は、考へて居ない。

◎そこで、奥田新市長に望む、新市長が、有り振れたる世間の消極論に、雷同せず、消極論に、如何なる道理上の證據あるかを、愼思せられんことを、希望し、同時に、東京市は之れを如何にすべきか、如何にせざるべからざるか、如何なる事業の計畫が、東京市の現在に、將來に橫はりつゝあるかを、その大處より、高處より、徐ろに考慮せられんことを要求する、僕は、首べを延ばして、その、決定の機を待ちたい、而して躁急の嫌ひあらんとも、僕は、新市長の結論が、僕等と同じく非消極論に歸嚮するを信じて疑はない、東京市の現狀を視よ、而してその將來を思

へ、何處に所謂消極論の根據あらんやだ、苟も、近世的都市の經營、趨勢に着目したらん者は、誰とて、東京市の現狀に滿足する者は無い筈である、僕は、奥田新市長の結論が、必らずこゝに達すべきを豫斷するに躊躇しない。

三、經濟的機關

◎その積極的經營は、一にして足りない、僕は、今一々それを此に列擧することをしない、それは、餘りに無用な詮議と思ふからである。

◎たゞ、一つの方針は、方針といふよりも、都市の性質に關する一定の概念は、その經濟的機關といふことである、僕は、近世の都市は、いづれも、その國家の有力なる經濟的機關であり、その國家の經濟的活動は、いづれも、その都市の設備、計畫の上に現れて居ると信ずる、言ひ換ゆれば、その都市の設備計畫の一斑を視れば、その國家の經濟的活動の方針、趨勢は、極すく領會さるゝと思ふて居る。

◎この趨勢に應じ、本然の面目を發揮するためにも、多方面の計畫を要するであらう、それをも略するとして、尚、申す、東京市民の生活狀態は如何、東京市民は今世界の大都の、いづれの民よりも、安易に、經濟的に生活しつゝありや、否や、若くば、內地の各市の民よりも、近世的文明の産物を、豐富に、輕便に自由に享受しつゝありや、否やと、僕は、奥田新市長に、此點の考慮を促し、此方針に叶ふ經營、施設を希望する。

◎世界の大都は、世界で、一番の物の賤い所である、現に、日本の商人は、濠洲産の羊毛を、直接に、濠洲で取引するよりも、倫敦と取引する方が、確實で、又、安價だと稱して居る、支那には、貨物は、盡處で買へとの諺がある、例へば、蘇洲を縮緬の産地とする、その縮緬を、蘇洲で買ふよりは、上海で買へ、上海は、その縮緬の盡處である、故に、上海で買ふ方が、便利だと申すのである、その如く、世界の大都は、世界の貨物の盡處である、東京は、その貨物の盡處と爲つて居るか、どうか、それが問題である、そのお考へを要求する、それは暫らく舍くとするも、東京市民の生活は、らくに、爲し得らるゝだけ、既に爲つて居るか、どうか、それが問題だと思ふ、而して東京市は、それを、そうすべき責任のある機關だと思ふ。

◎僕は。日本の都市は斯樣な設備目的の缺けて居ることを、遺憾に感じて居る、否、全く缺けて居るとは謂はない、人生自然の要求である、無意識の間にも、そのやうの設備は、いくらか出來て居る、或は、存外、出來て居るとも謂へる、たゞ、それ無意識である、三百年來の自然に任せた發達である、近世的科學、智巧の妙を競ふた結果から言ふと、そこに、殆んどその設備が無いと言ふていゝ程に、亂雜を極め、不調和を極め、不注意を極め、無方針に墮し、無計畫に爲り來つて居る、東京市の現狀は、見れば見る程、此感じを禁じ得ないものがある、差當り、奥田新市長に、此點の着意、研究、奮發を望まざるを得ない。

◎或は、電燈問題を以て、東京市の暗礁と喧する者もあるが、然りとて現實を、現實として解釋するに、奥田君ほどの智慧者が、これしきの事に、屈託する譯もあるまい、僕は、その解釋の餘地の尙あることを信ず

る者である、然も、その解釋は、以上の經濟的機關の基礎に於て決せられねばならぬ、その大なる脚地に、警察を乘り出し、それを根底として、若くば背景として、解釋することが必要である、そうさへすれば、事は、左程でも無く決せられるものと思ふ。

◎何にせよ、僕は、東京市は、大なる經濟的機關として、日本のため、東洋のための、大なる經濟的機關として、組織的、建設的の計畫を、東京市に望んで居る。奥田新市長が、東京市の、此當然の性質に適應する經營に、銳意努力されんことを祈る、果して然らば、東京市民は、永く、奥田市長を德とするであらう、たとへ、德とせられざるも、其の德は永久に遺るであらう、今は、只これだけを申すのみ、餘は、他日を期す。

◎更に、奥田博士は家族主義に對し、一種の地歩を占めた學者である、自治制は、家族主義の變形である、その思想を、政治化した、若くば社會化した特種の制度である、奥田博士が、市の統治者として、その思想に如何の影響を得來るかは、僕の興味を以て注視したい所である。

▽奥田市長の人物

城西隱士

奥田義人氏は帝國大學出身中の秀才である、其學級中の順位は江木衷を筆頭に奥田は二番で卒業した、是れが明治十七年である、其より奥田は伊東巳代治子に引立てられて内閣や法制局に奉職して居つたようだが、其世間に一種氣骨ある有爲の官吏として認められしは彼が第一次桂内閣の時に法制局官として其政案に係かる行政整理案が採用されぬと云ふので辭職した時であつた、是れが明治三十四年頃であつたかと思ふ、當時桂公の面目未だ足らず其前後に教科書事件等もありて閣内の統一も思はしからず、奥田は一法制局長官に過ぎざりしも其辭職は或は内閣瓦解の動機とならんかと思はれた、當時奥田の重んぜられた一端として見るべきであらう。

是より約十年間奥田は鳴かず飛ばず宮中制度取締人に從事し又は宮中顧問官となり、或は教鞭を帝國大學及び明治大學に執り殆んど政界に意なきものの如くであつた、此間日露戰争あり桂内閣斃れて西園寺内閣成立し、更に第二桂内閣成り又第二西園寺内閣成り、遂に例の有名なる第三次桂内閣に到り憲政擁護運動の大騒ぎとなるも奥田は一切世間に向ひ口を開かず一面老書生を装ふて居つた、尤も此十年間に彼れは二回郷里鳥取市から代議士となつて衆議院に席を占めたが、院内の騒ぎも黨派的のかけ引も之を冷眼視し頗る超然たるものであつた、重大事件には毎度政友會と行動を共にした様であつたが、其席は政友會に置かず無所屬であつた。蓋し是れ宮内者などに對する遠慮より注意したものであつたろうが、奥田の處世術の如何にも圓滿無礙であることを證すると云ふてよかろう。

十年啼かず飛ばずの奥田氏は山本内閣の成ると共に文部大臣となり、

乍ち、内閣中の人氣男となり、最も無瑕にして大臣らしき大臣として世間より歡迎された、又近年になき好個の文部大臣として歡迎された。松田正久男の病むに當り司法大臣を攝し後ち遂に全く文部より司法省に轉じたが、玆でも亦た評判は惡しくなかつた、要するに山本内閣の瓦解したる後でも、他の大臣中には材幹に於て遙かに彼に優れる人々も兎角の非難を免れざるに奧田氏のみは惡評を受けず、文部司法兩省に於ける功績として强ゐて餘すべき程のことはなかりしも、省内及び世間より惜しがられつゝ職を去りしは大成功と云はねばならぬ、多年學者として、行政官として、政黨の首領として今日に至れるも遂に名望を失はざりしは自ら奧田氏の人格に歸すべく、事に處して思慮周到なること、人に對して虛懷謙抑なること、名利に淡泊にして功を貪ぼらざること、堅忍持久其德操を二三にせざること、是れ奧田義人氏の特長にして、其今日ある全く此等の特長に由れりと謂ふべきである、今の濁れる亂雜なる世の中に於ては誠に珍らしき人格ではあるまいか、東京市長と爲るに付ては相當の注意を拂ひて後決心したようだが、吾々は氏の必ず成功するを信ずる、其れは華々しき成功にはあらざるべきも、奧田一流の成功であろう、蓋し今の東京市では是れ以上は要求し得られぬ、若しも奧田氏にして電燈問題等具體的に差かかりたる各問題を片付くるの外、市行政の上市會の間に今少し公平にして穩正の氣風を注入するを得ば氏また空しく市長の椅子を占めなんだと云ふべきであろう。

▽巧妙過ぎる奧田君

早川鐵冶

新東京市長としての奧田義人君は、これ迄の市長さんの中では一番私はよからうと思ふ、最初の松田君は、創設の時代であつたから、これと言つて見るべき事蹟もなかつた。次に市長となられた尾崎君は野黨の闘將としては誠に古今獨歩の感があり、攻擊質問等はこの人獨特の長所で何人の追隨をも許さないけれども、行政事務や、劃策の經營のことに至つてはこの人の短所とするところであつたから、十年間市長の椅子に居りながら何等見るべきものがなかつた。啻徒らに森久保村野一派がタマニーホールの傀儡たるに止まつて居つた。阪谷君は誠に溫良な好紳士であつて、行政上の智識手腕も相當に具へて居り、計數にも明かな人である。然しながら其性質溫良であつたが爲めに特にタマニーホールを破壞して從來の弊風を一掃するといふやうなことは出來なかつた。啻おとなしい許りで、多少事務を劃策したけれど、實行には常に勇氣がなくてはならないし、勇氣があれば多少矢面に立つて働かねばならないが、斯ういふ性質であるから氏が電燈問題で倒れるに至つたのも亦己むを得ない。要するにさばきがきかないものだから到頭野心家輩が機熟せしりとて詰腹を切らせるやうに仕向けたものらしいが、かゝる奸策を用ゐる者もある中だから市政の革新も君では企て及ばぬところであつた。私は君が從來の經歷から言つても亦御身代から言つても、市長等のやうな傾い

厭な會を相手にする仕事は初めからなさらなかつたらよかつたらうと思つて居る。

其處へ行くと奥田君は所謂海山千年の人であつて、粹も不粹も十分に味ひ盡くして居る人だから、阪谷君を倒したやうな奸策に對しては逸早く氣を付けられることであらうと思ふ。氏が就任前に容易に受理を肯んぜず、事情已むを得ずして遂に市長となつた等は如何にも其遣り口が巧妙である。世間ではこれを稱して官海游泳術の達人とするが、達人必ずしも達人に非ずで、御自分のお腕前としては其榮達も晩れて居つた。これといふのも官海游泳術の達人と餘りに世間から認められた結果で、今度の就任の有樣等を見て居ると實に官海游泳術の巧みな人のよい證據である。就任すると直ぐに政友會を脫會したのも巧妙である。少くとも世間からは巧妙な遣り口と認められて居る。

君と我輩とは一高時代の同窓であつて歲も我輩より少し上だつたかと思ふが、我輩等も兄分として君には一目も二目も置いて始終敬意を拂つて居つたものだ。學識も豐富だし行政手腕にも富んで居る。世間では圓滿滑脫だと思つて居るが、意地もある。故に夫の野心家をして其乘取策を防ぎ事務の成績をも上げられたることだらうとは思ふが、思ひ切つて憎まれ役になり矢面に立つて東京市政の爲めに百年の計を立てゝ色々の弊害を除かうとまでするか何うかは疑問である。東京市政の革新を要することは元より御承知であらう。將來の施設にしても水道、下水、交通の便、道路の整理、家屋の制定等百般の事業等に一方ならぬ考慮と努力とを要する。何うも大學出の人間は世の中を巧妙に無事に渡らうとする頭があつて困る。將來に偉蹟を遺し國家の爲めに或は市政の爲めに、非難をかまはずどし／＼陣頭に立つて遣る勇氣のないのが遺憾である。君は手腕はある方であるが勇氣が足らぬ。官海游泳術に達者だといふが、本來ならばもつと發達して居なければならぬところを、して居ないのはこれが爲めではなからうか。經歷からいふても彼が農商務省の局長をして居た時分に原敬等はまだ書記官であつた。然るに原敬は今でこそ悲境に沈淪して居るとはいふものゝ兎にも角にも野黨の旗頭で一時は原內閣の呼び聲もあつた。無論本人はさう確信して居つたことだらう。奥田君は今度政友會に辭表を出されたが、尾崎は十年間政黨者として東京市長の役を務めて居たのであるから奥田にしても務まらない筈はない。世間でも奥田が主なる政友會員であることは承知の上で、再三再四推選したのであるから政友會員として市長の職を遣つてもちつとも差支へはなからうと思ふがこれは即ち君の巧妙なる所以であるかも知れない。然し其巧妙なところがよくないのだ。

▽東京市長を論じて 奥田君に望む

文部大臣法學博士 一木喜德郎

人物評論といふものは困る。餘りに人の事を褒めると阿ることにな

し、さうかと言つて人の惡口を言ふことは出來ない。尤も新東京市長奥田君に就いては何も惡口を言ふやうなことが無からうけれど、假令有つたところで、言ふことは出來ない。であるから奥田君の人物評論といふやうなものは別として、東京市長の事に就いては私も嘗て關係した居つたこともあり、多少考へて居ることもあるから、其等の事に就いて何か一場の話をせよとの事ならば一通り私の考へを申上げてもよいと思ふ。自然にそれが新任東京市長奥田義人君に望む所ともなり、貴誌の要求を濟すこととなるならば望外の幸である。

先般貴族院に都市制案なるものを提出したが、私は其れと深い關係を有つて居るものであるから、先頃の議會で、貴族院豫算會議の席上、私は或人から其事に關する質問を受けた。其質問の趣旨は、前阪谷市長其職を辭してから既に半年にもなるが、今日のやうな有様では何時、何人が其地位を滿すか未だに見當が附かない。是れは制度其物が不良いのではないか。嘗て東京市の爲めに特別な制度を必要とせられたことがあつたやうであるが、今日之に對しては如何なる考へを有つて居らるかといふ意味であつた。其當時は未だ奥田君が市長の椅子に着くとも、誰が着くとも全く解らなかつた時分であつたが、以前から私は之に對しては特別の制度を要するものと考へて居つたので、其案を起し貴族院多數の賛助を得て、數回之を衆議院に提出したのであつたが、不幸にして衆議院の一致を見るに至らずして已んだのであるが、今日に至つても尚其一致を見ないとすれば、現行制度の最善を盡して行くより外はなからうといふ意見を述べておいた次第である。

私は其當時、市の現狀が實際の權力と責任の所在とが一致せず、又其關係が不明であるが爲めに、都市の行政は散漫に流れ、其實績が少しも舉らないのであると感じて居つた。市長は有るけれども、市參事會又は市會議員の制肘が甚だしく、實際の勢力は市參事會若くは其一人の手に在つて、徒らに市長は空位を擁して居るに過ぎない有様である。而して參事會は合議體であるから其責任が分れて、何人の責任とも附かない。市長は成程責任の地位には在るけれど、今言つたやうに實權は無い。府は市を監督する責任があるけれど、然しながら實際には府知事が東京市に對して監督權を行ふを許さない。それ故に日本全國の首府たる東京市の如き大都市は普通の制度で以て支配することは六ケ敷い。寧ろ現在の如き市が府縣の下に在る制度を改めて、市は直接に國家の監督を受けることにするがよい。然らば自然の結果として、市は府縣と同じ地位に立つて、其行政を擔任する長は國が直接に任命せざるを得ぬこととなる。之は已むを得ぬ結果であつて、斯くの如くにして團體の長たる者の地位を市會から獨立せしめ、市會は只其監督節制を掌り、市長は自己の責任を以て自己の意見を行ふといふ事になれば、行政の實績は舉がりはしないだらうかと。

以上は當時提案の趣旨であつたのであるが其成立を見るに至らずして今日に到り今日にては其成立の望は最早絶えて了つたやうな次第である

そこで第二に考へたのは、市長といふものは矢張り其選任方法を今日の如くしておくとして、舊の市政に於て市參事會が理事機關であつたが

爲めに責任が散漫になつたものとすれば、今日それをでも改めたら、いくらか良くなるではなからうか。合議體で行政を遣る事は良い事もあり、實行の如何に依つては實績の擧る事も認めるけれど、今日の日本の國情なり、從來の經驗に照して觀て實際に合はない處がある。是れは寧ろ市參事會なるものは府縣參事會などと同じく議事の機關として、行政の責任は專ら市長に在るとしたならば明かになるではなからうか。議するといふ事と、理するといふ事とを別にして、一方は責任を以て事に當り、他方は之に對して監督を加へるといふ事にしたら、仕事の成績が擧り、又弊害の生ずることも少くなるではなからうか。是れは獨り東京市にのみ關する問題ではなく、各市に通ずる問題である。

市制の改正は嘗て內務省で企てられ、案も幾度か書き變へられた。現在用ゐてゐるのは私の內務省に居る時分に作つた物で、上下兩院の協贊を經て、今日法律となつて居るのであるが、此改正に依つて理事機關は簡單になり、明白となつて市長も餘程遣り易くなつた事と考へてゐる。實際に於て此改正は我國の事情に適したものであつたと今も尙さう信じてゐる。然しながら大都市に於ては市長と議事機關との關係が依然として舊の如しであつて、參事會が行政の力を失つても、市會が市の事に就いて細大制肘するとは變りがないやうである。それが爲めに市長の位置は極めて困難で、一度び缺員を生ずると其後任が容易に物色されないといふ有樣である。最大都會たる東京に於て特に其困難が甚だしい。阪谷市長辭して既に半歲の歲月を閱しても尙適當な候補者が得られなかつたといふ其原因の一は、或は其邊に在りはしなかつたであらうかと思ふ。

斯う考へて來ると、病弊の根本は復たしても制度に在るのではないかといふ疑念が生じて來る。即前述べたやうな貴族院での質問も此疑に基いたものでは無からうか。幸に今日銓衡委員の熱心な努力に依つて奧田君を市長に迎へ得るやうになつて、一時前のやうな疑を除くことの出來たのは誠に幸である。奧田君は行政の經驗も有り、人物といひ、學識といひ、共に世人の認むるところであつて、若し此人にして尙市長として永く其地位を保つことを得ず、萬一不幸にして辭職するやうな事があつたら、再び罪は制度に在りはしないかといふ疑ひを生ずることを避け得ないであらう。どうか氏が市民全體の希望する如く永く此地位に在つて紛糾錯雜した幾多市政の問題を解決し、市行政の實績を擧げられんことを切望して止まない次第である。

それにつけても、奧田君にして如何に才力が有り、學識經驗が有るにしても、今日の世の中といふものは一人の考で仕事が擧がるものではない。市民全體殊には市民を代表してゐる市會が能く市長の地位を理解し責任を負うて其所信を行はしめ、細事に就いては猥りに制肘を加へること無く、市民全體の利益の爲めに常に市長の施政に就いて注意を與へ、節制を行うて過なからしめるやうに努めなければ如何に奧田氏が立派な市長であつても、市民の希望を滿足せしむる譯には行かないであらう、私は君の東京市長となられた事を衷心市の爲めに賀すると共に君が十分に君の健康を保ち、責任を負うて自己の經綸を行はれん事を望む者であ

る。それと同時に又市會議員の諸君が理事機關と議事機關との立場を能く區別して、市長に十分な責任を負はしめ、市政の實績を擧げしめる事に力められんことを冀望して歇まないのである。

▽奥田義人君

石川半山

新任東京市長奥田義人君は悧巧な人で有る、頭腦明晰にして機を見るに敏なる人で有る、其の才氣に至ては犬養毅、岡崎邦輔諸君に比すべき者だが、それが策士と見られないで、今日では德望家となッて居る所は全く修養の結果で有る。

初對面の時

明治二十三年の春、僕が代々木の品川彌二郎先生の別邸に往て、先生から維新前後の事に付て種々の教を受けて居ると、多くの客が來たが、其の第一は大谷嘉兵衛君で、茶業組合へ政府の保護金を下附されんことを要求し、時の農商務次官前田正名君へ先生の紹介狀を戴きたいと迫まッた、大谷君が此の要求をして居る所へ、「新に特許局長に任命を受けましたので、一寸御挨拶に罷り出でました」と言て、奥田義人君の名刺が來た、當時の品川先生は樞密顧問兼御料局長官で農商務省に關係は無かッたが、農商務省は先生が創立された者だから、此時代迄尙先生の勢力範圍で、新任の局長等は拔け目なく御挨拶に罷り出でた者だ先生は此の名刺を大谷君と僕とに示して「之れは年は若かいがなか／＼秀才だ」と言はれたが、案内に連れて入り來ッた奥田君を見ると、今とは違ひ年も若かく未だ三十歳ばかりで、色も白く、黒いモーニング、コートで頭髮を奇麗に梳り、今の言葉で言ふならば頗るハイカラな風采で如何にも先生の言はるゝ如く秀才だらうと思はれた、其の日は品川先生と大谷君と奥田君と僕と四人で、午餐を共にしたが、之れは僕か奥田君に接したる初めで、爾來奥田君の名を聽く每に、「秀才」と云ふ觀念が直ぐに浮はざるを得なかッた、

官界游泳術の達人

凡そ若かい時に秀才と評される樣な人は、多くは德望家よりも手腕家になる者だ、奥田君も最初は德の人ではなかッた樣だ、特許局長の時でも、衆議院書記官長の時でも、敏腕家と評された、拓殖務次官、農商務次官、法制局長官、文部次官等を歷任して、往く所として可ならざるなき手腕を示した時、世人は彼れを評して、「官界游泳術の達人」と言ッた僕は此評を聞いた時に、彼れは秀才の進むべき道に進み得た者だと思ふて居た。

親分は伊東巳代治子

特に奥田君の親分は伊東巳代治子で有ると云ふ事が、一般に知れ渡ッた、伊東子は勿論德の人ではなくて才の人で有る、明治の石田三成とさへも言はれた人で、智略の秀れたる人だ、此の人の子分には馬鹿は一人も居らない、皆怜悧で拔け目のない人ばかりだから、奥田君が此の智略の本陣に入て、相當の地位を占めて居るのを見て、世人が彼れを智略の人と見るのは止むを得なかつた。

德望家と化す

然るに一たび官界を退てより、イツの間にやら彼れは德望の人となッて居た、明治三十六年横濱で衆議院議員の選擧の時、加藤高明君は落選したけれど、奥田君は當選して居た、而して此時は鳥取市からも當選して居た、横濱市に於て彼れは島田君に次ぐの名望を收め、鳥取市では殆んど匹敵する者の無い人望を收めて居た、其後中央大學は彼れを學長に推戴し、彼れは今尙一部青年から崇拜されて居る、其の山本内閣の文部

大臣に就任するや、內閣の中堅で有ッたが、其の德望は各大臣中の雄なる者で有ッた、彼れは此の內閣に於て原敬氏以上の働らきをしたけれど反對黨は少しも彼れを憎くまなかッた、彼れは今や手腕の人としてよりも、德望の人として尊敬されて居る、明治二十三年に代々木で面會した時は、秀才の如き風采を備へて居たが、今や疎髯蓬々として、全く德望家の風采を具へて居る、昔は美しいモーニンク、コートかフロック、コートを着して居た者が、今日は流行に遲くれた古い衣服で平然として居る、昔は二人曳の人力車や馬車で市內を横行濶歩した者が、今や徒歩主義と稱して多くは步行し、止むを得ざる時は電車を利用して居る、曾て才智の人たりし彼れは、今や化して德望の人となり、行住坐臥、總べて德望の人たるべく化して居る、世間の人は、彼れを疑ふて「彼れは世人瞞着をなすべく故意に此の如き事をなしつゝ有り」と言ふが、それは酷評だ、僕は彼れが過ぐる十年間の修養に於て、此の如く德の人となッた者と考へる。

彼れの本意

今春僕は地方遊說の歸途、偶然沼津から奧田君と東海道の列車を共にして、東京へ歸ッた、奧田君も政友會の遊說員として靜岡縣に演說した歸途で有ッた、其の時に東京市長が無くて困まると云ふ問題が話題となッた時、彼れは「自分の如きは最も不適任で、第一にシルク、ハットで諸所の儀式に臨むのが閉口だ」と言ッた、之れは彼れの本心で、彼れに一點野心のなかッたことは明白で有る。

世間には彼れが久しく市長たるの野心を包藏しつゝ、巧みに市會議員等を操縱して、僅に其の目的を遂した樣に言て居を者も有るが、僕等は左樣には思はない、之れは必ず中野武營君を初め多くの議員に推されて止むを得ず之を受けた者と信ずる、從て市會議員等が此上何面倒な事を持ち込むなら彼れは何時でも之を投げ出すで有らうと信ずる。

將來良市長か

彼れが政友會の總務たる事と、電燈問題に關する市會の決議を無視する覺書を取つたことは、世の物議を生じた、實は僕も此の二點に於ては彼れに反對せんと欲した一人で有る、然かし彼れは就任後直ちに政友會を脫會して、第一の攻擊點を消滅した、此の位拔け目のない人だから電燈問題に付ても、何とか市會の感情を害しない樣に巧みに切り拔ける方案を有して居るに違ひない、僕は奧田君とは私交上に於ては、極めて淺いけれども、彼れの智略を認める一人で、而して近かく十年間の修養に於て、德望家の素質を發揮したるに鑑み、將來に於て彼れは必ず良市長となるで有らうと想ふ者だ、又市會議員等も彼れのアラばかりを見ないで、彼れを良市長となる樣に助ける方が、市民の爲めに良い事と、公平なる見地に立て考へる者だ、然かし若し奧田君が今後誤て良くない事をすれば、僕等は何時でも彼れに反對して、彼れを叩き落すに躊躇する者ではない。

▽樂觀を許さぬ奧田の前途

逆耳樓主人

奧田と云ふ人間は學問もあるし、相當の知識もあるし、先づいゝ人だらうと思ふ。併しながら人格と云ふ點になると、世間で云ふ程高い人間ぢやない、隨分コスイ所もあるやうに思はれる。今では民間に久しく居つた爲めに餘り世間の噂にも上らぬやうになつたが、昔は官界游泳術の達人として名高いものであつた。官界游泳術の達人とはどう云ふ事かと云ふと、伊藤の政權を取つた時は旨く伊藤に取入り、山縣の羽振のよい時は巧みに山縣の機嫌を取ると云ふ事で、詰り操守がない――守る所の

なきことを表示するもので、此一事已に人格の崇高でない事を證する。十年前の奥田に對する公評はつまり悧巧な人と云ふことであつた。今では人格に一點の批難がないやうにいはれるが、それは間違で、學問をして多少君子の道を聞いて居るから、無學者のやうな品のわるい事は出來ない、然し性質は立派な人とはいひにくい。又手腕と云つても實際の手腕をあらはした事はない。只本來が法律家であるから制度調査とか何とか云ふ方面には相當の成績を擧げたであらうが、實際上の事には未だ大手腕をあらはした實例がない。だから手腕の程はよく分らない。けれども些か君子の道を聞いて居るが爲めに思ひ切つたわるい事は出來まい。矢張り世評を氣にするだらう、だから所謂辣腕は有つて居るまいと思ふ。

之を阪谷に比ぶれば人格は些か劣つて居る。其代り悧巧な點は阪谷より餘程優つて居やう。阪谷はいはゞ好人物過ぎて失敗したものと見らるゝから、其點は奥田の方が却てよいかも知れぬ。

けれどもが、先生の今度の出方は少し遣り損つて居る。それは最初詮衡委員が東京市長の椅子を奥田へ持つて行つた時から、彼は其地位を始終自分の方へ引つける手段を取つて居る。それは第一に自分は不可んけれども相當の人物を僕が盡力しようと云つて、そして牧野に勸めたけれども、牧野が之を受けやうとは誰だつて想像が出來ぬ。恐らく奥田自身が最もよく牧野の受けぬ事を知つてゐたゞらう。それで牧野が受けぬ爲めに又再び話は奥田に還つた。之は彼の親分であつた巳代治から得た筆法で、巳代治は昔よく此手でやつたものだ。それから彼は詮衡委員に一々お禮參りをやつて歩いた。私のやうなものを推薦して下すつて有難い。私はどうもなることが出來ぬが何考へてよい人を推しませうといつてゐた。處が其中の或人から、そんな事を云ふより自分がなつた方がよいではないかといはれた時、流石の奥田もつひ口が辷つて、都合によつてはなつてもよいと云ふ口吻を洩らしたさうだ。幾度吻ね附けられても詮衡委員が彼を思ひ切らなかつたのも要するに彼の此の時の口吻があつたからであらう。或は已に加藤正義と打合せが出來て居つたと云ふ話もあるが其眞偽は分らない。兎に角手を換へ品を換へてやれば彼は受けると云ふ所がみんなに見えたものに違ひない。而して其原因は奥田が自ら作つたのだ。奥田はさう云ふ術を弄する人である。又あゝ云ふ風に廿日もかゝつてグズ〳〵やつて居つたのは一つは條件を取る爲めであつたらう。そしてあの覺書なるものを取つた。然し之は奥田にとつて果して巧妙な遣口であつたか或は巧妙過ぎて拙いものであるか。今後の結果を見なければ判斷は出來ない。僕にはあれがどうも遣り損ひであつたらうと思ふ。何故かと云ふと、奥田がすーっと出て來ると相當の市長である。久しく空椅子になつて居つた所に奥田がだまつて出ると、よい市長だと云つて市長が一齊に歡迎したらう。處がいろ〳〵小刀細工をやつた爲めに内面の事も分り、又覺書を取つて電燈問題を自分の勝手にやると云ふやうな氣振りを見せたのは市民の快しとせざる所である。又市會の一部のものも感情上奥田に對して面白くないのでいはゞ他日紛擾の種を蒔いた事にもなる。さうすると餘りに策を弄した結果奥田に不利を來たしたものと思ふ。併しながら此一事はよく奥田の人物をあらはすもので今後仕事をするに萬事此調子であらうと思ふ。さうなると今まで人格が高いとか手腕があるとか云つて居つた世評は直きに反對の世評に變らぬとも限らない。已に覺書の如きは第一の市會に於ていろ〳〵の質問が出て覺書の効能がないやうになつたではないか。されば今度の奥田の出方は已に失敗に初まつたもので、今後の奥田の地位は其困難なること矢張り阪谷に劣らず、決して前途の樂觀を許さぬものと信ずる。

■七月號出來■

定價廿錢 送料二錢・半年分一圓六十七錢 一年分三圓十二錢

女の世界

福澤桃介 ■藝者の功徳で家庭圓滿

■日本の女よ！諸君を解せよ……和田垣博士

■良人に對する主婦の希望……日向きむ子、三宅安子、鳩山薫子、原口鶴子、小川きくえ、吉岡彌生

■自由戀愛主義と社會關係……岩野泡鳴

■若夫婦和合の秘訣……青柳有美

■星の歌舞伎（長編小説）…泉鏡花

■生ぬるき夜（長編小説）…尾島菊子

●結婚と僕の煩悶……野依秀一

■大阪屋の杜若姫…長谷川時雨

■エライ女と其良人との關係…立花貞世

■女の團洲宇治龍子さん

■兩性問題生活問題

■理想の良人を罵る

■女俠堀の小萬

■下田歌子一代記

■結婚裁判と子殺事件…堺利彦

■王蝶に代つて野依氏…青柳生

■女優向の女 小山内薫

■和夫が在世なら…鳩山春子

■福澤先生と女 鎌田慶應義塾長

發行所 東京日比谷 振替三四三三 實業之世界社

（中付二〇一）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨を御附記を乞ふ

雄辯

■國家中心の觀方……山田敏一

■今や地方は空虛也……神戸彌作

讀者論壇
▽元老利用論 廣瀬秀圓
▽潮風君今在らば いねのもり
▽斜に見たる大阪 野村政造
▽學生と文藝 尾崎段山

■下院見聞記 風塵樓客

■支那人に誨ふ 永井柳太郎
▽高辯論部私觀 井口孝親
▽日本雄辯術 大澤一六
▽京都佛大辯士月旦 小林浩吉
▽薫風一路關西に下る記 永川俊美

■三大學に選擧權を與へよ 尾崎行雄

■豫想されたる日米戰爭 桐生悠々

縱論横議
▽彈れたる響の流 高醫 尾垣春二
▽殉教者 七高 行元豐圓
▽日蓮主義 日大 小根澤義山
▽生活の要求 東大 松下舜孝

■小久保喜七氏に與ふ 冬湖學人

▽聲から見た雄辯家 白堂山人
▽沼間守一君を憶ふ 島田三郎
▽噫中江兆民 兒玉花外
▽桐の花散る頃 平井晩村

■秀吉と家康 黒頭巾

■世界の平和と日本の使命……副島義一

■ロシアよりスカンヂナビカへ 露都にてA生

(中付二の二)

正價廿八錢稅二錢五厘
一ヶ年分參圓十二錢郵稅共

本郷坂下町 大日本雄辯會 振替東京三九三〇

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

近代文豪評傳

第五編 ＝新刊出來＝

モオパッサン

□永井荷風先生
□後藤末雄先生 共著

近代世界の思潮を風靡せる佛蘭西自然派の小説家にして世界的文豪たるモオパッサンの著作が我文壇に紹介せられてより既に二十年を閲す。而して未だ一編の傳記出づるなし本書は實に彼が少年時より、狂して終れるまでの、藝術的一生を明快に評記す。

■四六版帙入美本、定價各冊壹圓、郵税八錢■

既刊書目

- 第一編 ベルグソン 中澤臨川先生著 再版
- 第二編 ツルゲニェフ 昇曙夢先生著 再版
- 第三編 イブセン 中村春雨先生著 新刊
- 第四編 ゴーリキィ 相馬御風先生著 新刊

好評嘖々たる二大叢書

發兌 東京京橋區南紺屋町 實業之日本社出版部 【振替口座三二六番】

森鷗外博士 島村抱月先生 監修並解説

世界名著物語

全部十五册完結す

第十四編 **沙翁物語** 相馬泰三氏著
世界的大文豪シエークスピーアの四大悲劇といはれてゐる傑作四種を収む、一讀巻を蓋ふ能はず

第十五編 **神曲物語** 高月龍之助氏著
ダンテの神曲は實に中世期文明を代表せる大文學なり、本書は高月氏が二年に亘り苦心玉成されたる名著なり

■袖珍型頗美本、定價各冊四十錢、郵税六錢■

＝既刊書目＝

1 ホーマー物語 七版
2 シルレル物語 五版
3 ゲエテ物語 六版
4 アーサー物語 四版
5 ハーデイ物語 三版
6 モリエール物語 三版
7 ユーゴー物語 三版
8 失樂園物語 再版
9 十日物語 再版
10 水滸傳物語 再版
11 ゾラ物語 再版
12 源氏物語 再版
13 ドンキホーテ物語 新刊

（中付二の三）

●早稲田大學教授文學士内ヶ崎作三郎序

吉田絃二郎新著

タゴールの哲學と文藝

■四六判上製美本箱入
■全壹冊紙數六百頁

正價金壹圓廿八錢　郵税八錢

大好評賣行激甚　忽ち四版

早稲田講演曰く…最近我邦思想界にも普く其名の宣傳されてゐる印度の哲人にして詩人たるタゴールの思想及創作を最も忠實に紹介して居ると思はれるのは本書である。其の哲學に於ては人間が個我より出て、靈意識に進み、此に個我の解放を得てあらゆる貪慾を捨て遂に個我とブラアマと渾合融一したる世界に達する彼れの人生觀を說いて詳を盡して居る、就中先づ彼れが生立ちよりベンガル傳來の思想此の哲人の生活の周圍背景より說き及□□んでゐるのは、其の思想の根柢を最も明にして居るものと云はなければならぬ。尙其の文藝の方面に於ては詩作「園丁」「新月」を譯載し附するに戲曲『郵便局』『暗室の王』『チトラ』三篇を以てして居る著者は此の哲人の思想に深大の共鳴を感じつゝある人タゴールの全般を知らんとする人は本書を見るのが最も好いと思ふ。

小關愛山
市川虛村　共著

新刊

ペスタロッチ全集

近代敎育思潮の權威にして實際敎育の創造者たる世界的大敎育家ペスタロッチが、變轉極り無き數寄的傳記を熱烈の筆を以て縱横に述べ其の代表的名著四種の梗概を平明的確に叙述紹介せり。かの難解晦澁なる翻譯書とは全然その撰を異にし快文才筆流るゝが如く讀者をして卷を措く能はざらしむ。

四六判上製金壹册
金壹圓廿錢
郵税金八錢

(中付二の四)

東京市神田區
表神保町七番地

大同館發行

振替貯金口座
東京八七貳番

評論

生命の傳統

中澤臨川

目下のわが思想界には二つの大きな潮流が流れてゐると見てよい。その第一はニーチエやベルグソンの哲學を祖述した、またはそれから暗示を得てゐる、または是等の者を誤り傳へた個人主義で、叨りに個性の權威とその充實とを主張してゐる。第二はタゴールの思想を中心とする無限實現論者で、西洋の個人主義に反對する一種の東洋思想である。この兩思想は全然相反してゐるかのやうで、その實、今日の時代傾向を飽和した著しい一つの類似點を有してゐる。それは即ち在來の理性主義に反對し、抽象理想の破產を宣言しつゝ、自然の本能を重んじ、生の體驗、實現、創造などを主張するところにある。換言すれば、「生命」の尊重が兩派の歸一點である。唯だ個人主義者が生命の充實を力說するに反し、無限實現論者は生命の擴大を過重しようとする。與に楯の一面のみを見てゐる偏した議論であると謂はれよう。

生命の特徵はその個性にある。個性の無いところには生命はない。「我」は我である、「我」は獨存である、「我」は無比較である。個性の滅却は生命の破產であり、創造の空盡である。かるが故にあらゆる物を犧牲としてもこの個性を發育充實せしめるのが生命の本然に協つた道であるといふのが個人主義の主張である。

然し、生命の樹は獨立して發育するが、その根は大地に降りてゐて、どの樹も同じく、土の乳房から營養を受けてゐる。個性の破滅が廣い生命の損失であるか

らには、それは宇宙と係はる所がなければならない。各自の個性が絶對獨立であるならば、それは何物とも沒交渉で、從て無價値でなければならぬ。個性の價値が認められるほど、それは一般との深い交渉の存在を意味してゐるのである。樹が大地に根をはやしてゐるやうに、我等の個性は宇宙との交通を求めてゐる。かるが故に個性は獨立ではあるが、孤立ではない、より廣く個性が宇宙間に滲透するほど生命の價値を生ずるといふのが、一方の無限實現論者の主張である。

充實は排他に由ては遂げられない。孤立した個性がどこから營養を得て充實されようか。また擴大は棄我の手段のみでは全くない。次第に自我を薄めて行く擴大は終に自己の生命の空虚に終らざるを得ない。されば、充實は親他あつての充實で、擴大は充實と共に行はれる擴大でなければならない。生命は充實を要求すると同時に擴大を要求する。生命の樹の生長は充實即擴大である。即ち生命に於ては充實の要求たる個人主義と、擴大の要求たる無限實現主義とは一致調和すべきである。

この世の中に於て、個性と無限との對立ほど神秘なものはない。その對立を絶對と見るか方便と見るか、または憎みの分離と見るか愛の分離と見るか、個人主義と無限實現論との分れる點である。絶對個人主義は奇怪にも、擴大された人間神の影坊子を出して、その背景たる自然の蔭を極度に薄らめやうとしてゐるに反し、無限實現論は白熱化された大自然の中に薄い光のランプのやうに人間を映出してゐる。宇宙と個性との對立を方便としての「愛の分離」と見る點は、無限實現論の方が正しいが、然し何ちらの説も、生命の兩面相の一方觀にのみ偏し過ぎてゐることは爭へない。

此に於てか個人と宇宙とを相當の位置に取りもどして、其關係を正しく觀察することが我等に最も必要である。今日の個人主義は個人の爲めの個人主義である。餘りに個性の價値を重大視して、却て自己を孤立せしめるの不自然を敢てしてゐる。その結果は得手勝手の人生觀に傾き、宇宙觀のない生命觀に墮してゐる。彼

等の觀る人生は背景のない芝居である。彼等は蛙仰するが鳥瞰しない。かやうな絶對個人主義は、不自然に個人を宇宙から、また民族から切り離して、精神的に孤立せしめる。彼等は狭いイゴォの造つた殻の中に孤嘯しながら、驕慢になり、狂燥的になり、冷笑的になり、厭人的になる。

絶對個人主義者が殊更に他を敵視して、知らず識らず自我の周圍(まわり)に造る障壁は、最も恐るべき因習で、不自然な人爲的個性である。我等は之を、生命がその進化の必要から『愛の分離』に由て樹てた本然の個性と區別せねばならぬ。前者は假相で、後者が眞相である。前者は反撥的であるが、後者は親和的である。前者は因習(タゴールの所謂「蒙昧」Avidia)となつて生命の進化をさまたげるが、後者は傳統として現はれ生命を鼓舞激勵する役を務める。

こゝに傳統とは種の有する天然的特性で、人類に於ては各種屬の民族性から下つては各個人の個性をも總括した言葉である。生命の自然的傳統は先づ我等をして個人的自覺を起さしめ、之を推し擴めては民族的自覺に到らしめ、更に之を推し擴めては人類的自覺に到らしめる。傳統は大自然が方便の爲めに造つた差別で生命の進化の障害であるが如くにして、また我等が廣い生命の自由に到達する唯一の關門であり或は足場である。生命その物が既成(レディー、メード)の固定品でなくして、一個の持續または純粹進化その物であることを悟らば、かやうな傳統と生命との矛盾は、寧ろ自然の顯象と言はねばならない。

されば生命の無限の道から大觀すると、個性も、民族も、人類も、やがては超越さるべきものである。否な、個性は民族性に、民族性は人性(ヒューマニチー)に包容さるべきである。

『汝は人類を苦み上げねばならぬ』とはニーチェの言葉である。數百年後のニーチェは更に斯う言ふであらう、「汝は超人を苦み上げねばならぬ」と。

生命の傳統から推せば、我等の最初の自覺が個性の實現にあることは言ふまでもない。されば個人主義の

主張は最も自然で、且つ人類の踏むべき第一歩である、然かし其處へ因習がくる。我等の愛の自覺が先づ近親の者から眼醒め始めると、そこへ利己的分子が挾まつて、折角燃え出した純愛の火を消し止めるやうに、我等の生命の自覺も多くは個性の範圍に止まつて了ふ。我等の小自我がそこへ「蒙昧」の障壁を築く。で、その障壁が高く厚く築き上げられるほど、我等の個性の影は病的に擴大せられて、それから個性の爲めの個人主義、或は絶對個人主義が起るのである。

正當の個人主義は生命の爲めの個人主義でなければならない。個性の爲めの生命であつてはならない。生命の自然的傳統は我等をして先づ個性に自覺せしめ、次に民族に自覺せしめ、更に人類に自覺せしめる。個性が充實され擴張されて民族性に、民族性が充實され擴張されて人性に――かうして幾多の傳統の關門を過りつゝ生命は進化する。されば人類主義は廣い生命その物から見ての個人主義であり、民族主義は人類全體から見ての個人主義であると謂へる。反對に、個人主義が小自我の因習に囚はれずに、正當に實踐せられ、擴大されゝば、それが民族主義へ行く筈である。

個性も、民族性も、人性も遂には超越さるべきもの、苦み上げらるべきものとしたら、無限實現説は唯一の眞理ではなからうかと言ふ人があらう。之は至て尤な説である。生命のめざす精神の自由郷の極致は無限の實現にある。即ちタゴールの言ふ如く『各の物及び總ての物の中に彼を實現し』、『個性の限られた城壁を超え、人間以上になり、The All と一致する』ことである。然かし之は理想である。尠くとも生命の傳統と進化とを無視した議論である。

生命の進化と創造とには限りがない。我等は一擧にして無限を飛び越すことが能きない。而も、我等は傳統といふ細い一筋の道を辿り乍ら、因習の障壁を幾重か切り開きつゝ無限の方へ進まねばならぬ。進化が無限であるならば、その道筋たる傳統も亦無限であらねばならぬ。然るに傳統は廣義の個人主義の原因である。されば、無限實現は我等の理想であつて、人類が、ま

たは民族の、または各個人の個人主義が我等の之に進む手段であらねばならぬ。

要するに、絶對個人主義は小自我の因習に囚はれたものであり、無限實現說は生命の傳統を無視したものである。我等をして人爲的因習の障壁を破らしめよ、そして生命の傳統に準じて自然の發達を遂げしめよ。宇宙と個人との關係を正しき位置にもどして、包容的な世界觀の上に我等の人生觀を立てしめよ。換言すれば、廣い生命の眞要求の中に赤裸々な我等を置かしめよ。

生命の樹はその種子からのみ萌す。種子は我等の天禀の個性である。その種子はまた之に適した鄉土に根をおろすことに由て發育し、繁茂し、そして眞の天性に達する。種子の性質と之に適した風土とを無視して、どうして樹が育つか。之と同じやうに、その土地から離れ、家族から離れ、民族から離れて、どうして人間が自然でありえようか。自己が自己の個性を以て實際に生き、愛し、苦しんだ經驗を離れて、伸々とした發育がえられようか。生命は根のない抽象でなくて、具體的の生長である。個性及び民族の傳統に由らない生命の、自然でありえよう筈はない。

かるが故に我等は生命の正しき傳統を蹈む個人主義及び民族主義を主張する。我等は抽象的な世界主義や博愛主義に反對する。然かし我等の個人主義は個人の爲めの個人主義であつてはならぬ。生命のための個人主義でなければならぬ。我等の個人主義はそれ自らの充實のみを目的とするものでなくて、「與へそして取る」擴大を目的とせねばならぬ。我等は進化の方則を無視した無限實現說に反對するが、而も我等の理想は其處にあらねばならぬ。

新刊批評と紹介

△**世界の變局**　德富猪一郎著　民友社發行

著者椽大の筆を揮ひ、日頃の蘊蓄を傾盡して、世界未曾有の大戰亂を論ずるに獨步の妙文を以てす。現局を論じ原因に溯り、結果を豫斷して行文流暢、實に一讀巻を措く能はざらしむるもの、誠に天下の珍品と言ふ

べし。(定價金二圓五拾錢)

△**歐洲教育の進化**　谷本富著　大日本圖書株式會社發行

本書は大學講義全集の第二輯にして、西洋教育史を講述せるものなれど、これに依つて西洋文明發展の經路を示せる點に於て殊に其特色を有すとなす。(定價金二圓)

△**大西鄕**　黒頭巾著　大學館發行

「百世の寳とすべきものは近松の文章、西鄕の人物」也といへる著者は其大西鄕の意氣に感じ、其人物を憧憬するの餘り此書を成す。想の卓、文の妙今また言ふの要無し。(定價金壹圓五拾錢)

△**處世之道**　大内青巒著　至誠堂發行

本書は著者が隨時隨所に講演せられたるものにして、通俗に人道の歸趣と處世の要諦とを說きて世人の修養に資せんとせり。(定價金貳圓)

△**純一生活**　吉江孤雁著　早稻田文學社發行

人間の紛糾錯雜した生活に統一を與へて、自然の姿に復歸せしめ度いといふのが純一生活の名ある所以である。著者は眞面目に本然の生其物を味はんとして苦悶して居る。此書に就て觀ても、外を飾る華かさは無いけれど、内に流れる一脉の眞摯は眞面目な生の熱愛者にとつて恰好無二の伴侶となるであらう。(定價金九拾五錢)

△**タゴールの哲學と文藝**　吉田絃二郎著　大同館發行

最近思想界の流行兒タゴールに關する著述も澤山に出たけれど、かの深遠なる哲學思想を盛るに幽玄なる詩作を以てした彼の著作を味ふには文章も巧く、其思想をも咀嚼して、其哲學と其文藝とを併せ說いた此書の如きが最も適當であらうと思ふ。(定價金壹圓貳拾八錢)

△**人生**　三浦關造譯　玄黄社發行

本書はトルストイの六十歳前後から八十歳迄の論文と書簡とを譯して收めた物である。杜翁の哲學宗教殊に晩年の思想を知るに便なるものである。(定價金壹圓拾錢)

△**鎌倉室町時代文學史(全)**　藤岡作太郎著　大倉書店發行

國文學史家として定評ある著者が三年間の講義にかゝる物にして、東圃遺稿の第三卷として今發刊せられたる也。我國文學史中鎌倉室町時代の文學は最も沈衰の時代にして其研究に最も困難を感ずるものなるが、今此書を得たる誠に欣ぶべしとなす。(定價金貳圓)

△**その前夜**　楠山正雄脚色　新潮社發行

ツルゲエニフのその前夜を五幕物に脚色して、藝術座に依つて上場せられたるは其臺本也。劇としての「その其前夜」は其當時既に定評あり其舞臺的功果に至つては勿論、讀物としても亦興味深し。(定價金七拾錢)

△**人性論**　中瀨古六郎譯　文明書院發行

生命學の泰斗、不老長壽論の著者、喰細胞說を唱へて有名なる世界の醫學者エリーメッチニコッフの人性論を直接佛蘭西語より譯せる物にして、此書が科學的研究として絕大の價値あるは勿論、譯者中瀨古氏は亦最も此種の譯出に適當なる人にして、其譯文明瞭能く其意を盡せるを見る。(定價金壹圓五拾錢)

新刊書二百餘種の批評　は頁數超過の爲み又々次號に廻はすの止むなきに至りたり。寄贈書肆及び讀者の諒恕を乞ふ。

（中付三の一）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

見よ空前の大計劃本邦學術界の最大權威

大日本學術叢書

購讀會員募集

會則摘要（甲種會員）本會刊行ノ叢書全部ヲ購讀スルモノ（乙種會員）本會刊行ノ叢書十種以上ヲ購讀スルモノ（丙種會員）本會刊行ノ叢書五種以上ヲ購讀スルモノ甲種會員ハ一冊一圓十錢乙種會員一冊ハ一圓二十錢丙種會員ハ一冊一圓三十錢（會費ハ毎冊出版通知次第一冊分宛拂込ムベキコト）會員外ニシテ叢書ノ一部ヲ希望スル場合ニハ一冊一圓六十錢郵税ハ總テ本會ノ負擔トス入會申込ハ葉書ニテ差支ナシ

◉申込次第會則進呈

◉本會顧問　文法學博士 加藤弘之　高島平三郎　理學博士 山内繁雄　山口小太郎　文學博士 遠藤隆吉

刊行書目　六月第一編出版以下毎月一冊宛出版　毎編紙數四百頁總クロース製美本

- 理學博士 山内繁雄著　遺傳論
- 文學博士 佐々木信綱著　和歌史の研究
- 文學博士 遠藤隆吉著　社會學の新研究
- 文學博士 中島力造著　近代倫理學說批判
- 文法學博士 加藤弘之著　利己論
- 文學博士 中島泰藏著　感情の心理
- 文學博士 高楠順次郎著　印度文明史綱
- 理學博士 石川千代松著　人間の進化
- 東洋大學教授 高島平三郎著　精神の進化
- 醫學博士 永井潜著　比較生理學
- 文學博士 服部宇之吉著　支那哲學史
- 東京帝國大學講師 木村泰賢著　印度哲學史
- 文學博士 前田慧雲著　支那佛教史
- 文學博士 村上專精著　日本佛教史
- 理學博士 一戸直藏著　太陽系
- 東京外國語學校教授 山口小太郎著　音韻論
- 文學博士 藤岡勝二著　言語地理
- 書名未定　文學博士 福來友吉
- 書名未定　理學博士 丘淺次郎
- 同　文學博士 松本文三郎
- 同　文學博士 深田康算
- 同　文學博士 上田敏
- 同　文學博士 朝永三十郎
- 同　文學博士 藤井健治郎
- 同　文學博士 芳賀矢一
- 同　文學博士 村川堅固
- 同　文學博士 醫學博士 富士川游
- 同　理學博士 龜高德三

理學博士 山内繁雄著

第一編 遺傳論

遺傳は生物特有の事實にして生物學の知識を以て論ぜらるべきものなれども遺傳に關する考は教育上社會政策上重要なる本書は本邦遺傳學の泰斗山内博士が最近學說の批判と獨得の研究を記述したるもの論理明確行文簡易一の贅語なし、是本書の誇とする所なり。

菊版上製函入美本　定價金壹圓六拾錢　七月二十五日發行

東京市日本橋區大傳馬鹽町十八番地　振替東京三〇一六三番

大日本學術協會

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

澁澤男題詩　阪谷男序　若槻藏相序　高橋男序

貴族院議員前大藏次官

勝田主計先生著

黒雲白雨

是れ著者が戰亂の歐洲より齎らせる趣味深き觀察また警拔なる活論文!!!

―辛州勝田主計先生曩に閑を得て支那歐米漫遊の途に上り眼を世界の大局に曝らし志を當世に行はんとす。旅中偶々歐洲大戰の突發するあり、歸來斯の未曾有の時局に對する胸中の磊磈を吐露せるもの即ち本書なり。財政に外交に軍事に經濟に觀察精透論旨警拔宇内の形勢と時勢の眞相を道破して餘蘊なし若し夫れ忙中閑を得て物せる輕妙洒脱なる俳句、紀行文に至つては錦上更に花を添え他人の企及を許さず。蓋し是れ唯一無二、最新の智識！最好の趣味！

阪谷男爵 曰く、學者も多く著作も多いが、最適當な人が折よく實地に遭遇し其研究を吐露せる本書の如きは實に得難し。

高橋男爵 曰く、君が山東にて口吟せる聚雨來の俳句が歐洲大戰の識を爲せるを偶意せるものか時務を談ずる者の必讀書。

若槻藏相 曰く、觀察の適確にして議論の肯綮に當れる實に當代得難き著作なり。一讀趣味津々として時の移るを覺えず。

總洋布裝幀頁數四百餘
精巧コロタイプ十六葉
金文字最美本
定價壹圓五拾錢
（送料八錢）

發兌元　東京市本郷區駒込富士前町十九番地　振替東京二六〇二一番　興風書院

(中付三の三)

發賣元　東京市神田神保町　東京堂　振替東京二七〇番

夏季特別號

早稻田文學

七月一日發行　本號倍册に限り　五十錢　郵税三錢

■罪と罰（脚本）　ドストエフスキイ原作　ローア、ビング脚色　坪内士行飜譯■

■小説　小さき獸　谷崎精二

■小説　冬　堀切茂雄

■小説　さび　畑耕一

■小説　御奉公　ない子

■小説　ひこばえ　村山勇三

■小説　妙な男　昇曙夢

■獨逸の群衆劇術に就いて（評論）　櫻井天壇

■シ・ウの新作（紹介）　荒畑寒村

最近思潮

■婦人參政權運動
■逝ける彫刻家ピ氏
■戰爭と言語
■北米出版界消息
■最近の評論壇
■代議政治無用論
■寛畝畫伯逝く
■六月の小説界

詩歌

兒玉花外　中川一政　渡邊吉治　大熊信行　石川才三郎　奥川夢郎　高山辰三　大澤一龍　吉植庄亮

■現代の惱み（評論）　田中純

■凡人淨土（感想）　相馬御風

（中付三の四）

● 不良少年問題の研究

■心理學上より見たる不良少年＝加藤成俊
■教育學上より見たる不良少年＝乙竹岩造
■救世軍より見たる不良少年＝高松大尉
■小説家より見たる不良少年＝田山花袋
■[illegible]

分類 圖書總目録 進呈
（掲載圖書約五千種・新版出來往復葉書にて申込あれ）

東京神田表神保町
合資會社 東京堂書店



道樂雙六

正宗白鳥

雨の霽れ間を見て、兄の太一は、田舍から來た弟の參三と一緒に家を出た。が、行先は異つてゐた。

「日比谷の公園でも見ようか」と、太一は電車の窓から公園の方を顧みて云つたが、弟が氣の進まぬらしいのを知ると、強いては勸めなかつた。そして、尾張町の乘換場所で電車を下りると、弟の行先の道順を簡單に敎へて、念のために持つて來た一本の傘をも貸してやつて、「あまり遲くならん間に歸つて來い」と云つて別れた。

別れた後で、太一は弟の用向について考へながら銀座通りをぶら〳〵歩いた。前觸れなしに、今朝突如に訪ねて來た弟の話を基として、彼れの故郷である貧しい漁村の現在の有樣をいろ〳〵と心に浮べた。目では飾窓の華美な品物を見て、耳では電車などの騷々しい音を聞きながら、田舍の穢しい家や、何造とか何平とかいふ漁夫の顏をひよい〳〵念頭に映じたゐた。と、傍にゐる間は何とも思はなかつた弟

の姿が、賑かな市街を背景にして濃厚に動き出したので、太一はふと獨り笑ひをした。色の赭黑いがつしりした身體に、七子か何かの單衣の紋付羽織を着て、自家製の賣れ殘りの色の汚いがさ／＼したパナマの帽子を被つて、天鵞絨か何かの太い鼻緒をすげた下駄を穿いた弟は、風采からしてあの漁村を代表して都へ來てゐるやうだつた。飾窓に映つた店さま／＼の贅澤品にも、誘惑されさうな目付を彼れはしてゐなかつた。

「あんな粗野な風をして、解り難い田舍言葉丸出しで、都會の役人など說廻つて賴んだところで、とても目的は達せられまい」と、太一はひそかに危んだ。成功にしろ不成功にしろ、弟の身の上にも彼れの一族の上にも、さして關係のあることではないが、しかし、あの貧乏村の運命を弟が脊負つて來てゐると思ふと、不安心でならなかつた。昔から命知らずと唄はれてゐたほどの勇敢な氣象と、熟練した技倆を持つて、近海に名の響いてゐた故鄕の漁民も、その中に智慧者がなかつたゝめに、年々に漁場を狹められて、やうやく目が醒めた頃には旣に時が遲過ぎた。今は最後のしかも一番肝心な漁場をも失はうとしてゐる。

「何にしても自分の村に附いてる海は、一里四方の淺い瀨だけで、他所の海を荒して漁をしとつたのぢやから、今のやうに規則が六ヶ敷なり出しちやどもならん。荒海を前に扣へとる土地だと漁業權の問題もさう面倒にやならんが、瀨戶內ぢや海は狹いし魚は次第に減つて來るしするから、漁場爭ひがひどうなつて共倒れのやうな有樣ぢや」と、弟が例を擧げて話してゐた。

太一はたび／＼の旅行でよく知つてゐる九州とか北陸とかの大海を思出して、それ等に比べると、自

分の故郷の海などは海と呼ぶのが可笑なくらゐで、小さい水溜りに過ぎないのだから、たとへ漁場が擴張されたつて高が知れてゐると、村の將來が案ぜられた。

こんな事に頭を使ひながら、腹こなしに歩いてゐる間、知らず〳〵銀座通りを左側から右側へて一週して、京橋を渡つた。次手に三越の江戸趣味展覽會といふものを見て來ようと、ふと思付いて、其方へ足を向けた。暫く止んでゐた雨がまたぽつ〳〵落ちて來たが、太一はそのために足を早めはしなかつた。水や泥を恐れるやうな衣服も下駄も身に着けてはゐなかつたので、むしろ冷たい雨に頬を打たれるのをいゝ氣持だくらゐに思つて、電車にも俥にも乘らないで三越まで行つた。彼れも散歩の目標として時々此處へ來たことはあるが、陳列された反物をしみ〳〵見たことは只の一度もなかつた。「着物の柄さへ見分けられぬやうな粗雜な人間に、他人の心理狀態など觀察されやう筈はない」と誰れかゞ云つたことは如何にも眞理であるやうに思はれたので、これも研究のつもりで、努力して吳服屋の飾窓を覗くことがないではないが、こんな贅澤品を見る彼れの目は節穴同然であつた。二十年も都會に住んでゐながら、その點では今日訪ねて來た弟とさしたる相違はなかつた。獨身時代に拵へた衣服は一つとして自分の身體に調和したものはなかつた。今着てゐるセルにしても、小さい吳服屋に騙された贋物だが、洒落れたつもりで買つた薩摩絣でも上布でも、一度水を潜るとぐにや〳〵になるまがひ物であつた。

彼れは左右にうよ〳〵してゐる見物人の中を素通りして、展覽會の方へ急いだ。時間が遲かつたので、附屬の光琳陳列會は既に閉られてゐた。江戸の風俗を現はす品々が取集められてゐたが、一つ〳〵見て行く中、次第に彼れの頭に殘つた感じは、どれも飯事染みてゐることだつた。道樂双六といふのに彼れ

は最も興味を寄せて見入つた。其處には振出しから上りまで、二三十の娯樂の繪が描かれてあつて、晝中の人物は皆呑氣らしい面付をしてゐた。碁將棊双六から女郎買ひ藝者遊びまで江戸時代の娯樂の種類が殘らず集められてあつたが、太一自身の心を惹くやうな娯樂は一つも見當らなかつた。江戸に限らず人間の娯樂はこのくらゐのところで盡きてゐるのであらうか。……彼れはその繪の前に立つて、いろ〳〵の知人のいろ〳〵な道樂を考へたが、どれにも羨ましがるほどの價値はなかつた。この双六には神信心をも算盤いじりをも道樂の一つとして見立ててあつて、宗教でも實業でも人間萬事を遊びごとゝ觀じてあるらしいのが、江戸の哲學の極意のやうに思はれて面白かつた。

窓から覗くと雨は可成りに激しく降つてゐた。出口へ下りると何時もの通りに雜沓してゐて、容易に下足が取れなかつた。で、椅子に腰を掛けて煙草を吸ひながら、買物の包を抱へてゐる人々の顏を見てゐたが、若い夫婦連れも醜いのや奇麗なのが幾組も通つた。大正の道樂双六には見逃がすべからざる材料だと思はれたが、それにつけても彼自身は只の一度も夫婦連れで三越や帝劇へ贅を盡しに行つたことはないのが、よく〳〵の貧乏性のやうに思はれた。何、見切物の浴衣地を一反や二反買つたり、帝劇の食堂で猫のへどのやうな洋食を食べたりするくらゐの贅澤は强いて出來ぬとはないと、腹の中では氣取つてゐたが、そんなことに興味が伴はないのだから、矢張骨の髓まで貧乏性に相違なかつた。

自働車や俥が泥を跳ね散らしてゐる中を、太一は傘も差さず低い下駄で貫拔けて、向側の店で雲丹だの乾物だのをしこたま買つて懷へねぢ込んだ。弟に喰はせるつもりで河岸の屋臺店で鮨を買つて、それをぶら下げて日本橋を渡つた。雨に濡れそぼちながら、こんな樣をして大通りを歩いてゐるのは、他人

の目にはさぞ見窄らしく映るだらうと、彼れは自分の姿を顧みた。

雨は夕立模樣でざつと降出した。電車はどれも鈴成りて車掌臺にまで溢れてゐた。彼れは銀行の石段で雨宿りして、他所行の衣服を濡しながら歩いてゐる人々を見て退屈を凌いでゐたが、雨は容易に止みそうでなかつた。で、我慢し切れなくつて、通りかゝつた空俥を呼んで飛乘つたが、暫く乘つたことのない俥の乘心地は惡くはなかつた。ずぶ濡れで泥濘をてくつてゐたのに比べると、多少贅澤の快感が味はれたやうだつた。

身體を動かして來たお蔭で、朝から重苦しかつた胃の腑も稍々輕くなつてゐた。手足を洗つて衣服を着替へて、例になく氣持よく食卓に向つた。竹の皮包を開けて、ぐちや／＼になつてゐる鮨を抓みながら、三越の話を女房に聞かせた。話す方では卒氣なかつたが、聞く方では羨ましさうに聞いてゐた。折角弟のためにと買つて來た鮨も、大方は二人の口へ入つて殘り少なになつた。

「これだけでも參三さんに取つときませう」と、女房は殘りを竹の皮包から小皿へ移して、「もう歸りさうなものだが。そのつもりで牛肉も取つといたのに」と呟いた。

「何處かで歌の話をしてゐるのだよ、屹度」太一はふと道樂双六の中にあつた歌人の繪を思出して獨笑ひをした。

「和歌だけでも凝固まつてやつてると、それ一つを樂みにして一生が送れるんだね」

「歌なんてそんなに面白いものか知らん」女房は不思議に思つて、「長唄や常盤津なら面白いだらうけれど、百人首の歌なんか詰らないと思ふわ」

「おれにや何方も面白くない。双六の中に釣魚といふのがあつたが、あれは一寸面白いものらしい。おれは故郷へ歸つて釣魚をしやうと思つてゐたこともあつたが、この頃は彼方でも漁が六ヶ敷くなつて、とても素人の慰みなんかにはならないさうだよ。おれが子供の時分には、埠頭場でも沙魚の五尾や十尾は釣れたから面白かつたがね」

太一は釣魚だの遊泳だのと、故郷の小さい靜かな海を娯樂場として遊んでゐた昔を思出した。あの頃は禁漁期の束縛もなければ、漁場爭ひもなかつた。釣竿や綱を持つて出れば、何處でゞも苦もなく魚は捕れることゝ思つてゐたのだつた。

食後暫くは茶の間で夕刊など讀みながら弟を待つてゐたが、あまり歸りが遲いので、待ちあぐんで二階の書齋へ上つた。其處には弟の荷物が轉つてゐた。萬葉集の考證本も四五冊側に出てゐた。これは弟が自分が持つてゐる小さな印刷機械を利用してつくつたもので、植字も印刷も校正も製本も凡て自分一人の手で日數を厭はず仕遂げたのである。活字を一字々々並べるにも、用紙を裁つにも、彼れの趣味が伴つてゐる譯である。

さういふ點を珍らしく思つて、太一は舊式な活字で印刷されてゐる萬葉集をところ〳〵開けて讀んだ。和歌の巧拙や古語の意味のよく解らない彼れにも、氣持よく感ぜられる歌が少くはなかつた。「やすみしゝわがおほきみ」とか、「高照らす日のみこ」とか呼んで、天皇に對して眞心を寄せた歌や、「草枕」の旅で「家なる妹」を思つてゐる歌をいくつも讀んでゐると、單純な飾り氣のない唄ひ振りが懷かしくなつた。そして、田舍の端でこんな古めかしい單純な歌の文字をいじくつて、それを無二の樂みにして

日を送つてゐる弟の身の上が仕合はせなやうに思はれた。

やがて、弟のらしい下駄の音が聞えたので、太一は書物を擱いて階下へ下りて、弟が茶の間へ腰を卸すのを待つて、「用事は易く話がつきさうなのか」と訊いた。

「飯は他所で饗れました」と、參三は振向いて兄嫁の問ひに答へてから、「骨を折つて呉れる筈にやなつたのぢやが、明日一度農商務省の係りの者に會つて直接に様子を索つて見にやならん」と尤もらしく云つて、「巣鴨新田から林町まで歩いて來たら、えらい遠いので閉口した」と零して、濕れた紋付羽織を脱ぐが早いか隅の方へ抛りつけた。

「しかし、あんな小ぽけな村の事を農商務省だつて身を入れて調べて呉れりやすまい。先づ駄目だらうね。長官に懇意な人でもあればだが、平役人に會つて頼んだつて、手頼りやなるまいね」太一は大きな役所へ訪ねて行く弟の田舎びた態度を想像しても、成功が信じられなかつた。

「そりや岡松さんの紹介で、向うの係りの人に特別に此方のためになるやうに周旋して貰ふことになつとるんぢや。……もう四五年早く願書を出しとけば面倒なことも起らなんだのぢやが、先方で漁業權の願書を出して漁場を自分のものにしとる後ぢやから、どうも都合が惡い」

弟は漁業權の講釋をした。縣と縣との軋轢や村と村との繩張爭ひを指で圖を描いて説明した。それによると、故郷の漁民の勢力範圍などは農商務省の水產課の地圖には載つてゐないらしかつた。存在すら認められてゐない。法律上海岸から五里離れたら何處の海でも自由な漁場になるのだが、瀨戸内のやうな狹隘しい所ではそんな法律は役に立たなかつた。殊に故郷あたりの海は何處にゐても陸の聲が聞えさ

うなくらゐに狹いのだ。

「今差當つて困つとるのは、Y島の漁なんぢや。鯛と鰆の捕れ時で、少し巧者な村の漁夫は一組で日に四五十圓の漁はするんぢやから、一年中一番大事な時節なのぢやがな。それを今年からY島の方で差留めやうとしとる。此方ぢや事情は分らなんだから、これまで通りに仕度をして出掛けて行くと、どつこいさうはならん漁業權は持つてるかと追返さうとするんで大悶着が起つとる。何しろ、Y島の漁夫は漁が下手なのに、此方の漁夫は上手だから、どし／＼魚を淺つて行くんで、見とつても忌々しうなるんと見える。自分等だけぢや捕り切れんでも、他村の者に見す／＼捕つてかれるんが胸糞が惡いんぢやらう。…若しかY島の漁が出來んとなると、村の者は今日に今日から食て行く道がなうなるがな。この鯛網を當てに借金もしとるし、質も置いとるし、資本も掛けとるんぢやから」

「あの島へそんなに魚が寄つて來るのかね」

太一は朧ろげに憶えてゐるその島を目に浮べて、その近傍の地理や景色を語合つた。島は播州灘に緑の蔭を映して、大阪通ひの船はそのほとりを通つてゐた。其處等で捕れた鯛は、明石鯛の中に數へられて、京阪地方で最上の市價を持つてゐるのだつた。鯛の濱燒は太一等が子供の時分に無類飛切りの美味として敎へられてゐた。磯馴松を掠めて藻鹽燒く煙が棚引くといふ舊い歌の文句にありさうな砂の白い濱邊に竈を据ゑて、海から引上げたばかりの鯛を燒いて饗宴を開くのは、昔の長者の贅澤な道樂として聞かされてゐた。

「今は鯛の鹽燒ぐらゐ誰れでも食べるやうになつたから魚も減る譯だね。…しかし小さい海でこせこ

せ言合つてゐるよりや朝鮮へでも臺灣へでも稼ぎに出たらいゝだらうのに」と太一が云ふと、
「そんな大仕掛のことになると、資本の工面からして面倒ぢや。今日捕つた者を今日金にせにやならん漁夫ばかりぢやから、長い先のことを考へる暇はありやせん」參三は兄の迂遠な言葉を笑つて、「全體漁夫には貯蓄心がなうて困るんだが、今度は貯蓄のためにえらい目に會ふたんぢや。二三年前東京の××貯蓄銀行から勸誘員が來て、甘いことを云ふて方々を說いて廻つたんで、その手先になつて周旋する者も出來て、共有財產や各自の金を、あの一郡全體で三萬圓近くも預けたのぢや。そないに利子が高いのではないんだけど、妙な人氣でその銀行へ預けとけきや五年で倍になるとか何とか、噂がえらうなつて、漁夫までも預けるやうになつたのはえゝが、この四月にその銀行が破產し居つて、重役が自殺したとかで、預けた者は元も子も取れりやせん。折角出來かゝつた漁夫の貯金思想もこれで滅茶ぢや」
「お前は預けた仲間ぢやないのかい」
「わしは預けるやうな金はないから、こんな時にや安心ぢやがな。しかし、東京へ來て自働車なんぞへ乘つてえらさうな顏しとる男を見ると、あゝいふ人間が貧乏人を騙して金を預けさせて、その金で贅澤をしとるやうに思はれて、由斷もなりやせん」
一しきり田舍話がはずんでゐたが、參三は旅の疲れで睡氣さして、頻りに欠伸をし出した。先つきから默つて二人の話を聞いてゐた女房は、ふと、
「參三さんは大變白髮が生へましたね」と云つた。兄よりも弟の方が老けて見られた。
「へゝえ」と、弟は氣のない返事をして、「わしは十年も前から白髮があります」

「明日は何處かへ見物に入つしやいますか」

「わしはこれで五六度東京へ來とる譯ぢやが、見物して廻つたことは一度もありません。角力だけは一度見たいと思ふとるけど、それもよしにするかな。用事さへ片付いたらさつさと去ぬこつちや」

　參三は旅の疲れでぐつすり眠入つたが、翌朝は早起自慢の兄が早くから雨戸を開けてゐるのに氣付づくと、自分だけ何時までも寢床にゐる譯には行かなくなつて、寢不足を我慢して起上つた。胃弱の兄のお相伴で、喰馴れぬ麵麭や牛乳で不滿足な朝飯を濟まして、袴を捲付けて出掛けた。しかし早起きのお陰で割引の電車に乘れたのは德用だつた。

　紹介狀を持つてある人を訪ねたが、その人はまだ寢てゐて、一時間くらゐ經つてから來て呉れと、取次の男が云つた。參三は所在なさに近所をぶらついたが、ふと昨日電車の中で兄の云つた言葉を思出して、無駄な時間を利用して、近くの日比谷公園へ行つて見ようと思ひついた。

　公園の中を少し歩いて見たが、さして興もないので、木蔭のベンチに腰をかけた。これが東京風かと思はれるやうな服裝をした男女が頻りに前を通つた。華美な東京の生活と粗末な田舍の生活とが彼れの頭の中で比較された。そして、彼自身には公園をも活動寫眞をも芝居をも些とも見たいと思つてゐないけれど、妻子には一度見せてやりたかつた。鶴の嘴から勢ひよく噴出してゐる噴水を子供に見せたらさぞ珍らしがるだらうに……。鶩の泳いでゐるのも鯉が麩を喰べてゐるのも、子供の心になつて見ると面白さうだ。

彼れは都會生活を羨むのではないが、多勢の兄弟の中で、自分一人が小學校以上の教育は受けないで、田舎で留守居役を勤めて老いて行くのを、割に合はぬ厭なことと時々思はぬではなかつた。英語だの獨逸語だのを聞かされたり、あるひは何とかの新思想だの自然主義だのと、やくたいもないことを弟どもが歸省のたびに喋舌つてゐるのを聞くと、癪に觸ることもあるし、そんなことの解らない自分が世に遲れてゐるやうで、弟に對して氣が引けることもあつた。

こんな不平が今もふと胸に湧いたが、それは間もなく烟のやうに消えて、青葉に圍まれた池の眺めは和歌の種となりかけた。ベンチにはいろ〳〵の人間が腰掛けては去つた。

彼れは時刻を見計らつて、公園を出てある官邸を訪ねた。應接室へ通されると、手持不沙汰でおづおづしたが、相手が意外にも柔しい態度で親切さうな口振りだつたのに甘へて、依頼の筋を心置きなく述べ立てた。そして兎に角好意ある返事を得たのを喜んで其處を出た。

まだ農商務省などへも行かなければならないのだが、さう續けて窮屈な所へ出入するのは厭だつた。附たりの用事として、短冊や色紙の揮毫の依頼をも引受けて來てゐるので、同じ奔走するにしても、その方がどれほど樂しみになるか知れなかつた。同門の歌友達をも訪ねて東京の歌壇の樣子をも聽きたかつた。

で、彼れは一村の安危の懸つてゐる漁業權の問題は一時頭の中から拭ひ去つて、晴々した氣持で、ある御歌所の歌人の住んでゐる方向を考へ〳〵電車道へ向つた。

參三は歌の話に凝つて一日を快く過した。知らず〳〵夜になつたので、慌てゝ歸途に就いたが、道を迷つたり電車の停電に會つたりして、豫定よりも餘程おくれて家へ着いた。兄夫婦は茶の間で眠さうな顏をして待つてゐた。鐵瓶には湯が滾つてゐた。參三は長い一日の間に自然にずり下つてゐた袴を脫いで、羽織を拋出して胡座を搔いた。

「御馳走などつさり拵へて待つてたのに、昨日も今日も晩に歸つてらつしやらないんだもの」と、兄嫁は馴々しく云つた。

「御馳走も、妙なもので、東京へ來ると、些とも食べたいことはありませんな。疲れるせいか、水や鹽加減が違ふせいか知らん。自分の家に居ると何でもよう食べられるんぢやが」と、弟は好意に背いたのを氣にしたやうな口調で申譯をした。泊らしてさへ貰へればいゝので、手厚く持成されやうとも親身な內輪話をしやうとも腹では思つてゐなかつた。注いで吳れた茶を乾いた喉へ二三杯も流し込んで、牛乳臭い變な味のする小さな西洋菓子を二つ三つさも不味さうに食べながら、今日見て來た日比谷や歌人の家の話を兄嫁に向つてしてゐたが、

「その菓子は旨くないのかい」と、先つきから自分は口を閉ぢて弟の口元をのみ見詰めてゐた太一が突如に訊いた。

「こないな菓子はわし等の口にや向かんわい。それに歲を取ると甘い者も以前のやうにお旨うない」と、參三は今まで無意味に食べてゐたのに氣付いて、指で持つてゐた西洋菓子を皿へ置いた。

「でもそのお菓子は高いんですよ。風月のですもの」と、兄嫁は仰山さうに云つて、「おとよさんはこれ

か大好きだと云つてゐるんですのに」

「あれが小癪に何を云ふことやら」

「……けど、おとよさんには會ひに入つしやるんすでせう。端書をやつて今度の日曜に家へ呼びませうか」

「へゝえ」參三は氣乘りのしない返事をして、「彼奴東京へ來る時、わしに顏も見せいで、挨拶なしで來居つた」

「でも、あなたが此方へ來て入つしやることを知つたら、屹度會ひたいと思ひなさるでせうよ。おとよさんもこの頃は大分東京馴れて學校が面白くなつたんでせう。先日仲よしのくに子さんと一緒に遊びに入しつて、學校話をして行きましたよ」

「あの二人は田舍に居つた時からやちもない話をし居つた。襁褓の洗濯なぞ、あんな汚いことをようも平氣でするこつちやと一人が云ふと、本眞になあと、一人が云ひ居つた。東京の學校を卒業さへすりや、一生襁褓の洗濯は自分がせいで、亭主がして呉れるとでも思ふとるのかも知れん」

忌々しさうな弟の言草に、太一は笑ひを洩らした。先日遊びに來て無愛相な彼れを煙たがつて、目を避け〳〵チヨコナンと座つてゐた小柄な二人の女學生を思ひ浮べて、その頭の中の邪氣のない考へを想像してゐると可笑かつた。

「しかし、あの女がよく根氣よく親爺を說付けたかと思ふと感心だよ。先日親爺がおとよに宛てゝ寄越した手紙を讀むと、子供嫌ひな親爺も、家にや女の子が珍らしいためか、あの子には甘いのに驚いたよ」

「今に親爺が後悔することが出來るこつちやらう」

參三は妹の名を聞くと、彼女が田舍にゐる間我は顏に振舞つてゐた樣に思出されるので、その噂を何時までもしてゐたくなかつた。

「さあ、もう寢させて貰ひませうかい」と座を立ちかけて、「しかし、わしも子供にや一通りの學問はさゝなければなるまいな」と、かねての心の蟠まりを口にして見たが、やがて、自分の寢室に當てられてゐる二階へ上つて行つた。

父を思起させるやうな弟の後姿を顧みながら、「矢張おれのやうに兄弟仲間から離れて、一人ぼつちでゐるのがいゝんだね」と、太一は生欠伸を洩らした。

「參三さんもおとよさんも皆んないゝ人なのにね。私誰れにも惡く思はれたくないと思つてよ」女房はさう云つた。

翌日もその次の日も、參三は朝早く出掛けて、夜に入つてから歸つた。歸ると、知名の歌人の書いて與れた短冊や色紙を兄嫁に見せて、筆蹟の批判をしたりした。故鄕からは組合の者の名や妻の名で頻りに問合せの端書や手紙が來た。それによると、彼地では出立後にまたごたごたが起つて彼れの歸りを待つてゐるらしかつた。妻の手紙の端には、「章一や私におゝしいお土産をどうぞお忘れないやうに」と書いてあつた。

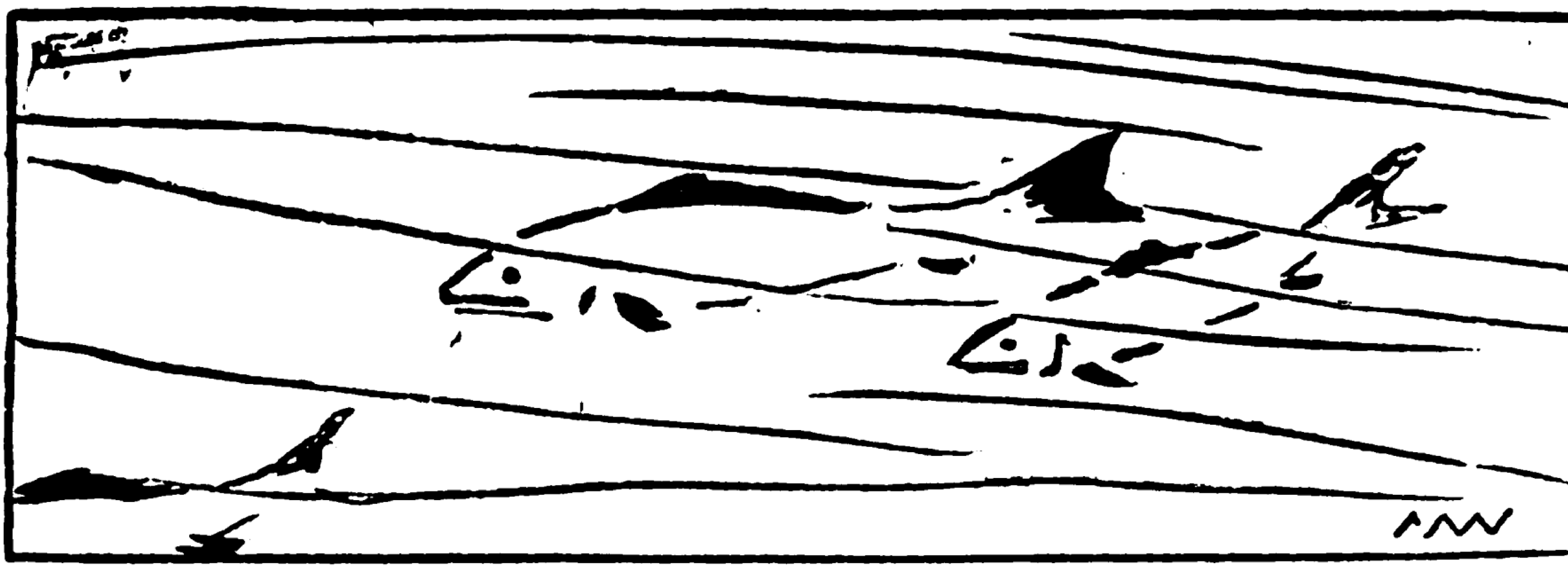
「用事は目鼻がついたのかい」と、四五日話をする機會のなかつた太一がある晩歸り仕度をしてゐる弟

に訊くと、

「纏つても纏まらないでも、先づわしの役目は濟んだ。いよ〳〵A島の權利が認められて、此方へは許可が下りんとなりや、漁夫どもどうかするぢやらう。わしの力にや及ばんがな」

參三は來た日ほどの執着はなささうに云つて笑つた。整理してゐる鞄の中には、大事さうに包まれた幾枚かの色紙に短冊と、最中の一袋が入れられてあつた。紋付羽織がその上に重ねられた。

「何百里ある遠方から入しつたのに、何だか飽氣ないわね。……庭の枇杷が熟れたら食べに來ると、おとよさんから今日端書が來ましたよ」と兄嫁が云つた。



大佛供養

長田幹彦

「……ほんなら明日の一時どすなあ。ほんまどつせ。私（あてえ）これから直ぐ家（うち）に往（い）んで、あんじよう支度しときますさかいに、あんたははんゝ寄り道せんと眞直にお歸りやすや。ほして明日になつておほかしやしたら私恨みまつせ。」

「なんでそんな人の惡いことするもんか。行くと云つたらどんなことがあつてもきつと行くよ。あんたこそ約束を破らんやうにおし。」

「ま、どうえ。そんな私と逢ひまつせ。そんななんやつたらなにも今夜あんたはんに逢うて貰ひに來いしまへんわ。ほんまに宇治へ行きまへういな。ほして一晩ゆつくり遊んで來まへういな。」

「うむ、きつと行く。この様子なら明日は天氣もよさゝうだから。」

「ほんまどつせ。よろしいか。なんぼ浮氣なあんたはんかて、義理ちうもんがおすわなあ。分つてますか。」

「分つた、分つた。きつと行くよ。」

「ほんなら此處で別れまつせ。もうちよつと一緒にゐたうおすけど、……もう一遍圓山から智恩院さんのなかを歩いて來ますほか。そやけどあんたはんもお草臥れやしたらろし、私ももう往なんと家の姉はんが又眼をむかはりますさかい、……ほんまに又明日がおすわなあ。今夜はこんだけにしときへう。ではさいなら。明日また停車場で。」

「さよなら。」

女は脂汗のじとじとゝねばつくほど堅く握りしめてゐた手をやつと離して、京女にしても一倍口輕なその口を噤んで、漸う欽治のそばを離れた。樹立の暗闇のなかでほの白いその頰はにいつと笑つて、別れともなげに少時の間またそこで躊躇してゐたが、欽治が手を帽子の鍔へかけると、到頭あきらめてもう一度

「さいなら。」と云つて、その儘踵を返して、一歩一歩足搜りに遠ざかつて行つた。細徑に敷いた小砂利は彼女の下駄齒にかゝつて、その物音がだんだんとゆるい傾斜を下へと下へと降りて行く。

欽治はそのかすかな跫音を聞いてゐるうちにふと我れに歸つたやうな氣持ちになつた。つい今迄眞葛ヶ原の樹陰を歩いてゐると思つてゐたのに、いつの間にか東の大谷を横切つて、圓山公園のうへゝ出てゐる。そこはこんもりと繁つた樹立で、枝と枝との間からは明るい月光に照らされた圓山公園の池畔と、祇園社の杜を越へて向ふに廣がつた京の街の灯がまるで南京珠をつないだやうにかすかにほの見えてゐる。女と一緒に歩いてゐながら何うしてこんな處まで迷ひ込んで來たのだらう。言葉と言葉とははつき

り交はし合つてゐながら道も分らぬほど、うわついた氣でゐたのは、何か深い思ひに暮れてゐたゝめであらうか。さう思ふと何かしら一心になつて考へつめてゐたやうな氣もするが、今からして思ひ返してみると、それが何であつたかさつぱり分らない。握りしめてゐた女の手からさまざまの思念が湧き起つて、その手が離されてしまふと一緒に心のすべての働きが忽ちにして迷路のなかへ入つてしまつたやうな氣がする。欽治は今自分がそれほどまでに深く女を愛してゐるのを我れながら笑はずにはゐられなかつた。

「おれももう三十歳だ。さうさうか女なぞに惚れてゐられる時代ぢやない。」彼の心は肩を怒らかすやうに呟く。併しその聲はどうしても心の底の底までは浸み徹つていかなかつた。何かその間には堅い膜があつて、それに觸られる度に胸の血が譯もなく躍るやうに思はれるのであつた。

あの女。彼は今あの女に逢つてからこのかたのことをすつかり思ひ出してみたいやうな心持ちになつてゐる。もう一度すつくり思ひ出して、その經過を確めたうへで彼はこれから又一歩を先へ踏みだす心構へをしやうと思つてゐる。事實、彼にとつてはこの一夜が最も肝要な時間なのである。今迄はうからかと思ひ詰て逢曳を重ねては來たが、明日愈々京の町を出離れて人目をしのぶ旅籠屋の二階でひと夜を明かすことになると、それから後は全くあの女と彼との間はまるで別な關係になつて來なければならぬ。乘りかゝつた船ならばどうせそこまで行かねばならぬものとしても、女の素直な氣質を思ふと、彼はさすがに自分といふものを省みずにはゐられない。旅から旅を歩いて、諸國の女と馴染みを重ねてはゐながら、彼には今更またひとつの羈絆を脊負はせられることが辛いのであつた。どうせ男女は行く水

の流るゝがごとくに逢うては別れ、別れてはまた次の岸に辿りつくやうなもの、さう思へば泙にもひとしいといふ断念はつくものゝ、情の深い女のことを思ふと彼は明日の後の自分が思はれてならなかつた。泙に太い根の出來るほだしが思はれてならなかつた。彼は定着した道徳心や節操などに對してはさまでの心懸りを持たなかつたが、その一事ばかりは長い間の經驗から一種の恐れを抱かぬ譯にはいかなかつたのである。女の心といふものがしみじみと分つて來た今日此頃、彼にはそれが全く苦惱なのであつた。

彼が京都へ來てからもう三月餘になる。圓山に篝火のほのめく夜櫻はいつかしら青葉に移つて、もう昨日今日はそろそろ鴨川の床に晩凉を逐ふ頃ともならうとしてゐる。其間彼は今迄の生活の惰性で、依然として灯の明るい巷にその日その日のいのちを求めては女から女に自分の安價な慰樂を托して暮らした。あの女に逢ひだしてからももう二月あまりになる。そも逢ふ瀬のはじまりはまだ都踊のある頃で、ある晩踊りの歸りに舞妓たちを連れて有明へ夜食をたべにいつたのが病みつきになつたのである。女は有明の二番娘で、滅多に客席へ出ないが、その晩は客の込み合ふ潮どきに行きあはせたので、仲居の手がまわり兼ねて奥の間から手助けに出て來たのである。はじめて見た折には顔は美しいが、何處か好かぬ女だと思つた。二度見た時にはかうした遊蕩の町に住む女にしては餘りに温なし過ぎて、食ひ足らぬやうに思はれた。それが三度になり、四度になりするうちに妙に馴染みが出來て、一緒に行く老妓などからつけつけ云はれるのに、立派な家の娘でゐながら返事も碌々出來ない様子が却つていぢらしくなつて、素人じみてゐるところがひどく彼の氣に入つてきた。口やかましい廓の女の常として、或ものは彼女

のことを旦那とりをしてゐると云ひ、或ものはまた三つになる子があるなどゝまことしやかに云ひふらして歩いた。激しい噂になると、僅かな金で情を賣つてゐるなぞと云ふことも聞えてきた。併し彼にはそんなことがどうしても眞實とは信じられなかつた。今迄出逢つた女にひきくらべて、それが確かによしない妓達の法界悋氣であると思つた。

女の方でも彼が度々有明の門をくゞるにつれ、憎からず思つたのであらう、五度六度と度を重なると仲居達の番を自分で引受けて、いつもいつも彼の座敷へはかゝさずやつて來た。一人で行く折なぞには自然彼と女とは對向ひになる。身のうへ話も出れば、つい色つぽい言葉の受渡しもはじまる。そして初めのうちは金づかひの荒い東京ものに對する物質的な執着であつたとしても、それが日を重ねるに從つて眞實の戀になつて行つたことはちよつとした素振りで彼にもよく分つてゐた。

彼はその時になつて女が出戻りの身の上であることを知つた。女は今年とつて二十四だつたが、二十一の時大阪のさる呉服店へ嫁いで、それから三年の間病身な姑と疳性な良人との間であるかぎりの憂きめをみせられ、ついこの二月に泣きの涙で實家へ歸つて來たのであつた。はじめてその話をこまごまと聞かされた時、欽治は女の睫毛に輝く涙の色にいぢらしい心根と、素直な世馴れぬ初心さとを認めたのであつた。そして一度緣づいた女であつて見れば無論處女でないのは知れきつてゐるが、殆んど毎日のやうに入れかわり立ち換り彼の周圍に集つて來る妓達のことを思ふと、彼にはその女が全くの處女のやうに思はれてならないのであつた。

散歩にいかうと云つて一度圓山の公園まで誘ひ出したのがきつかけになつて、彼はその後も二度ほど

彼女と東山の山裾を包む深い綠樹の陰をとめ步む樂しみを味はつた。初夏の爽やかな夜は、いつの間にか彼女の心に强い情熱を吹き込んで、彼女はいつも欽治の腕に體を托しながら、身も心も蕩けてゆくやうな思ひを口に漏らした。一度男を知つてゐる女の胸に戀心の甦へる時ほど恐ろしいものはない。誘惑は熱つこい指先にまで現はれて、それが男の肩に觸れ、胸に觸れる時、男はどうして焦だゝしい自分の心の狂奔を制することが出來やう。女が大膽になるにつれ、欽治もだんだんとその情熱の波に卷き込まれていつたのであつた。

今夜はその三度目の逢瀨なのである。女は到頭彼に何處か人氣離れたところへ連れて行つて吳れと云ひだした。自分から節操まで男の前へ投げだしてかゝつて來たのである。もうその頃は祇園に住む妓のぐうたらな緊りのない戀に飽きてゐた欽治には、どうしてもこの强い戀をしりぞけるだけの力がなかつた。今迄逢つた妓の誰よりも激しい熱情をもつてゐるこの女が彼には一番美しく思はれさへしたのである。後はどうならうと構はぬ、今の情緖の波に任せて行けるところまで行つてみやう、そしてこの女の胸の潜んだ情をば堀れるところまで堀つていつてみやう、さうした盲目な氣が女を抱いた胸からむらむらと込みあげて來た。そして彼は到頭女と明日人氣はなれた宇治へ同行することを約してしまつたのである。女は大阪の親戚へ行くといふ口實で家を出ることに心をきめてゐた。女の眼にもその時深い決心と不安と歡喜とが一緖になつて輝いてゐた。

彼には明日から日一日に女の方へ深く深く陷り込んでゆく自分の姿がみえて來た。一度關係が出來て女の方から一層激しい情熱で追ひ縋られる場合、彼はいつもいつも女よりも大きい犧牲を拂はせられる

のが常であつた。或時は自分の位置も、自分の誇りも、それから體そのものまでも賭にかけるやうなことがあつた。それを思ふと彼は何となく心の奥底から起つて來る一脈の冷感を覺えずにはゐられなかつた。

彼はそんなことを思ひあぐみながら少時するとぶらぶら足にまかせて樹立の陰を出た。ざあと瀧の水音の聞えるあたりまで來ると、手入れの届いた傾斜地の芝草が月の光にくつきりと青色をみせて、月明りに煙る公園の丘や池や小流れのたゝずまひが一眼に見渡されて來た。左阿彌の二階座敷にともる明い灯影は東山の山影に初夏の宵らしい色つぽさを漂はせて、宴會でもあるとみえそこからは醉つた男の笑ひ聲や賑かな絃歌のぞめきが遠く聞えてくる。そして迂曲した道を上つたり下りたりしてゆく散歩の人の姿もしつとりと露にうるんで、山の方から息づいてくる微風には嵐氣に似た青葉の匂ひがあつた。

枝垂櫻のところまで下りてくると、彼はふとすぐ傍で彼の名を呼ぶ女の聲を聞いた。深い思ひに沈みながらも遠くから響いて來る木履の音にはうすうす氣づいてゐたが、

「荒川はん。荒川はん。」と呼びかけられてみると、彼はびくりとしてその儘そこへ立止まりながら顔を擡げずにはゐられなかつた。

「荒川はんやおへんか。ほんまにいけずやなあ。さつきにからせんど呼んでんのに、知らん顔しておいきやしたえなあ。」と、云ひながら此方へ歩み寄つてくるのは祇園でも賣妓の雛江と云ふ若い藝妓だつた。客につれられて歩きに來たものと見え、その他にも四五人の人影が道の片陰を歩み過ぎてゆく。

「おゝ、雛江はんか。何處へいくんだい。」彼は仕方がなしに笑ひながら云つた。

「私お客さんと一緒に散歩にきた。あんたはんこそ何處へおいきやしたんえ。今頃ひとりでこんなとこ

ろを歩いてやはるのはちと怪しうおすえなあ。今迄勝勇はんと一緒と違ひまつか。」雛江はその當時彼と噂のあつた妓のことを云ひ出しながらふやけたやうな聲で笑ひだした。

欽治にはその名を聞くさへ頼りない氣がした。好いてゐるの、好いてゐないのといふ浮名はうるさく立つても、進んでどうしやうと云ふ氣の起らない妓のことを思ひ出すと、彼は東山のうへに照る月まで が不徹底な色に輝いてゐるやうで寧ろ不愉快にさへなつた。

「笑談云つちや可けない。」彼は自分でも可笑しいくらゐ彈まぬ聲で答へるよりほかには仕方がなかつた。

「うむ、あんたはん今夜なんやしら怪體におすなあ。きつうしゆんどゐやすのえなあ。なんでどす?」

「いや、なにもしゆんでなんかゐやしないよ。餘り歩いたんで草臥れたのさ。」

「さうどつか。そやけどなんやしら怪體なわ。」雛江は月影にすかして欽治の顏をのぞきこみながら、「これから川端へお寄りやすのか?」

「さあ、今夜はよさう。この樣子ぢやお茶屋の暖簾をくゞる氣がしないから。」

「そなこと云はんと一遍お寄りやすな。私もうちよつとしたら往にますさかい……」

「うむ、寄れたら寄らう。」

「どうぞ。ほて私も知らしとくれやすや。そないに勝勇はんばかししらさんと私も偶にはしらして欲しいわ。よろしいか。ほんまどつせ。ほんならまたあとで。さいなら。」

雛江はその儘膝頭あたりまでまくつた着物の裾から紅い長襦袢の裾を蹴出しながら先へいつた客のあ

とを追つてゆく。彼は何故かその後姿を見送る氣さへしなかつた。

祇園社の杜から四條の石段下へ出ると、彼は眼のさめるやうな街筋の電燈の光が足もとへさつと波打つてくるのを覺えた。人足の繁いなかに、ともすると肩先をかすめてゆくやうな電車の警鈴や自働車の笛が響いてくる。彼はうつらうつら物思ひに耽りながらもやつと四條の大橋まで辿つて來て、そこから川端の柳の樹陰につゞく茶屋々々の灯の色を眺めるには眺めたが、どうしてもそつちへ曲つてゆく氣はしなかつた。そしてその足ですぐさま木屋町の宿へ歸つて、鴨川の呟きをきゝながらそれから長い明日の首尾を一心になつて思ひあぐねたのであつた。臥床へ入つて寢つくまでいろいろな不安な妄念が起つてともすると疼くやうな戀の初夜の歡びを消さう消さうとしてゆくのであつた。

其翌日、約束の時間になると欽治は昨夜と違つてまるで何もかも忘れたやうな嬉しさに唆られながら宿を出て行つた。宇治の初夏を飾る青い山、青い谿流のなかに女と自分を置いてみることが彼にはこのうへもなく歡ばしかつたのである。谿山の眺めを粋な圓窓に收めた「花やしき」の中二階で、兎にも角にもこの美しい月の夜頃を戀の場面の人物になつてひと夜を明かすその情趣が彼には耐らなく嬉しく思はれるのであつた。彼は遠い昔に味はつた初戀の切なさと嬉れしさを再び味はひながら、もどかしい思ひに追はれて電車で七條の停車場の方へ向つた。

停車場前で下りると、もう廣場を越えて向ふの入口のところへ立つてゐる女の姿が眞先に眼に映つた

きた。あかの他人ならばとても見えさうもない距離にゐながらその姿貌がはつきり見えるのも彼の心がさせる業なのであつた。

近寄ると女は先づ二三歩彼の方へ歩み寄つて來て、

「よんべは濟まんこと。ほんまに來とくれやしたえなあ。」と、包みきれぬ嬉れしさを瞳の底に輝やかしながら少し慄えを帶びた聲で云つた。

「隨分長く待つたらう。」欽治の聲も抑へつけるやうにはしてゐながら、妙にはづんでゐた。

「いゝえ、そないに長いこと待たしまへん。」さう云ひながら女は一張羅らしいお召の袷に輕いコートを着たすらりとした體をちよいと曲げて嬌態をしてみせたが、その顏にはか成り長く欽治を待つてゐたらしい疲れがそれとなく見えてゐた。それがまた彼にはひどくいぢらしく見えたのであつた。

なにしろ京阪電車でいけば便利でもあるし時間もかゝらないのを態々汽車にするほど人目を恐れてゐる間柄のことゝて、彼は女に切符を買つてくる間一二等の待合室へ行つて待つてゐろと耳打ちしてそのまゝ別々の入口から驛の建物のなかへ入つて行つた。そして宇治までの切符を二枚買つて、まだ十五分ほど間があるので、その間せめても一緒にゐやうと思つて待合室へ入つてゆくと、女は丁度隅のところのベンチに腰をおろして、彼の入つて來るのをさも待ち遠しさうにみまもつてゐた。

待合室へ入つてみて、彼ははじめてその日が何の日に當たるかと云ふとに氣がついた。五月六日と云へば新たに修繕の工成つた彼の世界無比の奈良の大佛殿で開眼の大供養會の執行はれる日である。しかも明日は愈々一七日の大結願といふその書入れの紀念日なのである。諸國の津々浦々からは或は信仰の

ために或は單に壯嚴な式會を見物するために日々幾千幾萬の人數が關西地方でなければみられぬ便利な交通網を辿つて續々と奈良市へ繰り込んでゆくさなかなのである。殊に京都驛は淨土宗の僧衆が上は智恩院猊下をはじめとして一山の大衆、末寺末院の僧徒、尼僧、各大學、尼僧𥱋等の生徒に至るまで悉く參詣にゆく乘降驛なので、待合室もプラットフォームも鼎の湧くやうな混雜だつた。彼等の大半はもう既に臨時列車で送られたあとなので、待合室のなかは紙屑や、密柑の皮や煙草の吸殼などが、その混雜の跡を語つてゐるに過ぎなかつたが、それでも殘された旅客や、日歸りで參詣にゆく人達でそこらはざわざわとどよめいてゐた。フロックコートに絹帽の紳士もゐれば、羽織袴の老爺もゐる。艶めかしい風俗をした女もゐれば、またなかにはどうして紛れ込んだものか、紅白粉で化物のやうな化粧をして桃色襦子の着物に紫の袴を穿いた踊り子なども混つてゐる。騷々しい人聲は人蒸息のたちこめた室內に流れて、その底には誰れが吸ふのか芳ばしい葉卷の匂ひなぞも漂つてゐる。

彼はそのまゝ何氣もなく人混みを分けて眞直に女の方へ歩いて行かうとしたが、卓子の傍まで來かゝるとその時、橫合から突然、

「おい、欽治君、欽治君ぢやないか。」と、云ふ太い聲が彼を呼びとめた。吃驚して聲のした方を振り顧へると、そこには四五人かたまつた年輩の紳士達の間に思ひもつかぬ人の笑顏が見えてゐる。それは彼がまだ學校にゐた時分親身のものも及ばぬほど世話をしてくれた黑田と云ふ老人であつた。一度は代議士にもなつたことのある人で、四十代までは隨分政界で活躍してゐたのだが、今ではもうその華々しい政治的生涯を葬つて、東京の或大會社の重役といふ閑散な位置に退いた人なのである。欽治は餘りに思

ひもよらぬ逢遇なので、稍々度を失ひながら、
「やあ、貴方、どうして此地へ？」と云つて、叮嚀に挨拶をしたきり眼をぱちぱちさせてゐた。
「はゝゝ。珍らしい處で逢つたもんぢやねえ。君が此方へ來とるちうことは先達の手紙で知つとつたが、よもやこんな處で逢へやうとは思はなかつた。」黑田は九州訛りを言葉尻に響かせながら肥つた顏に笑ひ皺を寄せて、「どうぢや、ちと逗留が長過ぎるやうぢやが、祇園あたりに襟がみをつかまへて東京へ歸さんのが出來たんぢやないかね。木伊乃とりが木伊乃になつてしまうては可けんよ。はゝゝ。」
「どう致しまして、御笑談でせう。」欽治は額に滲み出た汗を手で押し拭ひながら、「何か御用でもあつて此方へお出でゝしたか。」
「いや、別に用といふほどのこともないが、大阪の支店へちよつと顏を出さんけりやならんことが出來たんで、一昨日この會社の連中と一緒に東京をたつて此方へやつて來たんさ。まあ體のいゝ觀光團さ。はゝゝ。」
「ぢや昨晩は京都へお泊りでしたか。」
「うむ、澤文へ泊つた。君のところへ一寸通知しやうと思つたが、君の宿所を忘れてしまうたんで到頭御無禮してしまつた。併し思ひがけんところで逢へて何よりぢやつた。」
「ほんとに餘り意外なんで吃驚いたしました。そして今日はこれから何地へ？」
「宇治へ行かうと思つとる。大阪の支店のものが是非案內すると云ふから一晩體を預けた譯さ。明日は奈良へ廻つて、大佛供養をみてそれからずうつと伊勢參宮をして歸らうと思つとる。君は何處へ行くん

ぢやね？」

宇治と聞くと欽治ははたと返事に窮して、どぎまぎしながら、

「は、ちよつと奈良まで。……」と、ついあらぬ方へ口を滑らしてしまつた。黒田も宇治へ行くとすれば旅館の數も二つ三つしきやない狹い土地のことゆゑ、自然は同じ宿へ落合はねばならぬかも知れぬ。それよりも第一女連れで宇治の驛へ下車するのが彼には黒田の手前後めたかつた。で、途方もない災難に出逢はしたものだと思ひながら、それとなく前後の手段を思案してゐると、そんなことゝは露ほども知らぬ黒田は人懷しい調子で、

「さうか、それぢや同じ列車でいける譯だね。そりや益々以つて好都合だ。まあゆつくり話さう。」彼は旅行服のポケットから銀製の葉卷入れをぬきだして欽治にすゝめながら次々と話を運んでいつた。

欽治はもう殆んどうはの空で、時々人の肩越しに女の方を偸みゝてゐたが、女はその時兩手を膝のうへゝちんと重ねて、不安さうな眼つきをしながらきつと此方を見つめてゐた。眼顏で合圖をしたいにもすぐ鼻の先に黒田の眼があるのでそれすら思ふやうには出來ず、彼は足摺りしたいほど焦悶しい思ひに責められながらぢつと我慢して黒田の話に合槌を打つてゐた。

やがて發車を報ずる呼鈴が鳴りだした。旅客は先を爭つてぞろぞろと改札口の方へ波打つてゆく。彼等もその後についてひと塊りになつて出ていつたが、欽治は一刻の間も黒田が離さないのでやつとのことで人目に立たぬやうに手で女に合圖をしてひと足先にプラットフォームへ出た。女もそれと樣子をみてとつたかして、人の後から何喰はぬ顏して見え隱れについて來た。

列車へ乘つてみると、黒田達の一連も矢張り一等なので、こんなことならせめて二等にすればよかつたと、欽治は今更ながら自分の思ひ過ごしを悔ゐずにはゐられなかつた。併し一等の車室のひとつしきやついてゐない列車であつてみれば何うすることも出來ず、彼は到頭度胸をきめてなりゆきはどうなと天に任せる氣で、黒田と隣り合はせの座席へ腰をおろしてしまつた。女の體は彼女の心次第に所理させることにして、それとなく流眄をくれてゐると、彼女はやがて車室へ入つて來て、此方へは眼もくれずに欽治とは向ひ合はせの座席の隅つこのところへつゝましやかに座をしめた。都合の悪いことにはその車室にはひとりの西洋婦人が乘つてゐるきりで、他には女の乘客がなかつたので、總ての乘客の眼はその時一齊に彼女の方へ向つて注がれた。

間もなく列車は消魂しい汽笛を殘して、煦々とした五月の日光の燃ゆる鳥羽野眞唯中へ馳り出て行つた。菜の花の黄も既に老いて、麥の葉が綠色の幻のやうに一面にひろがつてみえる。老阪峠から愛宕、稻荷山から比叡、比良につゞく一帶の翠巒は濃い淺い若葉の斑をその山肌に印して、見るから夢みるやうにうつとりと烟つてゐる。そして樹立さへない一望の野の彼方には桃山の傾斜が心持ちのいゝ線の流れで空を劃つて、そこの綠の間にちらちら顔を出してゐる家々の白壁がまるで銀粉を塗つたやうに明るく輝いてみえる。

黒田は皆が座席へ落着くとやがて欽治を大阪の支店の庶務課長や、會計課長といつたやうな連中に紹介した。さすがは社交にたけた人達のことゝて、誰れしも

「お名前は兼々から伺つて居りました。」などゝ調子のいゝ挨拶をして、やがて彼等の間には湧くやうな

歡談が起つた。そしてなかでも話しの好きな黑田は蒼い葉卷の煙を吐きながら京阪地方で見聞した事實の感想を東京のそれに結びつけたりしながら頻りに喋舌つてゐた。口をついて出る警句や笑談が皆の腹を抱へさせた。

欽治はその笑ひ聲の隙を偸んでは時々女の方をぢろりぢろりと偸みゝた。女は膝のうへに置いた信玄袋の紐を弄びながら、絶えず四方から浴びせかけられる瞳を恐れてか、ぢつと眼を伏せてゐる。車窓から流れ込む綠がゝつた日光の反映は濃く化粧したその頰をぬけるほど白くみせて、束髮に結つた房さりした黑髮といひ、眼つきといひ、鼻つきといひ、欽治にはその時ほど女が美しく見えたことは今迄に嘗つてなかつた。彼は今迄何處かに隱されてゐた女の本體を初めて洞視したやうな氣になつて、これが今日から全く自分のものになつてしまふのかと思ふとぞくぞくするやうな嬉れしさが胸に湧いてくるのであつた。そして周圍にゐる乘客達の眼が彼女の方へ注がれる度に腹立たしいやうな、それでゐて妙に誇らしいやうな不思議な氣持ちがするのでなつた。

桃山、木幡も過ぎて、列車はいつか茶畑と竹籔のなかを明くなつたり暗くなつたり日影に弄ばれながら黃檗の寺の前へ差懸つた。そこからはもう朝日山の頂と宇治の水力電氣の煙突が樹立の彼方に隱見してゐる。

欽治は宇治へ着いてから後の身の振方を思案してはゐたが、つい黑田達の輕い口に乘せられて氣を入

方へ散らしてゐたので、そこへ來るまでどうしやうと云ふはつきりした手段は極まつてゐなかつた。奈良へと云つたものが宇治へ下車するのも變だし、髻へ女のことはうまく見附らぬやうにするとしても、宇治ではもう今となつては機がつかない。それにそこで下車するとなれば黑田達がきつと一緒に來いと云つて無理やりに彼を同じ旅宿へ引張つてゆくにきまつてゐる。さうなれば萬事休矣である。……

そんなこんなを思ひ煩つてゐるうちに列車は遠慮會釋もなく麥圃の間を駛つて到頭宇治川の鐵橋へかゝつてしまつた。車窓からみると朝日山や大吉山、それからずつと奥の近江境の連山まで新緑が青々と燃えたつて、古風な勾欄のある宇治橋の彼方には壺のやうに迫つた谿谷と、浮舟の洲とが趣致のある谿山の配置をみせ、一基の魚供養の寶塔が萬綠の中心に輝く唯一點の白であつた。そして深綠の激流は泡だちながら一直線に岸を洗つて、はるか上流の方では誰れを渡たすのか紅毛氈を敷いた扁舟が危うげに河面に漂つて、それに乘る桔梗色の洋傘が繪のやうに美しい。今宵戀の夢を埋める筈であつたあの「花やしき」の瓦屋根も明るい新綠の間に點々と光つてゐる。欽治はなつかしい宇治の風物を眺めると、胸が疼くやうだつた。

列車は間もなく宇治驛へ入つていつた。

「さあ、宇治で御座いますよ。お支度をなすつて。」一番下僚らしい背廣服の男が案内役にせきたてると、黑田は肥つた體をやをら起こして、

「ぢや欽治君。こゝでお別れだね。君も早く東京へ歸つて來んけりやいかんぜ。はゝゝゝ。ぢやさよなら。」

「有難う御座います。どうか御機嫌よう。御内方へもどうぞ宜しく。」
「有難う。君も壯健で勉强したまへ。」
「御免下さいまし。」
「さよなら。」
「さよなら。」
車室のなかはひとしきりこんな言葉で賑はつて、一連はぞろぞろプラットフォームへ降りていつた。そして幾度か此方を振顧つて帽子をあげながら笑顏をみせてゐたか、やがてその姿も停車場の建物の向ふへ隱れてしまつた。それと一緒に又汽笛が鳴つて列車は潮のひきさつたやうな一等車を曳きながらごとりごとりと動きだした。
欽治は何よりも先に女の方を振顧つた。女はまるで物忘れでもしたやうな顏つきをして今にも起ち上らうとするやうに腰を浮かしながら欽治の方を一心になつて打瞻つてゐた。眼と眼とが逢ふと先づその間には當惑したやうなそぐはぬ表情が輝いた。
欽治はそのまゝすぐにも女のそばへ行かうと思つたが、四邊の乘客の手前もあるので、態と我れを抑へてじつとしてゐた。黑田達の降りたあとが五席ほど續いてあいてゐるので、彼は到頭我慢が出來なくなつて、眼顏でそつと女をこつちへ呼び寄せた。女はもう人前もなにも構つてはゐられないと云つたやうに、すぐさまそわそわしながら彼の隣席へやつて來た。
「どないにおしやしたんどす。知つたお方どすか。」女は座るとすぐに小聲で訊いた。

「うむ。大變な人にぶつつかつちやつたもんだ。」欽治は息をはづませながら黑田のことをざつと說明して、「なにしろ彼方の連中も宇治へ行くと云ふんだらう。どうにもかうにも仕樣がなからうぢやないか。ほんとに今日ぐらゐ困つたことはありやしない。」

「ほんまになあ。私がゐましてさぞお困りやしたらうなあ。ほんで宇治へは行かれまへんのか。」

「あの樣子ぢや降りるにも降りられないぢやないか。仕方がないからまあこの汽車の行くところまで行つてみやう。」

「さうかて切符が宇治までどつしやろ。乘り過ごしたら叱られますやないか。」小心な女はもう眉のあたりに心配さうなおろおろした色を浮べてゐる。

「なにそんなことがあるもんか。行きついた先でそれだけの賃金を拂ひさへすれば構ふことはありやしない。」欽治は投げだすやうに云つて、心のなかでは何處へ行つたものかと思案に餘つてゐた。

「さうどすか。大事おへんのか。ほんならえゝけど。……」女はやつと安心したといふやうに腰を落着けて、「ほして宇治が駄目どしたら何處へおいきやすのどす。また誰方ぞに逢ふと可けまへんさかい、早う汽車を降りまへうぃな。折角こないにして出て來ましたよつてに、二人ひつついてゐたうおすわなあ。」女は向側の坐席に坐つて乘客の樣子を伺ひながら顏を近々と寄せて來た。その眼はもう節制を失つたやうにだらけてゐた。

欽治はいろいろ考へてみたが、宇治から奈良までの驛々には二人を泊めてくれる宿屋のありさうな町もないので、到頭最終驛の奈良まで行くことに心をきめた。大佛供養で混雜はしてゐても菊水か對山樓

あたりには一間ぐらゐ氣の利いた座敷が明いてゐるだらうと云ふのがせめてもの望みだつた。

二人はそれでもやつと對向ひになれたので、嬉れしさうに顏をつき合はせて車窓に映つる丘陵や小流れの姿をみながら睦ましげにひそひそと語り合つてゐた。列車が驛々を越すにしたがつて漸次と大膽になつて、しまひには端にも聞えるほどな聲で笑つたり饒舌つたりしだした。

三時少し過ぎになつて列車は漸う奈良の停車場へついた。そこのプラットフォームは乘る客と降りる客が一緒に落ち合つてゐるので低い上屋が屋鳴りするやうに人波を打つてゐる。

「奈良、奈良。湊町、龜山、名古屋行きは乘り換へ。」と、大聲で喚いてゆく驛員の聲で乘客は誰れも彼れもそわそわと落着かぬ顏をして皆一齊に乘降口の方へ押重なつてゆく。

欽治はそつと女の手を握つてやりながらプラットフォームへ降りた。そして人波の間をくゞつてやつとのことで改札口から停車場前の廣場へ出ると、すぐさま車を傭つて、菊水へ向けて駛らせた。

だらだら登りの大道は往き來るさの人波で一杯に埋まつてゐる。洋傘や菅笠は右と左にぞろぞろと續いて、そのうへを盛りあがつたやうになつて人力車の列が動いてゆく。軒並につゞく安宿では客引きの聲も嗄れがれになつて、あられ酒、鹿の角細工などを鬻ぐ店々も人足喧しく、大道の眞向にみえる春日山も人いきれでぼうつと霞んだやうになつてゐる。

車夫はとある道の角まで來て、先の車の列がはたと行止まつたのをみると、梶棒を片手で抑へて片手

で流れ出る汗を押拭ひながら、

「旦那はん、菊水へお泊りでつか？」と、思ひついたやうに訊いた。

「うむ。どうだ、大分混んでゐるかね。」欽治は町の雜踏をみると稍不安になつたのでさう訊きかへした。

「さうだんなあ。大阪からえらい大けな連中はんが來てやはりまんので、今頃おいでやしてもあかんかも知れまへんなあ。」

「ぢや對山樓の方はどうだ。」

「あつちやゝつたら開いてまつしやろ。」

そのうちに又車の列がぞろぞろ動き出したので話はそれぎりになつてしまつた。

猿澤の池畔まで來ると、丁度大佛殿では智恩院僧徒の總禮がはじまる時分なので、阪路は身動きも出來ぬほどの混雜を呈してゐる。先の車に乘つた連中も續々そこで下りるので、欽治達ももどかしくなつて到頭そこで車を捨てた。そして濛々と立騰る砂塵を頭からかぶりながら人波に押されて一歩一歩阪をのぼつて行つた。

群衆のなかには何處からやつて來たのか白粉を塗つた黑紋つきの小供の一隊が東大寺へ納める供物を大きな船に積んで、えいえいと聲を揃へて曳いてゆく。道傍に出た露店も、寶樹も幔もその一隊が殘してゆく濃い砂塵に包まれて、さすがに興福寺の大塔も、南圓堂の屋根も平常の幽雅な風情を奪はれてまるで匂ひのない白茶けた殺風景な畫圖になつてしまつてゐる。欽治も女も唯一刻も早くこの雜踏のなかから遁れたいといふ氣ばかりした。

やつとのことで菊水の前まで來ると、そこは大阪の會社の大連に全部座敷を占められてゐるらしく、業の旗をたてまわした樣子を見ても到底彼等のやうな客の泊まれぬのは明らかだつた。すぐ上の四季亭も矢張り一杯の客で門口からみると二階座敷にはホワイトシャツ一枚になつた男連れが眞紅に醉つて亂舞してゐる有樣だつた。

「こりや驚いたなあ。この樣子ぢや對山樓も駄目かも知れない。」欽治は少しづゝ失望を覺えながら女の方を振り顧つたが、兎に角一遍そつちへも廻つても見やうと思ひながら態と人の雜踏しない道を選つて、春日の杜の方へ入つて行つた。

雪消澤を北へ踏みきると、もうそこいらはさすがにひつそりとしてゐた。濃い若葉は重々しく芝生のうへゝ垂れ下つて、滿目すべて眞蒼に染められたなかには蒸すやうな午後の日射しが靜かな斑を落としてゐる。ところどころに臥た鹿の眼色も眠むさうで、欽治達の足音に驚かされて顏は擡げるが、さて起つて來やうともしない。そして杜の奥へ入れば入るほど吹く風は冷たくなつてきて、もう樹陰の薄闇には蝘蟲がぶんぶん呻いてゐる。

とある小流れのところまで來ると女はそこの石のうへゝがくりと腰を落として、

「はあ、しんど。ちよつと休んで行きまへうな。私もう胸がしんどうて叶ひまへんわ。」ぽうつと上氣して汗ばんだその顏は欽治の方を振仰いでさも疲れたやうに嘆息をつく。

欽治も稍疲れを覺えたのでそのまゝ女のすぐ傍へ腰をおろした。

「ほんまにえらい人どしたえなあ。私あんななかへ入ると眼が眩うて、そらほんまに叶はんのどつせ。

對山樓云ふたら、もう一度彼方へ歸らんなりまへんのどつか。」

「いや、これから大佛の裏をぬけて、畑の間を北へ下りさへすればぢきだ。」

「さうどつか、それやつたら宜しいけど。……それにこんな日には京都からもたんと來てやはりますさかい、また誰れぞに逢ふたら叶ひまへんさかいな。」

「さうだねえ。又先刻のやうに知つた人にでもつかまつたら今度こそ遁げられないからねえ。」

「さうどす。もうこの儘こないにして二人きりでゐたうおすわ。」

その云ひ方がいかにも情熱に慄へてゐるやうだつたので、欽治は思はず女の肩へ手を懸けて體ごと自分の胸へひき寄せた。

「まあ、いやらし。てんごうせんとおゝきやすな。」と、かすかに呟いて、女はそつと四邊へ氣を配りながら男の手をはづさうとしたがその力は弱い抵抗を示すだけで、いつかしらまた男の手をしつかりと握り緊めながら自分から男の胸へ顔を埋めてしまつた。

大佛殿はそこからはさして遠くもないと見えて、供養會のどよみがかすかに杜の底で谺を呼びながら聞えて來る。今總禮を了つて餘興に入つたものと見え、舞樂の火焔太皷の音と篳篥の音が何處か壯嚴な音律をもつて流れてくる。そして春日野にかゝつてゐる見世物小舍の銅鑼や、樂隊や、客を呼ぶ聲なども雜然としたどよみをつくつて、風の加減で時折喧しく聞えてくるが、何よりも鋭く二人の耳を怯かすのは鐘樓の方で見物人達が戯れに撞く頓狂な梵鐘の唸りであつた。

建立されてから既に一千有餘年の星霜を閲した彼の偉大なる大佛殿、その間にも數多くの著名な歷史

を繰り返した世界唯一の殿堂が今四度目の大修繕を施されて、五月の陽光に新裝を輝かしながら宗教の權威を誇つてゐるのである。併し佛教的儀典はいかに莊嚴に執行はれても今や既に時代は轉換し、古への信仰は再び歸り來ることなく、一切衆生は唯物見遊山に出るやうな安易な心持ちでその巨大なる殿堂の方へ集まつて行くのである。この神聖な春日の杜のなかへ響いてくる現實の噪音はその矛盾を語り、その幻滅を語つてゐる。欽治は汗ばむだ女の熱い頬に唇を押し當てながら何となく噴き笑したいやうな、歡ばしいやうなそわそわした心持ちで供養會の光景を想像してゐた。抑へきれぬ情熱は丁度祭りの夜のやうな浮々した調子で彼の血を唆かして、彼は女が息苦しくなるまで堅くかたくその肩を抱きすくめたのであつた。

「ほんまにいつまでもこないにしてゐたうおすなあ。私もう生命も何もあんたはんのもんにしてあげたんどすさかいに、もうどんなことがありましてもお見捨やしたら厭どすせ。もしそんなことがありましたらほんまに私死んでしまひまつせ。」女は涙に濕んだ眼で欽治の方をじいつと見上げてゐたが、欽治が譯なくうつとりしてゐるのをみると、急に疑はしさうな眼色になつて、「今やから云ひまつけど、あんたは今かて勝勇はんのことを思ふとゐやすのどつしやろ。」

「莫迦な、あんなせうもない藝妓どうするもんか。」

「口ではなんぼおいひやしたかてあきまへんわ。そんなんやつたら私もうどないにせう知らん。……」

「今になつてそんな莫迦なことを疑ぐるものぢやないよ。私は世界中であんたより好きな女はひとりもゐないんだから。」欽治は恐ろしく眞顏になつて、また女の肩を強くつよく抱きしめながら呟いたが、そ

れを聞くと女は急にしくしく啜り泣きしだして、
「ほんまにさうやつたら嬉れしうおすけど……」と、涙を呑みながら、「そやけど、私のやうなせうむない女ではとてもあんたはんの奧樣にはなれまへんし、何やしらきつう賴りなうおすわ。ほんまに東京へお歸りやす折にはどないにしても連れてつてお呉れやすや。婢衆がはりに使うとくれやしても大事おまへんさかいに、どうぞお傍へ置いとくれやす。」
欽治は女がかうした紋切形の言葉を云ひ出す時にはいつも返事に困るので、
「今日といふ日を忘れなければいゝさ。あんたが今日のことをいつまでも覺えてゐて呉れさへすれば私は決してあんたを捨てやしない。」と、自分に呟くやうに言葉尻を呑み込みながら女の耳の端で云つた。
「ほんまにさうどすな。今日は大事な大事な日やわ。大佛さんかて開眼しやはる日どすものなあ。」女はさう云ひながら涙の隙に極めて肉感的な微笑を洩らした。
往ぬる天平の昔、聖武帝が佛願をこめて袞龍の御袖に白砂を掬びつゝ基礎を定められたあの大佛殿の開眼の日が、かうした末世の男女の泡沫のやうな戀の記念日にならうとは誰れが豫期しやう。もしあの巨大な盧舍那佛の銅塊に佛心宿らばいかなる慈悲の眼をもつて、度し難い現代の衆生を下瞰することであらう。そこに些々たる習俗、謬信を超越した大自然の嘲笑があると欽治は思つたのである。そして今正直な動物欲の間に轉々してゐる自分が淺猿しくも思はれると同時に痛快にも思はれるのであつた。
杜を出て、大佛殿の裏から寂しい銀杏樹並樹の間を戒壇院の方へ下りてゆく時、もう今日の式典は濟んだと見えて、白粉のまだらに剝げかゝつた童子の稚兒や、肩に擔いだ太刀の先に五條の袈裟や黑法衣

をまろめて突掛けた山法師や、冠を腰へさげて直衣の片肌ぬぎになつてゆく侍士などがまるで旅藝人の群のやうにぞろぞろと疲れはてた足調で町の方へ歸つてゆく。生駒の峯とほく沈む茜色の落日はその男達の影を乾きゝつた路の面へ長く倒して、奈良の都は炊煙とゝもにだんだんと蓉れゆかうとしてゐるのである。

欽治達の眼にはその時、斷草離々たる古池の彼方に對山樓の甍が夕陽に照り映えながらくつきりと映つて來た。彼等の周圍にはどんな壯大な出來事が起らうとも、彼等の心には今宵その屋根の下で戯れ明かす戀の睦言よりほかにはもう何もなかつたのであつた。(をはり)



盜難

後藤季雄

去年の夏は本當に忙しかつた。朝飯を濟ますと直ぐさま下宿を出掛けて、彼處此處と駈け廻つてから、家へ歸るのは、彼れ是れ夜の十一時近くであつた。私は佛蘭西人に日本語を敎へたり、日本人に佛蘭西語を授けて、漸つと其日を過してゐた。

朝の六時に寢床を離れると、もう七時には下宿から出掛けて、八時少し前にアイヤン敎授の門を叩いた。敎授は昨年の秋遙々巴里から帝國大學に赴任された法律學者で、年のころはもう四十に近かつたらう、大そう落ち着いた如何にも學者らしい好紳士であつた。併し私が日本語を敎へたのは夫人の方であつた。ある五月雨の朝であつた。私は籐の肱掛椅子に座はりながら、夫人の食堂から歸つて來るのを待つてゐた。食堂は松の植込に隱れた別棟の建物で、附近の外人達は此處に集つて賑やかな食卓に就くのであつた。純白な窓掛のかげから

高い話聲がもれて、をり〳〵嗤つと笑聲が起つた。

夫人の居間は八疊ぐらゐの瀟洒な洋室で、古代の美術品が所狹く置かれてゐた。窓掛けは印度模様の更紗であつたし、入口の片隅には古びた二枚折りの金屏風や、螺鈿の用簞笥などが並べてあつた。窓際の違棚には象牙彫の藤娘、金泥の剝げた佛像、靑磁の花瓶などが、各々夫人の寵愛を誇り顏に控へてゐた。四邊の壁を見ると、華魁道中の浮世繪や、廣重らしい風景畫を額にして、そのわきには朽ち果てた般若の面が掛つてゐた。

私は古い美術品の香ひを嗅いでゐた。そして何處かの美術館にでも置き去りにされた氣がして、物語めいた空想に渴いた心を浸してゐた。

窓には糠雨が降つてゐた。

ふと靴音が響いた。アイヤン敎授と夫人とが何やら樂しげに話しながら、蛇の目を相合傘にして松の植込を靜かに步いてきた。夫人は輕く裳裾を揭げながら石堦を降りてゆく。そして晴れやかな夫人の橫顏に雨傘の紺土佐が薄く匂つてゐた。

私は凝つと此の樣子を見守りながら異國情緒の詩趣にかられてゐた。あの錢屋五兵衞が幕府の禁制を犯して、歐洲諸國と交易したときには、千石船に帆を擧げて、珊瑚簪中の髮飾りから桐油、雨傘の類まで積んで往つたと聞く。當時の歐州人は竹と油紙とで拵へた雨傘に、いかばかり極東の韻致を見出したことだらう。そして華麗と奇矯を好む貴婦人は此の雨傘を買ひ整へ、雨のそぼふる夜、年若い情人に差し掛けて、杜ある客舍の石堦を登つていつたに違ひない‥‥

私は取りとめのない空想に溺れてゐた。その途端に入口の扉があいて教授と夫人とが這入つてきた。

「いやな御天氣ですこと…隨分おまちになりまして…」

「いゝえ、十分ばかり待ちました。」

と私は斯う答へて、椅子を前にずらした。

それから夫人はペンを取り換へ、インキを浸して、原書を見ながら、ペラ〳〵饒舌り立てる日常の會話を純粹な國語に飜譯するのが私の務めであつた。私は困り拔いて小頸をかしげる事が多かつた。すると夫人はペン軸のさきを指に挾みながら、手持沙汰に私の顏を見詰めてることもあつた。時には金髮の亂れ毛を掻き上げてゐた。

夫人の髮は純ブロンド色の、細い柔かな毛並で、窓から、そよ風が吹き込むと、嫋やかな毛先が花粉のやうに飛び散つた。女鳩の胸毛(むなげ)よりも柔い毛並とは夫人のやうな髮のことだらうと私は見守つてゐた。夫人は雪白の洋裝で、頸脚と腕先とが豐(ふく)よかな肉付を露はしてゐた。私は若い肉體(からだ)の香ひに醉れて音樂のやうな言葉の旋律に醉つてゐた。殊に夫人の瞳が私を引きつけた。夫人が窓の方に振り向くと二つの瞳が青く光つた。けれども碧玉やうな瞳のなかに私の醜い赤ら顏を見ると、胸が惡いほど嫌やな心持がしてきた。

アイヤン教授は歸國の荷作りに忙しかつた。氏は暑中休暇を利用して、アグレジエの學位を受けに歸朝する筈であつた。教授は近頃買ひ求めた美術品を一つ〳〵新聞紙にくるみ、それに薄い綿をかぶせて大い洋鞄(トランク)に收(しま)つてゐた。繆細の硯箱、卷繪の菓子鉢、支那燒の茶碗、青磁の花瓶から、よく神社などで

見かける金燈籠まで、さも大事さうに手に取つて凝つと見詰めてから、手際よく入れるのに工夫を凝らしてゐた。教授の足許には青錆を吹いた古代の鏡や、昔の華魁がさしたらしい鼈甲の櫛笄まで揃つてゐた。

私は折々、教授の後姿を見ながら、ゴンクールのやうに骨の髓まで美術の趣味が泌み渡つた「美術館の人」とは斯ういふアマトウールを言ふのだらうと思つてゐた。そして昔、大奥などで用ゐた油壺を薄い日向にかざしながら、無雜作に描いた花鳥の圖や、七寶崩しなぞの模樣を眺め入る顔付を見ると、東洋の物語めいた風韻を味つてゐるに違ひないと思つたし、または象牙彫の藤娘なぞを、しみ〴〵と見取れた眼付には、美術品のかげから藝術家の生命を喚び醒まし、その呼吸さへ聞かうとする藝術的恍惚を思はずにはゐられなかつた。

「こんど佛蘭西へ持つて入らしやるのですか。」

「勿論、持つてゆきますとも……」

とアイヤン教授は當然だといふ顔付で答へた。

一時間半ほど稽古が濟むと、一寸休んだ。夫人は手を拍つて、「お君さん」と呼んだ。やがて瘦ぎすの美しい小間使がサイダーをお盆にのせてきた。

「蒸暑くつて嫌やな天氣ですね」

「ほんとね。日本は氣候がいけませんね。」「濕つぽくつて皴りやすいから慣れないと直き風邪を引きますよ。それに驚いたのは髮がぬけて、色が黒くなるのとです……つまり日本化するのでせう……」

と若い夫人は快濶に言ひながらも、脱け毛の果敢なさを包む譯には往なかつた。

夫人は先づ私の洋杯にサイダーを注いで下すつた。

「貴方、入らつしやいな、サイダーが來ましたから……」

「あゝ、いま行くよ」

とアイヤン教授は後向きの儘、氣のない返辭をした。

程なく教授も加はつて私達はサイダーに喉を潤しながら、日本の風俗などを話したりしてゐた。すると教授は、

「昔の日本人は悠長なものでしたね、御覧なさい。この筆入れは蓋の上から青い紐で結ぶやうになつてゐます……」

といつた。

「いや、筆入れぢやありません。文箱です。手紙を人に持させてやるとき、入れる箱です……」

と私は答へた。それは五三の桐を散らした一閑張の小さい文箱で、何處やら御姫様の調度らしかつた。

私か文箱のことを説明すると、教授はやつと合點が行つて、

「あの、さうでしたか。私は筆入れだとばかり思つてゐましたよ。」

と微笑を漏らした。

併し此の逸話も教授を偲ぶ懐しい思ひ出談となつてしまつた。若い教授は先頃の戰役で勇しく敵彈のために倒れてしまつた。あの快濶な夫人は寡婦となつてしまつた

新しい戰場の夕暮、眞赤な花が斷々と吹き匂ふ葉櫻に、花環を手向けながら、去らうとして去るに忍びず、しよんぼり頸垂れた喪服の後姿が、私の目に、あり〳〵と浮んでくる……

いま頃、夫人は何うして居らつしやるだらう。昨年、お別れするとき、

「來年の正月には、きつと歸つてきますから、また敎へて下さいな……」

と言つた夫人の言葉を思ひだす。併し夫人は――いや、この若い寡婦は、もはや日本の土地を踏むこともあるまい……

さて私がアイヤン敎授の家を出るのは、何時も十一時であつた。そして乃木坂から電車にのつて本郷の下宿まで歸つてきた。机の上には「鄕愁」の校正が待ち兼ねてゐた。私は直ぐさま校正をやりだした二三臺も朱を入れてしまふ頃、女中が御飯を持つてきた。私は時計を御膳のそばに置いて時間を見ながら、箸を置くと、脫ぎ捨てた上着をつけて、直ぐさま下宿を出掛けた、一時半までに曉星中學へ行かなければならなかつた。

草花の咲き亂れた石階を登り、薄暗い二階に上がり詰めた、小さい、白い部屋に這入ると、私は直ぐさま窓の開け放して、燒けたやうな身體を涼しい風に冷やしてゐた。

がらん〳〵と集鈴の音が響いる。すると校庭が俄かに靜まつて、市場の果てた靜けさが日ざかりを領してゐた。ふと靑空を見上げると、雲の峰が炎き立つて、莖にとまつた旅鳥の羽が光つてゐた。靑桐の樹蔭で靴紐を結び直してゐた學生が狼てゝ校庭の廊下を駈けてゆく……

やがて靴音が二階の廊下に聞えだして部屋の前で、ぱたりと止しだ。挙て扉を叩く音がした。

「お這入んなさい……」

「今日は……何んと、熱い日でせう。」

と扉を開けながら佛蘭西人は斯ういつて大いな字書を机に置いた。

私は日本語を敎へだした。時には佛蘭西語の敎科書に純粋な日本の譯語を與へなければならなかつたそれは疲れ切つた頭の天邊を西洋錐で揉み込まれるかと思ふほど苦しい仕事であつた。それに身體は、だるく頭はぼんやりとして何れほど睡かつたらう。いくら眠るまいとしても眼瞼が自から附き合つていつか、うと／＼として了つた。時には生返辭をして我ながら驚いた事もあつた。つく／＼睡魔に反抗する苦痛を味つたのであつた。私は子供のをり、店の小僧達が居儀汚く居睡をしてゐると、頰邊に蛇の目をかいたり、帶の結び目を抽斗の鐶に結び付けて俄かに搖り起すと、寢惚顏をしながら、やつと氣がついて吃驚するのを喝采した事もあつた。または臺所の片隅で白河夜船の御飯焚に、生大根を抱かしたり、紙縒を鼻に通して嬉しがつてゐた事もあつた。そして小僧や御飯焚は惡戯されて、一遍は眼を醒しても、直ぐさま平氣で睡て了ふのが常であつた。克くもあゝ居睡が出るものだと私は怪しんでゐたが、今は居睡の苦痛を實驗するやうになつて了つた。

四時半まで日本語を敎へて學校を辭すると、直ぐさま九段上から電車に乘つた。赤坂見附で電車を乘り換へ山王下で降りて、藝者家の軒を曲がつた。もう軒並に火が這入つて靑柳の裾が夕風に靡いてゐた。

筋立をさした湯上姿が柳の葉蔭を通つて、炎えるやうな素足が薄闇を縫つていつた。

私はV氏の宅を音づれた。氏は佛國の參謀大尉で遙々見學のために來遊されたのであつた。私は氏に日本語を敎へてゐた。いつものやうに通されるのは階下の書齋で、浮世繪、掛物、掛皿などを手際よく配置した樣子を見ると、やつぱし美術館にでも這入つたやうな氣がして、飽まで美術好きな佛蘭西氣質を床しく思はずには居られなかつた。

何時も珈琲を持つて來るのは夫人であつた。夫人は母上の喪に服してゐらしやるとかで、黒い服が却つて似つかはしい、上品な、美しい方であつた。

「お前、頭痛は何うしたい……」

「もう癒りました。」

「さうかい。顔色が惡いから大切におしよ……」

夫妻の會話には濃やかに情愛が籠つてゐた。殊に私の心を牽きつけたのは、親しい言葉で叫び交はすintoyerの口調であつた。詩集や小說を繙いて斯ういふ言葉使ひを見た事はあつたが、唇から出た言葉を耳にした事はなかつた。そして西洋の言葉でも隔りのない、親しい言葉の情趣を味つてゐた。夫人は私を相手に時候の挨拶をしたり、ふとした世間話などをしてから「Aurevoir monsieur」と言ひ殘して靜かに扉を排した。私は夫人の後姿を見送つてゐた。

V‥氏と私は差し合ひになつてしまつた。殊に氏は日本の書牘文に興味を見出して、佛文で著作さへされようとしてゐた。私は生きた字引として氏の前に座はつてゐたが、今朝から間斷のない勞働で、頭

は全く疲れて返辭に窮した事は數へきれなかつた。

あたりは段々、薄暗くなつてきた。何時か向側の窓にさしてゐた夕燒が翳つて、なんとも言へない寂しさが部屋の中に充ちてきた。そして掛血の模樣も「隅田川の夕凉」の繪も見えなくなつてしまつた。

すると、こつ〳〵入口の扉を叩く音がした。

「お這入りなさい……」

とV…氏は扉の方を見詰めながら言つた。扉が少しあくと黄ろい灯影がさし込んだ。

「洋燈を持つて參りました。」

と女中が靜かに這入つてきて古風な洋燈を机の上において往つた。

私は電燈が引いてあるのに、何うしてわざ〳〵古臭い洋燈を用ゐるのか解らなかつた。柔い光は目に好いせゐか、それとも古代を偲ぶ佛蘭西氣質のせゐなのか。とにかく氏は何んとも言はなかつた。さりとて訊く譯にも往かなかつた。唯だ黄ろい燈火のかげで勉强してゐると、座ろに肅めやかな昔懷しい心持がして、小學校時代に小さい机を前にしながら一穗の孤燈に親んでゐた幼い昔を思ひ出さずには居られなかつた。

V…氏の家を辭したのは丁度六時半でもあつた。それから近所で夕飯を認めてから、遠い團子坂まで出掛けた。某家の令孃に佛語の初步を敎へるためであつた。一時間ほど敎へてから私は當時、神明町にゐた某畫伯の畫室を音づれた。そして矢つぱし佛語を敎へたのであつた。

朝から晩まで佛語や日本語を敎へて家へ歸つてくると、ちやうど十一時すぎであつた。もう部屋には

ちやんと寢床が待つてゐた。洋服を脱がずに疲れた身體を投げだした時、木綿の蒲團も如何ほど柔く、嫋やかに私を迎へて呉れた事だらう。私は茫んやり天井を見詰めてゐた。もう口をきく氣力もなつた。終日、佛蘭西語を饒舌つたせゐか、頰邊から口先が幅つたかつた。そして今朝から夜遲くまで續けてきた勞働の苦痛を考へてみた。それも生活の爲だと思ふと、悲しい心持のしない譯には往かなかつた。

それから草臥れぬいた身體を起して机の上を見た。それは手紙を探すためであつた。一つの葉がきでも見つけた時には、探し甲斐のする心持がして嬉しかつたが、それさへ見かけないときには、どれほど寂しからう。私は家庭を離れてから妙に人戀しくなつてしまつた。其の內に何時か、うと〳〵睡氣が差して時には洋服のまゝ翌朝まで寢込んだ事もないではなかつた。

私は初めて熟睡の快感を味つた。

ある朝、いつもより早く眼が醒めた。私は枕許に手を伸ばして時計を探してみたが見當らなかつた。時計を枕許に置いて寢るのが私の癖であつた。若しや洋服の隱袋にでも這入つては居まいかと思ひながら汗臭い洋服を手にして、有りつたけの隱袋を探して見たが見付らない。私は洋服を逆樣に振つて見ても一錢銅貨が飛びだしたばかりで、時計の音も聲えなかつた。

「惜しい事をして了つた。昨夜、落しちやつたのだ……」

と思つた時には妙に心細い氣がしてきた。近ごろは鎖も紐もつけずに、むきだしの儘、襯衣の隱袋に入れておいた。そのせゐで落して了つたのだらう……鎖か紐でも附けておけば好かつたと先に立たない

後悔が胸に溢れてきた。

その時計は首尾よく高等學校へ這入つたとき、初めの戀人が買つて呉れた紀念品であつた。

「紀念にこの時計を上げませう。どんな事があつても、私を忘れちや嫌やよ。せめて時計を見たら私を思ひだして頂戴な……」

彼女は潤ひがちな眼付をして私の心を讀むやうに見詰めた。こんな月並な言葉も私には嬉しかつた。

「僕は肌身離さず持つてゐますよ。さうしてセコンドの音を聞いたら貴方だと思つてゐます……」

尖塔の秘室に幽閉された若い王様が、幾年か〱都の空を眺めながら日の入る方を眺め暮らすうちに、何時か白髮の老爺となつて、夜な〱牢番の寢靜るのを待ち焦れながら、置時計に耳を當てゝセコンドの音を聽きながら、抱擁接吻の柔かい感觸と、戀人の胸に鳴り響く鼓動の音を思ひだすのが無さがなかの樂しみであつたといふ物語を記憶してゐたので、斯んな御座りな言葉を口にすると、

「私の方が先に死んでしまふわ。年上ですもの……」

と彼女は悲しげに言つた。私は其時の寂しい顏付を今だに忘れない。彼女は何うしたらう。近頃は時計を見ても彼女を思ひだすことは滅多に無かつた。

とにかく其時計は銀梨地の片側で當時、流行つた品であつた。殊に器械はウォルサム會社の特製で毎日、午砲と一秒の差異も無つた。また高等學校の寄宿舍で、夜長の徒然から、話材の盡き果てた揚句には、てん〱に時計を見せ合つた事もあつた。その中で私の時計が一ばん新形であつた。器械精巧であつた。寶石の數も多かつた。要するに一ばん立派で、縣知事樣から賞品に頂いたと言つて、さも大事そ

うに汚いゼーム皮にくるんであつた時計でさへも私の時計と比べれば光彩を失つて了つた。
「君の時計は素的だなあ。いつたい幾らぐらゐしたい……」
と友達に讃められると私は何んなに嬉しかつたらう。當時は、それほど子供泌みてゐた。
「いくらだか僕は知らないよ、貰らひものだから……」
斯う私は答へた。そして戀人から紀念に貰らつたのだと言ひたかつたが、怖しい男性の嫉妬から鐵拳制裁でも喰はされては大へんだと考へて、何時も默つてゐた。
その時計を落して了つた。それとも掏られたのか。とにかく時計は失くなつて了つた。落して了ふと其の時計が惜しかつた。そして折角呉れた彼女に濟まないと思つてゐた、けれども所詮、出ない物と諦めずには居られなかつた。
時計がないのは何より不便であつた。私は下宿の帳場へ出掛けて、大きい掛時計を見に往つた。
「この時計は合つてゐますか。」
「合つてをりますよ。」
と朝から晝寢をしてゐた御内儀さんが、御尻を向けた儘で、さも面倒臭さゝうに言つた。
私は堪らないほど厭やな心持がした。併し新しい時計を買ふ程の餘裕は無かつたので、まあ當分は時計無しの身でゐようと諦めて、往來を歩きながら、明い店先を覗き込んだり、眩しい靑空を仰いで、時計臺を見詰めてゐた。
時には靑柳の葉かげに隱くれた停留場の時計を探した事もあつた。

いつか一週間ほど立つてしまつた、ある日曜の朝であつた。廊下に優しい足音がしてきた。

「御免下さい。御勉强ですか」

と言ひながら御内儀さんが這入つてきた。

「ねえ、貴郎、時計をお落しになつたのぢや御座いませんよ。お盗られになつたのですよ。唯今、巡査が參りましてね…‥」

御内儀さんは巡査の話を傳へた。

それは斯うであつた。近頃下宿屋荒しの盗坊が出沒するといふので網を張つてゐると、その盗坊は品川の女郎屋で捕つて了つた。この泥棒は私の下宿屋へ這入つて私の時計と二階の人の紹羽織を盗んだ事まで白狀して了つた。紹の羽織は出なかつたが、時計の方は何うした運の廻り合はせか、或る質屋の藏から出てきた。それゆゑ早く盗難屆を出して時計を取りに來いと言ひ棄てゝ巡査は歸つたさうであつた。

「泥棒が這入つたので御座んすね。ほんとに驚きましたよ。夢にも存じませんでしたから…‥」

御内儀さんは片袖の綻を氣にしながら言つた。

盗難に逢ふほど私は金持ちでない。生れてから初めて盗難に逢つたかと思ふと、我ながら可笑しな心持がして、私のやうな素寒貧を相手にする泥棒は何んな顔付をしてゐるだらうと妙に好奇心が募つてきた。とにかく時計の出たのは寢耳に水の吉報で、毎日聞きなれたセコンドの音がふと耳許に浮んできた。

私は嬉しかつた。何かの緣で彼女に逢ふ折りがあつても、此の時計さへあれば、彼女の心變りを責める事は出來ても、此方に寸分のひけはないと思つてゐた。午後から早速、盗難屆を書いて警察へ送つて置

いた。

それから二三日立つと、盗難品を取りに明一時までに出頭すべしと品川の警察から言つてきた。警察署へ出頭するのも私には初めての經驗なので、何處やら怖しい氣もしたが、勇氣を鼓して、翌日は早御晝をすまして、出掛けていつた。

八山下の終點で電車を降りると、私は先づ帽子を取つて汗を拭いた。品川の潮臭い海風が涼しかつた。空も青く海も蒼い。二つながら眞青で、日ざかりの大空には入道雲が湧き立つて、安房上總の山々が、鮮やかに聳えてゐた。藍壺のやうな海面を白帆が往來して、太陽の激しい反射が痛いほど目に泌みた。

日向の往來から輕い埃が立つて、長い影法師が眞黑な姿を描いてゐた。日向の白壁に大い孕女のお腹が影繪のやうに映つてゆく。私は可笑しく思ひながら自分の影法師に送られて片影を通つていつた。閑靜な邸内の木立から蟬の鳴音が聞えて耳許が今にも焦げ出しさうであつた。樹蔭には葭子張の氷屋が出てゐて、「函館氷」とかいた小さい旗が海風に飜り、玉簾垂れが涼しい音を傳へてゐた。私は何氣なく葭子のがけを覗いて見た。白脚袢の藥賣が手拭で額の汗を拭き〳〵雪の花を啜つてゐた。

鐵橋の袂には一株の柳が青々と繁つて、若い髮のやうに吹き亂れてゐた。その葉かげに菓物屋の盤臺が出てゝゐた。通り掛つた勞働者がいきなり剝き立ての梨子を攫んで、頰張りだした。

「親方、お錢を……」

「食つてからやらあ、愚圖いふねえ……」

勞働者は答へるのも面倒さうに、梨子を噛つて、一滴の露も惜しさうに舌甜めずりをしてゐた。

「あゝ、甘かつた……そら……」

と勞働者は腹掛の丼から二錢銅貨を投りだして、すた／＼日向を辿つてゆく。草鞋の底から輕い埃が立つた。そして撒水車と擦れ逢ふと勞働者は袢纒の裾を捲りながら、大路に泡沫をよけて通つた。海岸を見ると蜘蛛の巣のやうな鐵道線が、ぎら／＼日向に光つてゐた。

私は額の汗を拭いた。そして俥を呼んだ。

「何處らへ參ります。」

「品川の警察まで……」

と私は答へた。そうして何んだか氣まりの惡い心持がしてきた。

俥は威勢よく走りだして京濱電車の停車場の前を過ぎると、海沿ひの小料理屋が軒を並べてゐたり、路ばたの井戸で盤臺を洗つてゐる魚屋の様子を見かけると、流石に宿場らしい感じがしてきた。やがて女郎屋の前に差し掛つた。古びた中にも媚めかしい二階座敷、樓名を染めぬいた入口の暖簾、古風な格子先、赤錆びた天水桶、――參勤交代の途次、御供の家來衆が一夜の馴染を重ねた榮華の昔が思はれた。二階の欄干に色つぽい夜具の乾してあるのは淺猿しかつた。私の泥坊はこんな小店で遊んでゐた處を捕つたに違ひないと私は思つてゐた。

俥夫の黑い饅頭笠が光線を反射して眼がぎら／＼した。銅色の頸筋から汗がだく／＼流れて白い法被が肩から脊中へ掛けて、ぐつしより濡れてゐた。俥夫は幾度も／＼梶棒を持ちかへて、額の汗を拭いてゐた。俥が早く走ると涼しい潮風が横幌から這入つてきた。

やがて俥は警察の前に着いた。それは見すぼらしい木造の建物で白塗のペンキも剝げてゐた。開け放した窓には薄汚い簾垂れが掛つて、白襯衣一枚の夏姿が見えてゐた。入口の石段に一株の百日紅が時を得顔に咲きだして、寂しい樹陰に大い白犬が、だるさうに睡つてゐた。そして私の靴音を開きつけると、耳を逆立てゝ、胡亂の目を見張つたが、やがて安心の付いたらしく、起き上りもせずに、また頸を垂れてしまつた。

玄關に這入ると御役所の臭がした。私は怖る〳〵受付けへ往つて、盗難品を受取りにきた由を告げると、眼付の凄い老人が「あつちだ」と言はん許りに扇子の先で、奥の方を指さした。

私はいやな心持がした。奥を見ると、「刑事課」とかゝつた木札が目についた。それは暑苦しい部室であつた。硝子窓から眞黄に日影が射し込んで小さい泥鉢の朝顔が萎れてゐた。入口の帽子架には制服の上着や制帽や、洋劍まで吊されて見るからに山賊小屋にでも、まぐれ込んだ氣がして猶さら暑苦しいのに、汚い椅子、書類の堆い机、非常持退と朱でかいた本箱が所挾く置かれて、洋刀の鞘が、ぎら〳〵光つてゐた。

窓際の机に部長だけが何やら調べてゐた。私は恐縮しながら盗難品を取りにきた事をつげた。

「あゝ、さうですか、本郷から此處までは堪りませんな。なにしろ此の熱さですから……」

と部長は御世辭よく言つて、大い書類綴をあけた。そして私の盗難屆と照り合はしながら、御飯粒でも挾まつたのか、頻りに前齒を、すう〳〵やつてゐた。

私は部長が懐しかつた。先刻、受付けの老爺さんが癪に障はつてゐたから、部長の叮重な取り扱ひを

うけると、人間らしく認められた氣がして、益々恐入らずには居られなかつた。

「この時計でせうな……」

と部長は机の本立から私の時計を取りだした。私は嬉しかつた。久し振りで友達にでも逢つたやうな氣がして、

「はい、さうです」

と答へながら片手を差しだした。

「もう差し上げても宜しいですが、規則ですから一應お尋ね致します。なにか特徴はありませんか。」

「さうですなあ……」

私は氣まり惡く、差しだした片手を引き込まして了つた。

私は考へながら、時計の裏側に月星の商標があることや、何時ぞや地面に落したので片側に窪みのあることや、短針の眞先に赤錆のあることまで言ひ添へると部長は合點の往つた顏付をして、

「それぢや差し上げませう、――」

と時計を渡して呉れた。

「どうも御面倒をかけて相濟みませんでした。」

と言つて此の時計を手にしたとき、私は何れほど嬉しかつたらう。時計は四時半の處で止まつてゐた。何時、何處で此の時計は止まつてしまつたのか。私の手許を離れた此の時計は何んな憂目を見たのだらう。この時計は處女の貞操を失つたに違ひないと考へながら私は時計の顏を見守らずには居られなかつ

た。

私は龍頭を卷くと、昔しながら音が、かち〳〵鳴りだした、泥坊の手に這入つて散々苦勞したことを囁くやうな、愁を訴へるやうな、同情を唆るやうな、汚された娘心の啜泣が聞えてきた。

私はやつぱし其の時計を掌に抱き締めてやつた。それから思ひだしたやうに時計を合せ樣と思つた。

「唯今、何時でせう。」

「さう……もう一時半です。十分ぐらゐ進んでゐるかも知れません。」

と部長は白襯衣の隱袋から鏈卷の大い時計を取りだしながら言つた。私は時計を合はせて了ふと、叮嚀に襯衣の隱袋に收つた。

ふと涼しい風が小窓から這入つてきた。腋臭の香ひが初めて鼻に泌みた。部長の腋の下は汗泌みで黄ろくなつてゐた。

「この泥坊は本郷の下宿を門並荒しましたよ。御覽なさい。此通りです……。」

と部長は盜難屆の綴りを見せて呉れた。

「隨分、克く這入りましたね。」

と私は合槌を打ちながら、盜難屆を見ると、目ぼしい下郷の下宿屋には大てい這入つてゐた。隣りの下宿にも、翌る晩這入つてゐた。私は下宿屋の主人から頼まれた事を思ひだした。今後の取締りにもなるから、若し出來ることなら、この泥坊が這入つた箇所や、時刻を聞いて來て呉れと頼まれてゐた。私は其事を部長に話すと、

「それぢや訊いて上げませう……」
と飽まで親切な部長は椅子から立ち上つた。
私は部長の後から蹤いていつた。板の間に靴音が高く響いて、部長は節だらけの扉に手をかけて、薄暗闇みに這入つていつた。入口の上には「留置場」とかいてあつた。私は兼ね／＼牢獄といふものには興味を持つてゐたから、留置場の樣子が見度くつて堪らなかつた。叱られたら其れまでだと覺悟をきめて部長のあとから蹤いていつたが、誰も咎める人は無かつた。
地下室にでも這入つたやうな冷めたさが、ぞつと身に泌みて濕つぽい薄暗がりに、人の氣配がして、そり／＼は呻きの聲が漏れてきた。なによりかより一種異樣な臭氣が鼻を衝いた。汗の香ひでもない。沈んだ空氣の腐敗する臭氣とも付かない、澁いやうな、酸いやうな、とにかく物の饐る香ひだ。これが怖らく罪惡の臭氣だらうと私は考へてゐた。
薄暗かりに角丸太の嚴めしい格子が見えて、格子の間には太い鐵棒が渡してある許りか、潜戸には赤錆びた海老錠まで掛つてゐた。私は子供のとき、繪草紙屋の店頭で見かけた「傳馬町牢屋の圖」を思ひだして、あの美しいお七やお駒なぞも此んな處に這入つて居たのだらうと考へてゐた。
部長は泥坊の名を高く呼んだ。
「はい………」
と微かな返辭が聞えて、牢格子の間近に一人の男が這ひだして來らしい。それほど苦痛の樣子がしてゐた。

「お前が、正修舘に這入つたのは何處からだ……」

「……」

「うむ、それから……」

「……」

部長の尋問の聲は聞えたが泥坊の返辭は聊かも聞えなかつた。私は怖る〳〵身體を乘り出して暗闇を覗き込むと、青ざめた顔が目を掠めた。なんといふ青白ろざだらう。眞青だ。見るからに、ぞつとするほど冷たい青色だ。病的な青みだ。古びて牢格子の間から眞青な顔が出てゐたのだ。私は思はず知らず私は振り向いて了つた。まつたく青い蠟細工のやうな顔をしてゐた。そのうへ鼻筋の通つた、眼付の凉しい美男子であつた。年の頃は二十前後でもあるだらう。とにかく凄艶な顔付で、さも切なさうに格子際で部長の尋問に答へてゐた。

ふと瞳を外らすと、白木の薄汚い床机が置いてあつた。その片端には老婆がしよんぼり腰をかけて、心配さうに頸垂れてゐた。皺だらけの横顔、思ひ沈んだ眼付、洗ひざらしの紺絣、名ばかり黒繻子の男帶を締めて、折々、眼を拭きながら、氣遣しげに待つてゐた。何にしに來たのだらう。面會にきたのかそれとも引取りにきたのか。とにかく老婆の心中を思ひやられずには居られなかつた。

もう部長は尋問を濟まして私を顧みた。

「あの晩は、さう一時ごろださうです。水口に手をかけて見ると、掛金が掛つてゐないので、易す〳〵這入つたさうですよ。それから階子段の處へくると、鼾の聲が聞えてゐたので、ふと部屋の奥を覗ふ

と貴方がぐつすり寢込んで居たさうです……」

と部長は一寸笑顔を見せた。それから泥坊は善き品もがなと見廻はして見たが、電燈が消えてゐたので何物も目に這入らなかつたが、枕許で時計の音がしてゐた。それを手探りで攫つてから二階の部屋で絽の羽織を盜んださうであつた。

「氣をつけなくちや往けませんよ。戸締りが肝腎ですからな、水口の掛金を忘れるなんて、まるで泥坊を待つてるやうなものです……」

と部長は私を誡めた、

「いや下宿へ歸つたら、よく申しませう……」

と私は答へたが、なんだか其ればかりでは物足りなかつた。

「あの泥坊は病氣ですか……眞青な顏をしてゐますが……」

「留置場へ這入ると、急に脚氣が出て……可哀相に……」

「それからあの阿婆さんは何んです……」

「ありや泥坊の御祖母さんなんです。今にも衝心すると言つて御祖母さんに逢はして呉れと手を合はして賴みますから今朝呼んでやつたのです……」

と部長も聲を曇らして言つた。

私達は何時か刑事課に前に出てきた。

「いろ／＼有り難う存じました。失禮いたします……」

「いや、何ういたしまして……此處から本郷までは拋りませんな……」

と部長は私を見送りながら日向を見詰めた。

私は道々いろ／＼な事を考へた。留置場の光景、青い蠟細工のやうな顔、老婆の打ち沈んだ様子、部長の言葉を考へると、妙に果敢ない心持がしてきた……

それから、もう一年立つてしまつた。あの人達は何うしたらう。あの牢格子から桓間見た青い顔、「死」よりも冷たい眞靑な顔色を思ひだすと、今でも、ぞつと身振ひがして冷汗が流れだす……あの泥坊は何うしたらう。盗まれた時計は持主の手に歸つて、昔しながらに健在であるか、靑ざめた美男子の泥坊は苦役を終つたらうか。わざ／＼泥坊のために、品川くんだりまで眞夏の日ざかりを呼び出されたが、私は少しも怨まない。却つて泥坊の身上に同情の涙を禁じ得ない。何故と言へば、あの美男な泥坊は間もなく衝心して、疾うに牢死したものと思ひきめてゐるからである……

六月廿一日夜

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
仝　神田區裏神保町　上田屋
仝　京橋區尾張町　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　京橋區西紺屋町　良明堂
仝　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
仝　東區京町堀　太華堂
仝　北區東梅田町　宮內立誠堂
京都市七條停車場前　三共社
仝　藤村梅松堂

○定價　金貳拾五錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二冊の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金四圓二拾五錢外國は金五圓九拾五錢の割となる

廣告取次店

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、万年社、秀逸堂、信頼社

送金注意

一誌代郵税は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替にて御送金の場合は指定を本郷區片町十番地中央公論社とし拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるゝ虞なし
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵劵代用必ず一割增の事
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢（集金委託料
　一金五圓迄　金七錢（及送達料共）
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正四年六月廿九日印刷納本
大正四年七月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地
中央公論社
電話（局）下谷九一一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

（青柳）

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.